

再考「真理のことば」

月夜の龍 掲載場所 <http://tsukiyonoryu.seesaa.net/article/464214534.html>

February 19, 2019

Contents

はじめに	3
第1部 新旧の章・詩番の対応	3
第2部 詩文一覧	10
第1節 さまざまな事	10
FS1 心	10
FS2 自己	10
FS2 はげみ	10
FS4 老いること	11
FS5 世の中	11
FS6 道	12
FS7 千という数にちなんで	13
FS8 花にちなんで	13
FS9 楽しみ	14
FS10 さまざまなこと	14
FS11 象	15
FS12 ひと組ずつ	15
第2節 さまざまな悪	16
FS13 悪	16
FS14 怒り	17
FS15 汚れ	17
FS16 執着と欲望	18
FS17 悪いところ	19
第3節 さまざまな人	19
FS18 愚かな人	19
FS19 賢い人	20
FS20 真人	21
FS21 道を実践する人	22
FS22 仏弟子	22
FS23 修行僧	23
FS24 バラモン	24
FS25 ブッダ	25
第3部 再考「真理のことば」	26
記述方法の説明	26
第1節 さまざまな事	26
FS 1 心	26
FS 2 自己	28
FS 3 はげみ	29
FS 4 老いること	32
FS 5 世の中	33

FS 6 道	35
FS 7 千という数にちなんで	38
FS 8 花にちなんで	40
FS 9 楽しみ	43
FS 10 さまざまなこと	44
FS 11 象	45
FS 12 ひと組ずつ	48
第2節 さまざまな悪	50
FS13 悪	50
FS14 怒り	51
FS15 汚れ	53
FS16 執着と欲望	55
FS17 悪いところ	60
(解散) 暴力 (OS 10 章)	62
(解散) 愛するもの (OS 16 章)	62
第3節 さまざまな人	62
FS18 愚かな人	63
FS19 賢い人	64
FS20 真人	68
FS21 道を実践する人	71
FS22 仏弟子	73
FS23 修行僧	75
FS24 バラモン	79
FS25 ブッダ	82
第4部 付録	84
付録1 魂と脳と守護霊 最終版	84
付録2 「心を治める」と「自己(魂)を整える」についての考察	90
付録3 四諦と仏道	90
(1) 四諦	90
(2) 仏道	91
付録4 人間の分類	93
(1) 分類方法	93
(2) 修行者	94
付録5 心の汚れ	95
(1) 汚れと煩惱	95
(2) 欲	97
(3) 執着と欲望	97
(コーヒーブレイク) 仏道のキーナンバー	98
付録6 武力と暴力	99
第5部 削除した詩	100
「第1節 さまざまな事」 内の削除詩	100
「第2節 さまざまな悪」 内の削除詩	102
「第3節 さまざまな人」 内の削除詩	104
おわりに	105

はじめに

お釈迦様の直接の教えが、「真理のこぼ」と「ブツダのこぼ」には非常に多いと言われてます（私も間違いがないと思っています）。これは、お釈迦様を慕う先人たちの忍耐と努力の結晶で、感謝してもし尽くせないほどです。

「真理のこぼ」は、短く、お釈迦様の教えの一部ですが、原始仏教の教えとされ、その中核に位置すると私は思います。しかし、残念ながら、分類、順序を中心にかなり乱れているのが現状だと強く感じていました。

この混乱を正すため、本書で、日本の神道の日月神示を参考に、「真理のこぼ」の再考を行ないました。この際、もっとも注意を払ったのは、「何事も順正しくやりて下されよ、神は順であるぞ、順乱れた所には神の能（はたらき）現はれんぞ。」という教えです。

そこで、まず章の整理を行い、節という単位を導入し、章を3分割しました。各節の名前と構成は、

第1節 さまざまな事

FS 1 心, FS 2 自己, FS 2 はげみ, FS 4 老いること, FS 5 世の中, FS 6 道, FS 7 千という数にちなんで, FS 8 花にちなんで, FS 9 楽しみ, FS 10 さまざまなこと, FS 11 象, FS 12 ひと組ずつ.

第2節 さまざまな悪

FS 13 悪, FS 14 怒り, FS 15 汚れ, FS 16 執着と欲望, FS 17 悪いところ.

第3節 さまざまな人

FS 18 愚かな人, FS 19 賢い人, FS 20 真人, FS 21 道を実践する人, FS 22 仏弟子, FS 23 修行僧, FS 24 バラモン, FS 25 ブツダ.

で、「10章 暴力」と「16章 愛するもの」は章を解体することとなりました。FSについては、第1部 新旧の詩番号対応表の導入部分を参考にしてください。

また、仏教用語の使い方もあやふやな部分が非常に多いため、主に付録で、仏教用語の定義を行い、出来るだけ定義した言葉で詩文を書き換え訂正を行いました。その結果、使われる単語が激減して、中村氏が再現なされた美しさや文学性が犠牲となりました。

また、訂正ではどうしても対応できない詩に関しては、虚偽の詩である可能性が高いと判断しましたので、削除しました（第5部に書き出しました。）。おそらく、ブツダゴースによる「真理のこぼ」編纂時に編入されたものではないかと、私は考えています。

まとめると、本書では、「真理のこぼ」の再考作業として、

第一に、章・詩の編成と順序の変更

第二に、仏教用語の定義や常識的な概念導入に伴う、詩文の変更

第三に、不要な詩や文章の削除

を行いました。

なお、本書は、中村元氏著の「真理のこぼ」（岩波文庫）を元に議論を展開しました。中村氏の精緻な注釈や、訳詩があってこそ、さらに、このような文献が、書店で手軽に買えるわが国の社会に心より敬意を表します。

今後、本書の「真理のこぼ」の書き換えの必要が生じ、人が書き換えを行う際には、ブツダゴースの編纂時に起きた悲劇を防止するため、本書と同様に過去の詩を記し、新しい詩を書くという形での書き換えを行ってください。（合掌）

第1部 新旧の章・詩番の対応

本書では、章番号と詩番号に新旧があり、さらに、前身のブログにも詩番号をつけています。また、章や詩の整理では、番号が非常に重要ですので、ここで番号の付け方について取り決めを行います。

- 中村元氏の取りまとめた「真理のこぼ」（岩波文庫）に記されている章番号を接頭文字 OS(Original Section) を使って表します。
- 本書で使用した章の並び順を表した章番号を接頭文字 FS(Final Section) を使って表します。
- O 番号 (Original Number) は、中村氏の付けた番号を記しています。
- B 番号 (Blog Number) は、前身となりました私のブログ「真理のこぼ 月夜の龍改定版」で用いた詩番号です。
(<https://newbuddhawords.blogspot.com/search/label/目次>)
- F 番号 (Final Number) は、本書で使用した詩の並び順を表した詩番号です。

次ページから6ページにわたり新旧章・詩番号の検索表を載せます。ページ内左側がF番号検索表、右側がO番号検索表になっています。この表のエクセルデータは、<http://tsukiyonoryu.seesaa.net/article/464214534.html> にアップしてありますので、ご活用ください。

F番号順(1/6)

O番号順(1/6)

最終版(再考 真理のことば)		ログ記事		オリジナル(中村氏版)		
詩番号	章番号	章名	詩番号	詩番号	章番号	章名
F 001	FS01	心	B 027	O 033	OS 03	心
F 002	FS01	心	B 028	O 034	OS 03	心
F 003	FS01	心	B 029	O 035	OS 03	心
F 004	FS01	心	B 030	O 036	OS 03	心
F 005	FS01	心	B 031	O 037	OS 03	心
F 006	FS01	心	B 032	O 038	OS 03	心
F 007	FS01	心	B 033	O 039	OS 03	心
F 008	FS01	心	B 034	O 040	OS 03	心
F 009	FS01	心	B 034	O 041	OS 03	心
F 010	FS01	心	B 035	O 042	OS 03	心
F 011	FS01	心	B 036	O 043	OS 03	心
F 012	FS02	自己	B 178	O 160	OS 12	自己
F 013	FS02	自己	B 179	O 157	OS 12	自己
F 014	FS02	自己	B 180	O 161	OS 12	自己
F 015	FS02	自己	B 181	O 162	OS 12	自己
F 016	FS02	自己	B 182	O 158	OS 12	自己
F 017	FS02	自己	B 184	O 164	OS 12	自己
F 018	FS02	自己	B 185	O 163	OS 12	自己
F 019	FS02	自己	B 186	O 165	OS 12	自己
F 020	FS02	自己	B 187	O 166	OS 12	自己
F 021	FS03	はげみ	B 015	O 021	OS 02	はげみ
F 022	FS03	はげみ	B 016	O 022	OS 02	はげみ
F 023	FS03	はげみ	B 017	O 023	OS 02	はげみ
F 024	FS03	はげみ	B 018	O 024	OS 02	はげみ
F 025	FS03	はげみ	B 019	O 025	OS 02	はげみ
F 026	FS03	はげみ	B 020	O 026	OS 02	はげみ
F 027	FS03	はげみ	B 021	O 027	OS 02	はげみ
F 028	FS03	はげみ	B 022	O 028	OS 02	はげみ
F 029	FS03	はげみ	B 023	O 029	OS 02	はげみ
F 030	FS03	はげみ	B 024	O 030	OS 02	はげみ
F 031	FS03	はげみ	B 025	O 031	OS 02	はげみ
F 032	FS03	はげみ	B 026	O 032	OS 02	はげみ
F 033	FS04	老いること	B 215	O 146	OS 11	老いること
F 034	FS04	老いること	B 216	O 147	OS 11	老いること
F 035	FS04	老いること	B 217	O 148	OS 11	老いること
F 036	FS04	老いること	B 295	O 135	OS 10	暴力
F 037	FS04	老いること	B 218	O 149	OS 11	老いること
F 038	FS04	老いること	B 219	O 150	OS 11	老いること
F 039	FS04	老いること	B 220	O 151	OS 11	老いること
F 040	FS04	老いること	B 221	O 152	OS 11	老いること
F 041	FS04	老いること	B 222	O 153	OS 11	老いること
F 042	FS04	老いること	B 223	O 154	OS 11	老いること
F 043	FS04	老いること	B 224	O 155	OS 11	老いること
F 044	FS04	老いること	B 225	O 156	OS 11	老いること
F 045	FS05	世の中	B 203	O 167	OS 13	世の中
F 046	FS05	世の中	B 204	O 168	OS 13	世の中
F 047	FS05	世の中	B 205	O 169	OS 13	世の中
F 048	FS05	世の中	B 206	O 170	OS 13	世の中
F 049	FS05	世の中	B 207	O 171	OS 13	世の中
F 050	FS05	世の中	B 208	O 172	OS 13	世の中
F 051	FS05	世の中	B 209	O 173	OS 13	世の中
F 052	FS05	世の中	B 210	O 174	OS 13	世の中
F 053	FS05	世の中	B 211	O 175	OS 13	世の中
F 054	FS05	世の中	B 212	O 176	OS 13	世の中
F 055	FS05	世の中	B 213	O 177	OS 13	世の中
F 056	FS05	世の中	B 214	O 178	OS 13	世の中
F 057	FS06	道	B 188	O 273	OS 20	道
F 058	FS06	道	B 189	O 274	OS 20	道
F 059	FS06	道	B 190	O 275	OS 20	道
F 060	FS06	道	B 191	O 276	OS 20	道
F 061	FS06	道	B 192	O 277	OS 20	道
F 061	FS06	道	B 192	O 278	OS 20	道
F 061	FS06	道	B 192	O 279	OS 20	道
F 062	FS06	道	B 193	O 280	OS 20	道
F 063	FS06	道	B 194	O 281	OS 20	道
F 064	FS06	道	B 195	O 282	OS 20	道
F 065	FS06	道	B 196	O 283	OS 20	道
F 066	FS06	道	B 197	O 284	OS 20	道
F 067	FS06	道	B 198	O 285	OS 20	道
F 068	FS06	道	B 199	O 286	OS 20	道
F 069	FS06	道	B 200	O 287	OS 20	道
F 070	FS06	道	B 201	O 288	OS 20	道
F 071	FS06	道	B 202	O 289	OS 20	道
F 072	FS07	千という数にちなんで	B 226	O 100	OS 08	千という数にちなんで

最終版(再考 真理のことば)		ログ記事		オリジナル(中村氏版)		
詩番号	章番号	章名	詩番号	詩番号	章番号	章名
F 133	FS12	ひと組ずつ	B 001	O 001	OS 01	ひと組ずつ
F 134	FS12	ひと組ずつ	B 002	O 002	OS 01	ひと組ずつ
F 135	FS12	ひと組ずつ	B 003	O 003	OS 01	ひと組ずつ
F 136	FS12	ひと組ずつ	B 004	O 004	OS 01	ひと組ずつ
F 137	FS12	ひと組ずつ	B 005	O 005	OS 01	ひと組ずつ
F 138	FS12	ひと組ずつ	B 006	O 006	OS 01	ひと組ずつ
F 139	FS12	ひと組ずつ	B 007	O 007	OS 01	ひと組ずつ
F 140	FS12	ひと組ずつ	B 008	O 008	OS 01	ひと組ずつ
削除				O 009	OS 01	ひと組ずつ
削除				O 010	OS 01	ひと組ずつ
F 141	FS12	ひと組ずつ	B 009	O 011	OS 01	ひと組ずつ
F 142	FS12	ひと組ずつ	B 010	O 012	OS 01	ひと組ずつ
F 143	FS12	ひと組ずつ	B 011	O 013	OS 01	ひと組ずつ
F 144	FS12	ひと組ずつ	B 012	O 014	OS 01	ひと組ずつ
削除				O 015	OS 01	ひと組ずつ
削除				O 016	OS 01	ひと組ずつ
削除				O 017	OS 01	ひと組ずつ
削除				O 018	OS 01	ひと組ずつ
F 145	FS12	ひと組ずつ	B 013	O 019	OS 01	ひと組ずつ
F 146	FS12	ひと組ずつ	B 014	O 020	OS 01	ひと組ずつ
F 021	FS03	はげみ	B 015	O 021	OS 02	はげみ
F 022	FS03	はげみ	B 016	O 022	OS 02	はげみ
F 023	FS03	はげみ	B 017	O 023	OS 02	はげみ
F 024	FS03	はげみ	B 018	O 024	OS 02	はげみ
F 025	FS03	はげみ	B 019	O 025	OS 02	はげみ
F 026	FS03	はげみ	B 020	O 026	OS 02	はげみ
F 027	FS03	はげみ	B 021	O 027	OS 02	はげみ
F 028	FS03	はげみ	B 022	O 028	OS 02	はげみ
F 029	FS03	はげみ	B 023	O 029	OS 02	はげみ
F 030	FS03	はげみ	B 024	O 030	OS 02	はげみ
F 031	FS03	はげみ	B 025	O 031	OS 02	はげみ
F 032	FS03	はげみ	B 026	O 032	OS 02	はげみ
F 001	FS01	心	B 027	O 033	OS 03	心
F 002	FS01	心	B 028	O 034	OS 03	心
F 003	FS01	心	B 029	O 035	OS 03	心
F 004	FS01	心	B 030	O 036	OS 03	心
F 005	FS01	心	B 031	O 037	OS 03	心
F 006	FS01	心	B 032	O 038	OS 03	心
F 007	FS01	心	B 033	O 039	OS 03	心
F 008	FS01	心	B 034	O 040	OS 03	心
F 009	FS01	心	B 034	O 041	OS 03	心
F 010	FS01	心	B 035	O 042	OS 03	心
F 085	FS08	花にちなんで	B 037	O 044	OS 04	花に…
F 086	FS08	花にちなんで	B 038	O 045	OS 04	花にちなんで
F 087	FS08	花にちなんで	B 039	O 046	OS 04	花にちなんで
F 088	FS08	花にちなんで	B 040	O 047	OS 04	花にちなんで
F 088	FS08	花にちなんで	B 040	O 048	OS 04	花にちなんで
F 089	FS08	花にちなんで	B 041	O 049	OS 04	花にちなんで
F 090	FS08	花にちなんで	B 042	O 050	OS 04	花にちなんで
F 091	FS08	花にちなんで	B 043	O 051	OS 04	花にちなんで
F 092	FS08	花にちなんで	B 044	O 052	OS 04	花にちなんで
F 093	FS08	花にちなんで	B 045	O 053	OS 04	花にちなんで
F 094	FS08	花にちなんで	B 046	O 054	OS 04	花にちなんで
F 095	FS08	花にちなんで	B 047	O 055	OS 04	花にちなんで
F 096	FS08	花にちなんで	B 048	O 056	OS 04	花にちなんで
F 097	FS08	花にちなんで	B 049	O 057	OS 04	花にちなんで
F 098	FS08	花にちなんで	B 050	O 058	OS 04	花にちなんで
F 098	FS08	花にちなんで	B 050	O 059	OS 04	花にちなんで
F 223	FS18	愚かな人	B 051	O 060	OS 05	愚かな人
F 224	FS18	愚かな人	B 052	O 061	OS 05	愚かな人
F 225	FS18	愚かな人	B 053	O 062	OS 05	愚かな人
F 226	FS18	愚かな人	B 054	O 063	OS 05	愚かな人
F 227	FS18	愚かな人	B 055	O 064	OS 05	愚かな人
F 228	FS18	愚かな人	B 056	O 065	OS 05	愚かな人
F 229	FS18	愚かな人	B 057	O 066	OS 05	愚かな人
F 230	FS18	愚かな人	B 058	O 067	OS 05	愚かな人
F 231	FS18	愚かな人	B 059	O 068	OS 05	愚かな人
F 232	FS18	愚かな人	B 060	O 069	OS 05	愚かな人
F 234	FS18	愚かな人	B 061	O 070	OS 05	愚かな人
F 235	FS18	愚かな人	B 062	O 071	OS 05	愚かな人
F 236	FS18	愚かな人	B 063	O 072	OS 05	愚かな人
F 238	FS18	愚かな人	B 064	O 073	OS 05	愚かな人
F 237	FS18	愚かな人	B 065	O 074	OS 05	愚かな人

F番号順(2/6)

最終版(再考 真理のことば)		オリジナル(中村氏版)	
詩番号	章番号	詩番号	章番号
F 073	FS07	千という数にちなんで	B 227
F 074	FS07	千という数にちなんで	B 228
F 075	FS07	千という数にちなんで	B 229
F 075	FS07	千という数にちなんで	B 229
F 075	FS07	千という数にちなんで	B 229
F 076	FS07	千という数にちなんで	B 230
F 076	FS07	千という数にちなんで	B 230
F 077	FS07	千という数にちなんで	B 231
F 078	FS07	千という数にちなんで	B 232
F 079	FS07	千という数にちなんで	B 233
F 080	FS07	千という数にちなんで	B 234
F 081	FS07	千という数にちなんで	B 235
F 082	FS07	千という数にちなんで	B 236
F 083	FS07	千という数にちなんで	B 237
F 084	FS07	千という数にちなんで	B 238
F 085	FS08	花にちなんで	B 037
F 086	FS08	花にちなんで	B 038
F 087	FS08	花にちなんで	B 039
F 088	FS08	花にちなんで	B 040
F 088	FS08	花にちなんで	B 040
F 089	FS08	花にちなんで	B 041
F 090	FS08	花にちなんで	B 042
F 091	FS08	花にちなんで	B 043
F 092	FS08	花にちなんで	B 044
F 093	FS08	花にちなんで	B 045
F 094	FS08	花にちなんで	B 046
F 095	FS08	花にちなんで	B 047
F 096	FS08	花にちなんで	B 048
F 097	FS08	花にちなんで	B 049
F 098	FS08	花にちなんで	B 050
F 098	FS08	花にちなんで	B 050
F 099	FS09	楽しみ	B 266
F 100	FS09	楽しみ	B 267
F 101	FS09	楽しみ	B 268
F 102	FS09	楽しみ	B 355
F 103	FS09	楽しみ	B 356
F 104	FS09	楽しみ	B 269
F 105	FS09	楽しみ	B 270
F 106	FS09	楽しみ	B 271
F 107	FS09	楽しみ	B 272
F 108	FS09	楽しみ	B 273
F 109	FS09	楽しみ	B 274
F 110	FS09	楽しみ	B 275
F 111	FS10	さまざまなこと	B 239
F 112	FS10	さまざまなこと	B 240
F 113	FS10	さまざまなこと	B 241
F 114	FS10	さまざまなこと	B 242
F 115	FS10	さまざまなこと	B 243
F 116	FS10	さまざまなこと	B 246
F 117	FS10	さまざまなこと	B 353
F 118	FS10	さまざまなこと	B 244
F 119	FS10	さまざまなこと	B 245
F 120	FS11	象	B 247
F 121	FS11	象	B 248
F 122	FS11	象	B 249
F 122	FS11	象	B 249
F 123	FS11	象	B 250
F 124	FS11	象	B 251
F 125	FS11	象	B 252
F 126	FS11	象	B 253
F 127	FS11	象	B 254
F 128	FS11	象	B 255
F 129	FS11	象	B 256
F 130	FS11	象	B 257
F 131	FS11	象	B 258
F 132	FS11	象	B 259
F 133	FS12	ひと組ずつ	B 001
F 134	FS12	ひと組ずつ	B 002
F 135	FS12	ひと組ずつ	B 003
F 136	FS12	ひと組ずつ	B 004
F 137	FS12	ひと組ずつ	B 005
F 138	FS12	ひと組ずつ	B 006
F 139	FS12	ひと組ずつ	B 007
F 140	FS12	ひと組ずつ	B 008

O番号順(2/6)

最終版(再考 真理のことば)		オリジナル(中村氏版)	
詩番号	章番号	詩番号	章番号
F 302	FS22	仏弟子	B 066
F 242	FS19	賢い人	B 067
F 247	FS19	賢い人	B 068
F 243	FS19	賢い人	B 069
F 254	FS19	賢い人	B 070
F 239	FS19	賢い人	B 071
F 245	FS19	賢い人	B 072
F 254	FS19	賢い人	B 073
F 244	FS19	賢い人	B 074
F 248	FS19	賢い人	B 075
F 256	FS19	賢い人	B 076
F 253	FS19	賢い人	B 077
F 250	FS19	賢い人	B 078
削除			B 080
F 259	FS19	賢い人	B 081
F 271	FS20	真人	B 082
F 241	FS19	賢い人	B 083
F 257	FS19	賢い人	B 084
F 257	FS19	賢い人	B 084
F 160	FS14	怒り	B 085
F 255	FS19	賢い人	B 087
F 258	FS19	賢い人	B 088
F 261	FS19	賢い人	B 089
F 269	FS20	真人	B 091
F 270	FS20	真人	B 090
F 072	FS07	千という数にちなんで	B 226
F 073	FS07	千という数にちなんで	B 227
F 074	FS07	千という数にちなんで	B 228
F 075	FS07	千という数にちなんで	B 229
F 075	FS07	千という数にちなんで	B 229
F 075	FS07	千という数にちなんで	B 229
F 076	FS07	千という数にちなんで	B 230
F 076	FS07	千という数にちなんで	B 230
F 077	FS07	千という数にちなんで	B 231
F 078	FS07	千という数にちなんで	B 232
F 079	FS07	千という数にちなんで	B 233
F 080	FS07	千という数にちなんで	B 234
F 081	FS07	千という数にちなんで	B 235
F 082	FS07	千という数にちなんで	B 236
F 083	FS07	千という数にちなんで	B 237
F 082	FS07	千という数にちなんで	B 236
F 083	FS07	千という数にちなんで	B 237
F 084	FS07	千という数にちなんで	B 238
F 148	FS13	悪	B 276
F 149	FS13	悪	B 277
F 150	FS13	悪	B 278
F 151	FS13	悪	B 279
F 152	FS13	悪	B 280
F 153	FS13	悪	B 281
F 154	FS13	悪	B 282
F 155	FS13	悪	B 283
F 156	FS13	悪	B 284
F 157	FS13	悪	B 285
F 222	FS17	悪いところ	B 286
F 158	FS13	悪	B 287
F 159	FS13	悪	B 288
削除			B 289
削除			B 290
削除			B 291
削除			B 292
F 161	FS14	怒り	B 293
F 162	FS14	怒り	B 294
F 036	FS04	老いること	B 295
F 233	FS18	愚かな人	B 296
削除			O 137
欠番			O 138
欠番			O 139
削除			O 140
F 303	FS23	修行僧	B 297
F 304	FS23	修行僧	B 298
F 260	FS19	賢い人	B 299
F 260	FS19	賢い人	B 299
削除			O 145
F 033	FS04	老いること	B 215
F 034	FS04	老いること	B 216
F 035	FS04	老いること	B 217

F番号順(3/6)

O番号順(3/6)

最終版(再考 真理のことば)		ログ記事		オリジナル(中村氏版)		
詩番号	章番号	章名	詩番号	詩番号	章番号	章名
F 141	FS12	ひと組ずつ	B 009	O 011	OS 01	ひと組ずつ
F 142	FS12	ひと組ずつ	B 010	O 012	OS 01	ひと組ずつ
F 143	FS12	ひと組ずつ	B 011	O 013	OS 01	ひと組ずつ
F 144	FS12	ひと組ずつ	B 012	O 014	OS 01	ひと組ずつ
F 145	FS12	ひと組ずつ	B 013	O 019	OS 01	ひと組ずつ
F 146	FS12	ひと組ずつ	B 014	O 020	OS 01	ひと組ずつ
F 147	FS13	悪	B 350	O 209	OS 16	愛するもの
F 148	FS13	悪	B 276	O 116	OS 09	悪
F 149	FS13	悪	B 277	O 117	OS 09	悪
F 150	FS13	悪	B 278	O 118	OS 09	悪
F 151	FS13	悪	B 279	O 119	OS 09	悪
F 152	FS13	悪	B 280	O 120	OS 09	悪
F 153	FS13	悪	B 281	O 121	OS 09	悪
F 154	FS13	悪	B 282	O 122	OS 09	悪
F 155	FS13	悪	B 283	O 123	OS 09	悪
F 156	FS13	悪	B 284	O 124	OS 09	悪
F 157	FS13	悪	B 285	O 125	OS 09	悪
F 158	FS13	悪	B 287	O 127	OS 09	悪
F 159	FS13	悪	B 288	O 128	OS 09	悪
F 160	FS14	怒り	B 300	O 222	OS 17	怒り
F 160	FS14	怒り	B 085	O 094	OS 07	真人
F 161	FS14	怒り	B 293	O 133	OS 10	暴力
F 162	FS14	怒り	B 294	O 134	OS 10	暴力
F 163	FS14	怒り	B 301	O 223	OS 17	怒り
F 164	FS14	怒り	B 303	新設	OS 17	怒り
F 165	FS14	怒り	B 304	O 227	OS 17	怒り
F 166	FS14	怒り	B 305	O 228	OS 17	怒り
F 167	FS14	怒り	B 306	O 229	OS 17	怒り
F 168	FS14	怒り	B 307	O 230	OS 17	怒り
F 169	FS14	怒り	B 308	O 231	OS 17	怒り
F 170	FS14	怒り	B 309	O 232	OS 17	怒り
F 171	FS14	怒り	B 310	O 233	OS 17	怒り
F 172	FS14	怒り	B 311	O 234	OS 17	怒り
F 173	FS15	汚れ	B 312	O 235	OS 18	汚れ
F 174	FS15	汚れ	B 313	O 238	OS 18	汚れ
F 175	FS15	汚れ	B 314	O 239	OS 18	汚れ
F 176	FS15	汚れ	B 315	O 240	OS 18	汚れ
F 177	FS15	汚れ	B 316	O 241	OS 18	汚れ
F 178	FS15	汚れ	B 317	O 242	OS 18	汚れ
F 179	FS15	汚れ	B 318	O 243	OS 18	汚れ
F 180	FS15	汚れ	B 319	O 244	OS 18	汚れ
F 181	FS15	汚れ	B 320	O 245	OS 18	汚れ
F 182	FS15	汚れ	B 321	O 246	OS 18	汚れ
F 182	FS15	汚れ	B 321	O 247	OS 18	汚れ
F 183	FS15	汚れ	B 322	O 248	OS 18	汚れ
F 184	FS15	汚れ	B 323	O 249	OS 18	汚れ
F 185	FS15	汚れ	B 324	O 250	OS 18	汚れ
F 186	FS15	汚れ	B 325	O 251	OS 18	汚れ
F 187	FS15	汚れ	B 326	O 252	OS 18	汚れ
F 188	FS15	汚れ	B 327	O 253	OS 18	汚れ
F 189	FS15	汚れ	B 302	O 226	OS 17	怒り
F 190	FS15	汚れ	B 328	O 254	OS 18	汚れ
F 191	FS15	汚れ	B 329	O 255	OS 18	汚れ
F 192	FS16	執着と欲望	B 330	O 334	OS 24	愛執
F 193	FS16	執着と欲望	B 331	O 335	OS 24	愛執
F 194	FS16	執着と欲望	B 332	O 336	OS 24	愛執
F 195	FS16	執着と欲望	B 351	O 212	OS 16	愛するもの
F 195	FS16	執着と欲望	B 351	O 213	OS 16	愛するもの
F 195	FS16	執着と欲望	B 351	O 214	OS 16	愛するもの
F 195	FS16	執着と欲望	B 351	O 215	OS 16	愛するもの
F 195	FS16	執着と欲望	B 351	O 216	OS 16	愛するもの
F 196	FS16	執着と欲望	B 352	O 212	OS 16	愛するもの
F 196	FS16	執着と欲望	B 351	O 213	OS 16	愛するもの
F 196	FS16	執着と欲望	B 351	O 214	OS 16	愛するもの
F 196	FS16	執着と欲望	B 351	O 215	OS 16	愛するもの
F 196	FS16	執着と欲望	B 351	O 216	OS 16	愛するもの
F 197	FS16	執着と欲望	B 333	O 337	OS 24	愛執
F 198	FS16	執着と欲望	B 334	O 338	OS 24	愛執
F 199	FS16	執着と欲望	B 335	O 339	OS 24	愛執
F 200	FS16	執着と欲望	B 336	O 341	OS 24	愛執
F 201	FS16	執着と欲望	B 337	O 340	OS 24	愛執
F 202	FS16	執着と欲望	B 338	O 342	OS 24	愛執
F 202	FS16	執着と欲望	B 338	O 343	OS 24	愛執
F 203	FS16	執着と欲望	B 339	O 344	OS 24	愛執

最終版(再考 真理のことば)		ログ記事		オリジナル(中村氏版)		
詩番号	章番号	章名	詩番号	詩番号	章番号	章名
F 037	FS04	老いること	B 218	O 149	OS 11	老いること
F 038	FS04	老いること	B 219	O 150	OS 11	老いること
F 039	FS04	老いること	B 220	O 151	OS 11	老いること
F 040	FS04	老いること	B 221	O 152	OS 11	老いること
F 041	FS04	老いること	B 222	O 153	OS 11	老いること
F 042	FS04	老いること	B 223	O 154	OS 11	老いること
F 043	FS04	老いること	B 224	O 155	OS 11	老いること
F 044	FS04	老いること	B 225	O 156	OS 11	老いること
F 013	FS02	自己	B 179	O 157	OS 12	自己
F 016	FS02	自己	B 182	O 158	OS 12	自己
削除 考察は第3章で行う			B 183	O 159	OS 12	自己
F 012	FS02	自己	B 178	O 160	OS 12	自己
F 014	FS02	自己	B 180	O 161	OS 12	自己
F 015	FS02	自己	B 181	O 162	OS 12	自己
F 018	FS02	自己	B 185	O 163	OS 12	自己
F 017	FS02	自己	B 184	O 164	OS 12	自己
F 019	FS02	自己	B 186	O 165	OS 12	自己
F 020	FS02	自己	B 187	O 166	OS 12	自己
F 045	FS05	世の中	B 203	O 167	OS 13	世の中
F 046	FS05	世の中	B 204	O 168	OS 13	世の中
F 047	FS05	世の中	B 205	O 169	OS 13	世の中
F 048	FS05	世の中	B 206	O 170	OS 13	世の中
F 049	FS05	世の中	B 207	O 171	OS 13	世の中
F 050	FS05	世の中	B 208	O 172	OS 13	世の中
F 051	FS05	世の中	B 209	O 173	OS 13	世の中
F 052	FS05	世の中	B 210	O 174	OS 13	世の中
F 053	FS05	世の中	B 211	O 175	OS 13	世の中
F 054	FS05	世の中	B 212	O 176	OS 13	世の中
F 055	FS05	世の中	B 213	O 177	OS 13	世の中
F 056	FS05	世の中	B 214	O 178	OS 13	世の中
F 348	FS25	ブッダ	B 162	O 179	OS 14	ブッダ
F 349	FS25	ブッダ	B 163	O 180	OS 14	ブッダ
F 322	FS23	修行僧	B -	O 181	OS 14	ブッダ
F 251	FS19	賢い人	B 164	O 182	OS 14	ブッダ
F 291	FS22	仏弟子	B 126	O 183	OS 14	ブッダ
F 293	FS22	仏弟子	B 128	O 184	OS 14	ブッダ
F 292	FS22	仏弟子	B 127	O 185	OS 14	ブッダ
F 249	FS19	賢い人	B 079	O 186	OS 14	ブッダ
F 295	FS22	仏弟子	B 129	O 187	OS 14	ブッダ
F 297	FS22	仏弟子	B 131	O 188	OS 14	ブッダ
F 298	FS22	仏弟子	B 132	O 189	OS 14	ブッダ
F 299	FS22	仏弟子	B 134	O 190	OS 14	ブッダ
F 299	FS22	仏弟子	B 134	O 191	OS 14	ブッダ
F 300	FS22	仏弟子	B 133	O 192	OS 14	ブッダ
F 252	FS19	賢い人	B 165	O 193	OS 14	ブッダ
F 296	FS22	仏弟子	B 130	O 194	OS 14	ブッダ
削除			B 166	O 195	OS 14	ブッダ
削除			B 166	O 196	OS 14	ブッダ
F 099	FS09	楽しみ	B 266	O 197	OS 15	楽しみ
F 100	FS09	楽しみ	B 267	O 198	OS 15	楽しみ
F 101	FS09	楽しみ	B 268	O 199	OS 15	楽しみ
削除				O 200	OS 15	楽しみ
削除				O 201	OS 15	楽しみ
F 104	FS09	楽しみ	B 269	O 202	OS 15	楽しみ
F 105	FS09	楽しみ	B 270	O 203	OS 15	楽しみ
F 106	FS09	楽しみ	B 271	O 204	OS 15	楽しみ
F 107	FS09	楽しみ	B 272	O 205	OS 15	楽しみ
F 108	FS09	楽しみ	B 273	O 206	OS 15	楽しみ
F 109	FS09	楽しみ	B 274	O 207	OS 15	楽しみ
F 110	FS09	楽しみ	B 275	O 208	OS 15	楽しみ
F 147	FS13	悪	B 350	O 209	OS 16	愛するもの
削除				O 210	OS 16	愛するもの
削除				O 211	OS 16	愛するもの
F 195	FS16	執着と欲望	B 351	O 212	OS 16	愛するもの
F 196	FS16	執着と欲望	B 352	O 212	OS 16	愛するもの
F 195	FS16	執着と欲望	B 351	O 213	OS 16	愛するもの
F 196	FS16	執着と欲望	B 351	O 214	OS 16	愛するもの
F 196	FS16	執着と欲望	B 351	O 215	OS 16	愛するもの
F 195	FS16	執着と欲望	B 351	O 216	OS 16	愛するもの
F 196	FS16	執着と欲望	B 351	O 216	OS 16	愛するもの
F 196	FS16	執着と欲望	B 351	O 216	OS 16	愛するもの
F 117	FS10	さまざまなこと	B 353	O 217	OS 16	愛するもの

F番号順(4/6)

O番号順(4/6)

最終版(再考 真理のことば)		オリジナル(中村氏版)	
詩番号	章番号	詩番号	章番号
F 204	FS16 執着と欲望	B 340	O 345 OS 24 愛執
F 204	FS16 執着と欲望	B 340	O 346 OS 24 愛執
F 205	FS16 執着と欲望	B 341	O 347 OS 24 愛執
F 206	FS16 執着と欲望	B 342	O 356 OS 24 愛執
F 206	FS16 執着と欲望	B 342	O 357 OS 24 愛執
F 206	FS16 執着と欲望	B 342	O 358 OS 24 愛執
F 206	FS16 執着と欲望	B 342	O 359 OS 24 愛執
F 207	FS16 執着と欲望	B 343	O 349 OS 24 愛執
F 208	FS16 執着と欲望	B 344	O 350 OS 24 愛執
F 209	FS16 執着と欲望	B 345	O 355 OS 24 愛執
F 210	FS16 執着と欲望	B 354	O 218 OS 16 愛するもの
F 211	FS16 執着と欲望	B 346	O 354 OS 24 愛執
F 212	FS17 悪いところ	B 357	O 306 OS 22 地獄
F 213	FS17 悪いところ	B 358	O 309 OS 22 地獄
F 214	FS17 悪いところ	B 359	O 310 OS 22 地獄
F 215	FS17 悪いところ	B 360	O 312 OS 22 地獄
F 216	FS17 悪いところ	B 361	O 314 OS 22 地獄
F 217	FS17 悪いところ	B 362	O 315 OS 22 地獄
F 218	FS17 悪いところ	B 363	O 316 OS 22 地獄
F 219	FS17 悪いところ	B 364	O 317 OS 22 地獄
F 220	FS17 悪いところ	B 365	O 318 OS 22 地獄
F 221	FS17 悪いところ	B 366	O 319 OS 22 地獄
F 222	FS17 悪いところ	B 286	O 126 OS 09 悪
F 223	FS18 愚かな人	B 051	O 060 OS 05 愚かな人
F 224	FS18 愚かな人	B 052	O 061 OS 05 愚かな人
F 225	FS18 愚かな人	B 053	O 062 OS 05 愚かな人
F 226	FS18 愚かな人	B 054	O 063 OS 05 愚かな人
F 227	FS18 愚かな人	B 055	O 064 OS 05 愚かな人
F 228	FS18 愚かな人	B 056	O 065 OS 05 愚かな人
F 229	FS18 愚かな人	B 057	O 066 OS 05 愚かな人
F 230	FS18 愚かな人	B 058	O 067 OS 05 愚かな人
F 231	FS18 愚かな人	B 059	O 068 OS 05 愚かな人
F 232	FS18 愚かな人	B 060	O 069 OS 05 愚かな人
F 233	FS18 愚かな人	B 296	O 136 OS 10 暴力
F 234	FS18 愚かな人	B 061	O 070 OS 05 愚かな人
F 235	FS18 愚かな人	B 062	O 071 OS 05 愚かな人
F 236	FS18 愚かな人	B 063	O 072 OS 05 愚かな人
F 237	FS18 愚かな人	B 065	O 074 OS 05 愚かな人
F 238	FS18 愚かな人	B 064	O 073 OS 05 愚かな人
F 239	FS19 賢い人	B 071	O 080 OS 06 賢い人
F 240	FS19 賢い人	B 104	O 380 OS 25 修行僧
F 241	FS19 賢い人	B 083	O 091 OS 07 真人
F 242	FS19 賢い人	B 067	O 076 OS 06 賢い人
F 243	FS19 賢い人	B 069	O 078 OS 06 賢い人
F 244	FS19 賢い人	B 074	O 083 OS 06 賢い人
F 245	FS19 賢い人	B 072	O 081 OS 06 賢い人
F 246	FS19 賢い人	B 112	O 376 OS 25 修行僧
F 247	FS19 賢い人	B 068	O 077 OS 06 賢い人
F 248	FS19 賢い人	B 075	O 084 OS 06 賢い人
F 249	FS19 賢い人	B 079	O 186 OS 14 ブツダ
F 250	FS19 賢い人	B 078	O 087 OS 06 賢い人
F 251	FS19 賢い人	B 164	O 182 OS 14 ブツダ
F 252	FS19 賢い人	B 165	O 193 OS 14 ブツダ
F 253	FS19 賢い人	B 077	O 086 OS 06 賢い人
F 254	FS19 賢い人	B 070	O 079 OS 06 賢い人
F 254	FS19 賢い人	B 073	O 082 OS 06 賢い人
F 255	FS19 賢い人	B 087	O 095 OS 07 真人
F 256	FS19 賢い人	B 076	O 085 OS 06 賢い人
F 257	FS19 賢い人	B 084	O 092 OS 07 真人
F 257	FS19 賢い人	B 084	O 093 OS 07 真人
F 258	FS19 賢い人	B 088	O 096 OS 07 真人
F 259	FS19 賢い人	B 081	O 089 OS 06 賢い人
F 260	FS19 賢い人	B 299	O 143 OS 10 暴力
F 260	FS19 賢い人	B 299	O 144 OS 10 暴力
F 261	FS19 賢い人	B 089	O 097 OS 07 真人
F 262	FS20 真人	B 150	O 401 OS 26 パラモン
F 263	FS20 真人	B 151	O 407 OS 26 パラモン
F 264	FS20 真人	B 155	O 412 OS 26 パラモン
F 265	FS20 真人	B 154	O 411 OS 26 パラモン
F 266	FS20 真人	B 153	O 410 OS 26 パラモン
F 267	FS20 真人	B 152	O 402 OS 26 パラモン
F 268	FS20 真人	B 156	O 413 OS 26 パラモン
F 269	FS20 真人	B 091	O 098 OS 07 真人
F 270	FS20 真人	B 090	O 099 OS 07 真人

最終版(再考 真理のことば)		オリジナル(中村氏版)	
詩番号	章番号	詩番号	章番号
F 210	FS16 執着と欲望	B 354	O 218 OS 16 愛するもの
F 102	FS09 楽しみ	B 355	O 219 OS 16 愛するもの
F 103	FS09 楽しみ	B 356	O 220 OS 16 愛するもの
削除			
F 160	FS14 怒り	B 300	O 222 OS 17 怒り
F 163	FS14 怒り	B 301	O 223 OS 17 怒り
削除			
F 189	FS15 汚れ	B 302	O 226 OS 17 怒り
F 165	FS14 怒り	B 304	O 227 OS 17 怒り
F 166	FS14 怒り	B 305	O 228 OS 17 怒り
F 167	FS14 怒り	B 306	O 229 OS 17 怒り
F 168	FS14 怒り	B 307	O 230 OS 17 怒り
F 169	FS14 怒り	B 308	O 231 OS 17 怒り
F 170	FS14 怒り	B 309	O 232 OS 17 怒り
F 171	FS14 怒り	B 310	O 233 OS 17 怒り
F 172	FS14 怒り	B 311	O 234 OS 17 怒り
F 173	FS15 汚れ	B 312	O 235 OS 18 汚れ
削除			
削除			
F 174	FS15 汚れ	B 313	O 238 OS 18 汚れ
F 175	FS15 汚れ	B 314	O 239 OS 18 汚れ
F 176	FS15 汚れ	B 315	O 240 OS 18 汚れ
F 177	FS15 汚れ	B 316	O 241 OS 18 汚れ
F 178	FS15 汚れ	B 317	O 242 OS 18 汚れ
F 179	FS15 汚れ	B 318	O 243 OS 18 汚れ
F 180	FS15 汚れ	B 319	O 244 OS 18 汚れ
F 181	FS15 汚れ	B 320	O 245 OS 18 汚れ
F 182	FS15 汚れ	B 321	O 246 OS 18 汚れ
F 182	FS15 汚れ	B 321	O 247 OS 18 汚れ
F 183	FS15 汚れ	B 322	O 248 OS 18 汚れ
F 184	FS15 汚れ	B 323	O 249 OS 18 汚れ
F 185	FS15 汚れ	B 324	O 250 OS 18 汚れ
F 186	FS15 汚れ	B 325	O 251 OS 18 汚れ
F 187	FS15 汚れ	B 326	O 252 OS 18 汚れ
F 188	FS15 汚れ	B 327	O 253 OS 18 汚れ
F 190	FS15 汚れ	B 328	O 254 OS 18 汚れ
F 191	FS15 汚れ	B 329	O 255 OS 18 汚れ
F 278	FS21 道を実践...	B 090	O 256 OS 19 道を実践...
F 278	FS21 道を実践...	B 090	O 257 OS 19 道を実践...
F 279	FS21 道を実践...	B 091	O 258 OS 19 道を実践...
F 280	FS21 道を実践...	B 092	O 259 OS 19 道を実践...
F 281	FS21 道を実践...	B 093	O 260 OS 19 道を実践...
F 282	FS21 道を実践...	B 094	O 261 OS 19 道を実践...
F 283	FS21 道を実践...	B 095	O 262 OS 19 道を実践...
F 283	FS21 道を実践...	B 095	O 263 OS 19 道を実践...
F 284	FS21 道を実践...	B 096	O 264 OS 19 道を実践...
削除			
F 285	FS21 道を実践...	B 097	O 265 OS 19 道を実践する人
F 285	FS21 道を実践...	B 098	O 266 OS 19 道を実践...
F 286	FS21 道を実践...	B 099	O 267 OS 19 道を実践...
F 287	FS21 道を実践...	B 100	O 268 OS 19 道を実践...
F 288	FS21 道を実践...	B 100	O 268 OS 19 道を実践...
F 287	FS21 道を実践...	B 101	O 269 OS 19 道を実践...
F 288	FS21 道を実践...	B 101	O 269 OS 19 道を実践...
F 289	FS21 道を実践...	B 102	O 270 OS 19 道を実践...
F 290	FS21 道を実践...	B 103	O 271 OS 19 道を実践...
F 290	FS21 道を実践...	B 103	O 272 OS 19 道を実践...
F 057	FS06 道	B 188	O 273 OS 20 道
F 058	FS06 道	B 189	O 274 OS 20 道
F 059	FS06 道	B 190	O 275 OS 20 道
F 060	FS06 道	B 191	O 276 OS 20 道
F 061	FS06 道	B 192	O 277 OS 20 道
F 061	FS06 道	B 192	O 278 OS 20 道
F 061	FS06 道	B 192	O 279 OS 20 道
F 062	FS06 道	B 193	O 280 OS 20 道
F 063	FS06 道	B 194	O 281 OS 20 道
F 064	FS06 道	B 195	O 282 OS 20 道
F 065	FS06 道	B 196	O 283 OS 20 道
F 066	FS06 道	B 197	O 284 OS 20 道
F 067	FS06 道	B 198	O 285 OS 20 道
F 068	FS06 道	B 199	O 286 OS 20 道
F 069	FS06 道	B 200	O 287 OS 20 道
F 070	FS06 道	B 201	O 288 OS 20 道
F 071	FS06 道	B 202	O 289 OS 20 道

F番号順(5/6)

O番号順(5/6)

最終版(再考 真理のことば)		ログ記事		オリジナル(中村氏版)		
詩番号	章番号	章名	詩番号	詩番号	章番号	章名
F 271	FS20	真人	B 082	O 090	OS 07	真人
F 272	FS20	真人	B 118	O 372	OS 25	修行僧
F 273	FS20	真人	B 348	O 352	OS 24	愛執
F 274	FS20	真人	B 347	O 351	OS 24	愛執
F 275	FS20	真人	B 175	O 348	OS 24	愛執
F 275	FS20	真人	B 175	O 421	OS 26	バラモン
F 276	FS20	真人	B 161	O 386	OS 26	バラモン
F 277	FS20	真人	B 170	O 398	OS 26	バラモン
F 277	FS20	真人	B 170	O 356	OS 24	愛執
F 277	FS20	真人	B 170	O 357	OS 24	愛執
F 277	FS20	真人	B 170	O 358	OS 24	愛執
F 277	FS20	真人	B 170	O 359	OS 24	愛執
F 278	FS21	道を实践…	B 090	O 256	OS 19	道を实践…
F 278	FS21	道を实践…	B 090	O 257	OS 19	道を实践…
F 279	FS21	道を实践…	B 091	O 258	OS 19	道を实践…
F 280	FS21	道を实践…	B 092	O 259	OS 19	道を实践…
F 281	FS21	道を实践…	B 093	O 260	OS 19	道を实践…
F 282	FS21	道を实践…	B 094	O 261	OS 19	道を实践…
F 283	FS21	道を实践…	B 095	O 262	OS 19	道を实践…
F 283	FS21	道を实践…	B 095	O 263	OS 19	道を实践…
F 284	FS21	道を实践…	B 096	O 264	OS 19	道を实践…
F 285	FS21	道を实践…	B 098	O 266	OS 19	道を实践…
F 286	FS21	道を实践…	B 099	O 267	OS 19	道を实践…
F 287	FS21	道を实践…	B 100	O 268	OS 19	道を实践…
F 287	FS21	道を实践…	B 101	O 269	OS 19	道を实践…
F 288	FS21	道を实践…	B 100	O 268	OS 19	道を实践…
F 288	FS21	道を实践…	B 101	O 269	OS 19	道を实践…
F 289	FS21	道を实践…	B 102	O 270	OS 19	道を实践…
F 290	FS21	道を实践…	B 103	O 271	OS 19	道を实践…
F 290	FS21	道を实践…	B 103	O 272	OS 19	道を实践…
F 291	FS22	仏弟子	B 126	O 183	OS 14	ブツダ
F 292	FS22	仏弟子	B 127	O 185	OS 14	ブツダ
F 293	FS22	仏弟子	B 128	O 184	OS 14	ブツダ
F 294	FS22	仏弟子	B 121	O 368	OS 25	修行僧
F 294	FS22	仏弟子	B 121	O 381	OS 25	修行僧
F 295	FS22	仏弟子	B 129	O 187	OS 14	ブツダ
F 296	FS22	仏弟子	B 130	O 194	OS 14	ブツダ
F 297	FS22	仏弟子	B 131	O 188	OS 14	ブツダ
F 298	FS22	仏弟子	B 132	O 189	OS 14	ブツダ
F 299	FS22	仏弟子	B 134	O 190	OS 14	ブツダ
F 299	FS22	仏弟子	B 134	O 191	OS 14	ブツダ
F 300	FS22	仏弟子	B 133	O 192	OS 14	ブツダ
F 301	FS22	仏弟子	B 260	O 296	OS 21	さまざまなごと
F 301	FS22	仏弟子	B 261	O 297	OS 21	さまざまなごと
F 301	FS22	仏弟子	B 262	O 298	OS 21	さまざまなごと
F 301	FS22	仏弟子	B 263	O 299	OS 21	さまざまなごと
F 301	FS22	仏弟子	B 264	O 300	OS 21	さまざまなごと
F 301	FS22	仏弟子	B 265	O 301	OS 21	さまざまなごと
F 302	FS22	仏弟子	B 066	O 075	OS 06	賢い人
F 303	FS23	修行僧	B 297	O 141	OS 10	暴力
F 304	FS23	修行僧	B 298	O 142	OS 10	暴力
F 305	FS23	修行僧	B 105	O 375	OS 25	修行僧
F 306	FS23	修行僧	B 106	O 392	OS 26	修行僧
F 307	FS23	修行僧	B 107	O 365	OS 25	修行僧
F 308	FS23	修行僧	B 108	O 366	OS 25	修行僧
F 309	FS23	修行僧	B 115	O 391	OS 26	バラモン
F 310	FS23	修行僧	B 109	O 360	OS 25	修行僧
F 311	FS23	修行僧	B 110	O 361	OS 25	修行僧
F 312	FS23	修行僧	B 111	O 363	OS 25	修行僧
F 313	FS23	修行僧	B 113	O 379	OS 25	修行僧
F 314	FS23	修行僧	B 114	O 390	OS 26	バラモン
F 315	FS23	修行僧	B 116	O 369	OS 25	修行僧
F 315	FS23	修行僧	B 116	O 377	OS 25	修行僧
F 316	FS23	修行僧	B 117	O 370	OS 25	修行僧
F 317	FS23	修行僧	B 119	O 371	OS 25	修行僧
F 318	FS23	修行僧	B 388	O 308	OS 22	悪いところ
F 319	FS23	修行僧	B 369	O 311	OS 22	悪いところ
F 320	FS23	修行僧	B 370	O 313	OS 22	悪いところ
F 321	FS23	修行僧	B 120	O 373	OS 25	修行僧
F 321	FS23	修行僧	B 120	O 374	OS 25	修行僧
F 322	FS23	修行僧	B	O 181	OS 14	ブツダ
F 323	FS23	修行僧	B 122	O 364	OS 25	修行僧
F 324	FS23	修行僧	B 123	O 378	OS 25	修行僧
F 325	FS23	修行僧	B 124	O 367	OS 25	修行僧

最終版(再考 真理のことば)		ログ記事		オリジナル(中村氏版)		
詩番号	章番号	章名	詩番号	詩番号	章番号	章名
F 111	FS10	さまざまなごと	B 239	O 290	OS 21	さまざまなごと
F 112	FS10	さまざまなごと	B 240	O 291	OS 21	さまざまなごと
F 113	FS10	さまざまなごと	B 241	O 292	OS 21	さまざまなごと
F 114	FS10	さまざまなごと	B 242	O 293	OS 21	さまざまなごと
削除				O 294	OS 21	さまざまなごと
削除				O 295	OS 21	さまざまなごと
F 301	FS22	仏弟子	B 260	O 296	OS 21	さまざまなごと
F 301	FS22	仏弟子	B 261	O 297	OS 21	さまざまなごと
F 301	FS22	仏弟子	B 262	O 298	OS 21	さまざまなごと
F 301	FS22	仏弟子	B 263	O 299	OS 21	さまざまなごと
F 301	FS22	仏弟子	B 264	O 300	OS 21	さまざまなごと
F 301	FS22	仏弟子	B 265	O 301	OS 21	さまざまなごと
F 115	FS10	さまざまなごと	B 243	O 302	OS 21	さまざまなごと
F 118	FS10	さまざまなごと	B 244	O 303	OS 21	さまざまなごと
F 119	FS10	さまざまなごと	B 245	O 304	OS 21	さまざまなごと
F 116	FS10	さまざまなごと	B 246	O 305	OS 21	さまざまなごと
F 212	FS17	悪いところ	B 357	O 306	OS 22	地獄
F 334	FS24	バラモン	B 367	O 307	OS 22	バラモン
F 318	FS23	修行僧	B 368	O 308	OS 22	悪いところ
F 213	FS17	悪いところ	B 358	O 309	OS 22	地獄
F 214	FS17	悪いところ	B 359	O 310	OS 22	地獄
F 319	FS23	修行僧	B 369	O 311	OS 22	悪いところ
F 215	FS17	悪いところ	B 360	O 312	OS 22	地獄
F 320	FS23	修行僧	B 370	O 313	OS 22	悪いところ
F 216	FS17	悪いところ	B 361	O 314	OS 22	地獄
F 217	FS17	悪いところ	B 362	O 315	OS 22	地獄
F 218	FS17	悪いところ	B 363	O 316	OS 22	地獄
F 219	FS17	悪いところ	B 364	O 317	OS 22	地獄
F 220	FS17	悪いところ	B 365	O 318	OS 22	地獄
F 221	FS17	悪いところ	B 366	O 319	OS 22	地獄
F 120	FS11	象	B 247	O 320	OS 23	象
F 121	FS11	象	B 248	O 321	OS 23	象
F 122	FS11	象	B 249	O 322	OS 23	象
F 122	FS11	象	B 249	O 323	OS 23	象
F 123	FS11	象	B 250	O 324	OS 23	象
F 124	FS11	象	B 251	O 325	OS 23	象
F 125	FS11	象	B 252	O 326	OS 23	象
F 126	FS11	象	B 253	O 327	OS 23	象
F 127	FS11	象	B 254	O 328	OS 23	象
F 128	FS11	象	B 255	O 329	OS 23	象
F 129	FS11	象	B 256	O 330	OS 23	象
F 130	FS11	象	B 257	O 331	OS 23	象
F 131	FS11	象	B 258	O 332	OS 23	象
F 132	FS11	象	B 259	O 333	OS 23	象
F 192	FS16	執着と欲望	B 330	O 334	OS 24	愛執
F 193	FS16	執着と欲望	B 331	O 335	OS 24	愛執
F 194	FS16	執着と欲望	B 332	O 336	OS 24	愛執
F 197	FS16	執着と欲望	B 333	O 337	OS 24	愛執
F 198	FS16	執着と欲望	B 334	O 338	OS 24	愛執
F 199	FS16	執着と欲望	B 335	O 339	OS 24	愛執
F 201	FS16	執着と欲望	B 337	O 340	OS 24	愛執
F 200	FS16	執着と欲望	B 336	O 341	OS 24	愛執
F 202	FS16	執着と欲望	B 338	O 342	OS 24	愛執
F 202	FS16	執着と欲望	B 338	O 343	OS 24	愛執
F 203	FS16	執着と欲望	B 339	O 344	OS 24	愛執
F 204	FS16	執着と欲望	B 340	O 345	OS 24	愛執
F 204	FS16	執着と欲望	B 340	O 346	OS 24	愛執
F 205	FS16	執着と欲望	B 341	O 347	OS 24	愛執
F 275	FS20	真人	B 175	O 348	OS 24	愛執
F 207	FS16	執着と欲望	B 343	O 349	OS 24	愛執
F 208	FS16	執着と欲望	B 344	O 350	OS 24	愛執
F 274	FS20	真人	B 347	O 351	OS 24	愛執
F 273	FS20	真人	B 348	O 352	OS 24	愛執
F 347	FS25	ブツダ	B 349	O 353	OS 24	愛執
F 211	FS16	執着と欲望	B 346	O 354	OS 24	愛執
F 209	FS16	執着と欲望	B 345	O 355	OS 24	愛執
F 206	FS16	執着と欲望	B 342	O 356	OS 24	愛執
F 277	FS20	真人	B 170	O 356	OS 24	愛執
F 206	FS16	執着と欲望	B 342	O 357	OS 24	愛執
F 206	FS16	執着と欲望	B 342	O 358	OS 24	愛執
F 277	FS20	真人	B 170	O 358	OS 24	愛執
F 206	FS16	執着と欲望	B 342	O 359	OS 24	愛執
F 277	FS20	真人	B 170	O 359	OS 24	愛執

F番号順(6/6)

O番号順(6/6)

最終版(再考 真理のことば)			オリジナル(中村氏版)	
詩番号	章番号	章名	詩番号	章番号
F 326	FS23	修行僧	B 125	O 382 OS 25
F 327	FS24	バラモン	B 136	O 406 OS 26
F 328	FS24	バラモン	B 137	O 383 OS 26
F 329	FS24	バラモン	B 138	O 399 OS 26
F 330	FS24	バラモン	B 139	O 415 OS 26
F 331	FS24	バラモン	B 140	O 416 OS 26
F 332	FS24	バラモン	B 141	O 389 OS 26
F 333	FS24	バラモン	B 142	O 393 OS 26
F 334	FS24	バラモン	B 367	O 307 OS 22
F 335	FS24	バラモン	B 143	O 394 OS 26
F 336	FS24	バラモン	B 144	O 395 OS 26
F 337	FS24	バラモン	B 145	O 396 OS 26
F 338	FS24	バラモン	B 146	O 404 OS 26
F 339	FS24	バラモン	B 147	O 405 OS 26
F 340	FS24	バラモン	B 148	O 409 OS 26
F 341	FS24	バラモン	B 149	O 408 OS 26
F 342	FS24	バラモン	B 150	O 388 OS 26
F 343	FS24	バラモン	B 158	O 384 OS 26
F 344	FS24	バラモン	B 159	O 400 OS 26
F 345	FS24	バラモン	B 160	O 385 OS 26
F 346	FS24	バラモン	B 161	O 386 OS 26
F 347	FS25	ブッダ	B 349	O 353 OS 24
F 348	FS25	ブッダ	B 162	O 179 OS 14
F 349	FS25	ブッダ	B 163	O 180 OS 14
F 350	FS25	ブッダ	B 135	O 387 OS 26
F 351	FS25	ブッダ	B 167	O 403 OS 26
F 352	FS25	ブッダ	B 169	O 397 OS 26
F 353	FS25	ブッダ	B 168	O 414 OS 26
F 354	FS25	ブッダ	B 171	O 417 OS 26
F 355	FS25	ブッダ	B 172	O 418 OS 26
F 356	FS25	ブッダ	B 173	O 419 OS 26
F 357	FS25	ブッダ	B 174	O 420 OS 26
F 358	FS25	ブッダ	B 176	O 422 OS 26
F 359	FS25	ブッダ	B 177	O 423 OS 26
削除			O 009	OS 01
削除			O 010	OS 01
削除			O 015	OS 01
削除			O 016	OS 01
削除			O 017	OS 01
削除			O 018	OS 01
削除		B 080	O 088	OS 06
削除		B 289	O 129	OS 10
削除		B 290	O 130	OS 10
削除		B 291	O 131	OS 10
削除		B 292	O 132	OS 10
削除			O 137	OS 10
削除			O 140	OS 10
削除			O 145	OS 10
欠番			O 138	OS 10
欠番			O 139	OS 10
削除 考察は第3章で行う		B 183	O 159	OS 12
削除		B 166	O 195	OS 14
削除		B 166	O 196	OS 14
削除			O 200	OS 15
削除			O 201	OS 15
削除			O 210	OS 16
削除			O 211	OS 16
削除			O 221	OS 17
削除			O 224	OS 17
削除			O 225	OS 17
削除			O 236	OS 18
削除			O 237	OS 18
削除		B 097	O 265	OS 19
削除			O 294	OS 21
削除			O 295	OS 21
削除			O 362	OS 25

最終版(再考 真理のことば)			オリジナル(中村氏版)	
詩番号	章番号	章名	詩番号	章番号
F 310	FS23	修行僧	B 109	O 360 OS 25
F 311	FS23	修行僧	B 110	O 361 OS 25
削除				O 362 OS 25
F 312	FS23	修行僧	B 111	O 363 OS 25
F 323	FS23	修行僧	B 122	O 364 OS 25
F 307	FS23	修行僧	B 107	O 365 OS 25
F 308	FS23	修行僧	B 108	O 366 OS 25
F 325	FS23	修行僧	B 124	O 367 OS 25
F 294	FS22	仏弟子	B 121	O 368 OS 25
F 315	FS23	修行僧	B 116	O 369 OS 25
F 316	FS23	修行僧	B 117	O 370 OS 25
F 317	FS23	修行僧	B 119	O 371 OS 25
F 272	FS20	真人	B 118	O 372 OS 25
F 321	FS23	修行僧	B 120	O 373 OS 25
F 321	FS23	修行僧	B 120	O 374 OS 25
F 305	FS23	修行僧	B 105	O 375 OS 25
F 246	FS19	賢い人	B 112	O 376 OS 25
F 315	FS23	修行僧	B 116	O 377 OS 25
F 324	FS23	修行僧	B 123	O 378 OS 25
F 313	FS23	修行僧	B 113	O 379 OS 25
F 240	FS19	賢い人	B 104	O 380 OS 25
F 294	FS22	仏弟子	B 121	O 381 OS 25
F 326	FS23	修行僧	B 125	O 382 OS 25
F 328	FS24	バラモン	B 137	O 383 OS 26
F 343	FS24	バラモン	B 158	O 384 OS 26
F 345	FS24	バラモン	B 160	O 385 OS 26
F 276	FS20	真人	B 161	O 386 OS 26
F 346	FS24	バラモン	B 161	O 386 OS 26
F 350	FS25	ブッダ	B 135	O 387 OS 26
F 342	FS24	バラモン	B 150	O 388 OS 26
F 332	FS24	バラモン	B 141	O 389 OS 26
F 314	FS23	修行僧	B 114	O 390 OS 26
F 309	FS23	修行僧	B 115	O 391 OS 26
F 306	FS23	修行僧	B 106	O 392 OS 26
F 333	FS24	バラモン	B 142	O 393 OS 26
F 335	FS24	バラモン	B 143	O 394 OS 26
F 336	FS24	バラモン	B 144	O 395 OS 26
F 337	FS24	バラモン	B 145	O 396 OS 26
F 352	FS25	ブッダ	B 169	O 397 OS 26
F 277	FS20	真人	B 170	O 398 OS 26
F 329	FS24	バラモン	B 138	O 399 OS 26
F 344	FS24	バラモン	B 159	O 400 OS 26
F 262	FS20	真人	B 150	O 401 OS 26
F 267	FS20	真人	B 152	O 402 OS 26
F 351	FS25	ブッダ	B 167	O 403 OS 26
F 338	FS24	バラモン	B 146	O 404 OS 26
F 339	FS24	バラモン	B 147	O 405 OS 26
F 327	FS24	バラモン	B 136	O 406 OS 26
F 263	FS20	真人	B 151	O 407 OS 26
F 341	FS24	バラモン	B 149	O 408 OS 26
F 340	FS24	バラモン	B 148	O 409 OS 26
F 266	FS20	真人	B 153	O 410 OS 26
F 265	FS20	真人	B 154	O 411 OS 26
F 264	FS20	真人	B 155	O 412 OS 26
F 268	FS20	真人	B 156	O 413 OS 26
F 353	FS25	ブッダ	B 168	O 414 OS 26
F 330	FS24	バラモン	B 139	O 415 OS 26
F 331	FS24	バラモン	B 140	O 416 OS 26
F 354	FS25	ブッダ	B 171	O 417 OS 26
F 355	FS25	ブッダ	B 172	O 418 OS 26
F 356	FS25	ブッダ	B 173	O 419 OS 26
F 357	FS25	ブッダ	B 174	O 420 OS 26
F 275	FS20	真人	B 175	O 421 OS 26
F 358	FS25	ブッダ	B 176	O 422 OS 26
F 359	FS25	ブッダ	B 177	O 423 OS 26
F 164	FS14	怒り	B 303	新設 OS 17

第2部 詩文一覧

第1節 さまざまな事

FS1 心

- F001 心は動揺し、ざわめき、護り難く、制し難い。英知ある人はこれを直くする____弓師が矢の弦を直くするように。
- F002 水の中（霊界）の住処から引き出されて陸「おか」の上（この世）に投げ捨てられた魚のように、この心は、悪魔の支配から逃れようとしてもがきまわる。
- F003 意は、顕在的で、軽々（かろがろ）とざわめき、欲するがままにおもむき捉え難い。
心は、この顕在的な意と、極めて見難く微妙な潜在部から成る。
- F004 悪魔は、この心の支配を狙う。
心を悪魔から守らなければ、安楽は得られない。
心を正しく治めれば安楽を得る。
- F005 心は独りで動きまわり、遠くに行ってしまう顕在部がある。また、形体なく、胸の奥の洞窟（心臓）にひそんでいる潜在部もある。これら心を治める人々は、死の束縛から逃れるであろう。
- F006 正しい真理を知らず、信念が汚されたならば、心の安楽（安住）は得られず、さとの智慧は湧いてこない。
- F007 心が煩惱に汚されず、念いが乱れずに、善悪のはからいを捨てるに至った真人（覚醒者）は、何も恐れることが無い。
- F008 ああ、この身はまもなく地上によこたわるであろう。魂は抜け、水瓶の破片のように無用になる。身体は、このように脆いものだと知って、身体への執着を離れよ。
- F009 心を正しく治めて、智慧の武器を持ち悪魔と戦え。そして執着することなく、勝ち得たものを守れ。
- F010 憎む人が憎む人にたいし、怨む人が怨む人にたいして、どのようなことをしようとも、邪なことをめざしている心はそれよりもひどいことをする。
- F011 母も父もその他親族がしてくれるよりもさらに優れたことを、正しく向けられた心がしてくれる。

FS2 自己

- F012 魂（自己）こそ心（自分）の主である。他人がどうして心（自分）の主であろうか？魂（自己）をよく整えたならば、得難き主を得る。
- F013 もしも人が魂（自己）を愛しいものと知るならば、心（自分）をよく守れ。賢い人は、怠らずに励み、常に心を治め、つつしんで目ざめているようにせよ。
- F014 心が作り、心から生じ、心から起った悪が知慧悪しき人を打ちくだく。一金剛石が宝石を打ちくだくように。
- F015 愚かな人は、仇敵がかれの不幸を望むとおりのことを、自己（魂）に対してなす。一蔓草（ツルクサ）が沙羅の木にまといつくように。
- F016 先ず自己を正しく整えてから、次いで他人に教えよ。そうすれば賢明な人は、煩わされて悩むことが無いであろう。
- F017 愚かにも、悪い見解にもとづいて、真理に従って生きるブツダ・真人たちの教えを罵るならば、その人は悪い報いが熟する。——カッタカという草は果実が熟すると自分自身が滅びてしまうように。
- F018 善からぬこと、自己のためにならぬことは、なし易い。ためになること、善いことは、実に極めてなし難い。
- F019 自ら悪をなすならば、自ら汚れ、自ら悪をなさないならば、自ら浄まる。浄いのも浄くないのも、各自のことがらである。人は他人を浄めることができない。
- F020 たとい他人にとっていかに大事であろうとも、（自分ではない）他人の目的のために自己のつとめをすて去ってはならぬ。自己の目的を熟知して、自己のつとめに専念せよ。

FS3 はげみ

- F021 努め励むのは不死の境地である。怠りなまけるのは死の境地である。
努め励む人々は死ぬことがない。怠りなまける人々は、死者のごとくである。
- F022 このようにはっきりと知って、努め励むことをよく知る人々は、努め励むことを喜び、真人（覚醒者）たちの明るく生き生きした生活を楽しむ。

- F023 真理に従う道を進むよう努め励み、堪え忍ぶこと強く、思慮ある人々は、安らぎに達する。
これは無上の幸せである。
- F024 心は奮起し、思いつつましく、行いは清く、気をつけて行動し、自ら制し、法（のり）にしたがって生き、努め励む人は、名声が高まる。
- F025 思慮ある人は、怠らず、努め励み、心を治め、執着と怒りと迷妄に打ち勝て。それにより、欲望による激流に押し流されない心の抛り所（魂）を作れ。
- F026 智慧乏しき愚かな人々は怠惰になじむ。
しかし賢い人は、最上の財宝（たから）を守るように、努め励むのを守る。
- F027 怠たらず、執着と歓楽に親まらずに、思念をこらす者は、大いなる楽しみを得る。
- F028 人は怠惰を退け、努め励むことにより、智慧を得て、憂いをなくす。
山上にいる人が地上の人々を見下ろすように、その人は憂いを持つ他の多くの人々を、自分とは異なると、はっきりと見極める。
- F029 怠りなまけている人々の中で、一人でも努め励み、そして、眠っている人々の中で、ひとりよく目覚めている思慮ある人は、足のろの馬を抜いて疾く走る馬のようなものである。
- F030 努め励む事は常に褒め称えられる。放逸なることは常に非難される。
マガヴァー（インドラ神）は、努め励んだので、神々の中の最高の者となった。
- F031 努め励む事を楽しみ、怠惰に恐れを抱く人は、微細なものでも粗大なものでも心のわずらいを、焼きつくしながら生活する。
- F032 努め励む事を楽しみ、怠惰に恐れを抱く人は、墮落するはずはなく、すでに安らぎ（ニルヴァーナ）の近くにいる。

FS4 老いること

- F033 何の笑いがあろうか。何の歎びがあろうか？——世間は常に燃え立っているのに——。汝らは暗黒に覆われている。どうして燈明を求めないのか？
- F034 見よ、粉飾された形体を！（それは）傷だらけの身体であって、いろいろのものが集まっただけである。病いに悩み、意欲ばかり多くて、堅固でなく、安住していない。
- F035 この容色は衰えはてた。病いの巢であり、脆くも滅びる。腐敗のかたまりで、やぶれてしまう。生命は死に帰着する。
- F036 牛飼いが棒をもって牛どもを牧場に駆り立てるように、老いと死とは生きとし生けるものどもの寿命を駆り立てる。
- F037 秋に投げすてられた瓢箪（ひょうたん）のような、鳩の色のようなこの白い骨を見ては、なんの快さがあろうか？
- F038 骨で城がつくられ、それに肉と血とが塗ってあり、老いと死と高ぶりごまかしとがおさめられている。
- F039 いたも麗しい国王の車も朽ちてしまう。身体もまた老いに近づく。しかし善い立派な人々の徳は老いることがない。善い立派な人々は互いに道理を説き聞かせる。
- F040 学ぶことの少ない人は、牛のように老いる。その人の肉は増えるが、その人の知恵は増えない。
- F041 わたくしは幾多の生涯にわたって生死の流れを無益に経めぐって来た、——家屋の作者（ツクリテ）をさがしもとめて——。あの生涯、この生涯とくりかえすのは苦しいことである。
- F042 家屋の作者よ！汝の正体は見られてしまった。心は、妄執を滅ぼし尽くし（身体の）形成作用を離れたので、汝（心）はもはや家屋を作ることはないであろう。汝の梁はすべて折れ、家の屋根は壊れてしまった。
- F043 若い時に、財を獲ることなく、清らかな行ないをまもらないならば、魚のいなくなった池にいる白鷺のように、痩せて滅びてしまう。
- F044 若い時に、財を獲ることなく、清らかな行ないをまもらないならば、昔のことばかり思い出して、かたくなな心となって、壊れた弓のように横たわる。

FS5 世の中

- F045 下劣なしかたになじむな。怠けてふわふわと暮らすな。邪な見解をいだくな。世俗のわずらいをふやすな。
- F046 奮起（フルイタ）てよ。怠けてはならぬ。道理に従った善い行ないを実行せよ。道理に従って行なう人は、この世でも、あの世でも、安楽に臥す。

- F047 道理に従った善い行ないを実行せよ。道理に従わない悪い行ないを実行するな。道理に従って行なう人は、この世でも、あの世でも、安楽に臥す。
- F048 世の中の実相と泡沫を見よ。泡沫はかげろうのごとく見よ。世の中をこのように観ずる人は、死王もかれを見ることがない。
- F049 さあ、この世の中を見よ。王者の車のように美しい部分が目立つ。愚かな人はそこに耽溺(たんでき)するが、賢い人はそれに執着しない。
- F050 以前は怠りなまけていた人でも、のちに怠りなまけることが無いなら、その人はこの世の中を照らす。一あたかも、雲を離れた月のように。
- F051 以前には悪い行ないをした人でも、のちに善によってつぐなうならば、その人はこの世の中を照らす。一あたかも、雲を離れた月のように。
- F052 この世の中は暗黒である。ここではっきりと理(コトワリ)と実相を見分ける人は少ない。しかし、これらを見分けたならば、悪魔とその軍勢にうち勝つ。あたかも、網から脱れた鳥のように。
- F053 網から脱れた鳥のような真人は、あるものは白鳥のように太陽の道を行き、あるものは神通により虚空を行き、あるものはブツダとなる。
- F054 唯一無二の真理を逸脱し、偽りを語り、安らぎの世界を無視している人は、どんな悪でもなす。
- F055 愚かな人々は分かちあうことをたたえない。しかし賢い人々は分かちあうことを喜ぶ。
- F056 大地の唯一の支配者となるよりも、全世界の主権者となるよりも、真人となるほうがすぐれている。

FS6 道

- F057 人の道のうちでは、仏道の八正道が最もすぐれている。
もろもろの真理のうちでは、四諦(苦・集・滅・道)が最上である。
もろもろの徳の中では、執着から離れることが最もすぐれている。
人々のうちでは、ブツダ(=眼ある人)が最もすぐれている。
- F058 これこそ道である。(真理を)見るはたらきを清めるためには、この他に道は無い。汝はこの道を実践せよ。これこそ悪魔を迷わして(打ちひしぐ)ものである。
- F059 汝がこの道を行くならば、苦しみをなくすことができるであろう。(棘が肉に刺さったので)矢を抜いて癒す方法を知って、わたくしは汝らにこの道を説いたのだ。
- F060 汝らは自ら努めよ。もろもろの修行完成者は(ただ)教えを説くだけである。心をおさめて、この道を歩む者は、悪魔の束縛から脱れるであろう。
- F061 「一切の形成されたものは無常である。」(諸行無常)
「一切の形成されたものは苦しみである。」(一切皆苦)
「一切の事物は我ならざるものである。」(諸法非我)
と明らかな知恵をもってこの世の全てを観るときに、人は苦しみから遠ざかり離れる。これこそ人が清らかになる道である。
- F062 起きるべき時に起きないで、若くて力があるのに怠りなまけていて、意志も思考も薄弱で、怠惰で物憂い人は、明らかな知恵によって道を見出すことがない。
- F063 言葉を慎しみ、心を落ち着けて慎しみ、身に悪を為してはならない。これらの三つの行ないの路を浄くたもつならば、ブツダの説きたもうた道を克ち得るであろう。
- F064 実に心が統一されたならば、豊かな知恵が生じる。心が統一されないならば、豊かな知恵がほろびる。生じることとほろびることとの、この二種の道を知って、豊かな知恵が生ずるように自己を整えよ。
- F065 一つの樹を伐るのではなくて、(煩惱の)林を伐れ。危険は林から生じる。(煩惱の)林とその下生えとを切って、林から脱れた者となれ。修行僧らよ。
- F066 たとい僅かであろうとも、男女の淫らな欲望が断たれないあいだは、その人の心は束縛されている。
- F067 自己の執着を断ち切れ、一池の水の上に出て来た秋の蓮を手で断ち切るように。静かなやすらぎに至る道を選び進め。めでたく行きし人であるブツダは安らぎへの道を説きたもうた。
- F068 「わたしは雨期にはここに住もう。冬と夏とにはここに住もう」と愚者はこのようにくよくよと慮って、死が迫って来るのに気がつかない。

F069 子どもや家畜のことに気を奪われて心がそれに執着している人を、死はさらって行く。__眠っている村を大洪水が押し流すように。

F070 子ども救うことができない。父も親戚もまた救うことができない。死に捉えられた者を、親族も救い得る能力がない。

F071 賢い人はこの道理を知って、教えをまもり自らを清め、安らぎに至る仏道をすみやかに進め。

FS7 千という数にちなんで

F072 無益な語句を千たび語るよりも、聞いて心の静まる有益な語句を一つ聞く方が優れている。

F073 無益な語句よりなる詩が千もあっても、聞いて心の静まる詩を一つ聞く方が優れている。

F074 無益な語句よりなる詩を百も唱えるよりも、聞いて心の静まる詩を一つ聞く方が優れている。

F075 常に行ないをつつしみ、自己を整え、心を治めることは、自己にうち克つ事である。

自己に克った者の勝利を敗北に転ずる事は、神も、ガンダルヴァ(天の伎楽神)も、悪魔も、梵天もなす事ができない。唯だ一つの自己に克つ者は勝利者となる。

この勝利者が、あまたの賤(いや)しい愚かな人々に打ち勝てば、その人は最上の勝利者となる。

F076 百年の間、月々千回ずつ祭祀(まつり)を営む人や、林の中で祭祀(まつり)の火につかえる人々がいる。もし、それらの人々が自己を修養した人(ブツダや真人)を尊び供養するなら、たとえその供養がつかの間であっても、ただ百年祭祀を営むだけよりも優れている。自己を修養した人を尊び供養することは優れている。

F077 功德を得るために、人がこの世で、一年間、神をまつり、犠牲(いけにえ)をささげ、あるいは火にささげ物をする。しかし、その全てをあわせても、ただ、行ないの正しい人々を尊ぶ真正なる祭りの方が、はるかに優れている。

F078 人が、常に、自己を修養した人(ブツダや真人)に敬礼を守れば、魂の寿命と美しさと楽しみと力が増大する。

F079 素行が悪く、心が乱れていて百年生きるよりは、徳行あり思い静かな人が一日生きる方が優れている。

F080 愚かに迷い、心の乱れている人が百年生きるよりは、知恵あり思い静かな人が一日生きる方が優れている。

F081 怠りなまけて、気力もなく百年生きるよりは、堅固につとめ励んで一日生きる方が優れている。

F082 物事が興り消え失せる因果を見極めずに百年生きるよりも、この因果を見極めて一日生きる方が優れている。

F083 魂の不死を見極めずに百年生きるよりも、これを見極めて一日生きる方が優れている。

F084 四諦の真理を見極めずに百年生きるよりも、これを見極めて一日生きる方が優れている。

FS8 花にちなんで

F085 だれ(どの魂)がこの大地(心)を正しく治めるであろうか?

だれが閻魔の世界と神々ともなるこの世界とを正しく治めるであろうか?

わざいに巧みな人が花を摘むように、善く説かれた真理のこぼれを摘み集めるのはだれであろうか?

F086 学び努める人こそ、この大地(心)を正しく治め、閻魔の世界と神々ともなるこの世界とを正しく治めるであろう。わざいに巧みな人が花を摘むように、学びつとめる人々こそ善く説かれた真理のこぼれを摘み集めるであろう。

F087 この身は泡沫(うたかた)のごとくであると知り、かげろうのようなはかない本性のものであるとさとり、そして悪魔に魅入られないよう、悪魔の花の矢を断ち切れ。

F088 花を摘むのに夢中になっている人を死がさらって行き、眠っている村を洪水が押し流す。

花を摘むのに夢中になっている人が、未だ望みを果たさないうちに、死神(悪魔)が彼を征服する。

F089 蜜蜂は(花の)色香を害(そこなわず)に、汁をとって、花から飛び去る。

修行者が村に行くときは、そのようにせよ。

F090 他人のした事としなかった事を鑑みて、他人の過失から学び、良い行ないを実行せよ。

自分のした事としなかった事を省み、自己の過失はすみやかに改めよ。

F091 うるわしく、あでやかに咲く花でも、香りの無いものがあるように、善く説かれたことばでも、それを実行しない人には実りがない。

F092 うるわしく、あでやかに咲く花で、しかも香りのあるものがあるように、善く説かれたことばも、それを実行する人には、実りがある。

F093 うず高い花を集めて多くの華鬘(はなかざり)をつくるように、人として生まれまた死ぬべきであるならば、多くの善いことをなせ。

- F094 花の香りは風に逆らっては進んで行かない。梅檀（せんだん）もタガラの花もジャスミンもみなそうである。しかし徳のある人の香りは、風に逆らっても進んで行く。徳のある人はすべての方向に薫る。
- F095 梅檀（セندان）、タガラ、青蓮華、ヴァッシキー——これら香りのあるものどものうちでも、徳行の香りこそ最上である。
- F096 タガラ、梅檀（セندان）の香りは微かであって、大したことはない。しかし徳行のある人々の香りは最上であって、天の神々にもとどく。
- F097 慎みを完成し、学び努めて生活し、正しい智慧によって解脱した人々には、悪魔も近づくによし無し。
- F098 塵芥にも似た盲（めしい）た凡夫のあいだにあって、正しくめざめた真人は智慧により輝く。あたかも、大道に捨てられた塵芥（ちりあくた）の山堆（やまずみ）の中から香しく美しい蓮華が生じ輝くように。

FS9 楽しみ

- F099 怨みをいだいている人々の間にあって、怨むこと無く、我らは暮らしていこう。
- F100 悩める人々の間にあって、悩み無く暮らそう。
- F101 貪っている人々の間にあって、患い無く、貪らないで暮らそう。
- F102 久しく旅に出ていた人が遠方から無事に帰って来たならば、親戚・友人・親友たちは彼が帰って来たのを祝う。
- F103 そのように善いことをしてこの世からあの世に行った人を善業が迎え受ける。——親族が愛する人が帰って来たのを迎え受けるように。
- F104 欲望に等しい火は存在しない。ばくちに負けるとしても、増悪に等しい不運は存在しない。このかりそめの身に等しい苦しみは存在しない。安らぎにまさる楽しみは存在しない。
- F105 飢えは最大の病いであり、形成せられる存在（わが身）は最もひどい苦しみである。このことわりをあるがままに知ったならば、ニルヴァーナという最上の楽しみがあることを知るであろう。
- F106 健康は最高の利得であり、満足は最上の宝であり、信頼は最高の親族であり、ニルヴァーナは最上の楽しみである。
- F107 心を落ち着けて孤独の味を味わい、重ねて、禪定により真理と知慧の味を味わうならば、恐れがなくなっていく。
- F108 もろもろのブツダ・真人に会うのは善いことである。愚かなる者どもに会わないならば、心はつねに楽しいであろう。
- F109 愚人とともに歩む人は長い道のりにわたって憂いがある。愚人と共に住むのは、常に辛いことである。__仇敵とともに住むように。賢い人と共に住むのは楽しい。__親族に出会うように。
- F110 よく気をつけていて、明らかに知慧あり、学ぶところ多く、忍耐づよく、真理を護る、そのような立派なブツダ・真人に親しめよ。

FS10 さまざまなこと

- F111 つまらぬ快樂を捨てることによって、広大なる楽しみを得ることができるのなら、賢い人は広大な楽しみをのぞんで、つまらぬ快樂を捨てよ。
- F112 他人を苦しめることによって自分の快樂を求める人は愚かな人であって、怨みの絆にまつわれて、怨みから免れることができない。
- F113 なすべきことを、なおざりにし、なすべからざることをなす、遊びたわむれ放逸なる愚かな者どもには、汚れが増す。
- F114 常に身体（の本性）を思い続けて、為すべからざることを為さず、為すべきことを常に為して、心がけて、自ら気をつけている賢い人々には、もろもろの汚れがなくなる。
- F115 在家の生活は困難であり、家に住むのも難しい。なぜならば、心を同じくしない人々と共に住むのは難しいからである。出家の生活も困難であり、それを楽しむことは難しい。出家者が策を弄して利益を求めると、苦しみに遇う。だから、出家者は、策を弄して利益を求めてはならない。
- F116 出家者は、林の中で、ひとり坐し、ひとり臥し、ひとり歩もうとも、なおざりになることなく、自己を整えることを楽しめ。
- F117 徳行と見識とをそなえ、法にしたがって生き、真実を語り、自分のなすべきことを行なう人は、人々から愛される。
- F118 信仰あり、徳行そなわり、名声と繁栄を受けている人は、いかなる地方におもむこうとも、そこで尊ばれる。
- F119 善き人々は遠くにいても輝く、一雪を頂く高山のように。善からぬ人々は近くにいても見えない、一夜陰に放たれた矢のように。

FS11 象

- F120 戦場の象が、射られた矢にあたっては堪え忍ぶように、われらは人のそしりを忍ぼう。多くの人は実に性質(たち)が悪いからである。
- F121 世のそしりを忍び、心をおさめた者は、人々の中にあっても最上の者となる。馴らされた象が、戦場にも連れて行かれ、王の乗りものとなり、最上の象となるように。
- F122 馴らされた騾馬は良い。インダス河のほとりの血統よき馬も良い。クンジャラという名の大きな象も良い。しかし自己を整え正しく心を治めた人は、これらよりもすぐれている。なぜならば、これらの乗物(身分、血統や財)によって、未到の地(ニルヴァーナ)に行くことはできない。そこへは、自己を整え正しく心を治めた人がおもむく。
- F123 「財を守る者」という汚れに染まった心は、いかんとも制し難く、かたくなに真理を拒む。この心は、執着を慕っている。あたかも、捕らえられても、一口の食物も食べず、こめかみから液汁をしたたらせて強暴になっている発情期の象が象の林を慕うように。
- F124 大食いをして、眠りをこのみ、ころげまわって寝て、まどろんでいる愚鈍な人は、大きな豚のように糧を食べて肥り、くりかえし母胎に入って(迷いの生存をつづける)。
- F125 この心は、以前には、望むがままに、欲するがままに、快きがままに、さすらっていた。今やわたくしはその心をすっかり抑制しよう、__象使いが鉤をもって、発情期に狂う象を全くおさえつけるように。
- F126 心は泥沼に落ち込んだ象のようである。
だから、努め励むのを楽しめ。おのれの心を護れ。自己を難処から救い出せ。
- F127 もしも思慮深く聡明でまじめな生活をしている人を伴侶として共に歩むことができるならば、あらゆる危険困難に打ち克って、こころ喜び、念いをおちつけて、ともに歩め。
- F128 しかし、もしも思慮深く聡明でまじめな生活をしている人を伴侶として共に歩むことができないならば、国を捨てた国王のように、また林の中の象のように、ひとり歩め。
- F129 愚かな者を道伴れとするな。それなら独りで行くほうがよい。
悪いことをするな。
求めるところは少なくあれ。
__林の中にいる象のように。
- F130 (大きかろうとも、小さかろうとも)、どんな果報にも満足するのは楽しい。
善いことをしておけば、命の終るときに楽しい。
(悪いことをしなかったので)、あらゆる苦しみ(の報い)を除くことは楽しい。
- F131 世に父を敬うことは楽しい。また母を敬うことは楽しい。世にブツダや真人を敬うことは楽しい。天下に正しい道があるのは楽しい。
- F132 老いた日に至るまで慎みをたもつことは楽しい。信仰が確立していることは楽しい。明らかな知恵を体得することは楽しい。もろもろの悪事をなさないことは楽しい。

FS12 ひと組ずつ

- F133 ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によって作り出される。もしも、汚れた心で話したり行ったりするならば、苦しみはその人に付き従う。
__車をひく(牛)の足跡に車輪がついてゆくように
- F134 ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によって作り出される。もしも清らかな心で話したり行ったりするならば、福楽はその人に付き従う。
__影がそのからだから離れないように。
- F135 「彼はわれを罵った。彼はわれを害した。彼はわれにうち勝った。彼はわれから強奪した。」という思いを抱く人には、怨みはついに息(や)むことがない。
- F136 「彼はわれを罵った。彼はわれを害した。彼はわれにうち勝った。彼はわれから強奪した。」という思いを抱かない人には、ついに怨みが息(や)む。
- F137 実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息(や)むことがない。
怨みを離れてこそ息(や)む。これは永遠の真理である。
- F138 私は常に死を覚悟している。
この覚悟を普通の人々は知らない。

しかし、(この) 覚悟をした人には、(この世に常住する) 争いがしづまる。

- F139 この世のものを浄らかだと思いなして暮らし、(眼などの) 感官を抑制せず、食事の節度を知らず、怠けて勤めない者は、悪魔にうちひしがれる。
___弱い樹木が風に倒されるように。
- F140 この世のものを不浄であると思いなして暮らし、(眼などの) 感官をよく抑制し、食事の節度を知り、信念あり、努め励む者は、悪魔にうちひしがれない。
___岩山が風にゆるがないように。
- F141 まことではないものを、まことであると見なし、まことであるものを、まことではないと見なす人々は、あやまった思いにとらわれて、ついに真実(まこと)に達しない。
- F142 まことであるものを、まことであると知り、まことではないものを、まことではないと見なす人は、正しい思いにしたがって、ついに真実に達する。
- F143 屋根を粗雑に葺いてある家には雨が漏れ入るように、心を修養していないならば、煩惱が心に侵入する。
- F144 屋根をよく葺いてある家には雨の漏れ入ることがないように、心をよく修養してあるならば、煩惱が侵入することはない。
- F145 たとえためになることを数多く語るにしても、それを実行しないならば、その人は怠っているのである。
かれは道を実践する人の部類には入らない。
- F146 たとえためになることを少ししか語らないにしても、
心を治めるように、
法にしたがって正しく実践するように、
執着と怒りと迷妄と疑惑と慢心を離れるように、
常に気をつけている人は、道を実践する人である。

第2節 さまざまな悪

FS13 悪

- F147 道に違(タゴ)うたことになじみ、道に順(シタガ)ったことにいそまず、目的を捨てて快いことだけを取る人は、みずからの道に沿って進む者を羨むに至るであろう。
- F148 善をなすのを急げ。悪から心を退けよ。善をなすのにのろのろしたら、心は悪事をたのしむ。
- F149 人がもしも悪いことをしたならば、それを繰り返すな。悪事を心がけるな。悪が積み重なるのは苦しみである。
- F150 人がもしも善いことをしたならば、それを繰り返せ。善いことを心がけよ。善いことが積み重なるのは楽しみである。
- F151 まだ悪い報いが熟さない間は、悪人でも幸運に遭うことがある。しかし悪の報いが熟したときは、悪人は災いに遭う。
- F152 まだ善い報いが熟さない間は、善人でも災いに遭うことがある。しかし善の果報が熟したときは、善人は幸福(サイワイ)に遭う。
- F153 「その報いは私には来ないであろう」と思って、悪を軽んずるな。水が一滴ずつ滴り落ちるならば、水瓶でも満たされるのである。愚かな者は、水を少しずつでも集めるように悪を積むならば、やがて災いに満たされる。
- F154 「その報いはわたしには来ないであろう」と思って、善を軽んずるな。水が一滴ずつ滴り落ちるならば、水瓶でも満たされる。気をつけている人は、水を少しずつでも集めるように善を積むならば、やがて福德に満たされる。
- F155 同行する仲間が少ないのに多くの財を運ばねばならぬ商人が、危険な道避けるように、また生きたいと願う人が毒を避けるように、人はもろもろの悪を避けよ。
- F156 もしも手に傷が無いならば、その人は手で毒をとり去ることもできるであろう。傷の無い人に、毒は及ばない。悪をなさない人には、悪の及ぶことがない。
- F157 汚れの無い人、清くて咎のない人をそこなう者がいるならば、その災いは、かえってその浅はかな人に至る。風にさらって細かい塵を投げると、(その人にもどって来る)ように。
- F158 大空の中にも、大海の中にも、山の中の奥深いところに入っても、およそ世界のどこにいても、悪業から脱れることのできる場所はない。
- F159 大空の中にも、大海の中にも、山の中の洞窟に入っても、およそ世界のどこにいても、死の脅威のない場所はない。

FS14 怒り

- F160 御者が馬をよく馴らすように、おのが感官の高ぶりを静め、汚れをなくせ。走る車をおさえるようにむらむらと起る怒りをおさえる人__その人をわれは<御者>とよぶ。他の人はただ手綱を手にしているだけである。
- F161 荒々しい言葉を言うな。言われた人々は汝に言い返すであろう。怒りを含んだ言葉は苦痛である。報復が汝の身に至るであろう。
- F162 壊れた鐘のように、声を荒げないならば、汝は安らぎに達している。汝はもはや怒り罵ることがないからである。
- F163 怒りを制すことによって怒りに、
善いことによって悪いことに、
わかち合うことによって物惜しみに、
真実によって虚言の人に立ち向かわなくてはならない。
- F164 アトゥラたちは、お釈迦様に帰依した三人の長老に教えを請い求めましたが、十分に納得出来る教えを示されませんでした。彼らは不満を抱いて、ついに、お釈迦様の元を訪ね、今までの経緯を述べて、教えを請いました。そのアトゥラたちにお釈迦様は、次のように語られました。
- F165 アトゥラよ。これは昔にも言うことであり、いまに始まることでもない。沈黙している者も非難され、多く語る者も非難され、すこしだけ語る者も非難される。世に非難されない者はいない。
- F166 ただ誹られるだけの人、またただ褒められるだけの人は、過去にもいなかったし、未来にもいないであろう、現在にもいない。
- F167 もしも心ある人が日に日に考察して、「この人は賢明であり、行いに欠点がなく、知慧と徳行とを身にそなえている。」
とって称讃するならば、
- F168 その人を誰が非難し得るだろうか？かれはジャンブーナダ河から得られる黄金でつくった金貨のようなものである。神々もかれを称讃する。梵天でさえもかれを称讃する。
- F169 身体がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。身体について慎んでおれ。身体による悪い行いをやめよ。
- F170 言葉がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。言葉について慎んでおれ。言葉による悪い行いをやめよ。
- F171 心がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。心について慎んでおれ。心による悪い行いをやめよ。
- F172 落ち着いて思慮ある人は、いかなる時でも、身を慎み、ことばを慎み、心を慎む。このように彼らは実によく己れをまもっている。

FS15 汚れ

- F173 汝はいまや枯葉のようなものである。閻魔王の従卒もまた汝に近づいた。汝はいま死出の門路に立っている。しかし汝には資糧（カテ）さえも存在しない。
- F174 だから、自己のよりどころをつくれ。すみやかに努めよ。賢明であれ。汚れをはらい、罪過がなければ、汝はもはや生と老いとに近づかないであろう。
- F175 聡明な人は順次に少しずつ、一刹那ごとに、おのが汚れを除くべし、__鍛冶工が銀の汚れを除くように。
- F176 鉄から起った錆が、それから起ったのに、鉄自身を損なうように、悪をなしたならば、自分の業が罪を犯した人を悪いところにみちびく。
- F177 読誦しなければ聖典が汚れ、修理しなければ家屋が汚れ、身なりを怠るならば容色が汚れ、なおざりになるならば、努め励む人が汚れる。
- F178 不品行は婦女の汚れである。もの惜しみは、恵み与える人の汚れである。悪事は、この世においてもかの世においても（つねに）汚れである。
- F179 これらの汚れより、さらに根元的な汚れが、自己を覆う無明である。修行僧らよ、努め励み、慎むことにより、もろもろの汚れを順次捨て、ついには無明が消滅するのを見とどけよ。
- F180 恥をしらず、鳥のように厚かましく、凶々しく、人を責め、大胆で、心のよごれた者は、生活し易い。
- F181 恥を知り、常に清きをもとめ、執着を離れ、慎み深く、真理を見て清く暮す者は、生活し難い。
- F182 不当に生きものを殺し、虚言（イツワリ）を語り、世間において与えられないものを取り、他人の妻を犯す人は、この世において自分の根本を掘りくずす人である。

- F183 人よ。このように知れ、__ 慎みがないのは悪いことである。__ 貪り（執着）と不正とのゆえに汝が永く苦しみを受けることのないように。
- F184 人は、信ずるところにしたがって、清き喜びにしたがって、正しく施し（布施）をなさなくてはならない。施し（布施）に見返りを求めると汚れが増す。だから、人は施し（布施）に見返りを求めてはならない。
- F185 正しくほどこされた食物や飲料に満足しない出家者は、昼も夜も心の安らぎを得ず、汚れが増す。
- F186 愛欲に等しい火は存在しない。不利な骰（サイ）の目を投げたとしても、怒りに等しい不運は存在しない。迷いに等しい網は存在しない。執着に等しい河は存在しない。
- F187 他人の過失は認識しやすく、自己の過失は認識し難い。心の汚れた人は他人の過失を籾殻のように吹き散らす、自分の過失は、隠してしまう。__ 狡猾な賭博師が不利な骰（サイ）の目をかくしてしまうように。
- F188 他人の過失を探し求め、つねに怒りたける人は、心の汚れが増大する。その人は心の汚れの消滅から遠く隔っている。
- F189 人が、ニルヴァーナを得ようとめざし、常に目ざめているように昼も夜も学び努めるならば、もろもろの汚れは消え失せる。
- F190 心の汚れた人たちは汚れのあらわれを楽しむが、学び努める人たちは汚れのあらわれを楽しまない。
- F191 造り出された現象が常住であることは有り得ない。真理をさとした人々（ブッダ・真人）は、汚れがなくなったので、動揺することがない。

FS16 執着と欲望

- F192 恣（ホシイママ）のふるまいをする人には執着が蔓草（ツルクサ）のようにはびこる。林の中で猿が果実を探し求めるように、輪廻転生し、あちこちさまよう。
- F193 この世において、執着のもとであるうづく汚れのなすがままである人は、もろもろの憂いが増大する。__ 雨が降ったあとにはピーラナ草がはびこるように。
- F194 この世において如何ともし難いこのうづく心の汚れを断ったならば、憂いはその人から消え失せる。__ 水の滴が蓮華から落ちるように。
- F195 欲の快樂から多くの執着が生じる。欲の快樂を離れたならば、執着が減る。
- F196 心の汚れから憂いと恐れが生じる。心の汚れを離れたならば憂いと恐れは存在しない。
- F197 さあ、皆さんに告げます。__ ここに集まった皆さんに幸あれ。執着の根（心の汚れ）を掘れ。（香しい）ウシーラ根 [正しい教え] を求める人が（雑草の）ピーラナ草 [悪魔の教え] を掘るように、また、葦が激流に碎かれるように、魔にしばしも碎かれてはならない。
- F198 たとえ樹を切っても、もしも頑強な根を断たなければ、樹が再び成長するように、執着の根源となる潜勢力（心の汚れ）を滅ぼさなければ、執着による苦しみはくりかえし現われ出る。
- F199 この世の中には、快いものに向って流れる激流があり、その流れは、執着をいなく人を漂わし去る。__ その流れとは、まさしく在住する様々な欲である。
- F200 人の快樂を求める執着は、はびこるもので、また心の汚れで潤される。実に人々は歡樂にふけり、楽しみをもとめて、生れと老衰を受ける。
- F201 （愛欲の）流れは至るところに流れる。（欲情の）蔓草は芽を生じつつある。その蔓草が生じたのを見たならば、知慧によってその根を断ち切れ。
- F202 欲望への執着に駆り立てられた人々は、わなにかかった兎のように、ばたばたする。欲望になずみ、欲望の激流に束縛され、永い間繰り返して執着しては得られない苦悩を受ける。それ故に修行僧は、自己の執着を除き去れ。
- F203 欲望の林から出ていながら、また欲望の林に身をゆだね、欲望の林から免れていながら、また欲望の林に向かって走る。その人を見よ！束縛から脱しているのに、また束縛に向かって走る。
- F204 鉄や木材や麻紐でつくられた枷を、ブッダや真人は堅固な縛とは呼ばない。財や宝石や耳環・腕輪をやたらに欲しがること、むやみに家族に惹かれること、__ それが堅固な縛である、と彼らは呼ぶ。それは低く垂れ、緩く見えるけれども、脱れ難い。賢い人々は、これらへの執着を離れなくてはならない。
- F205 欲望になずんでいる人々は、自らの執着により、激流に押し流される。__ 蜘蛛がみずから作った網にしたがって行くようなものである。思慮ある人々はこれを断ち切って、顧みることなく、すべての執着を捨てて、歩んで行く。
- F206 田畑は雑草によって害（ソコナ）われ、この世の人々は、執着、怒り、誤った見解（迷妄）、疑惑、慢心によって、害

(ソコナ) われる。

- F207 あれこれ考えて心が乱れ、汚れにより心がはげしくうずくのに、心の汚れ（不浄）を浄らかだと見なす人には、執着がますます増大する。この人は実に束縛の絆を堅固たらしめる。
- F208 あれこれの考えをしずめるのを楽しみ、常に心身の汚れ（不浄）を観察して心を治める人は、実に悪魔の束縛の絆を取り除き、断ち切るであろう。
- F209 激流の中で、解脱（彼岸、ニルヴァーナ）を求める賢い人は享楽に害（ソコナ）われることがない。愚かな人は享楽のために害（ソコナ）われるが、享楽を執着するがゆえに、愚かな人は他人を害（ソコナ）うように自分も害（ソコナ）う。
- F210 言葉で説き得ないもの（ニルヴァーナ）に達しようとする志を起し、意（オモイ）は満たされ、欲の激流に心の礙（サマタ）げられることのない人は、（流れを上る者）と呼ばれる。
- F211 教えを説いて与えることはすべての贈与にまさり、教えの妙味はすべての味にまさり、教えを受ける楽しみはすべての楽しみにまさる。執着を滅ぼすことは全ての苦しみにうち勝つ。

FS17 悪いところ

- F212 偽りを語る人、あるいは自分でしておきながら「私はしませんでした。」と言う人、一この両者は死後には等しくなる、一來世では行ないの下劣な業を持った人々なのであるから。
- F213 放逸で他人の妻になれ近づく者は、四つの事がらに遭遇する。——すなわち、禍をまねき、臥して楽しからず、第三に非難を受け、第四に悪しきところに墜ちる。
- F214 禍をまねき、悪しきところに墜ち、相ともにおびえた男女の愉楽は少なく、王は重罰を課する。それ故に人は他人の妻になれ近づくな。
- F215 その行ないがだらしなく、慎みが乱れ、清らかな行ないなるものもあやしげであるならば、大きな果報はやって来ない。
- F216 悪いことをするよりは、何もしない方が良い。悪いことをすれば、後で悔いる。単に何かの行為をするよりは、善いことをする方が良い。なし終わって、後で悔いがない。
- F217 辺境にある、城壁に囲まれた都市が内も外も守られているように、そのように自己を守れ。瞬時も空しく過ごすな。時を空しく過した人々は悪いところに墜ちて、苦しみ悩む。
- F218 恥じなくてよいことを恥じ、恥ずべきことを恥じない人々は、邪な見解をいだいて、悪いところにおもむく。
- F219 恐れなくてもよいことに恐れをいだき、恐れねばならぬことに恐れをいだかない人々は、邪な見解をいだいて、悪いところにおもむく。
- F220 避けねばならぬことを避けなくてもよいと思ひ、避けてはならぬ（＝必ず為さねばならぬ）ことを避けてもよいと考える人々は、邪な見解をいだいて、悪いところにおもむく。
- F221 遠ざけるべきこと（＝罪）を遠ざけるべきであると知り、遠ざけてはならぬ（＝必ず為さねばならぬ）ことを遠ざけてはならぬと考える人々は、正しい見解をいだいて、善いところにおもむく。
- F222 汚れの無い人々は全き安らぎに入り輪廻を離れ、それ以外の人々は輪廻にとどまり、行いにより死後に赴く所が決まる。

第3節 さまざまな人

FS18 愚かな人

- F223 眠れない人には夜は長く、疲れた人には一里の道は遠い。正しい真理を知らない愚かな者どもには、生死の道のりは長い。
- F224 旅に出て、もしも自分よりもすぐれた者か、または自分にひとしい者に出会わなかったら、むしろきっぱりと独りで行け。愚かな者を道伴（づ）れにしてはならぬ。
- F225 「わたしたちには子がある。わたしには財がある。」と思って愚かな者は悩む。
しかしすでに自己が自分のものではない。
ましてどうして子が自分のものであろうか。どうして財が自分のものであろうか。
- F226 もしも愚者がみずから愚であると考えれば、すなわち賢者である。愚者でありながら、しかもみずから賢者だと思ふ者こそ、「愚者」だと言われる。
- F227 愚かな者は生涯賢者に仕えても、真理を知ることが無い。匙が汁の味を知ることができないように。
- F228 聡明な人は瞬時（またたき）のあいだ賢者に仕えても、ただちに真理を知る。_____舌が汁の味をただちに知るように。

- F229 あさはかな愚人どもは、自己に対して仇敵（かたき）に対するようにふるまう。悪い行いをして、苦い果実（このみ）をむすぶ。
- F230 もしも或る行為をした後に、それを後悔して、顔に涙を流して泣きながら、その報いを受けるならば、その行為をしたことは善くない。
- F231 もしも或る行為をしたのちに、それを後悔しないで、嬉しく喜んで、その報いを受けるならば、その行為をしたことは善い。
- F232 愚かな者は、悪いことを行っても、その報いの現れないあいだは、それを蜜のように思いなす。しかし、その罪の報いの現れたときには、苦悩を受ける。
- F233 しかし、愚かな者は、悪い行ないをしておきながら、気がつかない。しかし浅はかな愚者は自分自身のしたことによって悩まされる。__あたかも、火がこの愚者を焼きこがすように。
- F234 愚かなものは、真理をわきまえた人が得る功德と同じように、断食行により功德が得られると考える。しかし、愚者の行う断食行に功德はない。
- F235 悪事をして、その業は、しぼり立ての牛乳のように、すぐに固まることはない。（徐々に固まって熟する）その業は、灰に覆われた火のように、（徐々に）燃えて悩ましながら、愚者につきまとう。
- F236 愚かな者に念慮（オモイ）が生じて、ついにその人には不利なことになってしまう。その念慮はその人の好運（シアワセ）を滅ぼし、その人の頭を打ち砕く。
- F237 「これは、わたしのしたことである。在家の人々も出家の人々も、ともにこのことを知れよ。およそなすべきこととなすべからざることについては、私の意に従え」__愚かな者はこのように思う。こうして欲求と高慢（たかぶり）とがたかまる。
- F238 愚かなバラモンや修行僧は、実にそぐわぬ虚しい尊敬を得ようと願うであろう。修行僧らのあいだでは上位を得ようとし、僧房にあっては権勢を得ようとし、他人の家に行っては供養を得ようと願うであろう。

FS19 賢い人

- F239 水道をつくる人は水をみちびき、矢をつくる人は矢を矯め、大工は木材を矯める様に、賢者は自己を整え、心を治めよ。
- F240 実に魂（自己）は心（自分）の主（あるじ）であり、帰趨（よるべ）である。故に魂により心を治めよ。__商人が良い馬を調教するように。
- F241 心をとどめている人々は努めはげむ。かれらは執着を遠ざける。彼らは、あの執着、この執着を捨てる。
- F242 （おのが）罪過（ツミトガ）を指し示し過ちを告げてくれる聡明な人に会ったならば、その賢い人につき従え__隠してある財宝のありかを告げてくれる人につき従うように。そのような人につき従うならば、善いことがあり、悪いことは無い。
- F243 悪い友と交わるな。卑しい人と交わるな。善い友と交われ。尊い人と交われ。
- F244 高尚な人々は、どこにいても、執着することが無い。快樂を欲してしゃべることが無い。楽しいことに遭（あ）っても、賢者は動ずる色がない。
- F245 一つの岩の塊りが風に揺るがないように、賢者は非難と賞賛とに動じない。
- F246 その行ないが親切であれ。（何ものでも）わかち合え。善いことを実行せよ。そうすれば、喜びにみち、苦悩を減するであろう。
- F247 道を説く賢い人は善人に愛せられ、悪人からは疎まれる。
- F248 自分のためにも、他人のためにも、子を望んではならぬ。財をも国をも望んではならぬ。邪なしかたによって自己の繁栄を願うてはならぬ。
（道にかなった）行いあり、明かな智慧があり、真理にしたがっておれ。
- F249 たとえ貨幣の雨を降らすとも、欲望の満足されることはない。「快樂の味は短くて苦痛である」と知るのが賢い人である。
- F250 賢者は、悪いことがらを捨てて、善いことがらを行え。楽しみ難いことではあるが、孤独（ひとりい）のうちにも、喜びを求めよ。
- F251 人間の身を受け、人生修行することは貴重で、無駄にしてはならない。
死ぬ運命にあると言われる人間は、実は、身体が死んでも、魂は連続的に存在する。
ただ、もろもろのみ仏の出現したもうことは稀であり、よって、正しい教えを聞く機会も稀である。
- F252 尊い人（=ブツダ）は得がたい。かれはどこにでも生れるのではない。思慮深い人（=ブツダ）の生れる家は、光り輝く。

- F253 真理が正しく説かれたときに、真理にしたがう人々は、渡りがたい輪廻転生を超えて、安らぎにいたるであろう。
- F254 真理を喜ぶ賢い人は、真理を聞き、正しく生活を送り安らかに臥す。その人の心は、深い澄んだ湖のように静かで清らかになる。
- F255 大地のように慎み深く、整った門のように分別を保ち、汚れた泥がない深い湖のように心が清らかな、そのような境地にある人には、もはや生死の世は絶たれている。
- F256 人々が多いが、安らぎ（解脱）に達する人々は少ない。他の（多くの）人々は輪廻転生をさまよっている。
- F257 心の汚れが消え失せ解脱することは、空を体現してこの世の実相を認識することでもある。この解脱者たちの行く路（足跡）は知り難い。__空飛ぶ鳥の迹の知りがたいように。
- F258 無相の体現によって解脱して、やすらいに帰した人__そのような人の心は静かである。ことばも静かである。行いも静かである。
- F259 八正道により、心を正しくおさめ、執着なく貪りを捨てるのを喜び、煩惱を滅ぼし尽くして輝く人は、現世において全く束縛から解きほごされている。
- F260 みずから恥じて自己を制し、良い馬が鞭を気につけないように、世の非難を気につけない人が、この世に誰か居るだろうか？
賢い人よ、鞭をあてられた良い馬のように勢いよく努め励めよ。
正しい信仰、慎み（戒しめ）、努め、禪定により思念をこらし、真理を確かに知り、この少なからぬ苦しみを除けよ。そして、知慧と行ないを完成させよ。
- F261 作られたもの__既存の信仰や神を軽信することなく、作られざるもの__法を知り、生死の絆が絶たれ、善悪の計らい、もろもろの欲求から離れた人、彼こそ実に最上の人、真人である。

FS20 真人

- F262 蓮葉の上の露のように、錐（キリ）の尖（サキ）の芥子のように、緒の欲望に汚されない人、——その人を我は真人と呼ぶ。
- F263 芥子粒が錐（キリ）の尖端から落ちたように、執着と怒りと高ぶりと隠し立てとが脱落した人、——その人を我は真人と呼ぶ。
- F264 この世の禍福いづれにも執着することなく、憂いなく、清らかな人、——その人を我は真人と呼ぶ。
- F265 こだわりあることなく、疑惑なく、不死の底に達した人、——その人を我は真人と呼ぶ。
- F266 現世を望まず、来世をも望まず、欲求がなく、とらわれの無い人、——その人を我は真人と呼ぶ。
- F267 すでにこの世において自分の苦しみの滅びたことを知り、重荷をおろし、とらわれの無い人、——その人を我は真人と呼ぶ。
- F268 曇りのない月のように、清く、澄み、濁りがなくなった人、——その人を我は真人と呼ぶ。
- F269 村にせよ、荒れ地にせよ、低地にせよ、平地にせよ、真人の住む土地は楽しい。
- F270 真人は人のいない荒れ地でも楽しい。世人の楽しまないところにおいて、執着なき真人は楽しむであろう。かれらは快樂を求めないからである。
- F271 あらゆる束縛の絆をのがれた真人は、憂いや悩みは存在せず、生きていながら人生の苦を終えたようになる。
- F272 明らかな知慧の無い人には精神の安定統一が無い。
精神の安定統一していない人には明らかな知慧が無い。
精神の安定統一と明らかな知慧とがそなわっている人は安らぎに帰す。
- F273 執着をなくし欲望の激流を離れ、諸の語義に通じ諸の文章とその脈絡を知るならば、「大いなる知慧ある人」と呼ばれる。
- F274 執着をなくし、さらに、汚れを滅ぼしつつした真人は、さとり究極に達した人で、生存の矢を断ち切った人となる。
- F275 現在、過去、未来の全ての汚れを離れよ。
その様な人を生存の彼岸に達したという。
その様な人は解脱して、もはや生れと老いを受けることが無いであろう。
そして、現在、過去、未来の全てのものを認識するであろう。
—その真人を我はブッダと呼ぶ。
- F276 慎みを完成させ、塵汚れ（チリケガレ）なく、常に為すべきことをなし、解脱に達した真人、——その人を我はブッダと呼ぶ。

F277 この世の人々は、執着、怒り、誤った見解（迷妄）、疑惑、慢心によって害われる。
怒り、執着、誤った見解、疑惑、慢心ともども断ち切り、さらに、無明を滅ぼした真人、——その人を我はブツダと呼ぶ。

FS21 道を実践する人

F278 あらあらしく事がらを処理するからとて、公正な人ではない。義と不義との両者を見きわめる人、粗暴になることなく、きまりにしたがって、公正なしかたで他人を導く人は、正義を守る人であり、道を実践する人であり、賢い人であるといわれる。

F279 多く説くからとて、それゆえに賢明なのではない。心を落ち着けて、怨むことなく、恐れることのない人、__その人こそ賢明であって、道を実践する人である。

F280 多く説くからとて、それゆえに道を実践している人なのではない。たとえ教えを聞くことが少なくても、身をもって真理を見る人、怠って道からはずれることの無い人__その人こそ道を実践している人である。

F281 頭髪が白くなったからとて<長老>なのではない。ただ年をとっただけならば「空しく老いぼれた人」と言われる。

F282 誠あり、徳あり、慈しみがあって、つつしみあり、みずからととのえ、汚れを除き、気をつけている人こそ「長老」と呼ばれる。

F283 嫉み、吝嗇（りんしょく=ケチ）、偽りを断ち、根絶やしにし、さらに、憎しみをのぞき、聡明である人、__かれこそ「端正な人」とよばれる。口先や美しい容貌では、「端正な人」とはならない。

F284 頭を剃ったからとて、戒めをまもらず、偽りを語る人は、出家者ではない。欲望と貪りにみちている人が、どうして出家者であろうか？

F285 他人に食を乞うからとて、それだけでは托鉢僧なのではない。汚らわしい行ないをしているならば、それは托鉢僧ではない。

F286 この世の福楽も罪悪も見極め、執着せず、清らかな行ないを修め、よく思慮して世に処しているならば、その人こそ托鉢僧である。

F287 ただ沈黙しているからとて、道を実践する人と思ってはならない。そのような中には、愚かに迷い無智なる人がたくさんいる。

F288 秤を手にもっているように、いみじきものを取り、もろもろの悪を除く賢者こそ道を実践する人なのである。この世にあって善悪の両者を（秤りにかけてはかるように）よく考える人こそ道を実践する人とよばれる。

F289 道を実践する人と呼ばれる人は、生きとし生けるものを無益に害わない。生きものを無益に害うのは、道を実践する人ではない。item[F290] 私は、解脱の楽しみを得た。それは凡夫の味わい得ないものである。それは、戒律や誓いだけによっても、また博学によっても、また瞑想を体現しても、またひとり離れて臥すことによっても、得られないものである。道を実践する者達よ。汚れが消え失せない限りは、油断するな。

FS22 仏弟子

F291 すべて悪しきことをなさず、善いことを行ない、自己の心を浄めること、——これが諸の仏の教えである。

F292 他を罵らず、害わず、慎んでおのれを守り、食事に関して（適当な）量を知り、適時 念定（禪定）を行ない、心に関することに努め励む。——これがもろもろのブツダの教えである。

F293 忍耐・堪忍は最上の苦行である。ニルヴァーナは最高のものであると、もろもろのブツダは説きたまう。他人を害する人、悩ます人は仏弟子ではない。

F294 仏の教えを喜び、慈しみに住し、怠らずに励めば、悪因の形成が止み、安楽な、静けさの境地（ニルヴァーナ）に到達する。

F295 天上の快樂は楽しいものだが、仏弟子にとって、妄執の消滅はさらに楽しい。

F296 もろもろのみ仏の現われたまうのは楽しい。
正しい教えを説くのは楽しい。
つどいが和合しているのは楽しい。
和合している人々がいそむのは楽しい。

F297 人々は恐怖にかられて、山々、林、園、樹木、霊樹など多くのものにたよろうとする。

F298 しかしこれは安らかなよりどころではない。これは最上のよりどころではない。それらのよりどころによってはあらゆる苦悩から免れることはできない。

- F299 四つの尊い真理の四諦が、安らかなよりどころであり、最上のよりどころであり、あらゆる苦悩から免れるよりどころである。
- F300 この四つの尊い真理とは、(1) 苦しみと、(2) 苦しみの成り立ちと、(3) 苦しみの超克(チョウコク)と、(4) 苦しみの終滅(オワリ)におもむく八つの尊い道(八聖道)である。
- F301 ゴータマの弟子が、昼も夜も起きている間は、常に「仏、法、心、体、善」について念い続ければ、覚醒し、その後も常に覚醒が持続する。そこで、彼らは、念定(禪定)を楽しむであろう。
- F302 利得に達する道もあり、安らぎに達する道もある。ブッダの弟子はこのことわりを知って、栄誉を求めず、努め励め。

FS23 修行僧

- F303 裸の行も、髻に結うのも、身が泥にまみれるのも、断食も、露地に臥すのも、塵や泥を身に塗るのも、蹲って動かないのも、__疑いを離れていない人を浄めることはできない。
- F304 修行僧は、身の装いはどうあろうとも、自己(魂)を整えて心を治めて、正しく、慎しみ深い行いを実行し、生きとし生けるものに対して(不当な)暴力を用いてはならない。
- F305 この世において明らかな知恵を求める修行僧の初めのつとめは、
怠らないで、
感官に気をくばり、
分限と足るを知り、
戒め(慎み)を守り、
浄らかに生きる善い友とつき合う、
ことである。
- F306 正しく覚った人(=ブッダ)の説かれた教えを、はっきりと学び得たなら、教示した人が、いかなる人であろうとも、その人を恭しく敬礼しつつ、その師に頼ることなく、常に自分で考え判断する自立した心を養え。
- F307 自分の得たものを軽んじてはならない。他人の得たものを羨むな。他人を羨む修行僧は心の安定を得ることができない。
- F308 修行僧は、怠ることなく清く生き、自分の得たものをが少なくても、それを軽んじない。
- F309 身にも、言葉にも、心にも、悪い事を為さず、(この)三つのところについて慎んでいる人、—その人を我は修行僧と呼ぶ。
- F310 修行僧は、眼について、耳について、鼻について、舌について、身について、言葉について、心について慎しもう。
- F311 修行僧は、あらゆることについて慎しめば、すべての苦しみから脱れる。
- F312 修行僧が、心が浮わつくことなく、言葉をつつしみ、思慮して語り、事実と真理とを明らかにするならば、その人の説くところはやさしく甘美になる。
- F313 みずから自分を励ませ。みずから自分を反省せよ。修行僧よ。心を護り、正しい念いをたもてば、汝は安楽に住するであろう。
- F314 愛好するものから心を遠ざけることは、修行僧にとって必要なことである。
- F315 修行僧よ。この舟から水を汲み出せ。汝が水を汲み出したならば、舟は軽やかにやすやすと進むであろう。貪りと怒りを断ち、ジャスミンの花が花びらを捨て落とすように、貪りと怒りを捨て去れば、汝は安らぎにおもむくであろう。
- F316 まず、五下分結を断ち、次に、五上分結を捨てよ。
さらに、信、精進、念、定、慧による五つ(のはたらき)を修めよ。
そうすれば、修行僧は、五つの汚れ(貪り、怒り、迷妄、高慢、疑惑)を超え、激流を渡った者とよばれる。
- F317 修行僧よ。瞑想せよ。なおざりになるな。汝の心を欲情の対象に向けるな。なおざりのゆえに鉄丸を呑むな。(灼熱した鉄丸で)焼かれるときに、「これは苦しい!」とって泣き叫ぶな。
- F318 戒律を守らず、自ら慎むことがないのに国の信徒の施しを受けるよりは、火炎のように熱した鉄丸を食らうほうがましだ。
- F319 茅草でも、とらえ方を誤ると、手のひらを切るように、修行僧の行も、誤っておこなうと、地獄にひきずりおろす。
- F320 もしも為すべきことであるならば、それを為すべきである。それを断乎として実行せよ。行ないの乱れた修行者はいつそう多く塵をまき散らす。
- F321 修行僧が念と定の修行のために、人のいない空家に入って心を静め真理を正しく観ずるならば、人間を超えた楽しみがおこる。

この修行により、個人存在を構成している諸要素の生起と消滅とを、徐々に正しく理解する。それにつれ、個人存在の不死のこわりを知り、それによる喜びを、彼は体得する。

- F322 世間から離れた静けさの中で、念いを静め、禪定に専中している修行僧は、正しいさとりを開く。神々でさえもその人を羨む。
- F323 真理を喜び、真理を楽しみ、真理をよく知り分けて、真理にしたがっている修行僧は、正しいことわりから墜落することがない。
- F324 修行僧が、身も静か、語(ことば)も静か、心も静かで、よく精神統一をなし、世俗の享樂物を吐きすてたならば、バラモンと呼ばれる。
- F325 名称とかたちについて「わがもの」という想いが全く存在しない、何ももの無いからとて憂えることの無い修行僧は、バラモンと呼ばれる。
- F326 たとい年の若い修行僧でも、仏の道にいそしむならば、雲を離れた月のように、この世を照らす。

FS24 バラモン

- F327 敵意ある者どもの間にあつて敵意なく、暴力を用いる者どもの間にあつて恐れず立ち向かい、執着する者どもの間にあつて執着しない人、——その人を我はバラモンと呼ぶ。
- F328 バラモンよ。流れを断て。勇敢であれ。諸の欲望を去れ。諸の現象の生成と消滅を知って、作られざるもの__法を知る者であれ。
- F329 罪がないのに罵られ、なぐられ、拘禁されるのを堪え忍び、忍耐の力あり、心の猛き人、——その人をわれはバラモンと呼ぶ。
- F330 出家して修行し、この世の欲望の激流を超え、執着の尽きた人、——その人を我はバラモンと呼ぶ。
- F331 出家して修行し、心をよく治めて、心の汚れの尽きた人、——その人を我はバラモンと呼ぶ。
- F332 バラモンを打つな。バラモンは打つ人に対して怒りだけを放つな。バラモンを打つものには禍がある。しかしただ怒りだけのバラモンにはさらに禍がある。
- F333 身なりによってバラモンなのではない。氏姓によってバラモンなのでもない。生れによってバラモンなのでもない。真理と理法とをまもる人は、安樂である。その人こそ(真の)バラモンなのである。
- F334 袈裟を頭から纏っていても、性質(タチ)が悪く、つつしみのない者が多い。かれら悪人は、悪いふるまいによって、悪いところに生まれる。
- F335 愚者よ。バラモンの身なりだけ整えて、何になるのだ。汝は内に密林(=汚れ)を蔵して、外側だけを飾る。
- F336 粗末な身なりで、痩せて、血管があらわれていようとも、寂しい場所で一人で瞑想に専念する人、——その人を我はバラモンと呼ぶ。
- F337 われは、(バラモン女の)胎から生れ(バラモンの)母から生れた人をバラモンと呼ぶのではない。この人は「<君よ>とって呼びかける者」といわれる。かれは何か所有物の思いにとらわれている。無一物であっても執着のない人、——その人を我はバラモンと呼ぶ。
- F338 在家者・出家者のいずれとも不要に交らず、住居にこだわらずに修行し、欲の少ない人、——その人を我はバラモンと呼ぶ。
- F339 強くあるいは弱い生きものに対して暴力を加えることなく、無益な殺生を行うことも、行わせることもない人、——その人を我はバラモンと呼ぶ。
- F340 この世において、長かろうと短かろうと、微細であろうとも粗大であろうとも、浄かろうとも不浄であろうとも、すべて与えられていない物を取らない人、——かれをわれはバラモンと呼ぶ。
- F341 粗野ならず、ことがらをはっきりと伝える真実のこばを発し、こばによって何人の心を害する意のない人、——その人を我はバラモンと呼ぶ。
- F342 悪を静め、瞑想と慎みが完成したのでバラモンと呼ばれ、正しい教えのもとで出家し努め励むので、修行僧と呼ばれる。
- F343 バラモンが、瞑想と智慧を得ることについて彼岸に達した(=瞑想を完成する)ならば、その人はよく知る人であるので、その人の束縛はすべて消え失せるであろう。
- F344 慎みと瞑想を完成させ、汚れを消滅させて最後の身体に達したバラモン、——その人をわれはブツダと呼ぶ。
- F345 彼岸(カナタノキシ)もなく、此岸(コナタノキシ)もなく、恐れもなく、束縛もないバラモン、——その人をわれはブツダ

と呼ぶ。

F346 念い静かで、塵垢(チリケガレ)、為すべきことをなしとげ、最高の目的である解脱に達した人、——かれをわれはブツダと呼ぶ。

FS25 ブツダ

F347 我は全てに打ち勝ち、全てを知り、あらゆることがらに関して汚されていない。全ての執着を捨てて、汚れが尽き、解脱している。自らさとしたのであって、誰を(師と)呼ぼうか。

F348 ブツダの勝利は敗れることがない。
ブツダの境地はひろくて涯しがない。
足跡をもたないかれを、いかなる道によって誘い得るであろうか？

F349 誘うために網のようにからみつき執着をなす妄執は、その人にはどこにも存在しない。ブツダの境地は、ひろくて涯しがない。足跡をもたないかれを、いかなる道によって誘い得るであろうか？

F350 太陽は昼にかがやき、月は夜に照し、武士は鎧を着てかがやき、バラモンは瞑想に専念してかがやく。しかしブツダはつねに威力もて昼夜に輝く。

F351 明らかな知慧が深くて、聡明で、種々の道に通達し、最後の目的を達した人、——その人を我はブツダと呼ぶ。

F352 すべての束縛を断ち切り、恐れることなく、執着を超越して、とらわれることの無い人、——その人を我はブツダと呼ぶ。

F353 この障害・険道・輪廻(サマヨイ)・迷妄を超えて、渡り終わって彼岸に達し、瞑想・熟考し、興奮することなく、疑惑なく、執着することなく、心安らかな人、——その人を我はブツダと呼ぶ。

F354 人間の絆を越え、天界の絆を越え、すべての絆を越えた人、——その人を我はブツダと呼ぶ。

F355 <快樂>と<不快>にとらわれることなく、清らかに涼しく、全世界にうち勝った英雄、——その人を我はブツダと呼ぶ。

F356 生きとし生ける者の生死をすべて知り、執着なく、良く生きし人、覚った人、——その人を我はブツダと呼ぶ。

F357 神々も天の伎楽神(ガンダルヴァ)たちも人間もその行方を知り得ない人、煩惱の汚れを滅ぼしつくした人、——その人を我はブツダと呼ぶ。

F358 牡牛のように雄々しく、気高く、英雄・勝利者・汚れの無い人・解脱者——その人を我はブツダと呼ぶ。

F359 前世の生涯を知り、また天上と地獄とを見、生存を滅ぼしつくすに至って、直観智を完成した聖者、完成すべきことをすべて完成した人、——その人を我はブツダと呼ぶ。

第3部 再考「真理のことば」

記述方法の説明

- 「★詩番号」の行では、F番号(B番号, 最終評価, O番号, オリジナル章番号)を書き記しました。
- 最終評価がブログで行なった評価と異なった際、右側に米印で記しました。ただし評価は主観的なものです。
 - A: 受け入れ可能,
 - B: 部分的に受け入れ可能,
 - C: 伝承ミスの可能性,
 - D: 意図的改ざん,
 - E: 不明
- 「F番号」の行には、最終書換え詩を書き記します。
- 「F番号」の行のF番号の右側の米印はブログの書換え詩から変更があることを示し、二つ付いている場合には大幅な変更があることを表します。
- 「元詩」の行には、その上のF番号で表された最終書換え詩に対応する中村氏のオリジナル詩を書き記します。
- コメントの横に、ブログコメントとの違いを示しました。以下の指標は、あくまでも変更程度のおおよそです。実際、かなりの書き直しとなりました。
 - 変 書き換えました。
 - 加 書き加えました。
 - 減 短くしました。
 - 無 ブログのままです。

第1節 さまざまな事

FS 1 心

心の詩句では、心の構造について正しく考察した結果、まどわす詩句が多いと判断しました。しかし、全く別なものに書き換えられているのではなく、主に語句の入れ替えにより改ざんされているという印象です。

心についての考察は、「付録1 魂と脳と守護霊」を読んでください。この付録を読んでから、第1章 心 を読んでください。今までは、結局理解できずに、お釈迦様の教えを遠ざけてしまった方は、実は合格です。なぜなら、誤まった教えを理解しようと躍起になると、危険な思考回路（自己洗脳）を生んでしまうからです。人によっては、本書を読むことで、仏教には仏魔による危険な落とし穴がたくさんあることを認識できるでしょう。

★詩番号 **F001 (B027, D*, O033, OS3)** [[@ FS 1 心]]

F001* 心は動揺し、ざわめき、護り難く、制し難い。賢い人はこれを直くする___弓師が矢の弦を直くするように。

元詩 心は動揺し、ざわめき、護り難く、制し難い。英知ある人はこれを直くする___弓師が矢の弦を直くするように。

*** (コメント; 変) *****

顕在意識が暴走しやすいのは、潜在意識にできた誤まった思考回路から流される誤まった情報と、外部(霊も含む)からの悪い刺激を受信するからだと考えています。

潜在部分の命令により顕在部分が誤動作する場合、自分では誤動作している自覚がないのです。他方、外部からの反応を顕在意識が感じ取ったり、守護神からのアドバイスを潜在意識が感じたりして、修正されていくのです。しかし、どちらの場合も、心の汚れにより感度が落ちたり、正しくない情報を受け取ると、どんどん正しい道から外れてしまうのです。

顕在意識を直接制御する潜在意識を鍛え正流の情報を顕在意識に送れるようにすることが、詩中の「これ(心)を直くする」ことで、これによって、暴走しやすい顕在意識を抑えるよう教示されています。

★詩番号 **F002 (B028, A, O034, OS3)** [[@ FS 1 心]]

F002* 水の中(霊界)の住処から引き出されて陸「おか」の上(この世)に投げ捨てられた魚のように、この心は、悪魔の支配から逃れようとしてもがきまわる。

元詩 水の中の住処から引き出されて陸「おか」の上に投げ捨てられた魚のように、この心は、悪魔の支配から逃れようとしてもがきまわる。

*** (コメント; 変) *****

水の中=霊界です。霊界はこの世と違いとても広いので、霊界でいた場所(階層)が重要ですから、それに対応して、住処という言葉をつけていると考えています。

陸の上=この世です。

お釈迦様には、私たち人間の心が、“陸「おか」の上に投げ捨てられた魚”のように、お見えになったのでしょうか。悪魔の支配から逃れようともがき回るところに、神様、仏様が人を救済しようと決心なさる理由があるのでしょうか。しかし、この守護が弱まれば、悪魔の支配に落ち、深みにハマります。

この世で正しい生活を送るには、霊界や神界からの守護が必要なのですが、魂や心が自力でなすべき事が、この真理のことに書かれているのです。

しかし、この世で生活を送るには、悪魔の守護もあります。

この詩は、これらを見分けるための教えの一つです。

真理のことに教えていることを自分で理解し実行に移していけば、顕在意識を直接制御する潜在意識を鍛え正流の情報を顕在意識に送れるようになり、神様、仏様の守護の下に行くことができます。

教えを聞かなくても正しく生きれている人は、魂に実力のある人です。そういう人は必ずいますが、大半の人には正しい教えが必要ではないかと感じています。

★ 詩番号 **F003 (B029, D*, O035, OS3)**、**F004 (B030, D*, O036, OS3)** [[@ FS 1 心]]

F003** 意は、顕在的で、軽々（かろがろ）とざわめき、欲するがままにおもむき捉え難い。

心は、この顕在的な意と、極めて見難く微妙な潜在部から成る。

元詩 心は、捉え難く、軽々（かろがろ）とざわめき、欲するがままにおもむく。その心をおさめることは善いことである。

心をおさめたならば、安樂をもたらす。

F004** 悪魔は、この心の支配を狙う。心を悪魔から守らなければ、安樂は得られない。心を正しく治めれば安樂を得る。

元詩 心は極めて見難く、極めて微妙であり、欲するがままにおもむく。英知ある人は守れかし。

心を守ったならば、安樂をもたらす。

*** (コメント) *****

「捉えがたい」、「軽々とざわめき」、「欲するがままにおもむく」というのは顕在意識部分だと考えています。

「極めて見難い」、「極めて微妙」というのは潜在意識部分だと考えています。

真理から外れないようにするには、心の支配を狙う悪魔から心を守り、さらに、魂で心を守る（鎮め、護り、制する）ことが必要だと教示なさっている詩です。付録2 “「心を守る」と「自己（魂）を整える」についての考察”を参照してください。

★ 詩番号 **F005 (B031, D*, O037, OS3)** [[@ FS 1 心]]

F005* 心は独りで動きまわり、遠くに行ってしまう顕在部がある。また、形体なく、胸の奥の洞窟（心臓）にひそんでいる潜在部もある。これら心を守る人々は、死の束縛から逃れるであろう。

元詩 心は遠くに行き、独り動き、形体なく、胸の奥の洞窟にひそんでいる。この心を守る人々は、死の束縛から逃れるであろう。

*** (コメント) *****

心の曖昧さが強調される詩です。心は独りで動きまわり、遠くに行ってしまう部分が主に顕在部（意識）、形体なく、胸の奥の洞窟（心臓）にひそんでいる部分は主に潜在部（意識）と解釈できます。

“制する”は、“治める”としましょう（F004 参照）。

★ 詩番号 **F006 (B032, D*, O038, OS3)** [[@ FS 1 心]]

F006* 正しい真理を知らず、信念が汚されたならば、心の安樂（安住）は得られず、さとの智慧は湧いてこない。

元詩 心が安住することなく、正しい真理を知らず、信念が汚されたならば、さとの智慧は全うからず。

*** (コメント) *****

条件と結果がちぐはぐです。整理して書き直しました。

★ 詩番号 **F007 (B033, D*, O039, OS3)** [[@ FS 1 心]]

F007 心が煩惱に汚されず、念いが乱れず、善悪のはからいを捨てるに至った真人（覚醒者）は、何も恐れることが無い。

元詩 心が煩惱に汚されることなく、おもいが乱れることなく、善悪のはからいを捨てている覚醒者（目ざめている人）には、何も恐れることが無い。

*** (コメント) *****

発達には段階があります。

善悪のはからいを捨てるには、心が煩惱に汚されていてもダメですし、念いが乱れていてもダメです。

1 → 2 → 3 → …と言う順を追っていくしかないのです、その順番を逸脱すると正しい目的地には着けないばかりか、魂の退化に繋がります。

★ 詩番号 **F008 (B034, D*, O040, OS3)**、**F009 (B034, D*, O041, OS3)** [[@ FS 1 心]]

F008** ああ、この身はまもなく地上によこたわるであろう。魂は抜け、水瓶の破片のように無用になる。身体は、このように脆いものだと知って、身体への執着を離れよ。

元詩 この身体は水瓶のように脆いものだと知って、この心を城郭のように（堅固に）安立して、智慧の武器をもって、悪魔と戦え。勝ち得たものを守れ。____しかもそれに執着することなく。
心をおさめたならば、安楽をもたらす。

F009** 心を正しく治めて、智慧の武器を持ち悪魔と戦え。そして執着することなく、勝ち得たものを守れ。

元詩 ああ、この身はまもなく地上によこたわるであろう。____意識を失い、無用の木片（きざれ）のように、投げ捨てられて。

（コメント；変）**

身体が心や魂を守ります。また、正しい心が身体を守り、邪まな心は身体を害します。
お釈迦様は、悪魔との戦いは、身体での戦いもありますが、心の戦いが重要であることを我々人間に説かれています。その点では、身体への強い執着が邪魔になることもあると、教えてらっしゃいます。
また、この2詩の流れを整理する必要を感じましたので、全面的に書き換えます。

★詩番号 **F010 (B035, A, O042, OS3) 、 F011 (B036, A, O043, OS3) [[@ FS 1 心]]**

F010 憎む人が憎む人にたいし、怨む人が怨む人にたいして、どのようなことをしようとも、邪なことをめざしている心はそれよりもひどいことをする。

元詩 書換えなし

F011 母も父もその他親族がしてくれるよりもさらに優れたことを、正しく向けられた心がしてくれる。

元詩 書換えなし

（コメント）**

なし

FS 2 自己

この章は、§ FS1 心とセットで存在します。「付録1 魂と脳と守護霊」を参考にしながら読んでください。
詩の順序は、内容を分類分けして、O160, O157, O161, O162, O158, O164, O163, O165, O166 と並べます。
自己=魂、自分=心とします。

★詩番号 **F012 (B178, D, O160, OS12) 、 F013 (B179, D, O157, OS12) [[@ FS 2 自己]]**

F012 魂（自己）こそ心（自分）の主である。他人がどうして心（自分）の主であろうか？ 魂（自己）をよく整えたならば、得難き主を得る。

元詩 自己こそ自分の主である。他人がどうして（自分の）主であろうか？ 自己をよくととのえたならば、得難き主を得る。

F013* もしも人が魂（自己）を愛しいものと知るならば、心（自分）をよく守れ。賢い人は、怠らずに励み、常に心を治め、つつしんで目ざめているようにせよ。

元詩 もしもひとが自己を愛しいものと知るならば、自己をよく守れ。賢い人は、夜の三つの区分のうちの一つだけでも、つつしんで目ざめておれ。

（コメント；F013 変）**

F012；魂とは、体から潜在意識から顕在意識全てですから、全てをバランス良く鍛錬することが、魂の成長にとって大切だと考えられます。また、鍛錬の仕方ですが、それは学問や技術を学ぶ事、身体を鍛える事、そして、常に自分が世のため人のために心を尽くして行動しているのか？を考える事等なのでしょう。最終段階では、魂の鍛錬に、瞑想・禪定の力が必要になります。

F013；（変）後のF014の詩が、これに関連する詩です。

魂を守る一つに、心（や脳）経由で、魂を退化させる悪い情報を植込まない事、身体に悪い物質を取り込まない事などがあります。反対に、魂を進化させる情報を取り込む事も大切です。そういう点では、情報、そして、食事は大切だという事です。

また、賢い人のカテゴリーになると、常に慎んで目覚めているように努力しなくてはなりません。

三つの区分とは、第一の時期は少年期、第二の時期は壮年期、第三の時期は、老年期だそうです。第一の時期、第二の時期の行いで、第三の時期が決定されるに決まっています。妻子を養うために悪い事とわかって、それに加担する事は、良くない事で、回避する方法を模索するべきです。このように三つの区分が独立してあるわけではないので、突然、第三の時期だけめざめようなんて不可能です。

この三つの区分については、中村氏の注釈によって、ブッダゴーサの意思が強く働いている事がわかります。したがって、後代の付け足し部分なので削除します。

★詩番号 **F014 (B180, D*, O161, OS12) 、 F015 (B181, D*, O162, OS12) [[@ FS 2 自己]]**

F014* 心が作り、心から生じ、心から起った悪が知慧悪しき人を打ちくたく。—金剛石が宝石を打ちくたくように。

元詩 自分がつくり、自分から生じ、自分から起った悪が知慧悪しき人を打ちくたく。——金剛石が宝石を打ちくたくように。

F015 愚かな人は、仇敵がかれの不幸を望むとおりのことを、自己（魂）に対してなす。—蔓草（ツルクサ）が沙羅の木にまといつくように。

元詩 極めて性の悪い人は、仇敵がかれの不幸を望むとおりのことを、自分に対してなす。——蔓草（ツルクサ）が沙羅の木にまといつくように。

（コメント；変）**

F014；自分を心と置き換えます。その人本体、全てが、魂の体現ですから、「人を打ち砕く」とは、「魂を打ち砕く」ことでもあります。

F015；「極めて性の悪い人」は「愚かな人」、「自分に対してなす」は「自己（魂）に対してなす」として、文章を整えます。

★詩番号 **F016 (B182, D, O158, OS12)**、**削除 (B183, D*, O159, OS12)** [[@ FS 2 自己]]

F016 先ず自己を正しく整えてから、次いで他人に教えよ。そうすれば賢明な人は、煩わされて悩むことが無いであろう。

元詩 先ず自分を正しくととのえ、次いで他人を教えよ。そうすれば賢明な人は、煩わされて悩むことが無いであろう。

O159 削除

元詩 他人に教えるとおりに、自分でも行なえ——自分をよくととのえた人こそ、他人をととのえるであろう。自己は実に制し難い。

（コメント；変）**

詳細は付録2“「心を治める」と「自己（魂）を整える」についての考察”をお読みください。

真人やブッダは、ただ道を示す（教える）のみで、人を整えることができるのは、他人ではなく自己というのが、お釈迦様の、もしくは、真理のこぼの一貫した教えです。したがって、他人をととのえるという O159 の概念自体が誤りです。詩 O159 の教えは F016 に含まれると考えて良いと思いますので、削除します。

★詩番号 **F017 (B184, B, O164, OS12)**

F017 愚かにも、悪い見解にもとづいて、真理に従って生きるブッダ・真人たちの教えを罵るならば、その人は悪い報いが熟する。——カッタカという草は果実が熟すると自分自身が滅びてしまうように。

元詩 愚かにも、悪い見解にもとづいて、真理に従って生きる真人・聖者たちの教えを罵るならば、その人は悪い報いが熟する。——カッタカという草は果実が熟すると自分自身が滅びてしまうように。

（コメント）**

「真人・聖者」ではなく、「ブッダ・真人」としました。

★詩番号 **F018 (B185, A, O163, OS12)**、**F019 (B186, A, O165, OS12)**、**F020 (B187, A*, O166, OS12)**
[[@ FS 2 自己]]

F018 善からぬこと、自己のためにならぬことは、なし易い。ためになること、善いことは、実に極めてなし難い。

元詩 善からぬこと、己れのためにならぬことは、なし易い。ためになること、善いことは、実に極めてなし難い。

F019 自ら悪をなすならば、自ら汚れ、自ら悪をなさないならば、自ら浄まる。浄いのも浄くないのも、各自のことがらである。人は他人を浄めることができない。

元詩 みずから悪をなすならば、みずから汚れ、みずから悪をなさないならば、みずから浄まる。浄いのも浄くないのも、各自のことがらである。人は他人を浄めることができない。

F020 たとい他人にとっていかに大事であろうとも、（自分ではない）他人の目的のために自己のつとめをすて去ってはならぬ。自己の目的を熟知して、自己のつとめに専念せよ。

元詩 たとい他人にとっていかに大事であろうとも、（自分ではない）他人の目的のために自分のつとめをすて去ってはならぬ。自分の目的を熟知して、自分のつとめに専念せよ。

（コメント；変）**

詩 F019 と F021 の己を自己と書き換えます。それ以外は文章を整えます。

FS 3 はげみ

導入（ブログ記事 「“はげみ”の章の後記」の書き直し）

真理のこぼ全体を熟読し終えた今となつては、人間が取り組む課題や取り組む姿勢は、各自の発達段階に応じて異なるといけないという事を痛感しています。

その結果、人間が生きる姿勢として推奨されるものが、魂のレベルに合わせて、“怠らずに励む（不怠惰）”→“努め励む”→“学び努める”

に、順次、変化すると、私は考えました。

発達には順序が大切です。いきなり“学び努める”から始めると、壁が高すぎて、逆に悪影響です。ようするに、人は、“怠らずに励む”という土台が出来ていて初めて、“学び励む”に移行でき、これができるようになると学び努めるという相になると、私は考えています。

この結論に至った議論に関しては、FS08 花にちなんで 詩 F085, F086 のコメントも参照ください。

実際には、人間が怠ってはいけないものとは、

- ・日頃の生活で優先順位が高く、回避すると生活が立ち行かない仕事
- ・生まれながらに持つ自分の勤めや課題

です。後者は自覚するまでが大変ですが、前者を不怠惰で正しくこなせば、後者は自ずと思い出されてきます。そして、後者に着手するあたりから、不怠惰だけではなく、努め励み、さらには学び努めるという姿勢も必要になってきます。これは、きつくなるように悪魔が計られます（必要悪ですが、）ので、つつい人間は脇道にそれてしまうのです。そんな人間を諷めているのが、この「はげみ」の章です。そして、この章では、主に不怠惰から努め励みまでの教えが書かれています。

修行者に語った形態の詩もありますが、在家者と出家者の広い領域の人々に対して、有益な教えだと思しますので、そのように捉えてください。

また、真理のことばを最後まで熟読し、他の章で色々と考察を深めた結果、ブログでの判定が妥当ではなく、概ね厳しすぎたので、判定を良くしています。

ブログでは、章名を「不怠惰」としましたが、中村氏の用いた「はげみ」に戻しました。

★ 詩番号 F021 (B015, A*, O021, OS2) 、 F022(B016, A*, O022, OS2) [[@ FS 3 はげみ]]

F021** 努め励むのは不死の境地である。怠りなまけるのは死の境地である。

努め励む人々は死ぬことがない。怠りなまける人々は、死者のごとくである。

元詩 つとめ励むのは不死の境地である。怠りなまけるのは死の境涯である。つとめ励む人々は死ぬことがない。怠りなまける人々は、死者のごとくである

F022* このようにはっきりと知って、努め励むことをよく知る人々は、努め励むことを喜び、真人（覚醒者）たちの明るく生き生きした生活を楽しむ。

元詩 このことをはっきりと知って、つとめはげみを能（よ）く知る人々は、つとめはげみを喜び、聖者たちの境地を楽しむ。

（コメント；変）**

ブログでは、“つとめ励む”を“怠らない”に置き換えました。やはり“努め励む”と漢字表記で元に戻しました。怠りなまけている人は死者のように見えるというのは、努め励んで、毎日を過ごしている人からするとよくわかると思います。私にはそのような人は単なる死者というよりゾンビに見えています。死んでもなお正しく生きている人の足を引っ張る感じです。しかし、詩文ではブログで使用したゾンビということばを使わず、死者という柔らかい表現に戻しました。

★ 詩番号 F023 (B017, B*, O023, OS2) 、 F024(B018, B*, O024, OS2) [[@ FS 3 はげみ]]

F023** 真理に従う道を進むよう努め励み、堪え忍ぶこと強く、思慮ある人々は、安らぎに達する。

これは無上の幸せである。

元詩（道に）思いをこらし、堪え忍ぶことつよく、つねに健（たけ）く奮励する、思慮ある人々は、安らぎに達する。これは無上の幸せである。

F024** 心は奮起し、思いつつましく、行いは清く、気をつけて行動し、自ら制し、法（のり）にしたがって生き、努め励む人は、名声が高まる。

元詩 ころろはふるいたち、思いつつましく、行いは清く、気をつけて行動し、みずから制し、法（のり）にしたがって生き、つとめ励む人は、名声が高まる。

（コメント；変）**

ブログでの書換え詩の方向は、大筋は間違っていないのですが、言葉使いを中村氏の言葉に近づけたいと思います。ただ、中村氏の詩はひらがな表記が非常に多いので、適時、漢字に変えていきます。

詩 F023 に出てくる安らぎとは、涅槃（ニルヴァーナ）と訳されますが、現在の仏教では、これは現世での富裕や生活の安定までも含まれているかのような教えになっています。

しかし、これは、罪穢れだらけの現在の現世を正しく教えていません。実際は、現世での富裕や生活の安定は、罪穢れを溜めることによって得られるような場合も多いのです。

もちろん、正しく光の道を歩んで裕福な人たちがやしがるべき地位についている人たちも実は結構います。それは現世に光の仕組みを残すためであって、彼らが有り余るほど、桁違いに財産や権限を持つなどはありませんし、彼らは目立ちません。また、罪穢れが

少ない人々は、この世の中の最下層に置かれることも多いですが、しかし、そのような人々は、暗くジトジトと人生を送っていることもまずありません。

詩 F024 の「自ら制し」は、「気をつけて行動し」に含まれると考えられるので、削除します。

★ 詩番号 **F025 (B019, D, O025, OS2)** [[@ FS 3 はげみ]]

F025** 思慮ある人は、怠らず、努め励み、心を治め、執着と怒りと迷妄に打ち勝て。それにより、欲望による激流に押し流されない心の抛り所（魂）を作れ。

元詩 思慮ある人は、奮い立ち、つとめ励み、自制・克己によって、激流も押し流すことのできない島をつくれ。

*** (コメント ; 変) *****

克己（こっき）；自分の欲望や邪念にうちかつこと。

また、「自己を制する」、とか、「自己を整える」、「自己を治める（鎮め、護り、制する事）」については、“付録2「心を治める」と「自己（魂）を整える」についての考察”を参照してください。

★ 詩番号 **F026 (B020, B*, O026, OS2)**、**F027(B021, B*, O027, OS2)** [[@ FS 3 はげみ]]

F026* 智慧乏しき愚かな人々は怠惰になじむ。

しかし賢い人は、最上の財宝（たから）を守るように、努め励むのを守る。

元詩 智慧乏しき愚かな人々は放逸にふける。しかし心ある人は、最上の財宝（たから）をまもるように、つとめ励むのをまもる。

F027** 怠たらず、執着と欲楽に親まらずに、思念をこらす者は、大いなる楽しみを得る。

元詩 放逸にふけるな。愛欲と欲楽に親しむな。おこたることなく思念をこらす者は、大いなる楽しみを得る。

*** (コメント ; 変) *****

「心ある人」は、今後、「賢い人」に変換します。

欲に関しては、人間の一存ではなくすることができなかと考えています。「付録5 心の汚れ」と「FS 16 執着と欲望」を参考にしてください。

詩 F027 では、愛欲を執着に置換します。

★ 詩番号 **F028 (B022, B*, O028, OS2)**、**F029 (B023, B*, O029, OS2)**、**F030 (B024, B*, O030, OS2)**

[[@ FS 3 はげみ]]

F028 人は怠惰を退け、努め励むことにより、智慧を得て、憂いをなくす。

山上にいる人が地上の人々を見下ろすように、その人は憂いを持つ他の多くの人々を、自分とは異なると、はっきりと見極める。

元詩 賢者が精励修行によって怠惰を退けるときには、智慧の高閣（たかどの）に登り、自らは憂い無くして（他の）憂いある愚人どもを見下ろす。_____山上にいる人が地上の人々を見下ろすように。

F029* 怠りなまけている人々の中で、一人でも努め励み、そして、眠っている人々の中で、ひとりよく目覚めている思慮ある人は、足のろの馬を抜いて疾く走る馬のようなものである。

元詩 怠りなまけている人々の中で、ひとりつとめはげみ、眠っている人々の中で、ひとりよく目覚めている思慮ある人は、疾くはしる馬が、足のろの馬を抜いて駆けるようなものである。

F030* 努め励む事は常に褒め称えられる。放逸なることは常に非難される。

マガヴァー（インドラ神）は、努め励んだので、神々の中での最高の者となった。

元詩 マガヴァー（インドラ神）は、つとめ励んだので、神々の中での最高の者となった。

つとめはげむことを人々はほめたたえる。放逸なることは常に非難される。

*** (コメント ; 加) *****

詩 F028 の“山上にいる人が地上の人々を見下ろすように”や詩 F029 の“疾くはしる馬が、足のろの馬を抜いて駆けるようなものである”のような比喩は、実際にお釈迦様が仰ったのか、後代の付け足しか悩ましいのですが、この手の比喩には、表現に光るものが多いので、私としてはお釈迦様のお言葉の場合が多いのではないかと考えています。ですから、基本的には、この手の比喩の詩部分は残します。

詩 F030 について。具体的な神様のお名前については、誰でも仏道の修行半ばの人は認識できないようです。神様の名前は後から付いてくるという意見がありますが、私も賛成です。今の私では、“マガヴァー（インドラ神）”を認識できません。でも、削除するほど自信もないので、記述を残します。

★ 詩番号 **F031 (B025, B*, O031, OS2)**、**F032 (B026, B*, O032, OS2)** [[@ FS 3 はげみ]]

F031** 努め励む事を楽しみ、怠惰に恐れを抱く人は、微細なものでも粗大なものでも心のわずらいを、焼きつくしながら生活する。

元詩 いそむことを楽しみ放逸に恐れをいだく修行僧は、微細なものでも粗大なものでも全て心のわずらいを焼きつくしながら歩む——燃える火のように。

F032** 努め励む事を楽しみ、怠惰に恐れを抱く人は、墮落するはずはなく、すでに安らぎ（ニルヴァーナ）の近くにいる。

元詩 いそむことを楽しみ、放逸に恐れをいだく修行僧は、墮落するはずはなく、すでにニルヴァーナの近くにいる。

（コメント；変）**

「放逸」は「怠惰」と書き換えます。

怠らない修行の奨励の一步先にある努め励むを楽しむ境地を教えてらっしゃいます。同じ仕事でも、嫌々やるのと、自分に与えられた仕事を嬉しい気持ちで努め励むのでは、周囲に与える影響が違ふものです。周囲に与える影響まで責任を持つには、怠惰に恐れをいだき、努め励むのを楽しむくらいにならないといけないと教えてくださっています。この境地まで行くにはかなりの霊格の高さが必要ですので、無理な場合はコツコツと怠らずに目の前のことをこなすよう努力するのがベストです。

FS 4 老いること

この章、全体は、新約聖書に通じる文章仕立てだと感じています。全般的に、とても恐ろしい雰囲気醸し出していますが、非常に正確に人間の体の特徴を説明しています。これらは、お釈迦様がより高次の存在から教授された教えを、直接的に語ってらっしゃるようです。「直接的」とは、ほとんど、お釈迦様の思考を通さないで、お釈迦様から発せられた教えというニュアンスです。多少、筆を入れましたが、極めて改ざんが少ないと感じています

★ 詩番号 **F033 (B215, A, O146, OS11)**、**F034 (B216, A, O147, OS11)**、**F035 (B217, A, O148, OS11)**

[[@ FS 4 老いること]]

F033 何の笑いがあるか。何の喜びがあるか？——世間は常に燃え立っているのに——。汝らは暗黒に覆われている。どうして燈明を求めないのか？

元詩 書換えなし

F034 見よ、粉飾された形体を！（それは）傷だらけの身体であって、いろいろのものが集まっただけである。病いに悩み、意欲ばかり多くて、堅固でなく、安住していない。

元詩 書換えなし

F035 この容色は衰えはてた。病いの巢であり、脆くも滅びる。腐敗のかたまりで、やぶれてしまう。生命は死に帰着する。

元詩 書換えなし

（コメント）**

なし

★ 詩番号 **F036 (B295, A, O135, OS10)** [[@ FS 4 老いること]]

F036 牛飼いが棒をもって牛どもを牧場に駆り立てるように、老いと死とは生きとし生けるものどもの寿命を駆り立てる。

元詩 書換えなし

（コメント）**

OS10 章 暴力 から移動しました。

★ 詩番号 **F037 (B218, A, O149, OS11)**、**F038 (B219, A, O150, OS11)** [[@ FS 4 老いること]]

F037 秋に投げすてられた瓢箪（ひょうたん）のような、鳩の色のようなこの白い骨を見ては、なんの快さがあるか？

元詩 書換えなし

F038 骨で城がつくられ、それに肉と血とが塗ってあり、老いと死と高ぶりとごまかしとがおさめられている。

元詩 書換えなし

（コメント）**

なし

★ 詩番号 **F039 (B220, A, O151, OS11)**、**F040 (B221, A, O152, OS11)** [[@ FS 4 老いること]]

F039 いとも麗しい国王の車も朽ちてしまう。身体もまた老いに近づく。しかし善い立派な人々の徳は老いることがない。善い立派な人々は互いに道理を説き聞かせる。

元詩 いとも麗しい国王の車も朽ちてしまう。身体もまた老いに近づく。しかし善い立派な人々の徳は老いることがない。善い立派な人々は互いにことわりを説き聞かせる。

F040 学ぶことの少ない人は、牛のように老いる。その人の肉は増えるが、その人の知恵は増えない。

元詩 学ぶことの少ない人は、牛のように老いる。かれの肉は増えるが、かれの知恵は増えない。

*** (コメント) *****

ことわり→道理、彼→その人と置き換えます。

★ 詩番号 **F041 (B222, A, O153, OS11)**、**F042 (B223, D, O154, OS11)** [[@ FS 4 老いること]]

F041 わたくしは幾多の生涯にわたって生死の流れを無益に経めぐって来た、——家屋の作者（ツクリテ）をさがしもとめて——。あの生涯、この生涯とくりかえすのは苦しいことである。

元詩 書換えなし

F042* 家屋の作者よ！ 汝の正体は見られてしまった。心は、妄執を滅ぼし尽くし（身体の）形成作用を離れたので、汝（心）はもはや家屋を作ることはないであろう。汝の梁はすべて折れ、家の屋根は壊れてしまった。

元詩 家屋の作者よ！ 汝の正体は見られてしまった。汝はもはや家屋を作ることはないであろう。汝の梁はすべて折れ、家の屋根は壊れてしまった。心は形成作用を離れて、妄執を滅ぼし尽くした。

*** (コメント ; 変) *****

詩 F042 では、家屋（人間の体）の作者は誰か？これが大切です。実は、これが煩惱や妄執に染まった心だと、この詩は私たちに語りかけます。

この詩は、心は魂全体を牽引する働きがあるのということも教えてくれています。心が煩惱や妄執を滅ぼせば、実は体の形成作用を離れるようです。ここまで来ると、安らぎに入っている（解脱している）のでしょう。

★ 詩番号 **F043 (B224, A, O155, OS11)**、**F044 (B225, A, O156, OS11)** [[@ FS 4 老いること]]

F043 若い時に、財を獲ることなく、清らかな行ないをまもらないならば、魚のなくなった池にいる白鷺のように、痩せて滅びてしまう。

元詩 書き換え不要

F044 若い時に、財を獲ることなく、清らかな行ないをまもらないならば、昔のことばかり思い出して、かたくなな心となって、壊れた弓のように横たわる。

元詩 若い時に、財を獲ることなく、清らかな行ないをまもらないならば、壊れた弓のようによこたわる。——昔のことばかり思い出してかこちながら。

*** (コメント ; 変) *****

この2詩は、在家者への教えです。正当な手段によって財を獲ることは、清らかな行ないを保つことと、同等に大切なことであることを、教えています。

ことにこの世の中でたくさんの経験が必要な若い時の出家修行の励行にブレーキをかけていると、私は感じています。

私なりに、若い時のパターンをこの詩に沿って下記のように洗い出し、考察を行いました。

財を蓄えた+清らかな行ないを保つ → 真人へとステップアップする中年、老後、

財を蓄えない+清らかな行ないを保つ → 仕事の従事、

財を蓄えた+清らかな行ないを保たない → 悪魔との契約か人生やり直し、

財を蓄えない+清らかな行ないを保たない → 人生やり直しか悪魔との契約。

FS 5 世の中

★ 詩番号 **F045 (B203, A, O167, OS13)**、**F046 (B204, A, O168, OS13)**、**F047 (B205, B, O169, OS13)**

[[@ FS 5 世の中]]

F045 下劣なしかたになじむな。怠けてふわふわと暮らすな。邪な見解をいだくな。世俗のわずらいをふやすな。

元詩 書換えなし

F046* 奮起（フルイタ）てよ。怠けてはならぬ。道理に従った善い行ないを実行せよ。道理に従って行なう人は、この世でも、あの世でも、安楽に臥す。

元詩 奮起（フルイタ）てよ。怠けてはならぬ。善い行ないのことわりを実行せよ。ことわりに従って行なう人は、この世でも、あの世でも、安楽に臥す。

F047 道理に従った善い行ないを実行せよ。道理に従わない悪い行ないを実行するな。道理に従って行なう人は、この世でも、あの世でも、安楽に臥す。

元詩 善い行ないのこわりを實行せよ。悪い行ないのこわりを實行するな。こわりに従って行なう人は、この世でも、あの世でも、安楽に臥す。

*** (コメント) *****

こわり(理)を道理と置き換えます。

日本語を整えます。

★詩番号 F048 (B206, D*, O170, OS13)、F049 (B207, B*, O171, OS13) [[@ FS 5 世の中]]

F048** 世の中の実相と泡沫を見よ。泡沫はかげろうのごとしと見よ。世の中をこのように観ずる人は、死王もかれを見ることがない。

元詩 世の中は泡沫のごとしと見よ。世の中はかげろうのごとしと見よ。世の中をこのように観ずる人は、死王もかれを見ることがない。

F049* さあ、この世の中を見よ。王者の車のように美しい部分が目立つ。愚かな人はそこに耽溺(たんでき)するが、賢い人はそれに執着しない。

元詩 さあ、この世の中を見よ。王者の車のように美しいである。愚者はそこに耽溺(たんでき)するが、心ある人はそれに執着しない。

*** (コメント) *****

詩 F048 ; FS19 賢い人 詩 F257 「空と相」についての詩とコメントを参照してください。泡沫=相となっています。

詩 F049 ; “愚者”は“愚かな人”と書き直しましょう。愚かな人との対応ですから、“心ある人”=“賢い人”となります。

★詩番号 F050 (B208, A, O172, OS13)、F051 (B209, A, O173, OS13) [[@ FS 5 世の中]]

F050 以前は怠りなまけていた人でも、のちに怠りなまけることが無いなら、その人はこの世の中を照らす。—あたかも、雲を離れた月のように。

元詩 また以前は怠りなまけていた人でも、のちに怠りなまけることが無いなら、その人はこの世の中を照らす。——あたかも雲を離れた月のように。

F051 以前には悪い行ないをした人でも、のちに善によってつぐなうならば、その人はこの世の中を照らす。—あたかも、雲を離れた月のように。

元詩 以前には悪い行ないをした人でも、のちに善によってつぐなうならば、その人はこの世の中を照らす。——雲を離れた月のように。

*** (コメント) *****

F050 ; 怠りなまけた人の償いは、怠りなまけないことで、悪い行ないをした人の償いは、善を行うことなのでしょう。FS17 悪いところ 詩 F216 で記述される、悪いことをするくらいなら、何もしないほうが良いという内容と一致します。

両詩に統一感を出すために、F050 から「また」を消し、F051 に「あたかも」を足します。

★詩番号 F052 (B210, D*, O174, OS13)、F053 (B211, D*, O175, OS13) [[@ FS 5 世の中]]

F052** この世の中は暗黒である。ここではっきりと理(コトワリ)と実相を見分ける人は少ない。しかし、これらを見分けたならば、悪魔とその軍勢にうち勝つ。あたかも、網から脱れた鳥のように。

元詩 この世の中は暗黒である。ここではっきりと(こわりを)見分ける人は少ない。網から脱れた鳥のように、天に至る人は少ない。

F053** 網から脱れた鳥のような真人は、あるものは白鳥のように太陽の道を行き、あるものは神通により虚空を行き、あるものはブツダとなる。

元詩 白鳥は太陽の道を行き、神通力による者は虚空(そら)を行き、心ある人々は、悪魔とその軍勢にうち勝って世界から連れ去られる。

*** (コメント変) *****

- ・ この2詩の難解な部分が、鳥の部分と人間の部分の混在だと思いましたので、人間に関する部分を詩 F052 に、鳥の部分の詩 F053 に振り分けました。
- ・ 「心ある人」は、いつものように「賢い人」とします。
- ・ 「世界から連れ去られる」は「輪廻を離れる」とします。
- ・ 賢い人の相で、たくさん学び努めて、汚れを十分に祓い、慎みの完成に至った人が真人(これはやはり人間です。)になるというのが、人間の魂の成長過程だというスタンスを私は取ります。ですから、白鳥と神通力による者とは真人というカテゴリーの人だと考えます。そして、この詩を読むと、真人には、どうやら白鳥のような人と神通力による人の二種類が存在するようです。これは、「ひふみ神示 黄金の巻 第九十二帖」で、天人(人間である天人です。)が二つに分類されていることと一致します。内容もおおよそ一致していると思います。以下にその神示を転載します。
- ・ ひふみ神示 黄金の巻 第九十二帖

つつましく、正しくして行けば その国々で一切不足なく暮して行けるやうに何も彼も与へてあるに気付かんのか。天災地変は人間の心のままと申してあらう。豊作、凶作 心のままぞ。今のままで行けば何うなるか、誰にも判らんであらうが、神示通りに出て来ること、未だうたがってゐるのか。ひつくとみつくの民あると申してあらう。ひつくの民は神の光を愛の中に受け、みつくの民は智の中に受ける。愛に受けると直ちに血となり、智に受けると直ちに神経と和して了ふのであるぞ。二つの民の流れ。(一月三日)

・ ひつくの民は、白鳥でしょう。みつくの民は、神通力による者 でしょう。

ちなみに、地球に生まれてくる天人級の存在は、ほとんどがみつくの民だとひふみ神示に記述されています。ただ、お釈迦様は、太陽の裔と、おっしゃっているのでひつくの民なのではないかと思っています。

★ 詩番号 **F054 (B212, B, O176, OS13) 、 F055 (B213, B, O177, OS13) [[@ FS 5 世の中]]**

F054* 唯一無二の真理を逸脱し、偽りを語り、安らぎの世界を無視している人は、どんな悪でもなす。

元詩 唯一なることわりを逸脱し、偽りを語り、彼岸の世界を無視している人は、どんな悪でもなさないものは無い。

F055** 愚かな人々は分かちあうことをたたえない。しかし賢い人々は分かちあうことを喜ぶ。

元詩 物惜しみする人々は天の神々の世界におもむかない。愚かな人々は分かちあうことをたたえない。しかし心ある人は分かちあうことを喜んで、そのゆえに来世には幸せとなる。

*** (コメント) *****

F054 ; 彼岸の世界=安らぎ (解脱後の世界、ニルヴァーナ、涅槃) の世界とします。二重否定を普通の文章にします。

F054 ; 「心ある人」は「賢い人」と書き直します。仏道は、天の神々の世界に赴くための教えではなく、ブッダ・真人になるための教えなので、このくだりは、削除します。同様に、仏教のいう来世とは、死後の世界のことですが、個人の死後の世界を良くするための教えは仏道ではありません。その時その時で、必要な行動を取り、喜びの中で生きることが、我々人間にとって大切なのです。

★ 詩番号 **F056 (B214, D, O178, OS13) [[@ FS 5 世の中]]**

F056* 大地の唯一の支配者となるよりも、全世界の主権者となるよりも、真人となるほうがすぐれている。

元詩 大地の唯一の支配者となるよりも、天に至るよりも、全世界の主権者となるよりも、聖者の第一階梯 (かいてい)(預流果) のほうがすぐれている。

*** (コメント変) *****

聖者の第一階梯に関しては、本質を突くような解説がありませんでした。仏道は普通の人間がブッダ・真人になることを奨励していますが、ブッダ>真人ですので、まずは真人になることが、我々普通の人間の目標です。従って、「真人となるほうが」と書き換えます。

「天に至ること」の定義は F053 で行いましたが、真人になってすることで、ここで否定する内容が出てくるのは不合理です。整合をとるために、詩から削除します。

FS 6 道

★ 詩番号 **F057 (B188, A, O273, OS20) 、 F058 (B189, A, O274, OS20)、 F059 (B190, B, O275, OS20)、 F060 (B191, A, O276, OS20) [[@ FS 6 道]]**

F057* 人の道のうちでは、仏道の八正道が最もすぐれている。

もろもろの真理のうちでは、四諦 (苦・集・滅・道) が最上である。

もろもろの徳の中では、執着から離れることが最もすぐれている。

人々のうちでは、ブッダ (=眼ある人) が最もすぐれている。

元詩 もろもろの道のうちでは<八つの部分よりなる正しい道>が最もすぐれている。

もろもろの真理のうちでは<四つの句> (=四諦) が最もすぐれている。

もろもろの徳のうちでは<情欲を離れること>が最もすぐれている。

人々のうちでは<眼ある人> (=ブッダ) が最もすぐれている。

F058 これこそ道である。(真理を) 見るはたらきを清めるためには、この他に道は無い。汝はこの道を実践せよ。これこそ悪魔を迷わして (打ちひしぐ) ものである。

元詩 書換えなし

F059 汝らがこの道を行くならば、苦しみをなくすことができるであろう。(棘が肉に刺さったので) 矢を抜いて癒す方法を知って、わたくしは汝らにこの道を説いたのだ。

F060* 汝らは自ら努めよ。もろもろの修行完成者は(ただ) 教えを説くだけである。心をおさめて、この道を歩む者は、悪魔の束縛から脱れるであろう。

元詩 汝らは(みずから) つとめよ。もろもろの如来(=修行を完成した人) は(ただ) 教えを説くだけである。心をおさめて、この道を歩む者どもは、悪魔の束縛から脱れるであろう。 [[@ FS 6 道]]

*** (コメント変) *****

この4つの詩で一つのパッケージだと考えています。

FS 4 章 老いることの導入で記したのと同様に、お釈迦様のお口から出たお言葉でしょうが、別の高次の存在からの直接的メッセージでしょう。

どうしてそう考えるかという、これらの詩で、使われる二人称が「汝」だからです。お釈迦様の教えでは、この二人称はあまり使われません。“汝”とは同等ではない下の人たちに使う二人称だそうです。ここで、メッセージの送り主は、人間たちが、ご自分より下であることをはっきりと宣言なさっているわけです。

高次元からのメッセージは、改ざんが難しいのか、あまり悪魔の手が入っていないことが多いのです。

詩 F057 ; 人類にとって仏道が一番有益だという事実を受け入れた上で、仏道=「八正道」or「悟りのよすが」or「五根」か? という問いの答えが「八正道」であるというのがこの詩句の内容です。

八正道は、サーリプッタ尊者が語った教えだという認識があります(違っていたらすみません。)。ここで、「付録3 四諦と仏道」を参考にしてください。

私がブログを記した当時は、悟りのよすかの教えが良いと思っていました。しかし、この詩では、八正道が最も優れていると宣言なさっていて、それを否定する根拠は、私にはありません。さらに、サーリプッタ尊者の存在が捉えることができた今となっては、とてもではありませんが、この詩を書き換えることはできません。

従って、ブログとは意見を変えて、詩も書き換えました。人類にとって仏道が一番有益だという事実を反映したいと思いましたが、詩中には仏道という言葉は付け足しました。

「もろもろの真理のうちでは<四つの句>(=四諦) がもっともすぐれている」では、四諦という概念が、あまたある仏道の真理の頂点にあるということを宣言するための詩です。その他の真理は、“真理のことは”内たくさん語られますが、それら全ては、この四諦という真理の枝葉だと捉えたらいいのでしょうか。

「もろもろの徳のうちでは<情欲を離れること>が最もすぐれている。」ですが、「付録5 執着と欲望(3) 執着と欲望」において、「欲(望)というものは、理科学でいう場のようなもので、すでにこの3次元の世の中に設定されているのです。」ということにしたので、我々が自力でなくすことのできない欲である情欲から離れることは、つまり執着を無くす事と換言します。自力で行うことをストレートに書いて、誤解を生じさせないためです。

徳とは、まっすぐな心で行う行為だそうです。何か見返りを期待するための善行とかでは、一応、徳を積んだと言われても、大した徳にはならないということです。その見返りへの執着を離れる(捨てる)ことが最高の徳だということが表されているのでしょう。

詩 F060 ; 如来という言葉は修行完成者としています。如来を使うと、宗教的になってしまうので、修行完成者とします。私は、修行完成者とは、ブッダ・真人だと考えています。

★ 詩番号 **F061 (B192, D, O277~O279, OS20)** [[@ FS 6 道]]

F061* 「一切の形成されたものは無常である」(諸行無常)

「一切の形成されたものは苦しみである」(一切皆苦)

「一切の事物は我ならざるものである」(諸法非我)

と明らかな知恵をもってこの世の全てを観るときに、人は苦しみから遠ざかり離れる。これこそ人が清らかになる道である。

O277 ; 「一切の形成されたものは無常である。」(諸行無常)と明らかな知恵をもって観るときに、人は苦しみから遠ざかり離れる。これこそ人が清らかになる道である。

O278 ; 「一切の形成されたものは苦しみである。」(一切皆苦)と明らかな知恵をもって観るときに、人は苦しみから遠ざかり離れる。これこそ人が清らかになる道である。

O279 ; 「一切の事物は我ならざるものである。」(諸法非我)と明らかな知恵をもって観るときに、人は苦しみから遠ざかり離れる。これこそ人が清らかになる道である。

*** (コメント加) *****

私は、お釈迦様がおっしゃったされる教えのハイライトは、実は、この3つではないかと思っていましたが、真理のことは読み込むにつけて、これがハイライトだというようなおこがましい議論は慎まなくてはならないと反省しました。

「明らかな知恵をもって見る」の目的語がないので、目的語として、「この世の全てを」を付け加えて、3詩を一つに書き換えます。

★ 詩番号 **F062 (B193, A, O280, OS20)**、**F063 (B194, A, O281, OS20)**、**F064 (B195, A, O282, OS20)**

[[@ FS 6 道]]

F062 起きるべき時に起きないで、若くて力があるのに怠りなまけていて、意志も思考も薄弱で、怠惰で物憂い人は、明らか

な知恵によって道を見出すことがない。

元詩 書換えなし

F063 言葉を慎しみ、心を落ち着けて慎しみ、身に悪を為してはならない。これらの三つの行ないの路を淨くたもつならば、ブツダの説きたもうた道を克ち得るであろう。

元詩 ことばを慎しみ、心を落ち着けて慎しみ、身に悪を為してはならない。これらの三つの行ないの路を淨くたもつならば、仙人(=仏)の説きたもうた道を克ち得るであろう。

F064 実に心が統一されたならば、豊かな知恵が生じる。心が統一されないならば、豊かな知恵がほろびる。生じることとほろびることとの、この二種の道を知って、豊かな知恵が生ずるように自己を整えよ。

元詩 書換えなし

*** (コメント) *****

F062; 愚かな人に対するの教え

F063; 賢い人に対するの教え。仙人をブツダと書き換えましょう。ことばを漢字で書きます。

F064; 賢い人でも真人に近い人に対するの教え。自己は魂です。

★ 詩番号 **F065 (B196, A, O283, OS20)**、**F066 (B197, D, O284, OS20)**、**F067 (B198, B, O285, OS20)**

[[@ FS 6 道]]

F065* 一つの樹を伐るのではなくて、(煩惱の) 林を伐れ。危険は林から生じる。(煩惱の) 林とその下生えとを切って、林から脱れた者となれ。修行僧らよ。

元詩 一つの樹をを伐るのではなくて、(煩惱の) 林を伐れ。危険は林から生じる。(煩惱の) 林とその下生えとを切って、林(=煩惱) から脱れた者となれ。修行僧らよ。

F066 たとい僅かであろうとも、男女の淫らな欲望が断たれないあいだは、その人の心は束縛されている。

元詩 たとい僅かであろうとも、男の女に対する欲望が断たれないあいだは、その男の心は束縛されている。——乳を吸う子牛が母牛を恋慕うように。

F067 自己の執着を断ち切れ、一池の水の上に出て来た秋の蓮を手で断ち切るように。静かなやすらぎに至る道を選び進め。めでたく行きし人であるブツダは安らぎへの道を説きたもうた。

元詩 自己の愛執を断ち切れ、——池の水の上に出て来た秋の蓮を手で断ち切るように。静かなやすらぎに至る道を養え。めでたく行きし人(=仏)は安らぎを説きたもうた。

*** (コメント) *****

F065; なし

F066; 欲望自体は、不足を感じて欲しがることという意味ですから、良くも悪くもないニュートラルな意味合いで捉えます。しかし、異性間の淫らな欲望は禁じられるべきです。この詩は男性の女性に対する性的な欲求を書いています、男女両方に注意を喚起すべきだと思いますので、詩を書き換えました。

「乳を吸う子牛が母牛を恋慕うように」という文は、子どもが母親を慕う当然の事をあらわしていますが、それを男女間の想いと重ねています。これが妥当だとは考えにくいので、削除します。

F067; ハスが生い茂るのは、夏です。秋は、すでにハスはなくなって寂しくなっているのですが、そこに、突如として、むくむくと生えてくる時期外れのハスのことを言っています。これはなくなったと思って安心していると、出てくる煩惱のことです。

愛執という言葉、執着と書き直させてください。

ブツダや如来は教えを説くだけであるということは、安らぎを説いたのではなく、安らぎへ至る道(方法)を説いたのでそれに従って書き換えます。

★ 詩番号 **F068 (B199, A, O286, OS20)**、**F069 (B200, A, O287, OS20)**、**F070 (B201, A, O288, OS20)**、**F071 (B202, A, O289, OS20)** [[@ FS 6 道]]

F068 「わたしは雨期にはここに住もう。冬と夏にはここに住もう」と愚者はこのようによくよと慮って、死が迫って来るのに気がつかない。

元詩 書換えなし

F069 子どもや家畜のことに気を奪われて心がそれに執着している人を、死はさらって行く。_____眠っている村を大洪水が押し流すように。

元詩 書換えなし

F070 子も救うことができない。父も親戚もまた救うことができない。死に捉えられた者を、親族も救い得る能力がない。

元詩 書換えなし

F071 賢い人はこの道理を知って、教えをまもり自らを清め、安らぎに至る仏道をすみやかに進め。

元詩 心ある人はこの道理を知って、戒律をまもり、すみやかにニルヴァーナに至る道を清くせよ。

*** (コメント) *****

F068～F070 なし

F071；教えを出家者に対して咀嚼し直したものが戒律（在家者の場合は慎み）と考えていますので、「戒律」を、普遍性が高い「教え」に書き換えます。

ニルヴァーナは安らぎと表記しましょう。

「心ある人」は、「賢い人」とします。

道を清めるのではなく、もともと清い道（仏道）を、自分を清めて歩みなさいということです。

FS 7 千という数にちなんで

全般的に平仮名表記が多いのですが、漢字に変えて読みやすくしました。

★ 詩番号 **F072 (B226, A, O100, OS8)**、**F073 (B227, A, O101, OS8)**、**F074 (B228, A, O102, OS8)**

[[@ FS 7 千という数にちなんで]]

F072 無益な語句を千たび語るよりも、聞いて心の静まる有益な語句を一つ聞く方が優れている。

元詩 書換えなし

F073 無益な語句よりなる詩が千もあっても、聞いて心の静まる詩を一つ聞く方が優れている。

元詩 書換えなし

F074 無益な語句よりなる詩を百も唱えるよりも、聞いて心の静まる詩を一つ聞く方が優れている。

元詩 書換えなし

*** (コメント) *****

なし

★ 詩番号 **F075 (B229, D, O103～O105, OS8)** [[@ FS 7 千という数にちなんで]]

F075* 常に行ないをつつしみ、自己を整え、心を治めることは、自己にうち克つ事である。

自己に克った者の勝利を敗北に転ずる事は、神も、ガンダルヴァ(天の伎楽神)も、悪魔も、梵天もなす事ができない。唯だ一つの自己に克つ者は勝利者となる。

この勝利者が、あまたの賤（いや）しい愚かな人々に打ち勝てば、その人は最上の勝利者となる。

元詩 O103；戦場において百万人に勝つよりも、唯だ一つの自己に克つ者こそ、じつに最上の勝利者である。

O104+O105；自己にうち克つ事は、他の人々に勝つ事よりも優れている。つねに行ないをつつしみ、自己をととのえている人、——このような人の克ち得た勝利を敗北に転ずる事は、神も、ガンダルヴァ(天の伎楽神)も、悪魔も、梵天もなす事ができない。

*** (コメント変) *****

自己にうち克つ事の定義を、自己を整え、心を治めることとすれば、自己にうち克つ事は、他の人々に勝つ事とは別の事象です。自己にうち克つ事ができた人は勝利者であることは間違いありませんが、これは、武力の戦いが強い弱い、弁が立つとは関係ありませんし、男女でも関係ありません。

では、他の人々に勝つ戦いの場合を考えましょう。この戦いは、武力、言論による戦い、その他諸々の戦いが考えられますが、まずは相手があることです。その相手が真理から逸脱しているのか？それとも真理を護っているのかによって、戦うことの意味が違ってきます。これが大義名分のない戦いがダメだと言われるゆえんです。正義の旗印の下にいる人たちを相手に戦うのは暴力の行使であって外道ですし、外道（賤しい愚かな人）相手に戦うのは真理を護るための必要な戦いなのです。「賤しい」に関しては、「ブツダのこぼ 第一 蛇の章 七 賤しい人」を参照してください。

戦いを分類せずに、全てを忌みものとするのは良くない教えです。

この3個の詩は一つの詩に書き換えます。

★ 詩番号 **F076 (B230, D, O106+O107, OS8)**、**F077 (B231, B*, O108, OS8)** [[@ FS 7 千という数にちなんで]]

F076 百年の間、月々千回ずつ祭祀（まつり）を営む人や、林の中で祭祀（まつり）の火につかえる人々がいる。もし、それらの人々が自己を修養した人（ブツダや真人）を尊び供養するなら、たとえその供養がつかの間であっても、ただ、百年祭祀を営むだけよりも優れている。自己を修養した人を尊び供養することは優れている。

元詩 O106 ; 百年のあいだ、月々千回ずつ祭祀（まつり）を営む人がいて、またその人が自己を修養した人を一瞬間でも供養するならば、その供養する事の方が、百年祭祀を営むよりも優れている。

O107 ; 百年のあいだ、林の中で祭祀（まつり）の火につかえる人がいて、またその人が自己を修養した人を一瞬間でも供養するならば、その供養する事の方が、百年祭祀を営むよりも優れている。

F077* 功德を得るために、人がこの世で、一年間、神をまつり、犠牲（いけにえ）をささげ、あるいは火にささげ物をする。しかし、その全てをあわせても、ただ、行ないの正しい人々を尊ぶ真正なる祭りの方が、はるかに優れている。

元詩 功德を得ようとして、ひとがこの世で一年間神をまつり犠牲（いけにえ）をささげ、あるいは火にささげ物をして、その全部をあわせても、(真正なる祭りの功德の) 四分の一にも及ばない。行ないの正しい人々を尊ぶ事の方が優れている。

*** (コメント減) *****

F076 ; 「尊ぶ」 > 「供養する、お布施をする。」という構造を明確に表現出来る詩に書き換えます。二つを一つの詩に合体します。

F077 ; 中村氏の注釈によれば、「真正なる祭り」とは、行ないの正しい人々を尊ぶ事だそうです。仏道では、功德を得るためのお祭りを良しとせず、この真正な祭りをを行うよう我々人間に教えています。日本のお祭りの対象は神様なので、仏教とは若干異なります。両方に共通して言えることは、お祭りとは、尊ぶべき存在（神様、仏様、お釈迦様、キリスト様、その他人間）に対して、感謝だけではなく、敬意を表す儀式だったんですね。

★ 詩番号 **F078 (B232, D, O109, OS8)** [[@ FS 7 千という数にちなんで]]

F078* 人が、常に、自己を修養した人（ブツダや真人）に敬礼を守れば、魂の寿命と美しさと楽しみと力が増大する。

元詩 つねに敬礼を守り、年長者を敬う人には、四種の事がらが増大する。——すなわち、寿命と美しさと楽しみと力とである。

*** (コメント減) *****

亀の甲より年の功というところもありますが、年齢が行けば悪患も付きます。ただ、日本では、年長者は伝統的に敬われていたと思いますし、昔は、年齢と人徳のあつきにもそれなりに相関があったと思います。また、正しい年長者を敬わなければ、この世の中が成り立ちません。ですから、お釈迦様は、年長者かどうかは、人の判断の材料の一つ程度には考えてらしたようですが、何よりも、自己を修養した人（ブツダや真人）を敬うことを推奨なさっていたのは事実でしょう。それと同時に、いつもきちんと自分で、他人が自己を修養した人かどうかを判断する癖をつけるように、我々に、再三、指示なさっています。

寿命と美しさと楽しみと力の4種ですが、光と闇が拮抗するこの世では、神様から与えられたものかもしれないですし、悪魔からのものかもしれません。この4種は、この世の私たちが得るものと言うより、私たちの魂が得る事ができるものでしょう。

★ 詩番号 **F079 (B233, A, O110, OS8)**、**F080 (B234, A, O111, OS8)**、**F081 (B235, A, O112, OS8)**

[[@ FS 7 千という数にちなんで]]

F079 素行が悪く、心が乱れていて百年生きるよりは、徳行あり思い静かな人が一日生きる方が優れている。

元詩 書換えなし

F080 愚かに迷い、心の乱れている人が百年生きるよりは、知慧あり思い静かな人が一日生きる方が優れている。

元詩 書換えなし

F081 怠りなまけて、気力もなく百年生きるよりは、堅固につとめ励んで一日生きる方が優れている。

元詩 書換えなし

*** (コメント) *****

なし

★ 詩番号 **F082 (B236, B, O113, OS8)**、**F083 (B237, D, O114, OS8)**、**F084 (B238, E, O115, OS8)**

[[@ FS 7 千という数にちなんで]]

F082* 物事が興り消え失せる因果を見極めずに百年生きるよりも、この因果を見極めて一日生きる方が優れている。

元詩 物事が興りまた消え失せることわりを見ないで百年生きるよりも、物事が興りまた消え失せることわりを見て一日生きる事の方が優れている。

F083* 魂の不死を見極めずに百年生きるよりも、これを見極めて一日生きる方が優れている。

元詩 不死の境地を見ないで百年生きるよりも、不死の境地を見て一日生きる事の方が優れている。

F084** 四諦の真理を見極めずに百年生きるよりも、これを見極めて一日生きる方が優れている。

元詩 最上の真理を見ないで百年生きるよりも、最上の真理を見て一日生きる方が優れている。

*** (コメント) *****

「見る」を「見極める」とします。

F082 ; 「物事が興りまた消え失せることわり」とは「物事が興り消え失せる因果」とします。

F083 ; 不死については、中村氏は注釈で非常に困惑しています。中村氏は、学者なので伝統を重んじて真面目に訳出してらっしゃいますが、宗教的に魂の不死が言えても、学問的に簡単に書けないのでしょう。しかし、お釈迦様は、魂は死なないという、断固とした原理原則（不死）にお立ちですから、どの魂もよほどのことがない限り、不死なのです。

今生限りの命では、悪いことした者勝ちという理屈に流されやすいのが人間だと、常日頃から感じています。私は魂の不死が宗教的であるとしても、これを前提にした行動規範によって、悪魔の甘言から人間が自衛できる力が育まれると思っています。

「不死の境地」を、正しく表すために「魂の不死の境地」と置き換えてみます。

F084 ; 仏道の中で最も優れている真理とは、四諦であると、FS 6 道 F057 詩で述べられているので、「最上の真理」を「四諦の真理」と置き換えます。

FS 8 花にちなんで

覚醒者と修行者については、世間一般では、ほぼ同等な扱いがなされています。しかし、覚醒者になるために修行している人が修行者と考える方が自然なので、この考え方で、本書は進めます。

覚醒者とは、お釈迦様のおっしゃる「目覚めた人」、「真人」、「ブッダ」という言葉で表されていると思いますので、本書ではそのように使います。

正しい真理を知って、魂が、守護神の力を借りて正しく心を鎮め、護り、制す（治め）れば、心が汚れることがなくなります（FS 1 心 詩 F003、004 で記述）。それと同時に、努力して、行いを魂に伴わせませす。このステップを繰り返す（これが修行）ことにより、その人の行動規範が、“怠らずに励む”→“努め励む”→“学び努める”へとステップアップしていきます（詩 F085、086 のコメント参照）。これにより、自然と善悪の計らいがなくなり始め、何も恐れることがなくなり始めます。この境地の究極にたどり着いた人が、ブッダなのだと思っています。

この章の“花”は、真理（真利、善的）のこともあるし、六欲の対象の場合（悪的）もあります（付録5 心の汚れ (2) 欲参照)。“美”を1つ取っても、光からのものか、または、闇からのものか、なかなか見分けがつかない時もあります。この章では、この対象的なものを花と喩えています。

★ 詩番号 **F085 (B037, B*, O044, OS4)**、**F086 (B038, B*, O045, OS4)** [[@ FS 8 花にちなんで]]

F085* だれ（どの魂）がこの大地（心）を正しく治めるであろうか？

だれが閻魔の世界と神々ともなるこの世界とを正しく治めるであろうか？

わざと巧みな人が花を摘むように、善く説かれた真理のこぼれを摘み集めるのはだれであろうか？

元詩 だれがこの大地を征服するであろうか？

だれが閻魔の世界と神々ともなるこの世界とを征服するであろうか？

わざと巧みな人が花を摘むように、善く説かれた真理のこぼれを摘み集めるのはだれであろうか？

F086* 学び努める人こそ、この大地（心）を正しく治め、閻魔の世界と神々ともなるこの世界とを正しく治めるであろう。

わざと巧みな人が花を摘むように、学びつとめる人々こそ善く説かれた真理のこぼれを摘み集めるであろう。

元詩 学びにつとめる人こそ、この大地を征服し、閻魔の世界と神々ともなるこの世界とを征服するであろう。

わざと巧みな人が花を摘むように、学びつとめる人々こそ善く説かれた真理のこぼれを摘み集めるであろう。

*** (コメント変) *****

詩 F085 での問いかけに対する答えが詩 F086 です。

「学びにつとめる」は「学び努める」と表記します。

「FS 03 はげみ」の導入で考察した「怠らずに励む」という土台が出来ていて、「学び努める」に移行すると考えています。発達には順序が大切です。いきなり「学び努める」から始めると、壁が高すぎて、逆に悪影響です。そういう意味では、

「怠らずに励む」→「努め励む」→「学び努める」

と、人も向上に合わせて、表現を変えないといけません。

中村氏の注釈では、「大地」とは「自己」という見解もあると紹介されています。しかし、私は自己を魂と解釈したので、「治められる」もしくは「征服される」のは心、そしてその統治者は魂だという考えに立っていますので、「大地」とは「心」であると考えます。「征服する」というのは、「治める」よりは、だいぶ強い表現で、私は征服という強い語気は好みませんので、「征服する」を「正しく治める」と書き換えます。

「閻魔の世界と神々ともなるこの世界」は、三千世界（あの世もこの世も全てミックス）の事だと思っています。

三次元のこの世界は時間は超えられませんが、色々な霊格の存在が行き交う擬似の三千世界だと私は捉えています。

また、この詩は、カッコを抜いても成立しますし、カッコだけを残しても成立します。つまり、2通りの読み方ができるわけですが、カッコを抜いた場合の詩は、世界のリーダーへの教えとなります。

（番外編1）ちなみに、初めから高い目標を掲げさせて、人を壊すというのは、悪魔の常套手段です。自分の置かれた場所、やらなければならない事とやりたい事を区別し、冷静に見分けて分相応に対応しないと、悪魔の思う壺です。でも、これは結構難しいので、最初は、過小評価から始めて、徐々に上げて行き、自分の位置を見つけることによって、自分の立ち位置を自分で判断するので、ですから、時間が必要で、焦りは禁物です。対象が大人であれば、自分でやって周囲の人たちに意見をもらったりしながら自分で

考えて見極めなくてはなりません、対象が子供であれば、親が見極めて本人に納得させる必要があります。掲げる目標に対するこのチェックポイントは意外に重要です。ここで、間違えさせられて、悪魔にやられてしまう人が多いのです。しかし、私は状況も悪いので仕方ないと思っています。最後に、今の目標が習得できてきたなら、次の目標を掲げることができる勇気がある事も大切です。

(番外編2) 学ぶという言葉は、なかなか広い意味があります。普通に生きて生活する中で得られる経験により得られる知識や体験、技術なども「学ぶ」に入れるのが主流ですが、これは、実は「習う」です。これらを習得した上で、さらに自分の意思と思考でプラスαする部分が、実は「学ぶ」と言われています。後者が学問でしょう。

普通に生きていく中で、人として正しく生きることができていることは、技術の習得よりは大切です、その土台がしっかりした人が習得したものは世の中にとって価値のあるものです。その上で「学問的学ぶ」を、この詩では求めているのだと思います。この土台がない人が、「技術の習得」や「学問的学ぶ」を行っても、閻魔の世界の住人に、てい良く使われて、悪いカルマを背負わされてしまうだけです。

(番外編3) 世の中のスピ系や仏教系では、「正しい」を固定的な概念で、他を排除する思想につながる言葉として忌み嫌う傾向があると思います。間違った正義が横行するので無理ありませんが、しかし「正しい」という言葉自体を否定するのはやりすぎだと思います。

真理とは唯一無二であり、一(点)に止まるという漢字の正の成り立ちを考えると、「正」の字は、真理のある側面を表したものではありませんかと思うのです。諸行無常の世の中で、揺るがない真理を探し、それに従うのが、私たち人間の務めで、その根本の「正」を否定することは、仏魔の言いなりになりやすくなるという危険があることを認識した方が良く考えています。

★ 詩番号 **F087 (B039, D, O046, OS4)** [[@ FS 8 花にちなんで]]

F087* この身は泡沫(うたかた)のごとくであると知り、かげろうのようなはかない本性のものであるとさとり、そして悪魔に魅入られないよう、悪魔の花の矢を断ち切れ。

元詩 この身は泡沫のごとくであると知り、かげろうのようなはかない本性のものであると、さとったならば、悪魔の花の矢を断ち切って、死王に見られないところへ行くであろう。

*** (コメント変) *****

死王=悪魔とします。

心を守るものが体。心と体とDNAを合わせたものが魂と考えています。

“悪魔の花の矢”は五欲(本書では六欲)への執着と考えます。

表現が曖昧なので、元詩を少し書き換えて、しっかりさせました。

庶民や修行者への戒めでしょう。

類似詩あり FS 5 世の中 詩 F048。

★ 詩番号 **F088 (B040, B, O047+O048, OS4)** [[@ FS 8 花にちなんで]]

F088 花を摘むのに夢中になっている人を死がさらって行き、眠っている村を洪水が押し流す。
花を摘むのに夢中になっている人が、未だ望みを果たさないうちに、死神(悪魔)が彼を征服する。

元詩 O047; 花を摘むのに夢中になっている人を、死がさらって行くように、眠っている村を、洪水が押し流して行くように。
O048; 花を摘むのに夢中になっている人が、未だ望みを果たさないうちに、死に神が彼を征服する。

*** (コメント) *****

庶民や修行者への戒めの詩です。

この2つの詩の“花”は、“悪魔の花の矢”は五欲(本書では六欲)です。

言葉尻を変えて、合体しましょう。

★ 詩番号 **F089 (B041, A, O049, OS4)** [[@ FS 8 花にちなんで]]

F089 蜜蜂は(花の)色香を害(そこなわず)に、汁をとって、花から飛び去る。
修行者が村に行くときは、そのようにせよ。

元詩 蜜蜂は(花の)色香を害(そこなわず)に、汁をとって、花から飛び去る。
聖者が村に行くときは、そのようにせよ。

*** (コメント変) *****

聖者は、ブッダ・真人(覚醒者)に当たると解釈しています。もはや覚醒者はこの教えを必要としないででしょう。ですから、聖者ではなく修行者へと記述を変更しました。修行者への戒めの詩です。この過ちは、実に犯しやすいです。

★ 詩番号 **F090 (B042, D, O050, OS4)** [[@ FS 8 花にちなんで]]

F090* 他人のした事としなかった事を鑑みて、他人の過失から学び、良い行ないを実行せよ。
自分のした事としなかった事を省み、自己の過失はすみやかに改めよ。

元詩 他人の過失を見るなかれ。他人のしたこととしなかったことを見るな。

ただ自分のしたこととしなかったことだけを見よ。

*** (コメント変) *****

他人は、先生ですから、良く観察し学ぶべきです。ですから、根本的に、真逆の教えで、悪魔の教えと判断しました。そこで、常識的に書き換えました。

★ 詩番号 **F091 (B043, A, O051, OS4)**、**F092 (B044, A, O052, OS4)** [[@ FS 8 花にちなんで]]

F091 うるわしく、あでやかに咲く花でも、香りの無いものがあるように、善く説かれたことばでも、それを実行しない人には実りが無い。

元詩 書換えなし

F092 うるわしく、あでやかに咲く花で、しかも香りのあるものがあるように、善く説かれたことばも、それを実行する人には、実りがある。

元詩 書換えなし

*** (コメント) *****

真理のことばを生かすも殺すも、個々の人間の実行次第ということです。

★ 詩番号 **F093 (B045, A, O053, OS4)** [[@ FS 8 花にちなんで]]

F093 うず高い花を集めて多くの華鬘（はなかざり）をつくるように、人として生まれまた死ぬべきであるならば、多くの善いことをなせ。

元詩 書換えなし

*** (コメント) *****

その通りです。ちなみに、人として生まれてまた死ぬべきであるならば、最低条件は悪いことをしないことです。

★ 詩番号 **F094 (B046, A, O054, OS4)**、**F095 (B047, A, O055, OS4)**、**F096 (B048, A, O056, OS4)**

[[@ FS 8 花にちなんで]]

F094 花の香りは風に逆らっては進んで行かない。梅檀（せんだん）もタガラの花もジャスミンもみなそうである。しかし徳のある人の香りは、風に逆らっても進んで行く。徳のある人はすべての方向に薫る。

元詩 書換えなし

F095 梅檀（センダン）、タガラ、青蓮華、ヴァッシキー——これら香りのあるものどものうちでも、徳行の香りこそ最上である。

元詩 書換えなし

F096 タガラ、梅檀（センダン）の香りは微かであって、大したことはない。しかし徳行のある人々の香りは最上であって、天の神々にもとどく。

元詩 書換えなし

*** (コメント減) *****

香りで嗅ぎ分けるのが大切なんです。日月神示には、鼻と額での判断が正しいと書いてありました。私はその2つに気をつけています。

★ 詩番号 **F097 (B049, A, O057, OS4)** [[@ FS 8 花にちなんで]]

F097* 慎みを完成し、学び努めて生活し、正しい智慧によって解脱した人々には、悪魔も近づくによし無し。

元詩 徳行を完成し、つとめはげんで生活し、正しい智慧によって解脱した人々には、悪魔も近づくによし無し。

*** (コメント変) *****

「つとめはげんで」を「学び努めて」と書き換えます。

「徳行を完成」というより、「慎みの完成」の方が、わかりやすいと思いますので、書き換えます。

★ 詩番号 **F098 (B050, B, O058+O059, OS4)** [[@ FS 8 花にちなんで]]

F098* 塵芥にも似た盲（めしい）た凡夫のあいだにあって、正しくめざめた真人は智慧により輝く。あたかも、大道に捨てられた塵芥（ちりあくた）の山堆（やまずみ）の中から香しく麗しい蓮華が生じ輝くように。

元詩 O058；大道に捨てられた塵芥（ちりあくた）の山堆（やまずみ）の中から香しく麗しい蓮華が生ずるように。

O059；塵芥にも似た盲（めしい）た凡夫のあいだにあって、正しくめざめた人（ブツダ）の弟子は智慧をもって輝く。

*** (コメント変) *****

「正しくめざめた人（ブツダ）の弟子」を「正しくめざめた真人」とした方が安全なので、置き換えます。
2つの対詩の関係を、構築し直し合体します。

FS 9 楽しみ

★ 詩番号 F099 (B266, D*, O197, OS15)、F100 (B267, A, O198, OS15)、F101 (B268, A, O199, OS15)

[[@ FS 9 楽しみ]]

F099** 怨みをいだいている人々の間であって、怨むこと無く、我らは暮らしていこう。

元詩 怨みをいだいている人々の間であって怨むこと無く、我らは大いに楽しく生きよう。怨みをもっている人々の間であって怨むこと無く、我らは暮らしていこう。

F100** 悩める人々のあいだであって、悩み無く暮そう。

元詩 悩める人々のあいだであって、悩み無く、大いに楽しく生きよう。悩める人々のあいだであって、悩み無く暮そう。

F101** 貪っている人々の間であって、患い無く、貪らないで暮らそう。

元詩 貪っている人々の間であって、患い無く、大いに楽しく生きよう。貪っている人々の間であって、貪らないで暮らそう。

*** (コメント) *****

“恨み”、“悩み”、“貪り”は、すべて煩惱で、人を墮落させる種ですので、これらに囚われることを否定します。しかし、“恨み”、“悩み”、“貪り”がきっかけで、どうやってこれらからの囚われから離れ得るのか思考・実践し人間の魂が成長するのです。ですから、これらを生む元は必ず存在するのが、この世なのです（「付録5 心の汚れ」参照）。

それにしても、恨みを抱いている人や、貪りばかりの人たちの間で、楽しくなると暮らしていけないので、元詩の「大いに楽しく生きよう。」の部分は削除して、文章を整えました。

★ 詩番号 F102 (B355, A, O219, OS16)、F103 (B356, A, O220, OS16) [[@ FS 9 楽しみ]]

F102 久しく旅に出ていた人が遠方から無事に帰って来たならば、親戚・友人・親友たちは彼が帰って来たのを祝う。

元詩 書換えなし

F103 そのように善いことをしてこの世からあの世に行った人を善業が迎え受ける。——親族が愛する人が帰って来たのを迎え受けるように。

元詩 書換えなし

*** (コメント) *****

OS 16 愛するもの から移動。

★ 詩番号 F104 (B269, B*, O202, OS15)、F105 (B270, B*, O203, OS15)、F106 (B271, B*, O204, OS15)

[[@ FS 9 楽しみ]]

F104* 欲望に等しい火は存在しない。ばくちに負けるとしても、増悪に等しい不運は存在しない。
このかりそめの身に等しい苦しみは存在しない。安らぎにまさる楽しみは存在しない。

元詩 愛欲に等しい火は存在しない。ばくちに負けるとしても、増悪に等しい不運は存在しない。
このかりそめの身に等しい苦しみは存在しない。安らぎにまさる楽しみは存在しない。

F105* 飢えは最大の病いであり、形成せられる存在(わが身)は最もひどい苦しみである。このことわりをあるがままに知ったならば、ニルヴァーナという最上の楽しみがあることを知るであろう。

元詩 飢えは最大の病いであり、形成せられる存在(わが身)は最もひどい苦しみである。このことわりをあるがままに知ったならば、ニルヴァーナという最上の楽しみがある。

F106* 健康は最高の利得であり、満足は最上の宝であり、信頼は最高の親族であり、ニルヴァーナは最上の楽しみである。

元詩 健康は最高の利得であり、満足は最上の宝であり、信頼は最高の知己であり、ニルヴァーナは最上の楽しみである。

*** (コメント変) *****

F104；愛欲を欲望と置き換えます。

F105；文末の「楽しみがある。」という部分が、前半部との整合が取れず、日本語として不適切だと感じましたので、補完し「楽しみがあることを知るであろう」と記しました。

F106；「知己」を、片山一良さんの訳「親族」としました (https://76263383.at.webry.info/201004/article_6.html さん参照)。

★ 詩番号 F107 (B272, D, O205, OS15) [[@ FS 9 楽しみ]]

F107** 心を落ち着けて孤独の味を味わい、重ねて、禪定により真理と知慧の味を味わうならば、恐れがなくなっていく。

元詩 孤独(ひとりい)の味、心の安らぎの味をあじわったならば、恐れも無く、罪過も無くなる、__真理の味をあじわいながら。

*** (コメント加) *****

詩の構成順番が狂わされているのでしょうか。“ブツダのこぼ”の詩(182)で、「この世では正しい教え(信仰)が人間の最上の富である。徳行に篤いことは安楽をもたらす。実に真実が味の中で美味である。知慧によって生きるのが最高の生活であるという」と謳われています。

禪定は、真理を理解し知慧を得るためのものです。そして、禪定を行う条件として、心を落ち着けた状態での孤独という環境が必要だと私は考えます。

罪過(悪いカルマ)は、自得により清算が原則と言われているので、禪定により罪過がなくなる部分の記述は削除します。

また、真理を理解し知慧を得れば恐れがなくなるだろうというのは容易に予測できますので、「恐れがなくなる。」は残します。

注ですが、仏教において真実は真理と同じことを表します。

★詩番号 **F108 (B273, D, O206, OS15)**、**F109 (B274, A, O207, OS15)** [[@ FS 9 楽しみ]]

F108* もろもろのブツダ・真人に会うのは善いことである。愚かなる者どもに会わないならば、心はつねに楽しいであろう。

元詩 もろもろの聖者に会うのは善いことである。かれらと共に住むのはつねに楽しい。愚かなる者どもに会わないならば、心はつねに楽しいであろう。

F109 愚人とともに歩む人は長い道のりにわたって憂いがある。愚人と共に住むのは、常に辛いことである。__仇敵とともに住むように。賢い人と共に住むのは楽しい。__親族に出会うように。

元詩 愚人とともに歩む人は長い道のりにわたって憂いがある。愚人と共に住むのは、つねにつらいことである。__仇敵とともに住むように。心ある人と共に住むのは楽しい。__親族に出会うように。

*** (コメント変) *****

F108; 聖者をブツダ・真人と書き換えます。中間部の「かれらと共に住むのはつねに楽しい。」は、この詩自体が「会うことと会わないこと」の対比で完結するべきだと感じましたので削除します。ブツダ・真人ともなれば、普通の人々が、彼らの一存で一緒に住むことはなかなか叶わないでしょう。

F109; 心ある人は賢い人と置き換えます。この詩が「賢い人と愚かな人」、「歩む(住む)と住まない」で対比が取れてきます。

★詩番号 **F110 (B275, B, O208, OS15)** [[@ FS 9 楽しみ]]

F110 よく気をつけていて、明らかに知慧あり、学ぶところ多く、忍耐づよく、真理を護る、そのような立派なブツダ・真人に親しめよ。

元詩 よく気をつけていて、明らかに知慧あり、学ぶところ多く、忍耐づよく、戒めをまもる、そのような立派な聖者・善き人、英知ある人に親しめよ。__月がもろもろの星の進む道にしたがうように。

*** (コメント変) *****

聖者・善き人、英知ある人を、ブツダ・真人と置き換えましょう。

守るべき戒めは、真理を体得するために、人間のためにあるものと、私は捉えますので、真人やブツダには必要ないです。真人やブツダは真理(正しい道)を護ってくださっていると考えているので、「戒め」を「真理」、「まもる」を「護る」と書き換えます。

「月がもろもろの星の進む道にしたがうように」ですが、月を観察すると、地球から一番近く、28日周期で地球を一周するだけのことはあって、遙か彼方の星たちと運行が違います。もちろん、惑星の火星や金星も同じように、他の多くの遠い星たちとは運行が異なります。科学的に根拠がわからないので、この部分は削除します。

FS 10 さまざまなこと

★詩番号 **F111 (B239, B, O290, OS21)**、**F112 (B240, A, O291, OS21)**、**F113 (B241, A, O292, OS21)**、**F114 (B242, A, O293, OS21)** [[@ FS 10 さまざまなこと]]

F111 つまらぬ快樂を捨てることによって、広大なる楽しみを得ることができるのなら、賢い人は広大な楽しみをのぞんで、つまらぬ快樂を捨てよ。

元詩 つまらぬ快樂を捨てることによって、広大なる楽しみを見ることができのなら、心ある人は広大な楽しみをのぞんで、つまらぬ快樂を捨てよ。

F112 他人を苦しめることによって自分の快樂を求める人は愚かな人であって、怨みの絆にまつわれて、怨みから免れることができない。

元詩 他人を苦しめることによって自分の快樂を求める人は、怨みの絆にまつわれて、怨みから免れることができない。

F113 なすべきことを、なおざりにし、なすべからざることをなす、遊びたわむれ放逸なる愚かな者どもには、汚れが増す。

元詩 なすべきことを、なおざりにし、なすべからざることをなす、遊びたわむれ放逸なる者どもには、汚れが増す。

F114 常に身体(の本性)を思い続けて、為すべからざることを為さず、為すべきことを常に為して、心がけて、自ら気をつけている賢い人々には、もろもろの汚れがなくなる。

元詩 常に身体(の本性)を思いつづけて、為すべからざることを為さず、為すべきことを常に為して、心がけて、みずから気をつけている人々には、もろもろの汚れがなくなる。

*** (コメント) *****

これら一連の詩は、汚れをなくす具体的な実践方法を示す貴重な詩です。

F111; 「心ある人」は「賢い人」、「見る」は「得る」に置き換えましょう。

F112; 「快樂を求める人は」は「快樂を求める人は愚かな人であって」と書き換えます。

F113; 「放逸なる者ども」は「放逸なる愚かな者ども」と書き換えます。

F114; 「自ら気をつけている人々」は「自ら気をつけている賢い人々」と書き換えます。

★ 詩番号 **F115 (B243, D, O302, OS21)**、**F116 (B246, B, O305, OS21)** [[@ FS 10 さまざまなこと]]

F115* 在家の生活は困難であり、家に住むのも難しい。なぜならば、心を同じくしない人々と共に住むのは難しいからである。出家の生活も困難であり、それを楽しむことは難しい。出家者が策を弄して利益を求めると、苦しみに会う。だから、出家者は、策を弄して利益を求めてはならない。

元詩 出家の生活は困難であり、それを楽しむことは難しい。在家の生活も困難であり、家に住むのも難しい。心を同じくしない人々と共に住むのも難しい。(修行僧が何かを求めて) 旅に出て行くと、苦しみに会う。だから旅に出るな。また苦しみに会うな。

F116* 出家者は、林の中で、ひとり坐し、ひとり臥し、ひとり歩もうとも、なおざりになることなく、自己を整えることを楽しめ。

元詩 ひとり坐し、ひとり臥し、ひとり歩み、なおざりになることなく、わが身をととのえて、林のなかでひとり楽しめ。

*** (コメント) *****

F115; 出家と在家で、詩がごちゃごちゃに編成されているので並べ直します。

出家者や修行僧はこの世の利益を求めて策を弄することは一切禁止されていますが、これが正しく伝わるように書き換えます。

また、お釈迦様ご自身が旅でご自分の教えを広められたのですから、決して「旅に出るな」とおっしゃるはずがないので、旅に関する記述は削除します。

F116; この文章の主語が、前の詩文(O304)との関連を見てもはっきりしません。ですが、意味合い的に出家者への戒めであろうと考えられますので、主語は「出家者」にします。

「林の中で一人楽しめ」は、「林の中で一人であっても楽しめ」に書き換えます。

「わが身をととのえて」は、「自己を整えて」と書き換えます。

修行僧、出家者は、不要に外に出て行くことは禁じられていますが、真理を在家に説くのも仕事ですから、たとえ辛くても、外に出なくてはならない時もあります。

★ 詩番号 **F117 (B353, A, O217, OS16)**、**F118 (B244, A, O303, OS21)**、**F119 (B245, A, O304, OS21)**

[[@ FS 10 さまざまなこと]]

F117 徳行と見識とをそなえ、法にしたがって生き、真実を語り、自分のなすべきことを行なう人は、人々から愛される。

元詩 書換えなし

F118 信仰あり、徳行そなわり、名声と繁栄を受けている人は、いかなる地方におもむこうとも、そこで尊ばれる。

元詩 書換えなし

F119 善き人々は遠くにいても輝く、一雪を頂く高山のように。

善からぬ人々は近くにいても見えない、一夜陰に放たれた矢のように。

元詩 書換えなし

*** (コメント) *****

なし

FS 11 象

仏教では、象は、立派な人(真人、覚醒者)、そして王様や王家などを比喻して使われることが多いようですが、明確な定義はありません。しかし、力強いものの例えとして用いられており、例えられているものは主に“人”ですが、心の場合(F125, F126)もあります。それらが善の場合もあり悪の場合もあるようです。

ただし、象で表現されているものに関しては、必ず力強さが前提にあり、それがない場合で良いとは言えないものは、豚と表現しているようです(F124)。

また、時を経るに従って、口伝による劣化で、文章がぼやけてきているとは考えられますが、極めて暗示的な詩が多く、全体としては魔の手の改ざんの少ない章だと思います。それゆえに意味が分からず、地味な印象がありますが、お釈迦様やその守護神の説法を何となく肌で感じる章です。

★ 詩番号 F120 (B247, A, O320, OS23)、F121 (B248, B, O321, OS23) [[@ FS 11 象]]

F120 戦場の象が、射られた矢にあたっては堪え忍ぶように、われらは人のそしりを忍ぼう。多くの人は実に性質(たち)が悪いからである。

元詩 書換えなし

F121* 世のそしりを忍び、心をおさめた者は、人々の中にあっても最上の者となる。馴らされた象が、戦場にも連れて行かれ、王の乗りものとなり、最上の象となるように。

元詩 馴らされた象は、戦場にも連れて行かれ、王の乗りものとなる。世のそしりを忍び、自らをおさめた者は、人々の中にあっても最上の者である。

*** (コメント加) *****

F120; なし

F121; 象と人間の対応がよくわからないので、「最上の象となる。」という文章を挿入します。

「自らをおさめた者」は「心をつめた者」と書き換えます。

★ 詩番号 F122 (B249, A, O322+O323, OS23) [[@ FS 11 象]]

F122 馴らされた騾馬は良い。インダス河のほとりの血統よき馬も良い。クンジャラという名の大きな象も良い。しかし自己を整え正しく心をつめた人は、これらよりもすぐれている。なぜならば、これらの乗物(身分、血統や財)によって、未到の地(ニルヴァーナ)に行くことはできない。そこへは、自己を整え正しく心をつめた人がおもむく。

元詩 322; 馴らされた騾馬は良い。インダス河のほとりの血統よき馬も良い。クンジャラという名の大きな象も良い。しかし自己をととのえた人はそれらよりもすぐれている。

323; 何となれば、これらの乗物によっては未到の地(ニルヴァーナ)に行くことはできない。そこへは、慎しみある人が、おのれ自らをよくととのえておもむく。

*** (コメント変) *****

O322; 馴らされた騾馬は生活に余裕があるバイシャ(カースト制における一般市民)、血統よき馬は中小王侯貴族、クンジャラという名の大きな象はクシャトリアの中でも大王に属する人々を指すのでしよう。

上記以外の人は人に非ずという過酷な世の中でしたが、お釈迦様は、この制度を、あえて表立って全面否定はしないものの、そこから漏れた最下層の人々にも、自己を整え心をつめることによって、誰でも、最上の人(真人)になることが出来ると教えてらっしゃいます。これに関しては、「付録4 人間の分類、(2) 修行者」で議論しますので参照ください。

「自己をととのえた」と「おのれ自らをよくととのえて」という表現は改めました。

O323; 乗り物は、身分、血統や財の喩えです。

二つの詩を一つに統合します。

★ 詩番号 F123 (B250, E*, O324, OS23) [[@ FS 11 象]]

F123** 「財を守る者」という汚れに染まった心は、いかんとも制し難く、かたくなに真理を拒む。この心は、執着を慕っている。あたかも、捕らえられても、一口の食物も食べず、こめかみから液汁をしたたらせて強暴になっている発情期の象が象の林を慕うように。

元詩 「財を守る者」という名の象は、発情期にこめかみから液汁をしたたらせて強暴になっているときは、いかんとも制し難い。捕らえられると、一口の食物も食べない。象は象の林を慕っている。

*** (コメント変) *****

わからないこと極まりないです。ブログからかなり解釈を変えました。

★ 詩番号 F124 (B251, A, O325, OS23)、F125 (B252, A, O326, OS23)、F126 (B253, A, O327, OS23)

[[@ FS 11 象]]

F124 大食いをして、眠りをこのみ、ころげまわって寝て、まどろんでいる愚鈍な人は、大きな豚のように糧を食べて肥り、くりかえし母胎に入って(迷いの生存をつづける)。

元詩 書換えなし

F125 この心は、以前には、望むがままに、欲するがままに、快きがままに、さすらっていた。今やわたくしはその心をすっかり抑制しよう、__象使いが鉤をもって、発情期に狂う象を全くおさえつけるように。

元詩 書換えなし

F126 心は泥沼に落ち込んだ象のようである。

だから、努め励むのを楽しめ。おのれの心を護れ。自己を難処から救い出せ。

元詩 書換えなし

*** (コメント) *****

どれもとても正確な詩文だと思います。

★ 詩番号 F127 (B254, A, O328, OS23)、F128 (B255, A, O329, OS23)、F129 (B256, A, O330, OS23)

[[@ FS 11 象]]

F127 もしも思慮深く聡明でまじめな生活をしている人を伴侶として共に歩むことができるならば、あらゆる危険困難に打ち克って、こころ喜び、念いをおちつけて、ともに歩め。

元詩 書換えなし

F128 しかし、もしも思慮深く聡明でまじめな生活をしている人を伴侶として共に歩むことができないならば、国を捨てた国王のように、また林の中の象のように、ひとり歩め。

元詩 書換えなし

F129* 愚かな者を道伴れとするな。それなら独りで行くほうがよい。

悪いことをするな。

求めるところは少なくあれ。

__林の中にいる象のように。

元詩 愚かな者を道伴れとするな。独りで行くほうがよい。孤独(ひとり)で歩め。悪いことをするな。求めるところは少なくあれ。__林の中にいる象のように。

*** (コメント減) *****

なし

★ 詩番号 F130 (B257, D, O331, OS23)、F131 (B258, D, O332, OS23) [[@ FS 11 象]]

F130 (大きかろうとも、小さかろうとも)、どんな果報にも満足するのは楽しい。

善いことをしておけば、命の終るときに楽しい。

(悪いことをしなかったので)、あらゆる苦しみ(の報い)を除くことは楽しい。

元詩 事がおこったときに、友だちのあるのは楽しい。(大きかろうとも、小さかろうとも)、どんなことにでも満足するのは楽しい。善いことをしておけば、命の終るときに楽しい。(悪いことをしなかったので)、あらゆる苦しみ(の報い)を除くことは楽しい。

F131* 世に父を敬うことは楽しい。また母を敬うことは楽しい。世にブツダや真人を敬うことは楽しい。天下に正しい道があるのは楽しい。

元詩 世に母を敬うことは楽しい。また父を敬うことは楽しい。世に修行者を敬うことは楽しい。世にバラモンを敬うことは楽しい。

*** (コメント加) *****

F130; ブツダゴースによる改ざんがなされています。中村氏の注釈によると、「事がおこったときに、友だちのあるのは楽しい」がブツダゴースによる注釈に従っているらしいのですが、詩 F129 で、「愚かなものが一緒なくらいなら一人でいなさい。」という教えと反するのです。ですから、この部分は消去します。

「どんなことにでも」という表現はあまりに乱暴なので、「どんな果報にでも」と改めます。

F131; ブツダゴースによる改ざんがなされています。中村氏の注釈によると、「世にバラモンを敬うことは楽しい」の部分がブツダゴースによる注です。しかし、中村氏は漢訳法句経で、「天下に道あるは楽し。」を紹介しています。バラモンは、現在の仏魔支配の仏教では、その頂点に位置するととらえるべきです。残念ですが、現時点では、バラモンという表現は、真人や目覚めた人、ブツダ、(正)道 等で置き換えられる部分については、置き換えていきましょう。

ただ、バラモンという言葉はなくすわけにはいかないと思っています。バラモンは、社会的立場を表す“出家者”の中の地位名称です。真人やブツダは、魂の霊格による分類です。広い意味では、バラモンは真人やブツダに含まれると考えられます。この点については、「付録4 人の分類」で、議論します。

お釈迦様は、バラモンについて“ブツダのことは第二 小なる章7 バラモンにふさわしいこと”で、昔のまっとうだったバラモンについて言及なさっています。このくだりは、削除された OS22 さまざまなこと 詩 O294 と 295 のコメントに載せてありますので参考にしてください。

★ 詩番号 F132 (B259, A, O333, OS23) [[@ FS 11 象]]

F132* 老いた日に至るまで慎みをたもつことは楽しい。信仰が確立していることは楽しい。明らかな知恵を体得することは楽しい。もろもろの悪事をなさないことは楽しい。

元詩 老いた日に至るまで戒しめをたもつことは楽しい。信仰が確立していることは楽しい。明らかな知恵を体得することは楽しい。もろ

もろの悪事をなさないことは楽しい。

*** (コメント変) *****

「戒め」ではなく、在家、出家の区別のない「慎み」を使います。

老いた日に至るまで慎みを保つためには、幼少期(全て親の責任)や青年、中年時代(幼少期の影響を受けつつも自分の責任が生じる)を、如何に道を大きく誤らずに進んだか?が問題なんです。人生の総決算が老齢期です。

若い時に変な宗教や歪んだイデオロギーを頭に叩き込まれると、老齢期にはその思考回路から離れられずに気付かないうちに周りに対して不快かつ迷惑な行動を取っているのです。こんな状態で老いた時に戒めなんか守れるはずはないのです。

幼少期の親の影響は絶大ですから、ある人の人生が、周りへの毒の散乱で終わった場合、その人の親には絶大な責任があるのは確かです。しかし、親から離れた20代で、自分から良くしていこうと決心したら救われる道もあります。これは、とても大変なことなのはわかります。今、こんなに世の中が乱れてしまっているのです、このような状況でアップアップしてらっしゃる方もいます。でも、何とか歯を食いしばって、正当な方法で三年頑張ってみてください。何か必ず変わります。40歳以降、あまりに修正不可能であると、病魔に捕まってしまうのですが、30代までは、本当に十分に大きな軌道修正ができます。

40歳以降でも、年々、修正できる範囲が狭まってはきますが、大幅な踏み外しでなければ、軌道修正はできます。とりあえず、長いけれど三年、歯を食いしばって頑張った後に自分の中に映る世の中を楽しみにしてみてください。きっと、最高の幸せ感はないでしょうが、物事の見え方の変化に驚くことでしょう。

FS 12 ひと組ずつ

★ 詩番号 F133 (B001, A, O001, OS1)、F134 (B002, A, O002, OS1) [[@ FS 12 ひと組ずつ]]

F133 ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によって作り出される。もしも、汚れた心で話したり行なったりするならば、苦しみはその人に付き従う。

___車をひく(牛)の足跡に車輪がついてゆくように

元詩 書換えなし

F134 ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によって作り出される。もしも清らかな心で話したり行なったりするならば、福楽はその人に付き従う。

___影がそのからだから離れないように。

元詩 書換えなし

*** (コメント) *****

これでひと組、対。

★ 詩番号 F135 (B003, A, O003, OS1)、F136 (B004, A, O004, OS1) [[@ FS 12 ひと組ずつ]]

F135 「彼はわれを罵った。彼はわれを害した。彼はわれにうち勝った。彼はわれから強奪した。」という思いを抱く人には、怨みはついに息(や)むことがない。

元詩 書換えなし

F136 「彼はわれを罵った。彼はわれを害した。彼はわれにうち勝った。彼はわれから強奪した。」という思いを抱かない人には、ついに怨みが息(や)む。

元詩 書換えなし

*** (コメント) *****

これでひと組、対。

★ 詩番号 F137 (B005, A, O005, OS1) [[@ FS 12 ひと組ずつ]]

F137* 実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息(や)むことがない。怨みを離れてこそ息(や)む。これは永遠の真理である。

元詩 実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息(や)むことがない。

怨みを捨ててこそ息(や)む。これは永遠の真理である。

*** (コメント加) *****

F137; 「捨てて」ではなく、「離れて」にしました。

★ 詩番号 F138 (B006, B, O006, OS1) [[@ FS 12 ひと組ずつ]]

F138** 私は常に死を覚悟している。

この覚悟を普通の人々は知らない。

しかし、(この)覚悟をした人には、(この世に常住する)争いがしづまる。

元詩 「われらは、ここであって死ぬはずのものである。」と覚悟をしよう。____このことわりを他の人々は知ってはいない。しかし、このことわりを知る人々があれば、争いはしずまる。

*** (コメント変) *****

塵穢れの多いこの三次元社会では、正しく覚醒した人は死を恐れてはなりません。また、この覚悟は、この世でのご利益を求めないという精神を助け、余計な悪いカルマを生産するのを防ぎます。常に死を覚悟して、この世のことを対処すれば、つまらない争いに巻き込まれないか、もしくは被害最小限という教えです。

カルマの精算時や試練中は争いに巻き込まれるのは仕方ないですが、主張すべき事ややるべき事は正しい手続きや言葉で行い、その結果には執着しないとなれば、無益な闘争が静まるのです。

★ 詩番号 **F139 (B007, A, O007, OS1) 、 F140 (B008, A*, O008, OS1) [[@ FS 12 ひと組ずつ]]**

F139* この世のものを浄らかだと思いなして暮らし、(眼などの) 感官を抑制せず、食事の節度を知らず、怠けて勤めない者は、悪魔にうちひしがれる。
____弱い樹木が風に倒されるように。

元詩 書換えなし

F140 この世のものを不浄であると思いなして暮らし、(眼などの) 感官をよく抑制し、食事の節度を知り、信念あり、努め励む者は、悪魔にうちひしがれない。
____岩山が風にゆるがないように。

元詩 書換えなし*

*** (コメント) *****

ブログでは書換えを行いましたが、最終的には元の詩を使用しました。

★ 詩番号 **F141 (B009, A, O011, OS1) 、 F142 (B010, A*, O012, OS1) [[@ FS 12 ひと組ずつ]]**

F141 まことではないものを、まことであると思なし、まことであるものを、まことではないと見なす人々は、あやまった思いにとらわれて、ついに真実(まこと)に達しない。

元詩 書換えなし

F142 まことであるものを、まことであるを知り、まことではないものを、まことではないと見なす人は、正しい思いにしたがって、ついに真実に達する。

元詩 書換えなし

*** (コメント) *****

その通りです。敬礼!

法句経(玄奘三蔵さんの訳)では、“まこと”は“真利”となっているそうです。漢訳の字は、なかなかイキで、実感しやすいです。ただ、中村氏は“まこと”を選んだので、それに沿わせていただきます。

★ 詩番号 **F143 (B011, D*, O013, OS1) 、 F144 (B012, D*, O014, OS1) [[@ FS 12 ひと組ずつ]]**

F143* 屋根を粗雑に葺いてある家には雨が漏れ入るように、心を修養していないならば、煩惱が心に侵入する。

元詩 屋根を粗雑に葺いてある家には雨が漏れ入るように、心を修養していないならば、情欲が心に侵入する。

F144* 屋根をよく葺いてある家には雨の漏れ入ることがないように、心をよく修養してあるならば、煩惱が侵入することはない。

元詩 屋根をよく葺いてある家には雨の漏れ入ることがないように、心をよく修養してあるならば、情欲の侵入することがない。

*** (コメント) *****

情欲を煩惱と書き換えます。詳しくは、「付録5 心の汚れ」を参照してください。この2詩のブログ記事でのコメントは全面的取消しをします。

★ 詩番号 **F145 (B013, A*, O019, OS1) 、 F146 (B014, A*, O020, OS1) [[@ FS 12 ひと組ずつ]]**

F145* たとえためになることを数多く語るにしても、それを実行しないならば、その人は怠っているのである。
かれは道を実践する人の部類には入らない。

元詩 たとえためになることを数多く語るにしても、それを実行しないならば、その人は怠っているのである。
かれは修行者の部類には入らない。

F146** たとえためになることを少ししか語らないにしても、
心を治めるように、
法にしたがって正しく実践するように、

執着と怒りと迷妄と疑惑と慢心を離れるように、
常に気をつけている人は、道を実践する人である。

元詩 たとえためになることを少ししか語らないにしても、理法にしたがって実践し、情欲と怒りと迷妄を捨てて、正しく気をつけていて、心が解脱して、執着することの無い人は、修行者である。

*** (コメント) *****

F145; 「付録4 人の分類」より、この条件を必要とする分類は、「道を実践する人」だと思いますので、「修行者」を「道を実践する人」に変えました。

F146; 詩 F145 とひと組になるように、「道を実践する人」を軸に、詩を書き換えました。

第2節 さまざまな悪

FS13 悪

書き直しが少ない章です。

○ 16 章 愛するもの（解散章）から詩 F147 を編入しました。

★ 詩番号 F147 (B350, A, O209, OS16) [[@ FS 13 悪]]

F147 道に違（タゴ）うたことになじみ、道に順（シタガ）ったことにいそしまず、目的を捨てて快いことだけを取る人は、みずからの道に沿って進む者を羨むに至るであろう。

元詩 書換えなし

*** (コメント変) *****

○ 16 章 愛するもの から移動

★ 詩番号 F148～F157 (B276～B285, A, O116～O125, OS 9) [[@ FS 13 悪]]

F148 善をなすのを急げ。悪から心を退けよ。善をなすのにのろのろしたら、心は悪事をたのしむ。

元詩 書換えなし

F149 人がもしも悪いことをしたならば、それを繰り返すな。悪事を心がけるな。悪が積み重なるのは苦しみである。

元詩 書換えなし

F150 人がもしも善いことをしたならば、それを繰り返せ。善いことを心がけよ。善いことが積み重なるのは楽しみである。

元詩 書換えなし

F151 まだ悪い報いが熟さない間は、悪人でも幸運に遭うことがある。しかし悪の報いが熟したときは、悪人は災いに遭う。

元詩 書換えなし

F152 まだ善い報いが熟さない間は、善人でも災いに遭うことがある。しかし善の果報が熟したときは、善人は幸福（サイワイ）に遭う。

元詩 書換えなし

F153 「その報いは私には来ないであろう」と思って、悪を軽んずるな。水が一滴ずつ滴り落ちるならば、水瓶でも満たされるのである。愚かな者は、水を少しずつでも集めるように悪を積むならば、やがて災いに満たされる。

元詩 書換えなし

F154 「その報いはわたしには来ないであろう」と思って、善を軽んずるな。水が一滴ずつ滴り落ちるならば、水瓶でも満たされる。気をつけている人は、水を少しずつでも集めるように善を積むならば、やがて福德に満たされる。

元詩 書換えなし

F155 同行する仲間が少ないのに多くの財を運ばねばならぬ商人が、危険な道を避けるように、また生きたいと願う人が毒を避けるように、人はもろもろの悪を避けよ。

元詩 書換えなし

F156 もしも手に傷が無いならば、その人は手で毒をとり去ることもできるであろう。傷の無い人に、毒は及ばない。悪をなさない人には、悪の及ぶことがない。

元詩 書換えなし

F157 汚れの無い人、清くて咎のない人をそこなう者がいるならば、その災いは、かえってその浅はかな人に至る。風にさか

らって細かい塵を投げると、(その人にもどって来る) ように。

元詩 書換えなし

*** (コメント) *****

漢字への書換えと、言葉を現代語風に変えましたが、ほぼ、原文通りです。

★ 詩番号 **F158 (B287, A, O127, OS 9) 、 F159 (B288, A, O128, OS 9) [[@ FS 13 悪]]**

F158 大空の中にも、大海の中にも、山の中の奥深いところに入っても、およそ世界のどこにも、悪業から脱れることのできる場所はない。

元詩 書換えなし

F159 大空の中にも、大海の中にも、山の中の洞窟に入っても、およそ世界のどこにも、死の脅威のない場所はない。

元詩 書換えなし

*** (コメント) *****

なし

FS14 怒り

★ 詩番号 **F160 (B300+B085, A, O222+O094, OS17+OS7) [[@ FS14 怒り]]**

F160** 御者が馬をよく馴らすように、おのが感官の高ぶりを静め、汚れをなくせ。
走る車をおさえるようにむらむらと起る怒りをおさえる人__その人をわれは<御者>とよぶ。他の人はただ手綱を手にしているだけである。

元詩 O222 ; 走る車をおさえるようにむらむらと起る怒りをおさえる人_____かれをわれは<御者>とよぶ。他の人はただ手綱を手にしているだけである。(<御者>とよぶにはふさわしくない。)

O094 ; 御者が馬をよく馴らしたように、おのが感官を静め、高ぶりをすて、汚れのなくなった_____このような境地にある人を神々でさえも羨む。

*** (コメント変) *****

他の詩と毛色が異なりますが、間違いなく、お釈迦様のお口から出たお言葉でしょう。さらに、離れた章においてありましたが、きっと、当初はこの二詩は対で配列されていたと考えられます。

怒りは、心の六汚れの一つです。怒りを制御することは、人間が心を治めるための一つの重要課題です。個々の怒りの元を、考察し、正しく認識することは、その人にとって大切な課題です。決して、全ての怒りを無条件で捨てるのが大切なのではなく、それを制御することが大切だという教えです。

★ 詩番号 **F161 (B293, A, O133, OS10) 、 F162 (B294, A, O134, OS10) [[@ FS14 怒り]]**

F161 荒々しい言葉を言うな。言われた人々は汝に言い返すであろう。怒りを含んだ言葉は苦痛である。報復が汝の身に至るであろう。

元詩 荒々しいことばを言うな。言われた人々は汝に言い返すであろう。怒りを含んだことばは苦痛である。報復が汝の身に至るであろう。

F162 壊れた鐘のように、声を荒げないならば、汝は安らぎに達している。汝はもはや怒り罵ることがないからである。

元詩 壊れた鐘のように、声をあげないならば、汝は安らぎに達している。汝はもはや怒り罵ることがないからである。

*** (コメント) *****

OS 10 暴力 から移動。

言葉の暴力について教えている詩です。

特徴は、二人称に汝が使われています。

ひらがなを漢字に直します。

★ 詩番号 **F163 (B301, D*, O223, OS17) [[@ FS14 怒り]]**

F163 怒りを制すことによって怒りに、
善いことによって悪いことに、
わかち合うことによって物惜しみに、
真実によって虚言の人に立ち向かわなくてはならない。

元詩 怒らないことによって怒りにうち勝て。善いことによって悪いことにうち勝て。わかち合うことによって物惜しみにうち勝て。真実によって虚言の人にうち勝て。

*** (コメント変) *****

怒ることは必要ですから、その部分が整合が取れるように書き換えます。

打ち勝てるかどうかは、その時の天の運みたいなどころがあり、たかが人間が勝ちにこだわると、痛い目にあうので、「打ち勝つ」を「立ち向かう」と表現を変えます。

★ 詩番号 **F164 (新設, B303)、F165 (B304, B, O227, OS17)、F166 (B305, A, O228, OS17)、F167 (B306, A, O229, OS17)、F168 (B307, A, O230, OS17) [[@ FS14 怒り]]**

F164 アトゥラたちは、お釈迦様に帰依した三人の長老に教えを請い求めましたが、十分に納得出来る教えを示されませんでした。彼らは不満を抱いて、ついに、お釈迦様の元を訪ね、今までの経緯を述べて、教えを請いました。そのアトゥラたちにお釈迦様は、次のように語られました。

元詩 新設ですので、対応詩はありません。

F165 アトゥラよ。これは昔にも言うことであり、いまに始まることでもない。沈黙している者も非難され、多く語る者も非難され、すこしだけ語る者も非難される。世に非難されない者はいない。

元詩 書換えなし

F166 ただ誹られるだけの人、またただ褒められるだけの人は、過去にもいなかったし、未来にもいないであろう、現在にもいない。

元詩 書換えなし

F167 もしも心ある人が日に日に考察して、「この人は賢明であり、行いに欠点がなく、知慧と徳行とを身にそなえている。」とって称讃するならば、

元詩 書換えなし

F168 その人を誰が非難し得るだろうか？ かれはジャンプーナダ河から得られる黄金でつくった金貨のようなものである。神々もかれを称讃する。梵天でさえもかれを称讃する。

元詩 書換えなし

*** (コメント) *****

アトゥラとはお釈迦様の在俗信者（仏弟子；FS22, 付録4参照）です。しかし彼には500人も信者がいました。

全員揃って、レーヴァタ長老のところに行って教えを聞こうとしましたが、この長老は1人静かに瞑想を行っていたために、何も説いてくれません。

次に彼らは、サーリプッタ長老のところに行きますが、難解なアビダルマに関する議論をやたらに聞かされただけで、彼は憤ります。

そして次に、アーナンダ長老のところに行きますが、ここではほんのちよつとの教えを説かれるだけでした。

ついに祇園精舎にいらっしゃるお釈迦様のところに行き着いた時の、アトゥラの怒りは頂点だと想像してみることは簡単です。そして、アトゥラが、怒りに任せて、3名の長老のことをお釈迦様に申し立てたのでしょう。その時に、お釈迦様がアトゥラ達に説いた教えがこの4つの詩です（中村氏の注釈より）。

ついこみ上げる怒りなどの一時的な感情で、いろいろな評価・避難（・礼賛）が起こるのが、この世の中だから、ただ誹られるだけの人、また、ただ褒められるだけの人なんていないのだと教えてくださります。だから、世の中の評価・避難・礼賛を安易に信じたり、その流れに乗って「自らが無責任な批評を繰り返すことはおやめなさい。」とアトゥラに教えているのが、詩 F165, F166 なのです。

さらに、世の中で信じて良い評価もあることを説いてらっしゃいます。それは、賢い人々や真人が時間をかけて熟考した評価だとおっしゃっています。各自もこのように簡単に人を批判・礼賛せず、熟考して評価しなさいという教えが、詩 F167, F168 です。お釈迦様ご自身は、先の3長老に対して、賞賛の気持ちがおありだという旨も、ここで暗に宣言なさっています。

以上から、この詩が、怒りの章にあるのは、怒りを抱えた人に説いた詩だからだと、私は考えています。

中村氏の注釈の内容をト書きとして、詩 F164 を新設し追加しました。

★ 詩番号 **F169 (B308, B, O231, OS17)、F170 (B309, B, O232, OS17)、F171 (B310, B, O233, OS17)、F172 (B311, B, O234, OS17) [[@ FS14 怒り]]**

F169 身体がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。身体について慎んでおれ。身体による悪い行いをやめよ。

元詩 身体がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。身体について慎んでおれ。身体による悪い行いを捨てて、身体によって善行を行なえ。

F170 言葉がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。言葉について慎んでおれ。言葉による悪い行いをやめよ。

元詩 ことばがむらむらするのを、まもり落ち着けよ。ことばについて慎んでおれ。語（コトバ）による悪い行いを捨てて、語によって善行を行なえ。

F171 心がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。心について慎んでおれ。心による悪い行いをやめよ。

元詩 心がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。心について慎んでおれ。心による悪い行いを捨てて、心によって善行を行なえ。

F172 落ち着いて思慮ある人は、いかなる時でも、身を慎み、ことばを慎み、心を慎む。このように彼らは実によく己れをまもっている。

元詩 落ち着いて思慮ある人は身をつつしみ、ことばをつつしみ、心をつつしむ。このようにかれらは実によく己れをまもっている。

*** (コメント) *****

「護身悪行」、「護口悪行」、「護意悪行」の三つのことを表した詩だそうです。残念ながら漢文だと、私には細かい部分かわりません。詩中の「むらむら」という表現は怒りも表しているのですが、怒りにだけに関係するとは思えません。しかし、これらの詩は、一応、この章に置いておきます。

原始仏教では怒りは不運だと捉えているようです（詩 F186）。怒り自体は、付録5 心の汚れ（1）汚れと煩惱で考察したように、心の汚れによって下地が作られますから、本人の責任です。ただ、何か起爆剤があって怒りが噴出するというプロセスなので、大きな起爆剤が来たりしたら、やはり不運とも言えます。この不運に襲われた時には、より一層、「護身悪行」、「護口悪行」、「護意悪行」に注意を払わなければならないということを教えてもらってほしいと思います。きっと、これら一つ一つが修行なのです。

“捨てよ”は“やめよ”に書き換えます。

「善行を行え」という部分は不要ですので、削除します。

また、“つつしむ”という訳は、「悪の汚れに侵されないように自分を守る」という原義の意識として中村氏は使ったそうです。

FS15 汚れ

★ 詩番号 **F173 (B312, A, O235, OS18)**、**F174 (B313, A, O238, OS18)**、**F175 (B314, A, O239, OS18)**、**F176 (B315, A, O240, OS18)** [[@ FS 15 汚れ]]

F173 汝はいまや枯葉のようなものである。閻魔王の従卒もまた汝に近づいた。汝はいま死出の門路に立っている。しかし汝には資糧（カテ）さえも存在しない。

元詩 汝はいまや枯葉のようなものである。閻魔王の従卒もまた汝に近づいた。汝はいま死出の門路に立っている。しかし汝には資糧（カテ）さえも存在しない。

F174 だから、自己のよりどころをつくれ。すみやかに努めよ。賢明であれ。汚れをはらい、罪過がなければ、汝はもはや生と老いとに近づかないであろう。

元詩 だから、自己のよりどころをつくれ。すみやかに努めよ。賢明であれ。汚れをはらい、罪過がなければ、汝はもはや生と老いとに近づかないであろう。

F175 聡明な人は順次に少しずつ、一刹那ごとに、おのが汚れを除くべし、__鍛冶工が銀の汚れを除くように。

元詩 聡明な人は順次に少しずつ、一刹那ごとに、おのが汚れを除くべし、__鍛冶工が銀の汚れを除くように。

F176 鉄から起った錆が、それから起ったのに、鉄自身を損なうように、悪をなしたならば、自分の業が罪を犯した人を悪いところにみちびく。

元詩 鉄から起った錆が、それから起ったのに、鉄自身を損なうように、悪をなしたならば、自分の業が罪を犯した人を悪いところ（地獄）にみちびく。

*** (コメント変) *****

これらは、詩 O235(F173)、O236、O237、O238(F174)、O239(F175)、O240(F176) の連続する6詩で1セットの教えですが、中村氏は、O236、O237 の二つの詩は、漢訳には見当たらないとのことから、後代に付け加えられた詩ではないかと注釈なされています。

この2つの詩を削除することによって、教えが分かりやすくスムーズに頭に流れてくるようになります。あたかも、教えが動き出す感じ。削除理由は、第5章削除詩の詩 O236、O237 で記します。

詩 F176) 中の地獄を削除します。

★ 詩番号 **F177 (B316, A, O241, OS18)**、**F178 (B317, A, O242, OS18)**、**F179 (B318, D, O243, OS18)**

[[@ FS 15 汚れ]]

F177* 読誦しなければ聖典が汚れ、修理しなければ家屋が汚れ、身なりを怠るならば容色が汚れ、なおざりになるならば、努め励む人が汚れる。

元詩 読誦しなければ聖典が汚れ、修理しなければ家屋が汚れ、身なりを怠るならば容色が汚れ、なおざりになるならば、つとめ慎しむ人が汚れる。

F178 不品行は婦女の汚れである。もの惜しみは、恵み与える人の汚れである。悪事は、この世においても かの世においても（つねに）汚れである。

元詩 書換えなし

F179* これらの汚れより、さらに根元的な汚れが、自己を覆う無明である。修行僧らよ、努め励み、慎むことにより、もろもろの汚れを順次捨て、ついには無明が消滅するのを見とどけよ。

元詩 この汚れよりもさらに甚だしい汚れがある。無明こそ最大の汚れである。修行僧らよ。この汚れを捨てて、汚れ無き者となれ。

*** (コメント減) *****

F177; 「つとめ慎む」を「努め励む」と書き換えました。

無明 (avija) という言葉は、お釈迦様が初めて使われたのかどうか？はわかりませんが、このようなものが存在するとは、私も最近切に感じています。詩 F177, F178 のような汚れは、表に現れている汚れですが、これらを取り払うのは、普段の生活を正しく送るよう心がければ順次なくなっていく、自分の努力が物を言います。

しかし、この無明というのが、感じる事すら出来ない汚れなので、なくすのが難しいのです。そして、この無明は変化 (ヘンゲ) して行為で汚れとして表に現れるので、その度ごとに、表に現れている汚れとして自分の努力でなくし、無明や汚れを消していくことはありません。これにより、徐々に、無明が変化した汚れが表に現れなくなります。表に出やすい汚れがかなり減ってくれば、実は、無明が感じられるようになってきます。これが、日月神示のいう洗濯だと思えます。無明については、付録5-(1) - ㊦でももう少し詳しく議論しますが、考え方の悪い癖や洗脳などは、無明に分類されると私は考えています。

★ 詩番号 **F180 (B319, A, O244, OS18)**、**F181 (B320, A, O245, OS18)**、**F182 (B321, A, O246+O247, OS18)**、**F183 (B322, A, O248, OS18)** [[@ FS 15 汚れ]]

F180 恥をしらず、鳥のように厚かましく、凶々しく、人を責め、大胆で、心のよごれた者は、生活し易い。

元詩 書換えなし

F181 恥を知り、常に清きをもとめ、執着を離れ、慎み深く、真理を見て清く暮す者は、生活し難い。

元詩 書換えなし

F182** 不当に生きものを殺し、虚言 (イツワリ) を語り、世間において与えられないものを取り、他人の妻を犯す人は、この世において自分の根本を掘りくずす人である。

元詩 生きものを殺し、虚言 (イツワリ) を語り、世間において与えられないものを取り、他人の妻を犯し、穀酒・果実酒に耽溺する人は、この世において自分の根本を掘りくずす人である。

F183* 人よ。このように知れ、__慎みがないのは悪いことである。__貪り (執着) と不正とのゆえに汝が永く苦しみを受けることのないように。

元詩 人よ。このように知れ、__慎みがないのは悪いことである。__貪りと不正とのゆえに汝が永く苦しみを受けることのないように。

*** (コメント変) *****

F182 : 全くの不殺生は、人が生きていく上では、あり得ませんので、「生き物を殺し」という部分を「不当に生きものを殺し」と書き換えました。

酒・薬物乱用については、他虐であるか自虐であるかの二元論で分類すると、自虐に入ります。一方、生きものを不当に殺す事、虚言を語る事、与えられていない物を取る (すなわち盗みと同じ) 事、他人の妻を犯す事は他虐に入ります。

自虐も良くないですが、他虐に比べたらずっとましです。お釈迦様は他虐に対しては、非常に厳しく禁じましたので、この詩は他虐行動のみで揃えます。

世の中で悪い事とされていることには、その本質に他虐性と自虐性がありますから、それをよく見極めて、善悪の判断をすべきです。

F183 : 「貪り」を「貪り (執着)」としました。

★ 詩番号 **F184 (B323, D, O249, OS18)**、**F185 (B324, D, O250, OS18)** [[@ FS 15 汚れ]]

F184* 人は、信ずるところにしたがって、清き喜びにしたがって、正しく施し (布施) をなさなくてはならない。施し (布施) に見返りを求めると汚れが増す。だから、人は施し (布施) に見返りを求めてはならない。

元詩 人は、信ずるところにしたがって、きよき喜びにしたがって、ほどこしをなす。だから、他人のくれた食物や飲料に満足しない人は、昼も夜も心の安らぎを得ない。

F185* 正しくほどこされた食物や飲料に満足しない出家者は、昼も夜も心の安らぎを得ず、汚れが増す。

元詩 もし人がこの (不満の思い) を絶ち、根だやしにしたならば、かれは昼も夜も心のやすらぎを得る。

*** (コメント変) *****

原文の施しが、不明瞭ですので、私は、お布施と解釈し、全面的に書き換えました。もともとは、在家者が出家者へする施しをなす

際の、両者への注意事項を謳った詩だと思いますが、詩の曖昧さから考えて、その原型をほとんどどめてないと考えられます。しかし、中村氏の注釈では、この点については触れていません。

★ 詩番号 F186 (B325, A, O251, OS18) 、 F187 (B326, A, O252, OS18)、 F188 (B327, A, O253, OS18)

[[@ FS 15 汚れ]]

F186 愛欲に等しい火は存在しない。不利な骰（サイ）の目を投げたとしても、怒りに等しい不運は存在しない。迷いに等しい網は存在しない。執着に等しい河は存在しない。

元詩 情欲にひとしい火は存在しない。不利な骰（サイ）の目を投げたとしても、怒りにひとしい不運は存在しない。迷妄にひとしい網は存在しない。妄執にひとしい河は存在しない。

F187* 他人の過失は認識しやすく、自己の過失は認識し難い。心の汚れた人は他人の過失を糲殻のように吹き散らす、自分の過失は、隠してしまう。___狡猾な賭博師が不利な骰（サイ）の目をかくしてしまうように。

元詩 他人の過失は見やすいけれど、自己の過失は見がたい。ひとは他人の過失を糲殻のように吹き散らす。しかし自分の過失は、隠してしまう。___狡猾な賭博師が不利な骰（サイ）の目をかくしてしまうように。

F188* 他人の過失を探し求め、つねに怒りたける人は、心の汚れが増大する。その人は心の汚れの消滅から遠く隔っている。

元詩 他人の過失を探し求め、つねに怒りたける人は、煩惱の汚れが増大する。かれは煩惱の汚れの消滅から遠く隔っている。

*** (コメント) *****

F186; 「情欲」と「妄執」については、再考過程での定義から漏れますので、「付録5 心の汚れ (2) 欲」で定義した「愛欲」と「執着」に書き換えます。「迷妄」は「迷い」と書き換えます。

F187; 全ての人、詩に書かれたようであるとは限りませんので、主語を、「人」から「心の汚れた人」と書き換えます。

「見る」という言葉だと曖昧なので、「認識」(ある物事を知り、その本質・意義などを理解すること。また、そういう心の働き。goo 辞書より) とします。

F188; 煩惱と汚れは同じものなので、「煩惱の汚れ」という表現は、正確さを欠きますので、「心の汚れ」と書き換えました。詳細は、付録5を参照ください。

★ 詩番号 F189(B302, D, O226, OS17) 、 F190 (B328, D, O254, OS18)、 F191 (B329, D, O255, OS18)

[[@ FS 15 汚れ]]

F189 人が、ニルヴァーナを得ようとめざし、常に目ざめているように昼も夜も学び努めるならば、もろもろの汚れは消え失せる。

元詩 ひとつねに目ざめていて、昼も夜もつとめ学び、ニルヴァーナを得ようとめざしているならば、もろもろの汚れは消え失せる。

F190 心の汚れた人たちは汚れのあらわれを楽しむが、学び努める人たちは汚れのあらわれを楽しまない。

元詩 虚空には足跡が無く、外面的なことを気にかけるならば、〈道の人〉ではない。ひとびとは汚れのあらわれをたのしむが、修行完成者は汚れのあらわれをたのしまない。

F191 造り出された現象が常住であることは有り得ない。真理をさとした人々（ブツダ・真人）は、汚れがなくなったので、動揺することがない。

元詩 虚空には足跡が無く、外面的なことを気にかけるならば、〈道の人〉ではない。造り出された現象が常住であることは有り得ない。真理をさとした人々（ブツダ）は、動揺することがない。

*** (コメント変) *****

F189; 努め励むこと（学び努めると書き換えますが、）は人が目覚める（覚醒する）ための修行です（付録3参照）。ですから、この教えは展開が逆です。

ひらがなを漢字へ書き換えます。

“FS14 章 怒り”から移動しました。

この詩の教えと類似の教えが、FS 9 楽しみ 詩 F107 です。

F189,190; 両詩とも、“虚空には足跡が無く、外面的なことを気にかけるならば、〈道の人〉ではない”という詩自体の意味が不明瞭です。後半とのつながりもあるように思えません。さらに、両詩とも後半部分で独立できますので、後半部分だけで編成しました。

FS16 執着と欲望

愛執（アイシュウ）やこの章内で使われる愛欲というのは、仏教用語です。

しかし、中村氏の真理のことばでは、愛執と愛欲は同じ意味で使われている場合もあり、そうでない場合もあり、また、明らかに誤りではないかと思われる箇所などが多々あります。そのため、全体としてぼやけた感じが残る章になっていると感じ

ます。

愛執と欲望についての言葉の意味を調査した上で、以下のように再定義し、各詩を個別で考えていきます。

- (1) 愛欲とは、(主に異性ですが、) 他者からの愛情を求める欲
- (2) 愛執とは、様々な対象に対しての執着を愛する心、すなわち執着

また、愛欲という言葉は、「付録5 心の汚れ(2) 欲」に記した基準で、欲の一つとして扱います。

したがって、この章の詩を読み解く際に、「愛執」を、「執着」で置き換えるべきか、「愛欲」に置き換えるべきか、それとも別の言葉が良いのかを考えます。

付録5は、この章の導入のために書いた内容が中心ですので、そちらに目を通してから、以下の再考をお読み下さい。

また、章題は、愛執という曖昧な言葉ではなく、はっきりと定義できた言葉を使うため「執着と欲望」に変えました。

★ 詩番号 **F192 (B330, B, O334, OS24)** [[@ FS 16 執着と欲望]]

F192 恋(ホシイママ)のふるまいをする人には執着が蔓草(ツルクサ)のようにはびこる。林の中で猿が果実を探し求めるように、輪廻転生し、あちこちさまよう。

元詩 恋(ホシイママ)のふるまいをする人には愛執が蔓草(ツルクサ)のようにはびこる。林の中で猿が果実を探し求めるように、(この世からかの世へと)あちこちにさまよう。

*** (コメント) *****

恋(ホシイママ)のふるまいをする人とは、(言動を)慎まない(=自制しない)、怠けていて、努めない、励まない、学ばない人のことです。

愛執は執着に変えます。執着が蔓草ならば、心の汚れはそれを潤す水とか肥料といったところです。

(この世からかの世へと)は、輪廻転生していることなので、そのように表現します。

★ 詩番号 **F193 (B331, B, O335, OS24)**、**F194 (B332, B, O336, OS24)** [[@ FS 16 執着と欲望]]

F193* この世において、執着のもとであるうずく汚れのなすがままである人は、もろもろの憂いが増大する。__雨が降ったあとにはピーラナ草がはびこるように。

元詩 この世において執着のもとであるこのうずく愛欲のなすがままである人は、もろもろの憂いが増大する。__雨が降ったあとにはピーラナ草がはびこるように。

F194 この世において如何ともし難いこのうずく心の汚れを断ったならば、憂いはその人から消え失せる。__水の滴が蓮華から落ちるように。

元詩 この世において如何ともし難いこのうずく愛欲を断ったならば、憂いはその人から消え失せる。__水の滴が蓮華から落ちるように。

*** (コメント変) *****

F193; “此の世において執着(シュウジャク; 執着で良いでしょう。)のもとであるこのうずく愛欲のなすがまま”と書いてありますが、愛欲とは執着(執心)を引き起こす元であるこの詩は伝えています。

当方は、この詩を、心の汚れの中でも、執着と憂いの関係を謳った詩と捉えて、愛欲→汚れ とし、書き直しました。

付録5 心の汚れ: (1) 汚れと煩惱: ⑥ 三毒の連携と(2) 欲を参照ください。

F194; 詩 F193 と同様に、執着と憂いの関係を謳った詩と捉えます。

愛欲→心の汚れ としました。

★ 詩番号 **F195 (B351, D, O212~O216, OS16)**、**F196 (B352, D, O212~O216, OS16)** [[@ FS 16 執着と欲望]]

F195** 欲の快樂から多くの執着が生じる。欲の快樂を離れたならば、執着が減る。

F196** 心の汚れから憂いと恐れが生じる。心の汚れを離れたならば憂いと恐れは存在しない。

元詩 212; 愛するものから憂いが生じ、愛するものから恐れが生ずる、愛するものを離れたならば、憂いは存在しない。どうして恐れることがあろうか?

213; 愛情から憂いが生じ、愛情から恐れが生ずる。愛情を離れたならば憂いが存在しない。どうして恐れることがあろうか?

214; 快樂から憂いが生じ、快樂から恐れが生じる。快樂を離れたならば憂いが存在しない。どうして恐れることがあろうか?

215; 欲情から憂いが生じ、欲情から恐れが生じる。欲情を離れたならば、憂いは存しない。どうして恐れることがあろうか?

216; 妄執から憂いが生じ、妄執から恐れが生じる。妄執を離れたならば、憂いは存しない。どうして恐れることがあろうか?

*** (コメント変) *****

OS 16 愛するものから移動。

第一に、これらの5詩は、「○から憂いが生じ、○から恐れが生じる。○を離れたならば憂いが存在しない。どうして恐れることがあろうか?」という詩形が共通です。

○の部分は、愛するもの、愛情、快樂、情欲、妄執です。「愛するもの、愛情、快樂、情欲」は執着する対象です。「妄執」は、執

着です。

第二に、「憂いが存在しない。どうして恐れることがあろうか？」は、この関係が不明瞭なので、「どうして恐れることがあろうか？」は削除します。その代わりに、「○を離れたならば憂いと恐れは存在しない。」としましょう。

以上の結果をまとめると、基本詩文形；

「○から憂いが生じ、○から恐れが生じる。○を離れたならば憂いと恐れは存在しない。」
を使用します。

5つの詩が並んでいますが、

“執着とそれの対象の欲に的を絞った詩”（「付録5 心の汚れ, (3) 執着と欲望」に基づく）

“心の汚れと憂いと恐れについて言及した詩”（「付録5 心の汚れ, (1) 汚れと煩惱」に基づく）

の2詩に書き換えました。

ちなみに、憂いと恐れは根本煩惱（六汚れ）として分類される訳ではなく、随煩惱のカテゴリーになるわけです。しかし、これらは、私たち人間にとっては、大きな心の負荷ですね。

これらの詩は、大変、強い思考ループがかかった詩だったと思います。解散した章「愛するもの」にあったのも、後からの改ざんで編入されたとも考えられるのですが、詩形がしっかりしている部分もあったので、残しました。

お釈迦様が、定義のはっきりしない曖昧な言葉を並べて教えをお説きになることはありえないです。

これら5詩に関して、中村氏の注釈は、唯一、執着に関する詩 O216 で、音韻についてのみ言及しています。

★ 詩番号 **F197 (B333, D*, O337, OS24)** [[@ FS 16 執着と欲望]]

F197** さあ、皆さんに告げます。__ここに集まった皆さんに幸あれ。執着の根（心の汚れ）を掘れ。

（香しい）ウシーラ根 [正しい教え] を求める人が（雑草の）ピーナラ草 [悪魔の教え] を掘るように、また、葦が激流に砕かれるように、魔にしばしも砕かれてはならない。

元詩 さあ、みなさんに告げます。___ここに集まったみなさんに幸あれ。欲望の根を掘れ。__（香しい）ウシーラ根を求める人がピーナラ草を掘るように、葦が激流に砕かれるように、魔にしばし砕かれてはならない。

（コメント変）**

欲望は、我々人間にはどうにもできないという立場なので、“欲望の根を掘れ”ではなく、「執着の根を掘れ」と書き換えます。

また、中間の詩は、ブログでは削除しましたが、「ウシーラ根」と「ピーナラ草」について再度調べた結果（下記）、ここでは復活させることにします。

「ウシーラ根」は、薬草や香油の原料で、古くからインドで栽培されている植物の根っこ（ここから香油を絞るらしいです。）なので、正しい教えのことを指しているようです。ピーナラ草は、どうやら、ウシーラによく似ているようですが、掘り出して絞ってみても香油は出ないものようです。つまり、ピーナラ草は、正しい教えに偽せた悪魔の教えのようです（なるほどです…。大概の良人がハマってしまうパターンです。）。

したがって、正しい教えを探求しようとしても、常に執着の根を掘る努力をしないと、ウシーラ根（正しい仏法）ではなく、ピーナラ草の根っこ（悪魔の教え）を掘ってしまうことを教えています。

★ 詩番号 **F198 (B334, B, O338, OS24)** [[@ FS 16 執着と欲望]]

F198 たとえ樹を切っても、もしも頑強な根を断たなければ、樹が再び成長するように、執着の根源となる潜勢力（心の汚れ）を滅ぼさなければ、執着による苦しみはくりかえし現われ出る。

元詩 たとえ樹を切っても、もしも頑強な根を断たなければ、樹が再び成長するように、妄執（渴愛）の根源となる潜勢力をほろぼさないならば、この苦しみはくりかえし現われ出る。

（コメント変）**

妄執（渴愛）は、度合いの高い執着なのでしょうが？ここでは、ただの執着と置き換えます。

潜勢力は、心の汚れと解釈しました。

「この苦しみ」とは、執着しても得られないという苦しみでしょう。

★ 詩番号 **F199 (B335, D, O339, OS24)** [[@ FS 16 執着と欲望]]

F199** この世の中には、快いものに向かって流れる激流があり、その流れは、執着をいなく人を漂わし去る。__その流れとは、まさしく在住する様々な欲である。

元詩 快いものに向かって流れる三十六の激流があれば、その波浪は、悪しき見解をいなく人を漂わし去る。___その波浪とは貪欲にねざした想いである。

（コメント変）**

三十六の激流は、諸説あり、これといって決め手となる説がないので、記述から外します。

この詩の波浪とは、この激流によってできる流れです。また、これを私たち人間が止める事はできないとするのが、本書の立場でした。したがって、「波浪が想い」ではなく、「その流れは、まさしく様々な欲である。」という内容に書き換えます。

★ 詩番号 **F200 (B336, D, O341, OS24)**、**F201 (B337, D, O340, OS24)** [[@ FS 16 執着と欲望]]

F200 人の快樂を求める執着は、はびこるもので、また心の汚れで潤される。実に人々は歡樂にふけり、楽しみをもとめて、生れと老衰を受ける。

元詩 人の快樂ははびこるもので、また愛執で潤される。実に人々は歡樂にふけり、楽しみをもとめて、生れと老衰を受ける。

F201 (愛欲の) 流れは至るところに流れる。(欲情の) 蔓草は芽を生じつつある。その蔓草が生じたのを見たならば、知慧によってその根を断ち切れ。

元詩 流れ(欲望)は至るところに流れる。蔓草(執着)は芽を生じつつある。その蔓草が生じたのを見たならば、知慧によってその根を断ち切れ。

*** (コメント) *****

F200; はびこりやすいものは快樂を求める執着とします。また、執着を潤すものは心の汚れとしました。これにしたがって、詩を書き換えます。

F201; “知慧によって”とは、努めること、励むこと、学ぶこと、慎むこと、禪定することなどなど総合的に捉えるべきです。これは、真人に近いくらいの靈格の高い人たちに対する教えだと思います。

★ 詩番号 **F202 (B338, B, O342+O343, OS24)** [[@ FS 16 執着と欲望]]

F202 欲望への執着に駆り立てられた人々は、わなにかかった兎のように、ばたばたする。欲望になずみ、欲望の激流に束縛され、永い間 繰返し執着しては得られない苦悩を受ける。それ故に修行僧は、自己の執着を除き去れ。

元詩 O342: 愛欲に駆り立てられた人々は、わなにかかった兎のように、ばたばたする。束縛の絆にしばられ愛著になずみ、永いあいだくりかえし苦悩を受ける。

O343: 愛欲に駆り立てられた人々は、わなにかかった兎のように、ばたばたする。それ故に修行僧は、自己の愛欲を除き去れ。

*** (コメント) *****

二つの詩を一つに合体します。

前提に合うように内容を判断し、言葉を定義したものに置き換え、

愛欲→欲望への執着、

愛著になずみ→欲望になずみ

束縛の絆にしばられ→欲望の激流に束縛され

と書き直します。

★ 詩番号 **F203 (B339, B, O344, OS24)** [[@ FS 16 執着と欲望]]

F203 欲望の林から出ていながら、また欲望の林に身をゆだね、欲望の林から免れていながら、また欲望の林に向かって走る。その人を見よ! 束縛から脱しているのに、また束縛に向かって走る。

元詩 愛欲の林から出ていながら、また愛欲の林に身をゆだね、愛欲の林から免れていながら、また愛欲の林に向って走る。その人を見よ! 束縛から脱しているのに、また束縛に向って走る。

*** (コメント) *****

愛欲を欲望に置き換えます。欲望を、激流ではなく林に喩えて説いてらっしゃいます。狂乱した修行僧のことを説明してらっしゃるのではないかと思います。

★ 詩番号 **F204 (B340, D, O345+O346, OS24)** [[@ FS 16 執着と欲望]]

F204** 鉄や木材や麻紐でつくられた枷を、ブツダや真人は堅固な縛とは呼ばない。財や宝石や耳環・腕輪をやたらに欲しがること、むやみに家族に惹かれること、__それが堅固な縛である、と彼らは呼ぶ。それは低く垂れ、緩く見えるけれども、脱れ難い。賢い人々は、これらへの執着を離れなくてはならない。

元詩 鉄や木材や麻紐でつくられた枷を、思慮ある人々は堅固な縛とは呼ばない。

宝石や耳環・腕輪をやたらに欲しがること、妻や子にひかれること、_____それが堅固な縛である、と思慮ある人々は呼ぶ。それは低く垂れ、緩く見えるけれども、脱れ難い。

かれらはこれをさえも断ち切って、顧みること無く、欲楽をすてて、遍歴修行する。

*** (コメント変) *****

家族の構成員は、それぞれ、自分の家庭を維持し守るための勤めは遂行しなくてはなりません。しかし、対外的な場合、むやみやたらに家族を中心に考えると、正しい判断ができず、悪魔に魅入られることを注意していると、考えました。

これら実態を捨てることを推奨しているわけではなく、これらへの執着を離れることが大切であることを表現しました。

★ 詩番号 **F205 (B341, B, O347, OS24)** [[@ FS 16 執着と欲望]]

F205 欲望になずんでいる人々は、自らの執着により、激流に押し流される。__蜘蛛がみずから作った網にしたがって行くようなものである。思慮ある人々はこれを断ち切って、顧みることなく、すべての執着を捨てて、歩んで行く。

元詩 愛欲になずんでいる人々は、激流に押し流される、__蜘蛛がみずから作った網にしたがって行くようなものである。思慮ある人々はこれをも断ち切って、顧みることなく、すべての苦悩をすてて、歩んで行く。

*** (コメント変) *****

愛欲を欲望に変えます。

欲望になずむとは、執着が多いことと考えます。

“苦悩をすてて”は、ブログでは、“汚れを捨てて”としましたが、最終的に“執着を捨てて”としました。

★ 詩番号 **F206 (B342, D, O356~O359, OS24)** [[@ FS 16 執着と欲望]]

F206 田畑は雑草によって害(ソコナ)われ、この世の人々は、執着、怒り、誤った見解(迷妄)、疑惑、慢心によって、害(ソコナ)われる。

元詩 O356; 田畑は雑草によって害われ、この世は人々は愛欲によって害われる。それ故に愛欲を離れた人々に供養して与えるならば、大いなる果報を受ける。

O357; 田畑は雑草によって害われ、この世は人々は怒りによって害われる。これ故に怒りを離れた人々に供養して与えるならば、大いなる果報を受ける。

O358; 田畑は雑草によって害われ、この世は人々は迷妄によって害われる。それ故に迷妄を離れた人々に供養して与えるならば、大いなる果報を受ける。

O359; 田畑は雑草によって害われ、この世は人々は欲求によって害われる。それ故に欲求を離れた人々に供養して与えるならば、大いなる果報を受ける。

*** (コメント変) *****

FS15 汚れ 詩 F184 で見返りを求める施し(供養)は禁止されましたので、全ての詩の後半部分は削除します。

詩 O356 中の「愛欲」は執着と置き換えることにします。さらに、O359 の欲求は執着ですから、執着に集約します。さらに六汚れ(除無明)の、怒り、悪見、疑惑、慢心を足します。

書き出す順番は、執着、怒り、悪見、疑惑、慢心とします。

★ 詩番号 **F207 (B343, D, O349, OS24)**、**F208 (B344, B, O350, OS24)** [[@ FS 16 執着と欲望]]

F207 あれこれ考えて心が乱れ、汚れにより心がはげしくうづくのに、心の汚れ(不浄)を浄らかだと見なす人には、執着がますます増大する。この人は実に束縛の絆を堅固たらしめる。

元詩 あれこれ考えて心が乱れ、愛欲がはげしくうづくのに、愛欲を浄らかだと見なす人には、愛執がますます増大する。この人は実に束縛の絆を堅固たらしめる。

F208 あれこれの考えをしずめるのを楽しみ、常に心身の汚れ(不浄)を観察して心を治める人は、実に悪魔の束縛の絆を取り除き、断ち切るであろう。

元詩 あれこれの考えをしずめるのを楽しみ、つねに心にかけて、(身体などを)不浄であると観じて修する人は、実に悪魔の束縛の絆をとりのぞき、断ち切るであろう。

*** (コメント) *****

F207; 愛欲がはげしくうづく→汚れにより心がうづく、愛執→執着と変更。

F208; 不浄という言葉は、よく使うのですが、このテキストで出てくる汚れと同じだと思います。「修する」、「観じて」に関しては、わかりやすいように現代語に意識しました。

★ 詩番号 **F209 (B345, B, O355, OS24)** [[@ FS 16 執着と欲望]]

F209* 激流の中で、解脱(彼岸、ニルヴァーナ)を求める賢い人は享楽に害(ソコナ)われることがない。愚かな人は享楽のために害(ソコナ)われるが、享楽を執着するがゆえに、愚かな人は他人を害(ソコナ)うように自分も害(ソコナ)う。

元詩 彼岸にわたることを求める人々は享楽に害(ソコナ)われることがない。愚人は享楽のために害(ソコナ)われるが、享楽を妄執するがゆえに、愚者は他人を害(ソコナ)うように自分も害(ソコナ)う。

*** (コメント加) *****

人々→賢い人

妄執→執着

愚者、愚人→愚かな人

彼岸に関しては、意味を付け加え、文脈に合うように言葉を付け足しました。

★ 詩番号 **F210 (B354, A, O218, OS16)** [[@ FS 16 執着と欲望]]

F210* 言葉で説き得ないもの(ニルヴァーナ)に達しようとする志を起し、意(オモイ)は満たされ、欲の激流に心の礙(サマタ)げられることのない人は、(流れを上る者)と呼ばれる。

元詩 ことばで説き得ないもの(ニルヴァーナ)に達しようとする志を起し、意(オモイ)はみたされ、諸の愛欲に心の礙(サマタ)げられることのない人は、(流れを上る者)と呼ばれる。

ない人は、(流れを上る者) とよばれる。

*** (コメント変) *****

OS16 愛するもの から移動。

「諸の愛欲に」を「欲の激流に」と書き換えました。

★ 詩番号 **F211 (B346, A, O354, OS24)** [[@ FS 16 執着と欲望]]

F211 教えを説いて与えることはすべての贈与にまさり、教えの妙味はすべての味にまさり、教えを受ける楽しみはすべての楽しみにまさる。執着を減ぼすことは全ての苦しみにうち勝つ。

元詩 教えを説いて与えることはすべての贈与にまさり、教えの妙味はすべての味にまさり、教えを受ける楽しみはすべての楽しみにまさる。妄執をほろぼすことはすべての苦しみにうち勝つ。

*** (コメント変) *****

読みやすくするために、ひらがなを漢字に変えました。

FS17 悪いところ

“地獄”という言葉を使うことを、日月神示により禁じられていますので、“地獄”は、“悪いところ”と書き換えます。

したがって、この章のタイトルは、“地獄”から“悪いところ”になり、文中もこの原則に従います。

この章は、詩 O306～O319 の 14 詩からなりますが、詩 O307 はバラモンに関する詩なので FS20 バラモンへ、詩 O308 (F318) , 311 (F319) , 313 (F320) は修行僧に関する詩なので FS18 修行僧へ移動します。移動した詩は、移動先で再考を行います。

従って、詩 O306, 309, 310, 312, 314～319 の順番で、最後に、OS 9 悪 から移動した詩 F222 (O126) を編入します。

地獄というと、どうしても死後の世界だと認識してしまいがちですが、そうではなく、現世から良いところから悪いところにかけて分別するふるいは存在すると思うのです。

そう感じた理由は、私が仕事をしている時、職務上、不正や不適切なことを行っている人たちと自分は全く別世界の人間だと思っていたからです。これは、同じ職場にいても、存在する場所が違うと感じ取った時なのでしょう。

私が見ていて、不正に手を出している彼らはいつも苦しそうです。もっと言ってしまえば、窒息しているような感じです。しかし、本人たちは、精一杯やっている自分に自己陶醉していて、素晴らしいなんて感じているようにも見えます。

逆に、行いの正しい人たちや性質の良い人たちは、苦しい状況で、実際に苦しくても、なぜか悲壮感が少ないと感じるのです。

このふるいによる分別が貧富の差や社会的ステイタスと、相関があるかと言われたら、もちろん答えは“Yes”なのです。この世の中は極めて正確な行いによる分別があることに驚いています。ただ、例外というものが必ずあって、例外(悪魔に魅入られた人たち)が目立ってしまい、この分別がうまく働いていないように感じてしまうこともあります。概ね、若い頃は例外が多いと感じています。 霊界(あの世)では、霊格が別の人たちとの交流はほとんどないようですが、この3次元は、一緒にいながら違うと言いつつも、やはり霊界に比べたらはるかに交流がありますので、その分、各々にストレスがかかりますが、他の霊格の存在との交流こそが、実は3次元に生まれてきて行う修行の主目的なのだと思います。

★ 詩番号 **F212 (B357, A, O306, OS22)** [[@ FS 17 悪いところ]]

F212 偽りを語る人、あるいは自分でしておきながら「私はしませんでした。」と言う人、—この両者は死後には等しくなる、—来世では行ないの下劣な業を持った人々なのであるから。

元詩 いつわりを語る人、あるいは自分でしておきながら「わたしはしませんでした」と言う人、—この両者は死後にはひとしくなる、—来世では行ないの下劣な業をもった人々なのであるから。

*** (コメント) *****

ひらがなが多く、読みにくいので、漢字に変換します。

★ 詩番号 **F213 (B358, A, O309, OS22)**、**F214 (B359, A, O310, OS22)** [[@ FS 17 悪いところ]]

F213 放逸で他人の妻になれ近づく者は、四つの事がらに遭遇する。—すなわち、禍をまねき、臥して楽しからず、第三に非難を受け、第四に悪しきところに墜ちる。

元詩 放逸で他人の妻になれ近づく者は、四つの事がらに遭遇する。—すなわち、禍をまねき、臥して楽しからず、第三に非難を受け、第四に地獄に墜ちる。

F214 禍をまねき、悪しきところに墜ち、相ともにおびえた男女の愉楽は少なく、王は重罰を課する。それ故に人は他人の妻になれ近づくな。

元詩 禍をまねき、悪しきところ(地獄)に墜ち、相ともにおびえた男女の愉楽はすくなく、王は重罰を課する。それ故にひとは他人の妻になれ近づくな。

*** (コメント) *****

F213 ; 地獄→悪しきところ とします。

F214 ; (地獄) を削除。「すくなく」を「少なく」と漢字表記します。

★ 詩番号 **F215 (B360, A, O312, OS22) 、 F216 (B361, A, O314, OS22)** [[@ FS 17 悪いところ]]

F215 その行ないがだらしく、慎みが乱れ、清らかな行ないなるものもあやしげであるならば、大きな果報はやって来ない。

元詩 その行ないがだらしく、身のいましめが乱れ、清らかな行ないなるものもあやしげであるならば、大きな果報はやって来ない。

F216 悪いことをするよりは、何もしない方がよい。悪いことをすれば、後で悔いる。単に何かの行為をするよりは、善いことをする方がよい。なし終わって、後で悔いがない。

元詩 悪いことをするよりは、何もしないほうがよい。悪いことをすれば、後で悔いる。単に何かの行為をするよりは、善いことをするほうがよい。なしおわって、後で悔いがない。

*** (コメント減) *****

F215 ; 「身のいましめ」を、「慎み」と書き換えます。

F216 ; ひらがなが多く、読みにくいので、漢字に変換します。

★ 詩番号 **F217 (B362, A, O315, OS22)** [[@ FS 17 悪いところ]]

F217 辺境にある、城壁に囲まれた都市が内も外も守られているように、そのように自己を守れ。瞬時も空しく過ごすな。時を空しく過した人々は悪いところに墜ちて、苦しみ悩む。

元詩 辺境にある、城壁に囲まれた都市が内も外も守られているように、そのように自己を守れ。瞬時も空しく過ごすな。時を空しく過した人々は地獄に墜ちて、苦しみ悩む。

*** (コメント変) *****

地獄→悪いところ とします。

★ 詩番号 **F218 (B363, A, O316, OS22) 、 F219 (B364, A, O317, OS22)、 F220 (B365, A, O318, OS22)、 F221 (B366, A, O319, OS22)** [[@ FS 17 悪いところ]]

F218 恥じなくてよいことを恥じ、恥ずべきことを恥じない人々は、邪な見解をいだいて、悪いところにおもむく。

元詩 恥じなくてよいことを恥じ、恥ずべきことを恥じない人々は、邪な見解をいだいて、悪いところ (=地獄) におもむく。

F219 恐れなくてもよいことに恐れをいだし、恐れねばならぬことに恐れをいだかない人々は、邪な見解をいだいて、悪いところにおもむく。

元詩 恐れなくてもよいことに恐れをいだし、恐れねばならぬことに恐れをいだかない人々は、邪な見解をいだいて、悪いところ (=地獄) におもむく。

F220 避けねばならぬことを避けなくてもよいと思ひ、避けてはならぬ (=必ず為さねばならぬ) ことを避けてもよいと考える人々は、邪な見解をいだいて、悪いところにおもむく。

元詩 避けねばならぬことを避けなくてもよいと思ひ、避けてはならぬ (=必ず為さねばならぬ) ことを避けてもよいと考える人々は、邪な見解をいだいて、悪いところ (=地獄) におもむく。

F221 遠ざけるべきこと (=罪) を遠ざけるべきであると知り、遠ざけてはならぬ (=必ず為さねばならぬ) ことを遠ざけてはならぬと考える人々は、正しい見解をいだいて、善いところにおもむく。

元詩 遠ざけるべきこと (=罪) を遠ざけるべきであると知り、遠ざけてはならぬ (=必ず為さねばならぬ) ことを遠ざけてはならぬと考える人々は、正しい見解をいだいて、善いところ (=天上) におもむく。

*** (コメント) *****

F218~F220 ; (=地獄) を削除

F221 ; (=天上) を削除

★ 詩番号 **F222 (B286, D, O126, OS9)** [[@ FS 17 悪いところ]]

F222* 汚れの無い人々は全き安らぎに入り輪廻を離れ、それ以外の人々は輪廻にとどまり、行いにより死後に赴く所が決まる。

元詩 或る人々は [人の] 胎に宿り、悪をなした者どもは地獄に墜ち、行ないのよい人々は天におもむき、汚れの無い人々は全き安らぎに入る。

*** (コメント変) *****

お釈迦様も、地獄という言葉をお使いになったとは、考えにくいと私は思っています。日月神示が示すように、それぞれの魂の格によって、同種・同レベルが集まる場所が死後の世界であるならば、居心地が良いはずで、その魂は地獄とは感じないとなると、地

獄という定義すら成り立たなくなってしまうのです。なんだか天才バカボンのパパのようですが、正しいとは感じます（証明なんてできませんが。）。

この書き換え作業では、地獄という言葉を定義しない、あの世はどの魂にとっても天国という立場です。

（解散）暴力（OS 10 章）

この章（OS 10）は、ブログでは、詩 O129～O134 の 6 詩の残存でしたが、今回の考察の結果、解散させることにしました。武力と暴力についての議論を付録 6 で行います。参考になさってください。この章の構成各詩の割り振りを下記に示しました。

- O 129 → 削除 (B289)
- O 130 → 削除 (B290)
- O 131 → 削除 (B291)
- O 132 → 削除 (B292)
- O 133 → FS14 怒りの詩 F160 (O222) の後に編入
- O 134 → O 133 に続いて、FS14 怒りに編入
- O 135 → FS 4 老いること の詩 F036 として編入
- O 136 → FS18 愚かな人の詩 O69 の後に編入
- O 137 → 削除
- O 140 → 削除
- O 141 → FS19 修行僧の文頭に編入
- O 142 → O 141 に続いて、FS19 修行僧に編入
- O 143 → O143 と O144 を合体させて
- O 144 → FS19 賢い人に編入
- O 145 → 削除

なお、残存した詩は、編入された章で考察を行います。

削除された詩は、第 5 部 削除した詩で考察を行います。

（解散）愛するもの（OS 16 章）

この章は、もともと詩の数が 12 本と少なく、内容に統一感が無いので、章自体を解散し、各詩は内容によって、他の章に振り分けします。

この章の構成各詩の割り振りを下記に示しました。

- O 209 → FS13 悪 に編入し、詩 F147 とする。
- O 210 → 削除
- O 211 → 削除
- O 212 ～ 216 → 二本の詩 B351, 352 にまとめ、FS16 執着と欲望の詩 O359 の後に編入
- O 217 → FS10 様々なこと に編入し、詩 F117 とする。
- O 218 → FS16 執着と欲望の詩 O355 の後に編入
- O 219 → FS 9 楽しみ に編入し、詩 F102 とする。
- O 220 → FS 9 楽しみ に編入し、詩 F103 とする。

なお、残存した詩は、編入された章で考察を行います。

削除された詩は、第 5 部 削除した詩で考察を行います。

第 3 節 さまざまな人

この節は、まず「付録 4 人間の分類」を参照して読んでください。

前半の FS17 ～ FS19 は、仏道による全ての人間を霊格・精神性により分類する「真人-賢い人-愚かな人」分類法の各カテゴリーの性質や目標が説明されています。全ての存在の目標は真人になることですので、この節の前半のクライマックスは FS19 真人です。

この節の中盤 FS20, 21 は在家か出家かのいかんを問わず、道に従って生きるか否かの分類で書かれたものです。お釈迦様は、在家で正しく世の中に身を処していることをが最も大切なのだとお考えになったと、私は考えるに至りました。そのため、このお釈迦様の教えのもとに実践する（在家か出家に関わらない）人たちの集団を仏弟子として、FS21 仏弟子という章を新設しました。

FS22, 23 では、出家者という立場を有する人たちへの戒めを書き出しています。詩の内容は、戒めや目標なのですが、かなり厳しいことが列挙されます。これらを守れるのであれば、出家を経た方がブッダへの到達は早いと、私は考えています。また、在家であっても、ブッダへ進む最終段階では、これらの戒めが必要になるであろうとも考えています。ただ、仏道の最

終目標がブツダであるため、この節のクライマックスはFS25 ブツダの章です。

この節を通して、本来の仏道の目的が大多数をしめる在家の人たちを正しく教え導くといういたってシンプルで常識的なものであることをつかんでいただけたら幸いです。

FS18 愚かな人

★詩番号 F223～F232 各詩とも元詩通り。[[@ FS 18 愚かな人]]

F223 (B051, A, O060, OS5) 眠れない人には夜は長く、疲れた人には一里の道は遠い。正しい真理を知らない愚かな者どもには、生死の道のりは長い。

F224 (B052, A, O061, OS5) 旅に出て、もしも自分よりもすぐれた者か、または自分にひとしい者に出会わなかったら、むしろきっぱりと独りで行け。愚かな者を道伴（づ）れにしてはならぬ。

F225 (B053, A, O062, OS5) 「わたしたちには子がある。わたしには財がある。」と思って愚かな者は悩む。
しかしすでに自己が自分のものではない。
ましてどうして子が自分のものであろうか。どうして財が自分のものであろうか。

F226 (B054, A, O063, OS5) もしも愚者がみずから愚であると考えれば、すなわち賢者である。愚者でありながら、しかもみずから賢者だと思ふ者こそ、「愚者」だと言われる。

F227 (B055, A, O064, OS5) 愚かな者は生涯賢者に仕えても、真理を知ることが無い。匙が汁の味を知ることができないように。

F228 (B056, A, O065, OS5) 聡明な人は瞬時（またたき）のあいだ賢者に仕えても、ただちに真理を知る。_____舌が汁の味をただちに知るように。

F229 (B057, A, O066, OS5) あさはかな愚人どもは、自己に対して仇敵（かたき）に対するようにふるまう。悪い行いをして、苦い果実（このみ）をむすぶ。

F230 (B058, A, O067, OS5) もしも或る行為をした後に、それを後悔して、顔に涙を流して泣きながら、その報いを受けるならば、その行為をしたことは善くない。

F231 (B059, A, O068, OS5) もしも或る行為をしたのちに、それを後悔しないで、嬉しく喜んで、その報いを受けるならば、その行為をしたことは善い。

F232 (B060, A, O069, OS5) 愚かな者は、悪いことを行っても、その報いの現れないあいだは、それを蜜のように思いなす。しかし、その罪の報いの現れたときには、苦悩を受ける。

*** (コメント減) *****
なし

★詩番号 F233 (B296, A, O136, OS10) [[@ FS 18 愚かな人]]

F233* しかし、愚かな者は、悪い行ないをしておきながら、気がつかない。しかし浅はかな愚者は自分自身のしたことによって悩まされる。__あたかも、火がこの愚者を焼きこがすように。

元詩 しかし愚かな者は、悪い行ないをしておきながら、気がつかない。浅はかな愚者は自分自身のしたことによって悩まされる。__火に焼きこがされた人のように。

*** (コメント減) *****
OS10 暴力から移動。
比喩部分は意味が通じるようにします。

★詩番号 F234 (B061, B, O070, OS5) [[@ FS 18 愚かな人]]

F234* 愚かなものは、真理をわきまえた人が得る功德と同じように、断食行により功德が得られると考える。しかし、愚者の行う断食行に功德はない。

元詩 愚かなものは、たとい毎月（苦行者の風習にならって一月に一度だけ）茅草の端につけて（極く少量の）食べ物を摂るようなことをしても、（その功德は）真理をわきまえた人々の16分の1にも及ばない。

*** (コメント) *****

日月神示の日月の巻 第03帖 (176) にも、下記のように修行についての教えがあります。

此の神示 声立てて読みて下されと申してあるがな。臣民ばかりに聞かすのでないぞ。守護神殿、神々様にも聞かすので、声出して読みてさへおればよくなるのぞぞよ。じゃと申して、仕事休むでないぞ。仕事は行であるから務め務めた上にも精出して呉れよ。それがまことの行であるぞ。滝に打たれ断食する様な行は幽界（がいこく）の行ぞ。神の国のお土踏み、神国の光いきして、神国から生れる食物（たべもの）頂きて、神国のおん仕事してゐる臣民には行は要らぬのぞぞ。此の事よく心得よ。十月十九日、一二。

他利的でない苦行のご利益を盲目的に信じ、こだわっている人々を見て、お釈迦様は愚かな者と断じてらっしゃるのでしょう。ですから、愚者の断食行には功德がなく、真理をわきまえた人の絶大な功德とは比べられないのです。

★ 詩番号 **F235 (B062, A, O071, OS5)**、**F236 (B063, A, O072, OS5)**、**F237 (B065, A, O074, OS5)**、**F238 (B064, A, O073, OS5)** [[@ FS 18 愚かな人]]

F235 悪事をして、その業は、しぼり立ての牛乳のように、すぐに固まることはない。(徐々に固まって熟する) その業は、灰に覆われた火のように、(徐々に) 燃えて悩ましながら、愚者につきまとう。

元詩 書換えなし

F236 愚かな者に念慮(オモイ)が生じて、ついにその人には不利なことになってしまう。その念慮はその人の好運(シアワセ)を滅ぼし、その人の頭を打ち砕く。

元詩 愚かな者に念慮(オモイ)が生じて、ついにかれには不利なことになってしまう。その念慮は彼の好運(シアワセ)を滅ぼし、かれの頭を打ち砕く。

F237 「これは、わたしのしたことである。在家の人々も出家の人々も、ともにこのことを知れよ。およそなすべきこととなすべからざることについては、私の意に従え」 ____愚かな者はこのように思う。こうして欲求と高慢(たかぶり)とがたかまる。

元詩 書換えなし

F238 愚かなバラモンや修行僧は、実にそぐわぬ虚しい尊敬を得ようと願うであろう。修行僧らのあいだでは上位を得ようと、僧房にあっては権勢を得ようと、他人の家に行っては供養を得ようと願うであろう。

元詩 書換えなし

*** (コメント) *****

F236 ; 「かれ」を「その人」としました。F238 ; 愚かな出家者のことを表しています。特に愚かなバラモンの行儀の悪い部分を明らかに謳った詩です。ですから、このことがはっきりわかるように主語を「バラモンや修行僧」と書き換えます。

光の守護下の人間であれば、カルマの清算は割合にすぐにやってきます。そんなのいらぬよと悪態をつきたくなくらいです(笑)。しかし、悪魔の守護下になると、カルマの清算が来ないのです。だから、悪人は交通違反しても捕まらないのです。しかし、溜まる一方のカルマで、自分が壊れていく危険をはらみます。

日月神示では、この世の人々や様々な団体に溜まった悪いカルマを「借錢」と言い表しているようです。これが溜まってしまっても二進も三進もいかないのが、現在のこの世の中なんだと思います。

FS19 賢い人

この章は順番が大幅に乱されています。ブログでの取り組み時も、当時はベストを尽くしたのですが、不完全でしたので、詩の並び順、構成も大幅に修正をしました。

★ 詩番号 **F239 (B071, B, O080, OS6)** [[@ FS 19 賢い人]]

F239* 水道をつくる人は水をみちびき、矢をつくる人は矢を矯め、大工は木材を矯める様に、賢者は自己を整え、心を治めよ。

元詩 水道をつくる人は水をみちびき、矢をつくる人は矢を矯め、大工は木材を矯める様に、賢者は自己を整えよ。

*** (コメント変) *****

「自己を整えよ」の部分、付録2のもとで、補足し「自己を整え、心を治めよ。」とします。

★ 詩番号 **F240 (B104, D, O380, OS25)** [[@ FS 19 賢い人]]

F240* 実に魂(自己)は心(自分)の主(あるじ)であり、帰趨(よるべ)である。故に魂により心を治めよ。__商人が良い馬を調教するように。

元詩 実に自己は自分の主(あるじ)である。自己は自分の帰趨(よるべ)である。故に自分をととのえよ。__商人が良い馬を調教するように。

*** (コメント変) *****

自己、自分の定義をしないままだと、よくわからないので、「付録1 魂と脳と守護霊最終版」で、これらを定義しました。

魂は、守護神と繋がっている、心(自分、意識)をそちらに向ければ、心が必要とする様々な回答が得られます。ただし、この過程で心の汚れがひどいと、正しい回答が得られなくなります。

「付録2 「心を治める」と「自己(魂)を整える」についての考察」に従って、この詩を書き直しました。

★ 詩番号 F241 (B083, D, O091, OS7) [[@ FS 19 賢い人]]

F241* 心をとどめている人々は努めはげむ。かれらは執着を遠ざける。彼らは、あの執着、この執着を捨てる。

元詩 ころをとどめている人々は努めはげむ。かれらは住居を楽しまない。白鳥が立ち去るように、かれらはあの家、この家を捨てる。

*** (コメント変) *****

中村氏により、住居＝執著であるという注釈がなされています。私は、出家礼賛は、人を正しい方向には導かないと考えていますので、ストレートに住居や家を執着と置き換え、文章を整えます。

★ 詩番号 F242 (B067, A, O076, OS6) [[@ FS 19 賢い人]]

F242 (おのが) 罪過 (ツミトガ) を指し示し過ちを告げてくれる聡明な人に会ったならば、その賢い人につき従え__隠してある財宝のありかを告げてくれる人につき従うように。そのような人につき従うならば、善いことがあり、悪いことは無い。

元詩 書き換えなし

*** (コメント) *****

なし

★ 詩番号 F243 (B069, A, O078, OS6) [[@ FS 19 賢い人]]

F243 悪い友と交わるな。卑しい人と交わるな。善い友と交われ。尊い人と交われ。

元詩 書き換えなし

*** (コメント減) *****

なし

★ 詩番号 F244 (B074, B, O083, OS6) [[@ FS 19 賢い人]]

F244* 高尚な人々は、どこにいても、執着することが無い。快楽を欲してしゃべることが無い。楽しいことに遭 (あ) っても、賢者は動ずる色がない。

元詩 書き換えなし

*** (コメント変) *****

元詩に戻しました。

★ 詩番号 F245 (B072, B, O081, OS6) [[@ FS 19 賢い人]]

F245* 一つの岩の塊りが風に揺るがないように、賢者は非難と賞賛とに動じない。

元詩 書き換えなし

*** (コメント変) *****

元詩に戻しました。

★ 詩番号 F246 (B112, A, O376, OS25) [[@ FS 19 賢い人]]

F246 その行ないが親切であれ。(何ものでも) わかち合せ。善いことを実行せよ。そうすれば、喜びにみち、苦悩を減するであろう。

元詩 書き換えなし

*** (コメント) *****

なし

★ 詩番号 F247 (B068, D, O077, OS6) [[@ FS 19 賢い人]]

F247 道を説く賢い人は善人に愛せられ、悪人からは疎まれる。

元詩 (他人を) 訓戒せよ、教えさとせ。宜しくないことから (他人を) 遠ざけよ。そうすればその人は善人に愛せられ、悪人からは疎まれる。

*** (コメント変) *****

詩の前半部分のように、積極的に他人に関わるというより、仏道は困っている人に道は説くものの、それを押し付けるのではなく、あくまでも、自分が愚だと気づくことから、心や意識に浮かんできたことを自分で実践することを大切にするのです。よってこの部分は、仏道ではない別の教えが併設されていると考えられるので削除します。

★ 詩番号 F248 (B075, A, O084, OS6) [[@ FS 19 賢い人]]

F248 自分のためにも、他人のためにも、子を望んではならぬ。財をも国をも望んではならぬ。
邪なしかたによって自己の繁栄を願うてはならぬ。
(道にかなった) 行いあり、明かな知恵があり、真理にしたがっておれ。

元詩 書き換えなし

*** (コメント減) *****
なし

★ 詩番号 **F249 (B079, A, O186, OS14)** [[@ FS 19 賢い人]]

F249 たとえ貨幣の雨を降らすとも、欲望の満足されることはない。「快樂の味は短くて苦痛である」と知るのが賢い人である。

元詩 たとえ貨幣の雨を降らすとも、欲望の満足されることはない。「快樂の味は短くて苦痛である」としるのが賢者である。

*** (コメント変) *****
ブログではかなり書き換えましたが、本書では、ほぼ元詩に戻しました。

★ 詩番号 **F250 (B078, A, O087, OS6)** [[@ FS 19 賢い人]]

F250 賢者は、悪いことがらを捨てて、善いことがらを行え。楽しみ難いことではあるが、孤独(ひとりい)のうちにも、喜びを求めよ。

元詩 賢者は、悪いことがらを捨てて、善いことがらを行え。家から出て、家の無い生活に入り、楽しみ難いことではあるが、孤独(ひとりい)のうちに、喜びを求めよ。

*** (コメント) *****
出家の勧めを弱める文章にしました。

★ 詩番号 **F251 (B164, B*, O182, OS14) 、 F252 (B165, B, O193, OS14)** [[@ FS 19 賢い人]]

F251 人間の身を受け、人生修行することは貴重で、無駄にしてはならない。
死ぬ運命にあると言われる人間は、実は、身体が死んでも、魂は連続的に存在する。
ただ、もろもろのみ仏の出現したもうことは稀であり、よって、正しい教えを聞く機会も稀である。

元詩 人間の身を受けることは難しい。死すべき人々に寿命があるのも難しい。正しい教えを聞くのも難しい。もろもろのみ仏の出現したもうことも難しい。

F252 尊い人(=ブツダ)は得がたい。かれはどこにでも生れるのではない。思慮深い人(=ブツダ)の生れる家は、光り輝く。

元詩 尊い人(=ブツダ)は得がたい。かれはどこにでも生れるのではない。思慮深い人(=ブツダ)の生れる家は、幸福に榮える。

*** (コメント変) *****

F251 ; 「人間の身を受けることは難しい。」とは、修行としての人生は貴重ですから、大切にせよということです。
「死すべき人々に寿命があるのも難しい。」は、死ぬと言われている人間も、死によって、無に帰るといふことはないという趣旨ですが、うまく伝わるように書き換えてみました。
F252 ; 「幸福に榮える」とは、中村氏の注釈によると「光り輝く」という意味だそうです。

★ 詩番号 **F253 (B077, D*, O086, OS6) 、 F254 (B070+B073, D, O079+O082, OS6)** [[@ FS 19 賢い人]]

F253 真理が正しく説かれたときに、真理にしたがう人々は、渡りがたい輪廻転生を超えて、安らぎにいたるであろう。

元詩 真理が正しく説かれたときに、真理にしたがう人々は、渡りがたい死の領域を超えて、彼岸(かなたのきし)にいたるであろう。

F254** 真理を喜ぶ賢い人は、真理を聞き、正しく生活を送り安らかに臥す。その人の心は、深い澄んだ湖のように静かで清らかなになる。

元詩 O079 ; 真理を喜ぶ人は、心きよらかに澄んで、安らかに臥す。聖者の説きたまうた真理を、賢者はつねに楽しむ。

O082 ; 深い湖が、澄んで、清らかであるように、賢者は真理を聞いて、こころ清らかである。

*** (コメント変) *****

F253 ; 「渡りがたい死の領域」を「輪廻転生」と置き換えます。
F254 ; 似ている二詩の一つにして、構成順序を整えました。真理を説くのは、ブツダか真人です。聖者とは、きっと真人以上の人を指すのではないかと思います。単に真理として詩を書換えて詩を作りました。

★ 詩番号 **F255 (B087, D*, O095, OS7)** [[@ FS 19 賢い人]]

F255* 大地のように慎み深く、整った門のように分別を保ち、汚れた泥がない深い湖のように心が清らかな、そのような境地にある人には、もはや生死の世は絶たれている。

元詩 大地のように逆らうことなく、門のしまりのように慎み深く、(深い)湖は汚れた泥がないように、__そのような境地にある人には、

もはや生死の世は絶たれている。

*** (コメント) *****

大地と門の比喩が不明ですから、以下の視点で書き換えます。

- ・ 大地は、生きとし生けるものすべてに恩恵を与えていても、いつも静かで自分を主張するということがありませんので、慎しみ深いのは大地と考えます。ただ、火山爆発や地震などは稀ですので、例外事項とします。
- ・ 門は閉めたり開けたりすることで、人の出入りを監視しますので、正しい分別を持つということを比喩していると考えます。
- ・ 湖は、心のたとえと考えます。

★ 詩番号 **F256 (B076, B, O085, OS6)** [[@ FS 19 賢い人]]

F256* 人々が多いが、安らぎ(解脱)に達する人々は少ない。他の(多くの)人々は輪廻転生をさまよっている。

元詩 人々が多いが、彼岸(かなたのきし)に達する人々は少ない。他の(多くの)人々はこなたの岸の上でさまよっている。

*** (コメント変) *****

彼岸などの言い回しは、あやふやですので、輪廻転生と解脱を使って書き換えました。

★ 詩番号 **F257 (B084, D, O092+093, OS7)** [[@ FS 19 賢い人]]

F257 心の汚れが消え失せ解脱することは、空を体現してこの世の実相を認識することでもある。この解脱者たちの行く路(足跡)は知り難い。__空飛ぶ鳥の迹の知りがたいように。

元詩 O092; 財を蓄えることなく、食べ物についてその本性を知り、その人々の解脱の境地は空にして無相であるならば、かれらの行く路(足跡)は知り難い。__空飛ぶ鳥の迹の知りがたいように。

O093; その人の汚れは消え失せ、食べ物をむさぼらず、その人の解脱の境地は空にして無相であるならば、かれの足跡は知り難い。__空飛ぶ鳥の迹の知り難いように。

*** (コメント変; 重要) *****

空と相について、説明を改めました。

“「分別のない世界を一切空」と。”言うらしいのです。(http://h-kishi.sakura.ne.jp/kokoro-391.htm さんより)。私は、この説明は明らかに間違いであると思います。

実は、自分の色眼鏡を外す、言い換えれば、心の汚れを取り払ってこの世の中を見るのが、空の体現です。完全に取払うことは難しいですが、出来る限り取り払う努力が必要です。この時、役に立つのが、禅定(瞑想)だとも思っています。その時に見える世界には、実は分別があるのです。はじめて体験すれば、空の中には物事も分別もあることがわかります。それらが、自分が色眼鏡で見ていた物事と分別とは違うということなのです。ですから、あえて私が空を一言で言えとなったら、「空とは、相を取り払ったこの世の実相」になります。

では、相とは、何でしょうか? 相とは、この世の形や現象です。この世の実相を覆うマトリックスのようなもので、空を体現することにより、色眼鏡を通して見えていた相が消えて、この世の中の物事も分別もある実相が見えてくる、これが「空の体現」でしょう。無相は「相を無くしてください。」という意味で、「有相を感じる。」という言い方でも良いでしょう。ですが、無相というと「何もかも無いと同じ」というイメージを持ってしまい、非常に危険です。

解脱は、持続的に空を体現して、この世の実相と相を認識することに他なりません。これに従って、詩を書き換えました。

そして、空の体現と「食べ物を貪らず」や「食べ物の本性を知る」は同等のはずがありません。従って、この2句は削除します。

また、この教えは、在家と出家の両者に与えられているので、財は結果として溜まってしまふことまで禁じえません。突き詰めて言ってしまうと、「財を蓄えること=悪」と言う関係は間違いで、悪魔のトラップです。従って、これに関する句も削除します。

結果として、両詩はほとんど同様な詩句になるので、合体させます。

★ 詩番号 **F258 (B088, D*, O096, OS7)** [[@ FS 19 賢い人]]

F258 無相の体現によって解脱して、やすらひに帰した人__そのような人の心は静かである。ことばも静かである。行いも静かである。

元詩 正しい智慧によって解脱して、やすらひに帰した人__そのような人の心は静かである。ことばも静かである。行いも静かである。

*** (コメント変; 重要) *****

解脱は、智慧が湧くことによってなされるというのではなく、この世の中の実相が認識できる(無相の体現とでも言いましょうか!)状態だと考えています。ですから、心の汚れがある程度以下に無くなることによってなされると考えています。この点に関しては因果関係が狂っているので、詩 F257 を参考にして、書き換えます。

真人は、一時的な解脱状態が多々あるでしょうが、これを永久に持続できるのがブツダなのでしょう。

★ 詩番号 **F259 (B081, B*, O089, OS6)**、**F260 (B299, B, O143+144, OS10)**、**F261 (B089, B, O097, OS7)**

[[@ FS 19 賢い人]]

F259* 八正道により、心を正しくおさめ、執着なく貪りを捨てるのを喜び、煩惱を滅ぼし尽くして輝く人は、現世において全く束縛から解きほごされている。

元詩 覚りのよすがに心を正しくおさめ、執着なく貪りを捨てるのを喜び、煩惱を滅ぼし尽くして輝く人は、現世において全く束縛から解きほごされている。

F260* みずから恥じて自己を制し、良い馬が鞭を気につけないように、世の非難を気につけない人が、この世に誰か居るだろうか？

賢い人よ、鞭をあてられた良い馬のように勢いよく努め励めよ。

正しい信仰、慎み（戒しめ）、努め、禪定により思念をこらし、真理を確かに知り、この少なからぬ苦しみを除けよ。そして、知恵と行ないを完成させよ。

元詩 O143；みずから恥じて自己を制し、良い馬が鞭を気につけないように、世の非難を気につけない人が、この世に誰か居るだろうか？ O144；鞭をあてられた良い馬のように勢いよく努め励めよ。信仰により、戒しめにより、はげみにより、精神統一により、真理を確かに知ることにより、知恵と行ないを完成した人々は、思念をこらし、この少なからぬ苦しみを除けよ。

F261 作られたもの__既存の信仰や神を軽信することなく、作られざるもの__法を知り、生死の絆が絶たれ、善悪の計らい、もろもろの欲求から離れた人、彼こそ実に最上の人、真人である。

元詩 何ものかを信ずることなく、作られざるもの（ニルヴァーナ）を知り、生死の絆を断ち、（善悪をなすに）よしなく、欲求を捨て去った人__かれこそ実に最上の人である。

（コメント変）**

真人の領域を謳っています。賢い人の目標です。

F258；真理のことばでは、八正道を推進していますので、「さとりよすが」を「八正道」に替えます。

F261；作られざるものとは、神々や人々が作ったものではなく、この世の元から厳然と存在しているもので、誰も変更できない法や法則のことと考えています。

“何ものかを信ずることなく”は、次の“作られざるもの”と対応した句ですから、“何ものか=作られたもの”となるでしょう。これらは既に作られたものですから、既存の宗教、信仰や教え、教育ということになります。これらへの軽信を警戒せよという教えでしょう。

FS20 真人

★ 詩番号 **F262 (B150, D*, O401, OS26)、F263 (B151, D*, O407, OS26)、F264 (B155, D*, O412, OS26)、F265 (B154, D*, O411, OS26)、F266 (B153, D*, O410, OS26)、F267 (B152, D*, O402, OS26)、F268 (B156, D*, O413, OS26)** [[@ FS 20 真人]]

F262** 蓮葉の上の露のように、錐（キリ）の尖（サキ）の芥子のように、緒の欲望に汚されない人、——その人を我は真人と呼ぶ。

元詩 蓮葉の上の露のように、錐の尖の芥子のように、緒の欲情に汚されない人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

F263** 芥子粒が錐（キリ）の尖端から落ちたように、執着と怒りと高ぶりと隠し立てとが脱落した人、——その人を我は真人と呼ぶ。

元詩 芥子粒が錐（キリ）の尖端から落ちたように、愛著と憎悪と高ぶりと隠し立てとが脱落した人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

F264** この世の禍福いづれにも執着することなく、憂いなく、清らかな人、——その人を我は真人と呼ぶ。

元詩 この世の禍福いづれにも執着することなく、憂いなく、汚れなく、清らかな人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

F265** こだわりあることなく、疑惑なく、不死の底に達した人、——その人を我は真人と呼ぶ。

元詩 こだわりあることなく、さとりおわって、疑惑なく、不死の底に達した人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

F266** 現世を望まず、来世をも望まず、欲求がなくて、とらわれの無い人、——その人を我は真人と呼ぶ。

元詩 現世を望まず、来世をも望まず、欲求がなくて、とらわれの無い人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

F267** すでにこの世において自分の苦しみの滅びたことを知り、重荷をおろし、とらわれの無い人、——その人を我は真人と呼ぶ。

元詩 すでにこの世において自分の苦しみの滅びたことを知り、重荷をおろし、とらわれの無い人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

F268** 曇りのない月のように、清く、澄み、濁りがなくなった人、——その人を我は真人と呼ぶ。

元詩 曇りのない月のように、清く、澄み、濁りがなく、歓楽の生活の尽きた人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

（コメント）**

これらは、比喩を用いながら対象を賛美する賛美詩です。

お釈迦様は、ご自分のご存命中のバラモン達に異論を唱えたのですから、バラモンを賛美する詩をブッダや真人のそれらよりたく

さん残したはざがありません。

また、中村氏も、真人の章の注釈のトップで、真人とは、「尊敬されるべき人」、「拝まれるべき人」、「尊敬供養を受けるべき人」と書かれています。真人とは、とても霊格の高い人間に使われていて、我々にとってはブッダとさほど変わらないと考えて良いと思います。

ですから、やはり真理のこぼの編纂当初は真人賛美詩も、相当にあったと考えるのが妥当です。

しかし、現在の真理のこぼでは、バラモンの章に、賛美詩も含めて詩が非常に多くなっていて不自然です。そのため、バラモンの章を整理して、ブッダ、真人、修行僧の各章に移動すべき詩を吟味しました。

これらの詩句も、ブログではブッダの章に組み込みました。しかし、ブッダのことを謳っているように書き換えると、どうしてか、詩の躍動感が消えてしまうのです。そこで、今回は、元詩を使って真人を賛美した詩に書き換えました。

「かれをわれは<バラモン>」→「その人を我は真人」と書き換えています。

F262; 情欲→欲望

F263; 愛著→執着、憎悪→怒り

F264; 「執著することなく、憂いなく、汚れなく、清らかな人」→「執着することなく、憂いなく、清らかな人」

F265; 「さとりおわって」を削除

F268; 「歓楽の生活の尽きた人」を削除

★ 詩番号 **F269 (B091, B, O098, OS7) 、 F270 (B090, B, O099, OS7) [[@ FS 20 真人]]**

F269 村にせよ、荒れ地にせよ、低地にせよ、平地にせよ、真人の住む土地は楽しい。

元詩 村にせよ、林にせよ、低地にせよ、平地にせよ、聖者の住む土地は楽しい。

F270 真人は人のいない荒れ地でも楽しい。世人の楽しまないところにおいて、執着なき真人は楽しむであろう。かれらは快樂を求めないからである。

元詩 人のいない林は楽しい。世人の楽しまないところにおいて、愛着なき人々は楽しむであろう。かれらは快樂を求めないからである。

*** (コメント変) *****

F269; “聖者”を“真人”と書き換えておきます。

F270; 愛著→執着と置き換えます。

全体; 中村氏の注釈によると、インドには、日本で考える“林”というものが存在しないようで(本当かな?いきなりジャングルになってしまうとかそう言う話なのでしょうか?)、ここでいう“林”は、“荒れた空き地”くらいの意味だそうです。ですから、“林”を“荒れ地”と書き換えます。

★ 詩番号 **F271 (B082, D*, O090, OS7) [[@ FS 20 真人]]**

F271* あらゆる束縛の絆をのがれた真人は、憂いや悩みは存在せず、生きていながら人生の苦を終えたようになる。

元詩 すでに(人生の)旅路を終え、憂いははなれ、あらゆることがらにくつろいで、あらゆる束縛の絆をのがれた人には、悩みは存在しない。

*** (コメント変) *****

詩の構成が正しくないため理解に苦しむ詩になっていましたので、言葉は利用して並び替えて書き換えました。

真人やブッダでも、この世に存在するのであれば、人生の旅は終わっていないのです。したがって、人生の苦が終わると書き換えます。

そして、人生の旅が終わっていない以上、なすべきことがあるはずなので、「あらゆることがらにくつろぐ」という文章は不適切と考え、削除します。

★ 詩番号 **F272 (B118, B, O372, OS25) [[@ FS 20 真人]]**

F272 明らかな知慧の無い人には精神の安定統一が無い。

精神の安定統一していない人には明らかな知慧が無い。

精神の安定統一と明らかな知慧とがそなわっている人は安らぎに帰す。

元詩 明らかな知慧の無い人には精神の安定統一が無い。精神の安定統一していない人には明らかな知慧が無い。精神の安定統一と明らかな知慧とがそなわっている人こそ、すでにニルヴァーナの近くにいる。

*** (コメント変) *****

ニルヴァーナ=安らぎ=解脱です。

「すでにニルヴァーナの近くにいる。」ではなく、「安らぎに帰す。」としました。これが修められたら、ブッダになれるのですが、在家でも、真人の段階にいる人には、禪定が必要であることを教えています。

今の心の状態を正しく定めること(禪定、瞑想)が精神の安定統一の手段であると教えています。これができること知慧を得るのですが、知慧を得たからといって、安定統一を心がけるのをやめてはダメで、常に安定統一と知慧を得る事を心がけなさいと教えています。

すでに述べましたが、念、定、慧は不可分です（付録3四諦と仏道 参照）

★ 詩番号 **F273 (B348, D, O352, OS24) 、 F274 (B347, D, O351, OS24) [[@ FS 20 真人]]**

F273 執着をなくし欲望の激流を離れ、諸の語義に通じ諸の文章とその脈絡を知るならば、「大いなる知慧ある人」と呼ばれる。

元詩 愛欲を離れ、執着なく、諸の語義に通じ諸の文章とその脈絡を知るならば、その人は最後の身体をたもつものであり、「大いなる知慧ある人」と呼ばれる。

F274 執着をなくし、さらに、汚れを滅ぼしつくした真人は、さとの究極に達した人で、生存の矢を断ち切った人となる。

元詩 さとの究極に達し、恐れること無く、無欲で、わずらいの無い人は、生存の矢を断ち切った。これが最後の身体である。

*** (コメント変) *****

OS24 ; 愛執 から移動しました。

O274 ; 付録5 で定義した言葉に置き換えました。

O274 ; 真人は、悟っている人ですが、その究極を体現した人がブツダとなると言う意味合いで詩を書き換えます。そのときの状態の特徴の一つが、「生存の矢を断ち切る」という趣旨の詩にします。

心の汚れ（付録5 参照）をかなり減らした状態なのですが、特に執着は全く無くしたあたりからがさとりと考えています。

★ 詩番号 **F275 (B175, A, O421+348, OS26+24) [[@ FS 20 真人]]**

F275** 現在、過去、未来の全ての汚れを離れよ。

その様な人を生存の彼岸に達したという。

その様な人は解脱していて、もはや生れと老いを受けることが無いであろう。

そして、現在、過去、未来の全てのものを認識するであろう。

—その真人を我はブツダと呼ぶ。

元詩 O348 ; 前を捨てよ。後を捨てよ。中間を捨てよ。生存の彼岸に達した人は、あらゆることがらについて心が解脱していて、もはや生れと老いを受けることが無いであろう。

O421 ; 前にも、後にも、中間にも、一物をも所有せず、無一物で、何ものをも執着して取りおさえることの無い人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

*** (コメント変) *****

O348 と O421 は、構造が似ており、合わせて一つにした方が、理解しやすくなると考えます。

「前、後、中間」という比喩表現を、「現在、過去、未来」と直接表現に置き換えます。

「あらゆることがらについて心が解脱」は、心が解脱するのではなく、その人が解脱することだと思うので、「解脱していて」と置き換えます。

「所有しない」という言葉が、真理のことばにはよく出てきますが、お釈迦様は、正当な所有を禁じるような妙な教えをしたはずはありません。ですから、「所有する、しない」のことばに関しては、基本的に削除していきます。

★ 詩番号 **F276 (B161, D, O386, OS26) [[@ FS 20 真人]]**

F276 慎みを完成させ、塵汚れ(チリケガレ)なく、常に為すべきことをなし、解脱に達した真人、——その人を我はブツダと呼ぶ。

元詩 静かに思い、塵垢(チリケガレ)なく、おちついて、為すべきことをなしとげ、煩惱を去り、最高の目的を達した人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

*** (コメント変) *****

仏道で、最高の目的が解脱であることは間違いないですが、仏道を完成させて終わりと言う概念は間違いです。その後も、続いていくと捉えれば、「なすべきことをなしとげ」と言う表現だと、終了感がにじみ出ますので、そうならないように書き換えました。

仏道では、「慎み」＝「戒」と考えることが、実は「戒」の本当の意味だということに気づきました。僧団内の決まりを「戒」としてしまったために、この字が悪事を働く僧団の印象を引きずってしまい、印象が芳しくない漢字になってしまったのでしょうか。また、在家者は、「慎」を使う風習ができたと考えています。なお、この詩はもともと OS26 バラモンの章にありましたので、バラモンの章 FS 24 詩 F346 にも、バラモンに合うように書き換えて掲載します。

余分だと判断した言葉はすべて削除しました。

★ 詩番号 **F277 (B170, A, O398+O356~359, OS26+OS24) [[@ FS 20 真人]]**

F277** この世の人々は、執着、怒り、誤った見解(迷妄)、疑惑、慢心によって害われる。

怒り、執着、誤った見解、疑惑、慢心ともども断ち切り、さらに、無明を滅ぼした真人、——その人を我はブツダと呼ぶ。

元詩

O398 ; 紐と革帯と網とを、手綱ともども断ち切り、門をとざす門(カンヌキ)を滅ぼして、めざめた人、——かれをわれは<バラモン>

>と呼ぶ。

- O356；田畑は雑草によって害われ、この世は人々は愛欲によって害われる。それ故に愛欲を離れた人々に供養して与えるならば、大いなる果報を受ける。
- O357；田畑は雑草によって害われ、この世は人々は怒りによって害われる。これ故に怒りを離れた人々に供養して与えるならば、大いなる果報を受ける。
- O358；田畑は雑草によって害われ、この世は人々は迷妄によって害われる。それ故に迷妄を離れた人々に供養して与えるならば、大いなる果報を受ける。
- O359；田畑は雑草によって害われ、この世は人々は欲求によって害われる。それ故に欲求を離れた人々に供養して与えるならば、大いなる果報を受ける。

*** (コメント変) *****

中村氏の注釈によると、紐=怒り、革帯=愛執、綱=誤った見解、手綱=潜んでいる煩惱、門=無明だそうです、比喩を用いると悪魔の暗号を残すことにもなりかねませんので、この詩では、これらの比喩は削除します。

さらに、「潜んでいる煩惱」は、「疑惑、慢心」に変えます。これに、無明を足して、六汚れが揃います。つまり、O356～O359をまとめて、「この世の人々は、怒り、執着、誤った見解、疑惑、慢心によって害われる。」としました。このまとめた詩句はFS 16 執着と欲望 詩 F206 にも、別の形で残しました。

FS21 道を実践する人

道を実践する人とは、「付録4 人間の分類」で紹介した真理の探究分類法です。

★ 詩番号 **F278 (B090, B, O256+257, OS19)**、**F279 (B091, A, O258, OS19)**、**F280 (B092, A, O259, OS19)** [[@ FS 21 道を実践する人]]

F278* あらあらしく事がらを処理するからとて、公正な人ではない。義と不義との両者を見きわめる人、粗暴になることなく、きまりにしたがって、公正なしかたで他人を導く人は、正義を守る人であり、道を実践する人であり、賢い人であるといわれる。

元詩 O256； あらあらしく事がらを処理するからとて、公正な人ではない。賢明であって、義と不義との両者を見きわめる人
O257； 粗暴になることなく、きまりにしたがって、公正なしかたで他人を導く人は、正義を守る人であり、道を実践する人であり、聡明な人であるといわれる。

F279* 多く説くからとて、それゆえに賢明なのではない。心を落ち着けて、怨むことなく、恐れることのない人、__その人こそ賢明であって、道を実践する人である。

元詩 多く説くからとて、それゆえにかれが賢明なのではない。こころおだやかに、怨むことなく、恐れることのない人、__かれこそ賢者>と呼ばれる。

F280* 多く説くからとて、それゆえに道を実践している人なのではない。たとえ教えを聞くことが少なくても、身をもって真理を見る人、怠って道からはずれることの無い人__その人こそ道を実践している人である。

元詩 多く説くからとて、それゆえにかれが道を実践している人なのではない。たとえ教えを聞くことが少なくても、身をもって真理を見る人、怠って道からはずれることの無い人__かれこそ道を実践する人である。

*** (コメント減) *****

F278；「道を実践する人」と「賢い人」がどういう人なのかをうたっていますから、長くなりますが、一つにします。「聡明な人」を「賢い人」と書き変えましょう。

F279；「こころおだやかに」を「心を落ち着けて」と表現を変えました。

「付録4 人間の分類」に基づいて書き換えました。

★ 詩番号 **F281 (B093, A, O260, OS19)**、**F282 (B094, B*, O261, OS19)** [[@ FS 21 道を実践する人]]

F281* 頭髪が白くなったからとて<長老>なのではない。ただ年をとっただけならば「空しく老いぼれた人」と言われる。

元詩 書き換えなし

F282* 誠あり、徳あり、慈しみがあって、つつしみあり、みずからととのえ、汚れを除き、気をつけている人こそ「長老」と呼ばれる。

元詩 誠あり、徳あり、慈しみがあって、傷わず、つつしみあり、みずからととのえ、汚れを除き、気をつけている人こそ「長老」と呼ばれる。

*** (コメント減) *****

F282；「傷わず」の意味がわからないので削除しました。

★ 詩番号 **F283 (B095, B*, O262+O263, OS19)**、**F284 (B096, B, O264, OS19)** [[@ FS 21 道を実践する人]]

F283* 嫉み、吝嗇（りんしょく＝ケチ）、偽りを断ち、根絶やしにし、さらに、憎しみをのぞき、聡明である人、__かれこそ「端正な人」とよばれる。口先や美しい容貌では、「端正な人」とはならない。

元詩 O262；嫉みぶかく、吝嗇（りんしょく＝けち）で、偽る人は、ただ口先だけでも、美しい容貌によっても、「端正な人」とはならない。O263；これを断ち、根絶やしにし、憎しみをのぞき、聡明である人、__かれこそ「端正な人」とよばれる。

F284 頭を剃ったからとて、戒めをまもらず、偽りを語る人は、出家者ではない。欲望と貪りにみちている人が、どうして出家者であろうか？

元詩 頭を剃ったからとて、いましめをまもらず、偽りを語る人は、＜道の人＞ではない。欲望と貪りにみちている人が、どうして＜道の人＞であろうか？

（コメント）**

F283；端正とは、“行儀や姿などが整っていて立派なこと。乱れた所がなく見事なこと。”と辞書に書かれています。お釈迦様は、在家で生活する立派に見える人たちが、本当に「端正な人」なのかの見分け方を伝授なさっています。

「住家がなくて遍歴し」は、“住家がない”と言うことにこだわりが生じてしまうので、「住居にこだわらずに修行し」と書き換えます。

F263；暴力は、不当な武力と定義しました。全く、“生き物を殺さず殺させることのない”なんて無理ですから、無益にという言葉をつけておきます。

F264；コメントなし

★詩番号 **F285 (B098, A, O266, OS19)、F286 (B099, A, O267, OS19)** [[@ FS 21 道を実践する人]]

F285 他人に食を乞うからとて、それだけでは托鉢僧なのではない。汚らわしい行ないをしているならば、それは托鉢僧ではない。

元詩 他人に食を乞うからとて、それだけでは＜托鉢僧＞なのではない。汚らわしい行ないをしているならば、それでは＜托鉢僧＞ではない。

F286* この世の福楽も罪悪も見極め、執着せず、清らかな行ないを修め、よく思慮して世に処しているならば、その人こそ托鉢僧である。

元詩 この世の福楽も罪悪も捨て去って、清らかな行ないを修め、よく思慮して世に処しているならば、かれこそ＜托鉢僧＞と呼ばれる。

（コメント減）**

道を実践する出家者の見極め方や、安易に出家者へのお布施することを諫める詩です。

★詩番号 **F287 (B100+B101, D, O268+O269, OS19)、F288 (B100+B101, D, O268+O269, OS19)、F289 (B102, D, O270, OS19)** [[@ FS 21 道を実践する人]]

F287** ただ沈黙しているからとて、道を実践する人と思ってはならない。そのような中には、愚かに迷い無智なる人がたくさんいる。

F288** 秤を手にもっているように、いみじきものを取り、もろもろの悪を除く賢者こそ道を実践する人なのである。この世にあって善悪の両者を（秤りにかけてはかるように）よく考える人こそ道を実践する人とよばれる。

元詩 O268+O269；ただ沈黙しているからとて、愚かに迷い無智なる人が＜聖者＞なのではない。秤を手にもっているように、いみじきもの取りもろもろの悪を除く賢者こそ＜聖者＞なのである。かれはそのゆえに聖者なのである。この世にあって善悪の両者を（秤りにかけてはかるように）よく考える人こそ＜聖者＞とよばれる。

F289* 道を実践する人と呼ばれる人は、生きとし生けるものを無益に害わない。生きものを無益に害うのは、道を実践する人ではない。

元詩 生きものを害うからとて＜聖者＞なのではない。生きとし生けるものどもを害わないので＜聖者＞と呼ばれる。

（コメント）**

＜聖者＞を「道を実践する人」と置き換えます。

詩 O268 と O269 を分割しました。

★詩番号 **F290 (B103, D*, O271+272, OS19)** [[@ FS 21 道を実践する人]]

F290 私は、解脱の楽しみを得た。それは凡夫の味わい得ないものである。それは、戒律や誓いだけでも、また博学によっても、また瞑想を体現しても、またひとり離れて臥すことによっても、得られないものである。道を実践する者達よ。汚れが消え失せない限りは、油断するな。

元詩 O271+O272；わたしは、出離の楽しみを得た。それは凡夫の味わい得ないものである。それは、戒律や誓いだけでも、また博学によっても、また瞑想を体現しても、またひとり離れて臥すことによっても、得られないものである。修行僧よ。汚れが消え失せない限りは、油断するな。

*** (コメント) *****

“出離”は、“解脱”のことでしょう。解脱は、在家的な生活を送っていても、到達できると、私は感じています。
この詩は、＜修行僧＞と同時に、＜道を実践する人＞へ与えられた詩句と捉えた方が、たくさんの人たちが対象であることが認識されるので得策と考え、書き直しました。詳しくは「付録4人間の分類；修行者」を参照してください。

FS22 仏弟子

仏弟子は、お釈迦様が残した教えを最上のものとして、それに従って生きる人たち全般を指します。もちろん、正しい教えを述べられたキリスト様や孔子様やソクラテス様などの教えを最上のものとして生活する人たちは含まれていません。それらの人は、道を実践する人、真人、賢い人に組み込まれるのでしょう。要するに正しい仏教徒という意味合いで捉えます。

★ 詩番号 F291 (B126, A, O183, OS14)、F292 (B127, B, O185, OS14) [[@ FS 22 仏弟子]]

F291 すべて悪しきことをなさず、善いことを行ない、自己の心を浄めること、——これが諸の仏の教えである。

元詩 書き換えなし

F292* 他を罵らず、害わず、慎んでおのれを守り、食事に関して(適当な)量を知り、適時 念定(禪定)を行ない、心に関することに努め励む。——これがもろもろのブツダの教えである。

元詩 罵らず、害(がい)せず、自分は戒律を守り、食事に関して(適当な)量を知り、淋しいところにひとり臥し、坐し、心に関することにつとめはげむ。——これがもろもろのブツダの教えである。

*** (コメント変) *****

F291; 「もろもろのブツダ」という複数表現から、本当はブツダはお釈迦様だけではなく、たくさんいらっしゃるのですが、本書では、「仏弟子」=「正しい仏教徒」とします。

F292; 戒律は出家側の表現と考えていますので、それと同等の在家側の言葉で書き換えます。

「淋しいところにひとり臥し、坐し、」は在家には無理なので表現を変えました。

★ 詩番号 F293 (B128, D*, O184, OS14) [[@ FS 22 仏弟子]]

F293 忍耐・堪忍は最上の苦行である。ニルヴァーナは最高のものであると、もろもろのブツダは説きたまう。他人を害する人、悩ます人は仏弟子ではない。

元詩 忍耐・堪忍は最上の苦行である。ニルヴァーナは最高のものであると、もろもろのブツダは説きたまう。他人を害する人は出家者ではない。他人を悩ます人は＜道の人＞ではない。

*** (コメント変) *****

＜道の人＞は「仏弟子」として詩を短くしました。

中村氏の記述した真理のことばで＜道の人＞というのは、在家、出家問わない道を実践する人の中でも、特に仏弟子を意味する場が多いのではないかと考えられます。

★ 詩番号 F294 (B121, A, O368+O381, OS25) [[@ FS 22 仏弟子]]

F294* 仏の教えを喜び、慈しみに住し、怠らずに励めば、悪因の形成が止み、安楽な、静けさの境地(ニルヴァーナ)に到達する。

元詩 O368; 仏の教えを喜び、慈しみに住する修行僧は、動く形成作用の静まった、安楽な、静けさの境地に到達するであろう。

O381; 喜びにみちて仏の教えを喜ぶ修行僧は、動く形成作用の静まった、幸いな、やすらぎの境地に達するであろう。

*** (コメント変) *****

「動く形成作用の静まった」を「悪因の形成が止み」と書き換えました。

ニルヴァーナという語を補足しました。

O381 も同じ教えの詩なので、一つにまとめました。

★ 詩番号 F295 (B129, D*, O187, OS14) [[@ FS 22 仏弟子]]

F295** 天上の快樂は楽しいものだが、仏弟子にとって、妄執の消滅はさらに楽しい。

元詩 天上の快樂にさえもこころ楽しまない。正しく覚った人(=仏)の弟子は妄執の消滅を楽しむ。

*** (コメント変) *****

天上とは、天国だと思っています。かなり、靈格の高い存在が集うあの世で、そこに存在するものすべてが一級品です。しかし、三界からは出られていない場所での、楽しみ(天人の音楽 etc.)が天上の快樂なのでしょう。これらを楽しめる心境は正常だと言えますので、これを否定しないように、詩文を比較の表現に変えました。

★ 詩番号 F296 (B130, A, O194, OS14) [[@ FS 22 仏弟子]]

F296 もろもろのみ仏の現われたまうのは楽しい。
正しい教えを説くのは楽しい。
つどいが和合しているのは楽しい。
和合している人々がいそしむのは楽しい。

元詩 書き換えなし

*** (コメント) *****

OS14 ブッダから移動しました。

★ 詩番号 **F297 (B131, D, O188, OS14)**、**F298 (B132, D, O189, OS14)**、**F299 (B134, D, O190+O191, OS14)**、**F300 (B133, D, O192, OS14)** [[@ FS 22 仏弟子]]

F297 人々は恐怖にかられて、山々、林、園、樹木、霊樹など多くのものにたよろうとする。

元詩 書き換えなし

F298 しかしこれは安らかなよりどころではない。これは最上のよりどころではない。それらのよりどころによってはあらゆる苦悩から免れることはできない。

元詩 書き換えなし

F299 四つの尊い真理の四諦が、安らかなよりどころであり、最上のよりどころであり、あらゆる苦悩から免れるよりどころである。

元詩 さとれる者 (=仏) と真理のことわり (=法) と聖者の集い (=僧) とに帰依する人は、正しい知恵をもって、四つの尊い真理を見る。——すなわち (1) 苦しみと、(2) 苦しみの成り立ちと、(3) 苦しみの超克 (チョウコク) と、(4) 苦しみの終滅 (オワリ) におもむく八つの尊い道 (八聖道) とを (見る)。

F300 この四つの尊い真理とは、(1) 苦しみと、(2) 苦しみの成り立ちと、(3) 苦しみの超克 (チョウコク) と、(4) 苦しみの終滅 (オワリ) におもむく八つの尊い道 (八聖道) である。

元詩 これは安らかなよりどころである。これは最上のよりどころである。このよりどころにたよってあらゆる苦悩から免れる。

*** (コメント) *****

この4詩で一つと考えます。僧がただの社会的立場の分類カテゴリーであるという立場なので、愚かな僧がいるという前提がある以上、仏法僧への帰依の奨励は正しくないとはっきりと宣言します。従って、仏法僧への帰依の記述は削除します。

仏弟子は、お釈迦様の説かれた四諦の真実と八正道の道を歩んで、個人の霊性の向上に努めなくてはならないという、シンプルな宣言をここで行ないました。

★ 詩番号 **F301 (B260~265, D, O296~301, OS21)** [[@ FS 22 仏弟子]]

F301** ゴータマの弟子が、昼も夜も起きている間は、常に「仏、法、心、体、善」について念い続けられれば、覚醒し、その後も常に覚醒が持続する。そこで、彼らは、念定 (禅定) を楽しむであろう。

元詩 O296 ; ゴータマの弟子は、いつもよく覚醒していて、昼も夜も常に仏を念じている。

O297 ; ゴータマの弟子は、いつもよく覚醒していて、昼も夜も常に法を念じている。

O298 ; ゴータマの弟子は、いつもよく覚醒していて、昼も夜も常にサンガ (修行者のつどい) を念じている。

O299 ; ゴータマの弟子は、いつもよく覚醒していて、昼も夜も常に身体 (の真相) を念じている。

O300 ; ゴータマの弟子は、いつもよく覚醒していて、その心は昼も夜も不傷害を楽しんでいる。

O301 ; ゴータマの弟子は、いつもよく覚醒していて、その心は昼も夜も瞑想を楽しんでいる。

*** (コメント) *****

中村氏の訳出が「A だから B です。」としたら、パーリ語では、「B だから A です。」なのです。これは、中村氏の訳出ミスでしょう。

各詩の、パーリ語の直訳を下に記します。

O296 ; 彼らにとって昼も夜も常にブッダを念じているなら常にゴータマの弟子はよく目覚めて、目覚める (http://76263383.at.webry.info/201211/article_26.html さんより)

O297 ; 彼らにとって昼も夜も常に法に向いて念じているなら常にゴータマの弟子はよく目覚めて、目覚める (http://76263383.at.webry.info/201212/article_1.html さんより)

O298 ; 彼らにとって昼も夜も常に僧に向いて念じているなら常にゴータマの弟子はよく目覚めて、目覚める (http://76263383.at.webry.info/201212/article_2.html さんより)

O299 ; 彼らにとって昼も夜も常に身体に向いて念じているなら常にゴータマの弟子はよく目覚めて、目覚める (http://76263383.at.webry.info/201212/article_3.html さんより)

O300 ; 彼らにとって昼も夜も常に不害の心を楽しむならば常にゴータマの弟子はよく目覚めて、目覚める (http://76263383.at.webry.info/201212/article_4.html さんより)

O301；彼らにとって昼も夜も常に瞑想の心を楽しむならば常にゴータマの弟子はよく目覚めて、目覚める
(http://76263383.at.webry.info/201212/article_5.html さんより)

ブログでは、下記のように詩を書き換えました。
B260；ゴータマの弟子は昼も夜も起きている間は、常にブツダについて念定（禪定）すべきである。これにより、彼らは、覚醒するか、もしくは、常によく覚醒しているのである。
B261；ゴータマの弟子は昼も夜も起きている間は、常に法について念定（禪定）すべきである。これにより、彼らは、覚醒するか、もしくは、常によく覚醒しているのである。
B262；ゴータマの弟子は昼も夜も起きている間は、常に僧に対して念定（禪定）すべきである。これにより、彼らは、覚醒するか、もしくは、常によく覚醒しているのである。
B263；ゴータマの弟子は昼も夜も起きている間は、常に身体について念定（禪定）すべきである。これにより、彼らは、覚醒するか、もしくは、常によく覚醒しているのである。
B264；ゴータマの弟子は昼も夜も起きている間は、常に武力と暴力について念定（禪定）すべきである。これにより、彼らは、覚醒するか、もしくは、常によく覚醒しているのである。
B265；ゴータマの弟子は昼も夜も起きている間は、念定（禪定）を楽しむべきである。これにより、彼らは、覚醒するか、もしくは、常によく覚醒しているのである。

しかし、起きている間はずっと念定するなんて、全く無理な話なので、「念じる」を「念定する」と解釈するのはやめました（ブログの訂正）。その結果、「念じている」を「念い」としました。この「念い」とは、強い意志を伴うことだそうです。常に思考・行動において、その基軸になる思いが「念い」としましょう。

B260～B264の詩では、念定する対象を、ブツダ、法、僧、身体、武力と暴力としましたが、「念ずる」の解釈を変えることによって、「僧」は「心」に、「武力と暴力」は「善」としました。

よって、念定の対象を「仏、法、心、体、善」とまとめます。

詩B265は、覚醒が進んだ結果、念定（禪定）が楽しくなると考えられますので、この解釈を踏まえて、六詩の一つにまとめました。

念ずる行為ですが、“ブツダのことば”では、寝ている間は、意識がないので、免除されていますので、「昼も夜も常に」は、「昼も夜も起きている間は常に」と置き換えました。

★ 詩番号 **F302 (B066, A, O075, OS6)** [[@ FS 22 仏弟子]]

F302** 利得に達する道もあり、安らぎに達する道もある。ブツダの弟子はこのことわりを知って、栄誉を求めず、努め励め。

元詩 一つは利得に達する道であり、他の一つは安らぎにいたる道である。ブツダの弟子である修行僧はこのことわりを知って、栄誉を喜ぶな。孤独の境地に励め。

*** (コメント変) *****

OS6 賢い人から移動。

「安らぎにいたる道」を守り自分を修養する過程が、仏道です。その結果、得られた利得を否定するのは心苦しいところです。

また、努め励む境地は、常に苦しくとも、常に楽しいとも、常に仲間がたくさんいるとも、常に孤独とも限りません。

以上の観点から、普遍的な言い回しに書き換えました。

この詩の主語は、「ブツダの弟子」とします。

FS23 修行僧

修行僧は、社会的立場の出家-在家分類に置ける、出家側に分類されます。出家側で、地位が高いものがバラモンと分類され、それ以外の出家者を修行僧としました（付録4 人間の分類 参照）。修行僧は、バラモンを経てブツダになるべく出家修行する人たちと考えています。

★ 詩番号 **F303 (B297, A, O141, OS10)**、**F304 (B298, D, O142, OS10)** [[@ FS 23 修行僧]]

F303 裸の行も、髻に結うのも、身が泥にまみれるのも、断食も、露地に臥すのも、塵や泥を身に塗るのも、蹲って動かないのも、__疑いを離れていない人を浄めることはできない。

元詩 書換えなし

F304** 修行僧は、身の装いはどうあろうとも、自己（魂）を整えて心を治めて、正しく、慎しみ深い行いを実行し、生きとし生けるものに対して（不当な）暴力を用いてはならない。

元詩 身の装いはどうあろうとも、行ない静かに、心おさまり、身をととのえて、慎みぶかく、行ない正しく、生きとし生けるものに対して暴力を用いない人こそ、<バラモン>とも、<道の人>とも、また<托鉢遍歴僧>ともいうべきである。

*** (コメント変) *****

この二つの詩が、暴力の章にあるよりは、修行僧への教えと捉えた方がまとまりが良くなると思われましたので、移動しました。

F302；ジャイナ教の修行者が行っていた苦行に関する記述だそうです。

F303 ; 「<バラモン>とも、<道の人>とも、また<托鉢遍歴僧>ともいうべきである。」と、一派一絡げにするのは良くないので、修行僧への戒めとして、詩を全面的に書き換えました。これらの人に対しては、“付録4 人間の分類”を参照してください。

「行ない静か」と「慎みぶかく」はオーバーラップします。暴力に対抗しなくてはならない時には、「行ない静か」の文言が行動の抑制になり、正しい教えを伝えられないので、「慎みぶかく」の方を残し、「行ない静か」は消します。

お釈迦様は、従来の信仰（ヒンズー教やジャイナ教）の行っていた苦行は全面的に否定なさいました。

★ 詩番号 **F305 (B105, D, O375, OS25)** [[@ FS 23 修行僧]]

F305* この世において明らかな知恵を求める修行僧の初めのつとめは、
怠らないで、
感官に気をくばり、
分限と足るを知り、
戒め（慎み）を守り、
淨らかに生きる善い友とつき合う、
ことである。

元詩 これは、この世において明らかな知恵のある修行僧の初めのつとめである。__感官に気をくばり、満足し、戒律をつつしみ行ない、怠らないで、淨らかに生きる善い友とつき合え。

*** (コメント変) *****

- ・元詩は、明らかな智慧を持っていなければ修行僧ではないという詩になっています。しかし、この世において明らかな智慧を有するのが、修行僧の最終目的の一つだと思います。したがって、“明らかな知恵のある”を“明らかな知恵を求める”とします。
- ・「戒律をつつしみ行ない」は「戒めを守る」と書き換えます。
- ・「満足し」は具体性がないので、「分限と足るを知り」と書き換えます。
- ・項目の並び順と日本語を整えます。

★ 詩番号 **F306 (B106, D, O392, OS26)** [[@ FS 23 修行僧]]

F306* 正しく覚った人(=ブツダ)の説かれた教えを、はっきりと学び得たなら、教示した人が、いかなる人であろうとも、その人を恭しく敬礼しつつ、その師に頼ることなく、常に自分で考え判断する自立した心を養え。

元詩 正しく覚った人(=ブツダ)の説かれた教えを、はっきりといかなる人から学び得たのであろうとも、その人を恭しく敬礼せよ、——バラモンが祭の火を恭しく尊ぶように

*** (コメント変) *****

バラモンの章から移動しました。

また、時間が経てば、人格も変わることはあります。人であっても、この世の中は諸行無常が適応されるようです。ですから師匠ですら、頼るよるべにしない、常に自分で考えて判断する姿勢を養うことを、この詩は教えていると捉えました。

★ 詩番号 **F307 (B107, C, O365, OS25)**、**F308 (B108, D, O366, OS25)** [[@ FS 23 修行僧]]

F307 自分の得たものを軽んじてはならない。他人の得たものを羨むな。他人を羨む修行僧は心の安定を得ることができない。

元詩 (托鉢によって) 自分の得たものを軽んじてはならない。他人の得たものを羨むな。他人を羨む修行僧は心の安定を得ることができない。

F308** 修行僧は、怠ることなく清く生き、自分の得たものをが少なくても、それを軽んじない。

元詩 たとい得たものは少なくても、修行僧が自分の得たものを軽んずることが無いならば、怠ることなく清く生きるその人を、神々も称讃する。

*** (コメント減) *****

ここで托鉢によって得たものと限定してしまうことは、もったいないです。人が得るもの全般、学びによる知識、瞑想による気づきまで含めての教えにしようと思います。

また、両詩とも、修行僧への戒律として位置付けました。

★ 詩番号 **F309 (B115, D, O391, OS26)** [[@ FS 23 修行僧]]

F309* 身にも、言葉にも、心にも、悪い事を為さず、(この)三つのところについて慎んでいる人、—その人を我は修行僧と呼ぶ。

元詩 身にも、ことばにも、心にも、悪い事を為さず、三つのところについてつつしんでいる人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

*** (コメント変) *****

OS26 バラモンの章から移動。これは、慎みの励行をしているので、修行僧への教えと考えています。

★ 詩番号 F310 (B109, D, O360, OS25)、F311 (B110, D, O361, OS25) [[@ FS 23 修行僧]]

F310 修行僧は、眼について、耳について、鼻について、舌について、身について、言葉について、心について慎しもう。

元詩 眼について慎しむのは善い。耳について慎しむは善い。鼻について慎しむのは善い。舌について慎しむのは善い。

F311 修行僧は、あらゆることについて慎しめば、すべての苦しみから脱れる。

元詩 身について慎むのは善い。ことばについて慎しむのは善い。心について慎しむのは善い。あらゆることについて慎しむのは善いことである。修行僧はあらゆることについて慎しむ、すべての苦しみから脱れる。

*** (コメント変) *****

この2つの詩で1つの詩と考えられますので、詩の編成を変えます。

この2つの詩は、六根と言われるものを教えています。六根とは、目、耳、鼻、舌、体、心で、我々が知覚する機関です。これを慎もうと、この2詩は教えています。その結果、この世に存在する六境；色、音、匂い、味、触覚、意の知覚対象に執着することがなくなるといのが、パーリ経典による六六経教えだそうです。ただし、この2詩では、身、言葉が抜けているので、これらを補います。

六根という言葉を使わずに、原文を残したいと思います。

★ 詩番号 F312 (B111, B, O363, OS25) [[@ FS 23 修行僧]]

F312 修行僧が、心が浮わつくことなく、言葉をつつしみ、思慮して語り、事実と真理とを明らかにするならば、その人の説くところはやさしく甘美になる。

元詩 口をつつしみ、思慮して語り、心が浮わつくことなく、事がらと真理とを明らかにする修行僧_かれの説くところはやさしく甘美である。

*** (コメント) *****

詩中の言葉を使って文章を整理しました。

★ 詩番号 F313 (B113, B, O379, OS25) [[@ FS 23 修行僧]]

F313* みずから自分を励ませ。みずから自分を反省せよ。修行僧よ。心を護り、正しい念いをたもてば、汝は安楽に住するであらう。

元詩 みずから自分を励ませ。みずから自分を反省せよ。修行僧よ。自己を護り、正しい念いをたもてば、汝は安楽に住するであらう。

*** (コメント変) *****

F312；「みずから」は、「魂が」と捉えることにします。

自分=心(意識)なのですが、詩を書き換えると多少みっともなくなるので、そのままにします。

「自己を護り」ですが、ブログでは、「魂を護り」としました。しかし、これに続く「正しい念い」の「念い」は今の心という意味ですから、魂が心を治め守って、正しい今の心(念)が保たれると解釈した方が、スムーズですので、変更しました。

★ 詩番号 F314 (B114, D, O390, OS26) [[@ FS 23 修行僧]]

F314* 愛好するものから心を遠ざけることは、修行僧にとって必要なことである。

元詩 愛好するものから心を遠ざけるならば、このことはバラモンにとって少なからずすぐれたことである。害する意(オモイ)がやむにつれて、苦悩が静まる。

*** (コメント変) *****

バラモンの章から移動。

中村氏も、注釈で解釈に苦しんでいます。愛好するものは、家族ではないかと論じていますが、はっきりしません。言葉通り、趣味から家族まで、すべての愛するものくらいに考えるしかありません。

しかし、後半の「害する意」との関連性が全くわかりません。「害する意」という言葉も曖昧です。

後半部は削除して、前半部分だけ言葉を整えて、書き換えます。この時、バラモンまで進んでいる魂に、この詩は必要はないので、これは修行僧への教えとしました。

★ 詩番号 F315 (B116, B, O369+377, OS25) [[@ FS 23 修行僧]]

F315* 修行僧よ。この舟から水を汲み出せ。汝が水を汲み出したならば、舟は軽やかにやすやすと進むであらう。貪りと怒りを断ち、ジャスミンの花が花びらを捨て落とすように、貪りと怒りを捨て去れば、汝は安らぎにおもむくであらう。

元詩 O369；修行僧よ。この舟から水を汲み出せ。汝が水を汲み出したならば、舟は軽やかにやすやすと進むであらう。貪りと怒りとを断ったならば、汝はニルヴァーナにおもむくであらう。

O377；修行僧らよ。ジャスミンの花が花びらを捨て落とすように、貪りと怒りとを捨て去れよ

*** (コメント変) *****

O369；中村氏の注釈によると、
舟：個人存在
水：誤った思考
です（異論ありません。）。
詩文を整えます。

★詩番号 **F316 (B117, B, O370, OS25)** [[@ FS 23 修行僧]]

F316 まず、五下分結を断ち、次に、五上分結を捨てよ。
さらに、信、精進、念、定、慧による五つ(のはたらき)を修めよ。
そうすれば、修行僧は、五つの汚れ(貪り、怒り、迷妄、高慢、疑惑)を超え、激流を渡った者とよばれる。

元詩 五つ(の束縛)を断て。五つ(の束縛)を捨てよ。さらに五つ(のはたらき)を修めよ。五つの執著を超えた修行僧は、<激流を渡った者>とよばれる。

*** (コメント変) *****

これは、五上分結と五下分結、五根、5つの執着を教えています。それらを具体的に書き出して、文章を整えました。詳しくは「付録5 心の汚れ (1)⑦、(4)」を参照してください。

「五つの執著」は「五つの汚れ」(六汚れのうち無明を抜いたもの；付録5参照)と書き直します。

★詩番号 **F317 (B119, A, O371, OS25)**、**F318 (B368, A, O308, OS22)**、**F319 (B369, A, O311, OS22)**、**F320 (B370, A, O313, OS22)** [[@ FS 23 修行僧]]

F317 修行僧よ。瞑想せよ。なおざりになるな。汝の心を欲情の対象に向けるな。なおざりのゆえに鉄丸を呑むな。(灼熱した鉄丸で)焼かれるときに、「これは苦しい！」と泣き叫ぶな。

元詩 書換えなし

F318 戒律を守らず、自ら慎むことがないのに国の信徒の施しを受けるよりは、火炎のように熱した鉄丸を食らうほうがまだ。

元詩 戒律をまもらず、みずから慎むことがないのに国の信徒の施しを受けるよりは、火炎のように熱した鉄丸を食らうほうがまだ。

F319 茅草でも、とらえ方を誤ると、手のひらを切るように、修行僧の行も、誤っておこなうと、地獄にひきずりおろす。

元詩 書換えなし

F320 もしも為すべきことであるならば、それを為すべきである。それを断乎として実行せよ。行ないの乱れた修行者はいつそう多く塵をまき散らす。

元詩 書換えなし

*** (コメント減) *****

F317；在家よりも出家側の方が、悪いことしにくく守られているのですから、それをわざわざ悪いことしに行くのならば、お仕置きだって厳しくなります。修行僧にとっては、厳しい言葉で叱ってくださる有難い詩ですから、そのまま、とっておきます。

F318～F320；OS22 地獄 から移動。

F318；ひらがなを漢字に書き換えました。

★詩番号 **F321 (B120, B, O373+374, OS25)** [[@ FS 23 修行僧]]

F321 修行僧が念と定の修行のために、人のいない空家に入って心を静め真理を正しく観ずるならば、人間を超えた楽しみがおこる。

この修行により、個人存在を構成している諸要素の生起と消滅とを、徐々に正しく理解する。それにつれ、個人存在の不死のこわりを知り、それによる喜びを、彼は体得する。

元詩 O373；修行僧が人のいない空家に入って心を静め真理を正しく観ずるならば、人間を超えた楽しみがおこる。

O374；個人存在を構成している諸要素の生起と消滅とを正しく理解するに従って、その不死のこわりを知り得た人々にとって喜びと悦楽なるものを、かれは体得する。

*** (コメント変) *****

二つの詩を一つにまとめます。

修行僧が念と定の修行(=真理を正しく観ずる)を行うことにより、得られるメリットを示されていると思います。

ここで言う喜びは、実際に体得しないと、言葉では説明できないと思うのです。だから、信じて修行を行ってくださいと御教示してくださっているのでしょう。

★詩番号 **F322 (B 番号なし, D, O181, OS14)** [[@ FS 23 修行僧]]

F322 世間から離れた静けさの中で、念いを静め、禪定に専中している修行僧は、正しいさとりを開く。神々でさえもその人

を羨む。

元詩 正しいさとりを開き、念いに耽り、瞑想に専中している心ある人々は世間から離れた静けさを楽しむ。神々でさえもかれを羨む。

*** (コメント) *****

ブログで考察を行わなかった可能性があります。

★ 詩番号 **F323 (B122, A, O364, OS25)** [[@ FS 23 修行僧]]

F323 真理を喜び、真理を楽しみ、真理をよく知り分けて、真理にしたがっている修行僧は、正しいことわりから墜落することがない。

元詩 書換えなし

*** (コメント) *****

修行僧は、とにかく真理の探究を楽しく喜んで履行しなさいと言う教えでしょう。

★ 詩番号 **F324 (B123, D*, O378, OS25)** [[@ FS 23 修行僧]]

F324 修行僧が、身も静か、語(ことば)も静か、心も静かで、よく精神統一をなし、世俗の享樂物を吐きすてたならば、バラモンと呼ばれる。

元詩 修行僧は、身も静か、語(ことば)も静か、心も静かで、よく精神統一をなし、世俗の享樂物を吐きすてたならば、<やすらぎに帰した人>と呼ばれる。

*** (コメント変) *****

<やすらぎに帰した人>は解脱者のことでしょう。そうすると、<真人>か<バラモン>の方が、正確です。修行僧の目標であるバラモンへの指針を謳った詩として書き換えます。

★ 詩番号 **F325 (B124, D, O367, OS25)** [[@ FS 23 修行僧]]

F325 名称とかたちについて「わがもの」という想いが全く存在しない、何ももの無いからとて憂えることの無い修行僧は、<バラモン>とよばれる。

元詩 名称とかたちについて「わがもの」という想いが全く存在しないで、何ももの無いからとて憂えることの無い人、__かれこそ<修行僧>とよばれる。

*** (コメント変) *****

この詩はバラモンか真人のことを謳った詩ですから、修行僧の目標であるバラモンへの指針として書き換えます。

★ 詩番号 **F326 (B125, A, O382, OS25)** [[@ FS 23 修行僧]]

F326 たとい年の若い修行僧でも、仏の道にいそしむならば、雲を離れた月のように、この世を照らす。

元詩 書換えなし

*** (コメント減) *****

なし

FS24 バラモン

★ 詩番号 **F327 (B136, D*, O406, OS26)** [[@ FS 24 バラモン]]

F327* 敵意ある者どもの間であって敵意なく、暴力を用いる者どもの間であって恐れず立ち向かい、執着する者どもの間であって執着しない人、——その人を我はバラモンと呼ぶ。

元詩 敵意ある者どもの間であって敵意なく、暴力を用いる者どもの間であって心おだやかに、執着する者どもの間であって執着しない人、——その人を我は<バラモン>と呼ぶ。

*** (コメント変) *****

「暴力を用いる者どもの間であって心おだやかに」は正しくないで、「暴力を用いる者どもの間であって恐れに負けずに立ち向かい」と書き換えました。

執着→執着 としました。

★ 詩番号 **F328 (B137, B, O383, OS26)** [[@ FS 24 バラモン]]

F328* バラモンよ。流れを断て。勇敢であれ。諸の欲望を去れ。諸の現象の生成と消滅を知って、作られざるもの__法を知る者であれ。

元詩 バラモンよ。流れを断て。勇敢であれ。諸の欲望を去れ。諸の現象の消滅を知って、作られざるもの(ニルヴァーナ)を知る者であれ。

*** (コメント変) *****

「作られざるもの(ニルヴァーナ)」を「作られざるもの_法」と置き換えました。

「消滅」を「生成と消滅」としました。

★ 詩番号 **F329 (B138, A, O399, OS26)** [[@ FS 24 バラモン]]

F329 罪がないのに罵られ、なぐられ、拘禁されるのを堪え忍び、忍耐の力あり、心の猛き人、——その人をわれはバラモンと呼ぶ。

元詩 罪がないのに罵られ、なぐられ、拘禁されるのを堪え忍び、忍耐の力あり、心の猛き人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

*** (コメント変) *****

「かれを」を「その人」とします。

★ 詩番号 **F330 (B139, D*, O415, OS26)**、**F331 (B140, D*, O416, OS26)** [[@ FS 24 バラモン]]

F330* 出家して修行し、この世の欲望の激流を超え、執着の尽きた人、——その人を我はバラモンと呼ぶ。

元詩 この世の欲望を断ち切り、出家して遍歴し、欲望の生活の尽きた人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

F331* 出家して修行し、心をよく治めて、心の汚れの尽きた人、——その人を我はバラモンと呼ぶ。

元詩 この世の愛執を断ち切り、出家して遍歴し、愛執の生存の尽きた人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

*** (コメント変) *****

元詩が、付録5の定義とは合わないので、執着と心の汚れに関する詩に、全面的に書き換えました。付録5で記したように、心の汚れの中に執着は入るのですが、この世に設定されている欲望の激流に直接感応するのは、執着なので、分けて詩を書きました。

★ 詩番号 **F332 (B141, A, O389, OS26)** [[@ FS 24 バラモン]]

F332* バラモンを打つな。バラモンは打つ人に対して怒りだけを放つな。バラモンを打つものには禍がある。しかしただ怒りだけのバラモンにはさらに禍がある。

元詩 バラモンを打つな。バラモンはかれ(=打つ人)にたいして怒りを放つな。バラモンを打つものには禍がある。しかし(打たれて)怒る者にはさらに禍がある。

*** (コメント変) *****

バラモンであっても、正当な怒りは持ち、適時、解決しなくてはなりません。ただし、あくまでも行動の軸は、落ち着いている心(もしくは理性)であるということなのです。これは、大変難しいですが、これができる人がある一定数いないと、この世の中は治まりません。

バラモンへの教えはそういった意味では、リーダーになる人たちにへの教えとも言えます。

★ 詩番号 **F333 (B142, B, O393, OS26)**、**F334 (B367, A, O307, OS22)**、**F335 (B143, B, O394, OS26)**、**F336 (B144, D, O395, OS26)**、**F337 (B145, D, O396, OS26)** [[@ FS 24 バラモン]]

F333 身なりによってバラモンなのではない。氏姓によってバラモンなのでもない。生れによってバラモンなのでもない。真理と理法とをまもる人は、安楽である。その人こそ(真の)バラモンなのである。

元詩 螺髪を結んでいるからバラモンなのではない。氏姓によってバラモンなのでもない。生れによってバラモンなのでもない。真理と理法とをまもる人は、安楽である。かれこそ(真の)バラモンなのである。

F334 袈裟を頭から纏っていても、性質(タチ)が悪く、つつしみのない者が多い。かれら悪人は、悪いふるまいによって、悪いところに生まれる。

元詩 袈裟を頭から纏っていても、性質(タチ)が悪く、つつしみのない者が多い。かれら悪人は、悪いふるまいによって、悪いところに(地獄)に生まれる。

F335 愚者よ。バラモンの身なりだけ整えて、何になるのだ。汝は内に密林(=汚れ)を蔵して、外側だけを飾る。

元詩 愚者よ。螺髪を結うて何になるのだ。かもしかの皮をまとして何になるのだ。汝は内に密林(=汚れ)を蔵して、外側だけを飾る。

F336 粗末な身なりで、痩せて、血管があらわれていようとも、寂しい場所で一人で瞑想に専念する人、——その人を我はバラモンと呼ぶ。

元詩 糞掃衣をまとい、痩せて、血管があらわれ、ひとり林の中であって瞑想する人、——かれをわれはバラモンと呼ぶ。

F337 われは、(バラモン女の)胎から生れ(バラモンの)母から生れた人をバラモンと呼ぶのではない。この人は「<君よ>とって呼びかける者」といわれる。かれは何か所有物の思いにとらわれている。無一物であっても執着のない人、——その人を我はバラモンと呼ぶ。

元詩 われは、(バラモン女の)胎から生れ(バラモンの)母から生れた人をバラモンと呼ぶのではない。かれは「<きみよ>とって呼び

かける者」といわれる。かれは何か所有物の思いにとらわれている。無一物であって執著のない人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

*** (コメント) *****

F334; OS22 地獄 から移動。

F337; きみよと言って呼びかけるものとは、本来なら尊敬しなくてはならない人に“君よ”と呼びかけてしまうバラモンのことです。すなわち、バラモンであるにも関わらず、この世(三次元)的な上下しか理解できず、靈格の区別が分からない、威張った似非バラモンの典型を表しているのです。

執著を執着と書き換えます。

★ 詩番号 **F338 (B146, D, O404, OS26)**、**F339 (B147, D, O405, OS26)**、**F340 (B148, A, O409, OS26)**

[[@ FS 24 バラモン]]

F338* 在家者・出家者のいずれとも不要に交らず、住居にこだわらずに修行し、欲の少ない人、——その人を我はバラモンと呼ぶ。

元詩 在家者・出家者のいずれとも交らず、住家がなくて遍歴し、欲の少ない人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

F339 強くあるいは弱い生きものに対して暴力を加えることなく、無益な殺生を行うことも、行わせることもない人、——その人を我はバラモンと呼ぶ。

元詩 強くあるいは弱い生きものに対して暴力を加えることなく、殺さずまた殺させることのない人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

F340 この世において、長かろうと短かろうと、微細であろうとも粗大であろうとも、浄かろうとも不浄であろうとも、すべて与えられていない物を取らない人、——かれをわれはバラモンと呼ぶ。

元詩 書換えなし

*** (コメント) *****

F338; 「在家者・出家者のいずれとも交らず」だと、相互にとって、この世の修行の意味がないのです。この世の修行は、交わってこそです。ただ、必要以上に交わらないように心がけないと、情や執着が生まれてしまうことを論じているのでしょう。

「住家がなくて遍歴し」は、“住家がない”と言うことにこだわりが生じてしまうので、「住居にこだわらずに修行し」と書き換えます。

F339; 暴力は、不当な武力と定義しました。全く、“生き物を殺さず殺させることのない”なんて無理ですから、無益にという言葉をつけておきます。

F340; コメントなし

★ 詩番号 **F341 (B149, B, O408, OS26)** [[@ FS 24 バラモン]]

F341* 粗野ならず、ことがらをはっきりと伝える真実のことはを発し、ことばによって何人の心を害する意のない人、——その人を我はバラモンと呼ぶ。

元詩 粗野ならず、ことがらをはっきりと伝える真実のことはを発し、ことばによって何人の感情をも害することのない人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

*** (コメント変) *****

地獄→悪いところ とします。

★ 詩番号 **F342 (B150, B, O388, OS26)** [[@ FS 24 バラモン]]

F342 悪を静め、瞑想と慎みが完成したのでバラモンと呼ばれ、正しい教えのもとで出家し努め励むので、修行僧と呼ばれる。

元詩 悪を取り除いたので<バラモン>(婆羅門)と呼ばれ、行ないが静かにやまっているので<道の人>(沙門)と呼ばれる。おのれの汚れを除いたので、そのゆえに<出家者>と呼ばれる。

*** (コメント変) *****

バラモンと修行僧の定義の一つを表した詩として、付録4に合うように、全面的に書き換えました。

★ 詩番号 **F343 (B158, B, O384, OS26)** [[@ FS 24 バラモン]]

F343 バラモンが、瞑想と智慧を得ることについて彼岸に達した(=瞑想を完成する)ならば、その人はよく知る人であるので、その人の束縛はすべて消え失せるであろう。

元詩 バラモンが二つのことがら(=止と観)について彼岸に達した(=完全になった)ならば、かれはよく知る人であるので、かれの束縛はすべて消え失せるであろう。

*** (コメント変) *****

延暦寺では、「止」とは禅定、「観」とは智慧と、教えられています。

悟りのよすが・八正道・五根で当てはめると、「止が定と念、観が慧」ということになります。

バラモンであるならば、智慧が湧くように瞑想もしくは禅定（念、定）を行い、智慧を得ることを繰り返し、ブッダへと歩みを進めましょうという意味の詩です。

瞑想の完成とは、瞑想により智慧が得られることとします（これは、実は、そう簡単ではありません。）。

★ 詩番号 **F344 (B159, D, O400, OS26)**、**F345 (B160, D, O385, OS26)**、**F346 (B161, D, O386, OS26)**

[[@ FS 24 バラモン]]

F344 慎みと瞑想を完成させ、汚れを消滅させて最後の身体に達したバラモン、—その人をわれはブッダと呼ぶ。

元詩 怒ることなく、つつしみあり、戒律を奉じ、欲を増すことなく、身をととのえ、最後の身体に達した人、—かれをわれは<バラモン>とよぶ。

F345 彼岸(カナタノキシ)もなく、此岸(コナタノキシ)もなく、恐れもなく、束縛もないバラモン、—その人をわれはブッダと呼ぶ。

元詩 彼岸(カナタノキシ)もなく、此岸(コナタノキシ)もなく、彼岸・此岸なるものもなく、恐れもなく、束縛もない人、—かれをわれはバラモンと呼ぶ。

F346 念い静かで、塵垢(チリケガレ)なく、常に為すべきことをなし、最高の目的である解脱に達した人、—かれをわれはブッダと呼ぶ。

元詩 静かに思い、塵垢(チリケガレ)なく、おちついて、為すべきことをなしとげ、煩惱を去り、最高の目的を達した人、—かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

*** (コメント変) *****

F344; 仏道では、「慎み」=「戒」と考えることが、実は「戒」の本当の意味だということに気づきました。僧団内の決まりを「戒」としてしまったために、この字が悪事を働く僧団の印象を引きずってしまい、悪い雰囲気がある漢字になってしまったのでしょうか。余分だと判断した言葉はすべて削除しました。

F346; “最高の目的”とは、輪廻転生外に出て、解脱することです。

“なすべきこと”とは、生まれてきて為さなくてはならない各個人の課題のことでしょう。

F344; FS20 真人の詩 F276 では、真人のための詩として掲載しています。

FS25 ブッダ

★ 詩番号 **F347 (B349, A, O353, OS24)** [[@ FS 25 ブッダ]]

F347 我は全てに打ち勝ち、全てを知り、あらゆることに関して汚されていない。全ての執着を捨てて、汚れが尽き、解脱している。自らさとしたのであって、誰を（師と）呼ぼうか。

元詩 われはすべてに打ち勝ち、すべてを知り、あらゆることに関して汚されていない。すべてを捨てて、愛欲は尽きたので、こころは解脱している。みずからさとしたのであって、誰を（師と）呼ぼうか。

*** (コメント) *****

OS24 愛執 から移動。

“すべてを捨てて、愛欲は尽きたので”→“全ての執着を捨てて、汚れが尽き”と書き換えます。

★ 詩番号 **F348 (B162, D, O179, OS14)**、**F349 (B163, A, O180, OS14)** [[@ FS 25 ブッダ]]

F348 ブッダの勝利は敗れることがない。

ブッダの境地はひろくて涯しがない。

足跡をもたないかれを、いかなる道によって誘い得るであろうか？

元詩 ブッダの勝利は敗れることがない。この世においては何人も、かれの勝利には達しえない。ブッダの境地はひろくて涯しがない。足跡をもたないかれを、いかなる道によって誘い得るであろうか？

F349 誘うために網のようにからみつき執着をなす妄執は、その人にはどこにも存在しない。ブッダの境地は、ひろくて涯しがない。足跡をもたないかれを、いかなる道によって誘い得るであろうか？

元詩 誘うために網のようにからみつき執着をなす妄執は、かれにはどこにも存在しない。ブッダの境地は、ひろくて涯しがない。足跡をもたないかれを、いかなる道によって誘い得るであろうか？

*** (コメント変) *****

F348; 「この世においては何人も、かれの勝利には達しえない。」と言ってしまうと、この世でブッダになることはできないと宣言していることとなります。しかし、我々人間は、ブッダを目指して生きているのですから、この矛盾する部分は削除とします。

F349; 実際には「執著」を「執着」と書き換えています。

★ 詩番号 **F350 (B135, A, O387, OS26)** [[@ FS 25 ブッダ]]

F350 太陽は昼にかがやき、月は夜に照し、武士は鎧を着てかがやき、バラモンは瞑想に専念してかがやく。しかしブッダはつねに威力もて昼夜に輝く。

元詩 書換えなし

*** (コメント) *****

ブッダ> バラモンです。ここを履き違えてはいけないと言う詩です。

★ 詩番号 **F351 (B167, D, O403, OS26)**、**F352 (B169, D, O397, OS26)**、**F353 (B168, D, O414, OS26)**

[[@ FS 25 ブッダ]]

F351 明らかな知慧が深くて、聡明で、種々の道に通達し、最後の目的を達した人、——その人を我はブッダと呼ぶ。

元詩 明らかな知慧が深くて、聡明で、種々の道に通達し、最後の目的を達した人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

F352 すべての束縛を断ち切り、恐れることなく、執着を超越して、とらわれることの無い人、——その人を我はブッダと呼ぶ。

元詩 すべての束縛を断ち切り、恐れることなく、執着を超越して、とらわれることの無い人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

F353 この障害・険道・輪廻(サマヨイ)・迷妄を超えて、渡り終わって彼岸に達し、瞑想・熟考し、興奮することなく、疑惑なく、執着することなく、心安らかな人、——その人を我はブッダと呼ぶ。

元詩 この障害・険道・輪廻(サマヨイ)・迷妄を超えて、渡りおわって彼岸に達し、瞑想し、興奮することなく、疑惑なく、執着することなく、心安らかな人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

*** (コメント変) *****

OS26 バラモンの章から移動しました。バラモンは社会的立場なので、このように謳われる人たちがバラモンになっているとは限りません。当然ですが、ブッダの内容なので、ブッダの章に移しました。

★ 詩番号 **F354 (B171, D, O417, OS26)**、**F355 (B172, D, O418, OS26)**、**F356 (B173, D, O419, OS26)**、**F357 (B174, D, O420, OS26)**、**F358 (B176, D, O422, OS26)**、**F359 (B177, D, O423, OS26)** [[@ FS 25 ブッダ]]

F354 人間の絆を越え、天界の絆を越え、すべての絆を越えた人、——その人を我はブッダと呼ぶ。

元詩 人間の絆を捨て、天界の絆を越え、すべての絆をはなれた人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

F355 <快樂>と<不快>にとらわれることなく、清らかに涼しく、全世界にうち勝った英雄、——その人を我はブッダと呼ぶ。

元詩 <快樂>と<不快>とを捨て、清らかに涼しく、とらわれることなく、全世界にうち勝った英雄、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

F356 生きとし生ける者の生死をすべて知り、執着なく、良く生きし人、覚った人、——その人を我はブッダと呼ぶ。

元詩 生きとし生ける者の生死をすべて知り、執着なく、よく行きし人、覚った人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

F357 神々も天の伎楽神(ガンダルヴァ)たちも人間もその行方を知り得ない人、煩惱の汚れを滅ぼしつくした人、——その人を我はブッダと呼ぶ。

元詩 神々も天の伎楽神(ガンダルヴァ)たちも人間もその行方を知り得ない人、煩惱の汚れを滅ぼしつくした真人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

F358 牡牛のように雄々しく、気高く、英雄・勝利者・汚れの無い人・解脱者——その人を我はブッダと呼ぶ。

元詩 牡牛のように雄々しく、気高く、英雄・大仙人・勝利者・欲望の無い人・沐浴者・覚った人(ブッダ)、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

F359 前世の生涯を知り、また天上と地獄とを見、生存を滅ぼしつくすに至って、直観智を完成した聖者、完成すべきことをすべて完成した人、——その人を我はブッダと呼ぶ。

元詩 前世の生涯を知り、また天上と地獄とを見、生存を滅ぼしつくすに至って、直観智を完成した聖者、完成すべきことをすべて完成した人、——かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。

*** (コメント) *****

共通;「かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。」を「その人を我はブッダと呼ぶ。」と書き換えます。

F354;「捨て」、「越え」、「離れ」と表現を変える意味がよくわかりませんので、全て「越える」とします。

F355;詩中の「とらわれる」対象がわかりませんので、「快樂と不快にとらわれない」と、対象を明記して、文章を整えました。F356;「よく行きし人」の意味がわかりませんので、「よく生きし人」とします。

F358;大仙人、沐浴者を削除。欲望のない人→汚れのない人、さとった人(ブッダ)→解脱者と書き換えました。

第4部 付録

付録1 魂と脳と守護霊 最終版

これは、<https://newbuddhawords.blogspot.com/2018/11/blog-post.html> に載せた記事です。

1. はじめに

私がマシューさんに、「人間の魂と身体、また、守護霊と言われる方との関係をはっきりとさせてみてはどうですか？自分と自分の先祖のことについても、あなたは先祖と自分を切り離して考えているところがありますが、それは甚大な誤解なのですよ。」と言われて、2017年6月19日現在ですでに一年以上が経っていました。

私自身も、自分と先祖、身体を持たないバックアップしている存在との関係には強い興味を持っていました。

そこで、二つの命題

人間の魂と心とは何か？

人間の身体と心の繋がりはあるのか、否、あるのは確かですが、どういう関係なのか？を立てました。

壮大な命題であると同時に、現在の人間の科学では、残念ながら、証明は不可能です。したがって、この記事も科学的バックアップは受けられないでしょう。でも、腑に落ちる説というものを、私の審神者を使った上で、情報を集め、考えをまとめてみたいと思った次第です。

なせならば、今後生きていく私たちが有意義な人生を送るための情報になると確信したからです。さらに、重大な病気で苦しんでいる方々にとっても有益ではないかと考えたのです。

でも、半年くらい思索を続けた2017年9月あたりに、「とても大変な課題に手を出してしまった。」と、かなり後悔した時期がありました。

審神者を行い、ネットで色々調べても、誰も答えが出せないのを良い事に、似て非なるような説が飛び交う世界が広がっているではありませんか。悪魔の広めている情報を拾い集めながら正しいものを探るという作業は、審神者を使う私にとっては、神経に与えるダメージがとても強いのです。「なかったことに。」なんて思ったこともあります。マシューさんはきつとアメリカ上空でこのネットを見ていると思うと…。「まだ宿題、終わってないよ！」って、お声が聞こえる私でした。

しかし、当時、並行して「真理のこぼ」の読み直しを始めました。その時に、達成するためには、変じ改めるべし、いろいろな情報（山）を重ね合わせて、正しいもの（お釈迦様の教えとマシューさんからの宿題の解）との出会いをする時期なのだというご託宣が降りてきました。

「真理のこぼ」を変じ改めるためには、どうしても、マシューさんからの宿題の解が必要であることに気づき、これらが別立てで存在しているのではなく、同じ源から発生している事を理解しました。

上記の命題の解を考えるにあたって、情報を細かく調べて吟味し、熟考しますが、核は審神者の情報になりました。

また、私の書いた「魂と脳と守護霊」シリーズの記事は、過去に訂正がたくさん入っていて、混乱した状態でした。この状態にピリオドを打つために、最終版記事を書きますが、この記事は「再考 真理のこぼ」の付録1としても使用します。

2. 人間の霊的システム

2-1 守護神

まず、守護神と心を導入しましょう。本守護神+正副守護神については、資料に載せた、ひふみ神示冬の巻第1帖を参考にしてください。

我々人間に働き掛ける霊的存在は、守護神だけではなく、外部霊もあります。身体を持たない霊体ですが、これは、正しい方向に導こうとする光系外部霊（神）と、悪い道に誘う闇系外部霊（神）がいます。副守護神は、闇系外部霊と共鳴しやすいです。それを起こさないように頑張るのが魂や正守護神です。

働きかけの詳細は、主に「4. 連携による人間システムの維持」で論じ、図2にまとめました。

2-2. 心

「真理のこぼ」第3章「心」では、訳者の中村元氏が注釈で、漢訳版で「心意品」と記されている題名を「心」と意識したことを記されています。中村氏は、別の箇所でも、漢訳では「意」と表記されている部分を「心」と意識しています。

「意」というと認識できる意識（顕在意識）を思い浮かべてしまいます。それはまんざら間違えではなく、「意」を心の音と漢字の成り立ち通りに捉えてたら、音がある心、つまり気づきやすい心とでも言えば、顕在意識となるのがお分かりかと思えます。一方、中国人は心を潜在意識と捉えたのだと思えます。ですから、題名は「心意品」となっているのでしょうか。漢訳は、あまりにも的確な訳出が多く、脱帽の連発です。

しかし、ここではあえて、潜在意識も含めたもの、つまり、

心（自分）＝顕在意識＋潜在意識；定義（1）

とします。

古来、日本人は、わざわざ定義しなくても、心は顕在部分と潜在部分の集合体と感じていたのではないかと推測しています。「心意」と書かれるより、「やまと言葉」の「心」を使いたかった、中村氏の訳出も、日本人としては非常に賛同できます。ただし、心という概念があやふやな現代では危険な訳出になってしまいました。

2-3. 魂

次に、“魂”について考えましょう。資料のひふみ神示では「人間の肉体は想念の最外部、最底部をなすものであるから肉体的動きの以前に於て霊的動きが必ずあるのであるぞ」と記されています。体はDNAによって、設計されています。これは先祖から受け継いだものが多いでしょう。

また、DNAは体質を決めるDNAと、働きが全くわからないDNAがあることがわかっています。ここで、DNAを導入し、議論を展開してみましょう。前者は数パーセントしかないのですから、働きがわからないDNAの多さにびっくりします。そこで、DNA①を三次元の肉体を設計する（頭の良し悪し、体の丈夫さ、運動神経等）とDNA②をいまだに役割が特定できていないものに分類しましょう。

私は、資料のひふみ神示の情報から、神様やご先祖様からの指令やその人の元来の性格などは、DNA②に情報があるのではないかと考えています。したがって、DNA②は、生きている間も、神霊界や幽界との交信、外部霊との、そして潜在意識とも交信を行なっているものだと考えています。ただ、顕在意識への働きかけはあまりなく、顕在意識が認識しにくいと考えています。

ここで、潜在意識、顕在意識、そしてDNA①とDNA②を合わせて、魂（＝自己）と考えます。つまり、
魂（＝自己）＝心（＝自分）＋DNA①＋DNA②；定義（2）

3. 人間の身体システムと霊性

3-1 人型図上の指によるエネルギー測定を試行

今回の題目に取り掛かる前に、白い紙に人型を書いて、目をつぶって人型の上を自分の指で撫でていく試行を行いました。どうして、そんな事をしたのかと言えば、指先に意識を集中すると何かを感じ取ることができるのかなと言う、疑問からです。ですから、このテキストのためにこの試行を行なったわけではないのです。しかし、私の指は、違いを感知しました。ちよつとした振動が伝わってくる場所があったのです。3回の試行ともほぼ同じ結果をえました。

- ・心臓部は全く疑う余地がないほど、強く振動を伝えてきました。
- ・喉部が次に強い振動を伝えてきました。
- ・頭とお腹は同じくらいの振動ですが、心臓と喉に比べるとだいぶ小さくなりました。
- ・手と股間は同じくらいですが、弱かったです。
- ・足は、振動を感じませんでした。

図1に人型図上の指によるエネルギー測定を試行の結果を書き込みます。

そして、前述した半年の停滞期間に、この試行結果が、顕在意識や潜在意識、守護神と関係があるのではないかと考えるようになりました。

この辺りは、私が訂正を入れまくったことからわかるように、非常に苦労した部分です。しかし、初期にはツイッターでの記事だったので、バラバラになっています。ちなみに、この記事に至るまでの最終の記事は<https://newbuddhawords.blogspot.com/2017/09/2017.html>です。

脳も身体の一つの器官ですから、私が感じた身体から放出されるエネルギーが頭の部分で他の器官よりは多く感じられたのは当然だと思います。しかし、心臓はさらに一桁以上多いエネルギーです（紙の人型を使って、指で感知してみてください。心臓だけは分かる方も多いと思います。）。これには本当に驚愕しました。頭が一番大きなエネルギーを出していると思っていたので、とても意外でした。

3-2 心臓と脳

それほどまでに特異な心臓ですから、心臓には何があるのかな？と調べるのは簡単で、二つの文献がありました。

一つ目は、「真理のことば OS03 章 心 O37」の詩の中村氏による注釈に、「胸の奥の洞窟；（略）古ウパニシャド以来、アートマン（心）は心臓の内にある空処に住すると考えられていた。それを受けている。」と記述があったのです。

2つ目は、マシュー君のメッセージを掲載してらっしゃる森田玄さんのブログ（<http://moritagen.blogspot.jp>）2017/5/4の記事の一部が参考になりますので、ご紹介します。

「心（ハート）に聞きなさい」と昔からあらゆる文化で言われていますが、ではどうしたら聞こえるのか、その方法が具体的に示されたことはありません。

英語ではハート（心）と心臓は同じ言葉（Heart）ですが、日本語は心と心臓は別です。でも、どうして昔の人は「心の臓器」と呼んだのでしょうか？

過去20年間の心臓神経学の発達によって、心臓には「心臓脳」と呼ばれる脳と同じ神経節ネットワークがあること、心臓と脳が常にコミュニケーションしていること、そして心臓から脳に送られる情報量は脳から心臓に送られるものより100倍以上も多いなどが発見されています。

単なる血液の循環ポンプだと思われていた心臓が、脳と全身の機能だけでなく、人間の感情、認知、行動、反応、能力に決定的な影響を与えていることが科学的に実証されています。

以上、森田氏の文献から、脳と心臓の連携が強いのは、頭で理解した事象に対して、それによって焦った時に心臓がドキドキするばかりで適切な対応策ができないなんてことから、容易に想像できるのです。つまり、脳と心臓は、顕在意識と潜在意識と同様に不可分であると言えるのです。

さらに、一つ目の参考文献に出てくるアートマンは、調べると意識の最も深い内側にある個だと言う、難しい表現が出てきますが、これも中村氏がカッコ書きで心であると注を入れてくださっていますので、アートマンは潜在意識であり、心臓にいと読み取ることができるのです。そして、顕在意識は、常に表に出て、感じることもできるので、脳にいと考えると問題ないです。

ゆえに、潜在意識は心臓を中心にして、顕在意識が脳を中心にいると言えます。

また、心臓は身体を存続させるかどうかのスイッチです。このスイッチは、基本的に本守護神が管理しているようです（審神者です。）。もちろん、正守護神や自分の意見を聞きつつも、最終的な決定権を持つのが、本守護神のようです。

3-3 丹田

次に、丹田（下っ腹）です。

禅定（瞑想）を行う時に、丹田に意識を集中するのは、禅定のいろはです。

私は、気分的に荒んでいる時というのは、必ず腸の調子が悪くなります。腸の調子が良くなってくると、非常に意識は明朗になってきます。私の場合、腸の不調は、私の守護神さんたちが、悪魔たちに攻撃をされている時ではないかと考えています。

これらのことから考えると、守護神達が出現する場所で、心に働きかける場所が主に下っ腹（丹田）だと考えられます（実は、審神者では、すぐにこの情報が来るのです。）。

そのため、魂が守護神と相談したいときは、下っ腹に心（意識）を集中させるのが有効で、禅定のいろはに「丹田に意識を集中する。」があるのだと思います。

よって、実は、本当に重要なことはハート（心臓）に聞くのではなく、下っ腹に意識を集中して考えることが有意義だと思います。

ちなみに、脳（器官）と心臓（魂）の連絡は、物理的に神経細胞が介しているようです（森田氏の文献）。しかし、下っ腹と心臓の間は、両端が魂なので、テレパシーのような別の情報伝達手法がメインではないかと思っています。

4. 連携による人間システムの維持

4-1 身体への情報伝達

次に、我々が日常過ごすために行っている、情報伝達と行動を考えてみます。

末端器官の情報が集まり、それらを動かすメイン器官はやはり脳だとは思いますが。

では、過程を詳しく見ましょう。情報に応じた最適な物理的反応は、守護神たちから魂へのアドバイス（基本は潜在意識に送られるようです）や過去の経験など潜在意識にある情報を、魂が潜在意識から顕在意識へと送り、それから魂が最適な反応を割り出し、脳に命じて、脳が身体の一部々に命じるという形ではないかと思っています。しかし、これらが、潜在意識のみで行われる場合もあるでしょう（身体の不調に関する対応など）。

身体の器官・末端の細胞が発する情報は何も外界の音や映像などの五感情報だけではなく、守護神からの働きかけの情報もあるようです。その情報は、身体のすべての部分で受け取ることができ、その情報は魂の潜在意識の領域に伝わり、それが圧倒的に多いようです。それらを潜在意識から顕在意識に変換する作業を担っているのも魂です。身体の各器官を通して得られた守護神さんからの情報は、一度、潜在意識に情報を運んで、そこで過去の経験などのデータとともに情報処理して顕在意識に運び、そこから脳へ神経で伝達して、身体の器官へと命を下すという方式で身体の動きが制御されていると思います。時間がかかっても正確な行動がとれるのでしょう。

ただ、潜在意識などの吟味を介さずに直接に顕在意識に情報が届くのも例外的にあると思います。怖くてドキドキするか、もう嬉しくて心臓がバクバクするような時は、守護神、魂、他の霊体の身体の一部からの情報が、顕在意識に直接届け

られた場合です。論理的なバックアップがなく、何だか感じるというものです。虫の知らせもこの類だと思います。

脳を通さずに、守護神や魂は体の各器官へ物理的対応を指示することもあるでしょう。“反射”と言われる反応（これは、熱いものに触れて、すぐに手を離し、その後熱いと感じる）や“火事場のバカ力”と言われるものがこれらに属するでしょう。こちらも緊急性が高い時です。

また、精神障害には、

1. 身体の脳が誤動作、故障する場合と、
2. 心の歪みが魂の歪みになり生じる誤動作の場合

の2通りがあるのではないかと思います。どちらも、霊的な作用があるのですが、1の場合は死に至るために生じた場合が多いと考えています。2.の場合は、軽症の場合は、心の歪みを解き放つことで治る可能性が高いと考えています。

最後に、心臓死より脳死が先というのは、魂が駆動部である脳のスイッチを切るからでしょう。そして、心臓のスイッチは守護神が切ります。これは、魂が安全に身体から抜けるためです。

4-2 守護神と魂と身体と DNA の連携

前節では、どんな（論理的も）思考も、潜在意識の大きなタンクがなければできないということがわかってきました。思考を司っているのは、主に潜在意識で心臓部分であろうということは、私にとっては驚愕の事実です。なぜならば、日常的に使われる“頭を使う”という表現を疑ったことはなく、信じきっていたからです。

ここまで議論してきた結果、顕在意識と脳によって身体の器官を使って魂の情報が体現されると言えます。その一方で、守護神>魂>脳という厳然とした関係があるために、脳は魂を制御できないのです。

しかし、外部と魂との通路も脳です。よって、魂を封印する、もしくは攻撃する糸口が、脳（顕在意識）です。顕在意識から潜在意識を壊すのです。洗脳するために、プロパガンダを流したり、教育を劣化させているのです。これにより、顕在意識での思考回路に滞りを作り、顕在意識による潜在意識の書き換えなども行ってしまうのです。どうしても考えがスムーズに流れなければ、その原因をきちんと見直して、その事象を取り扱った時に、頭の中がどう動くかを観察してください。これによる洗脳防衛は有効だと思います。

他にも、様々な薬物や電磁波により身体の末端の器官に誤信号を脳に送らせたり、DNAを損傷させたり、脳に異常を加えて、潜在意識を攻撃する方法もあります。

また、脳はDNAの管理業務をしていると思います。書き換えもできるようです。例えば、魂が出した解決策が本守護神や正守護神の意図することであれば、脳にDNAの書き換えを命じることが可能で、その命令に従って、脳はDNAを書き換えます。奇跡的なガンの治癒などは、この例だと思います。

同様に、悪魔の言いなりになって、脳がDNAを書き換えてしまうこともあります。この場合は、奇跡的な飛躍ではなく、連続した劣化が主になります。

このようなシステムのもとで、我々の三次元の体が保たれ、修行ができています。すごいシステムだと感じるばかりです。

最後に、図1に魂と守護神と身体部位のまとめ図で、体の各器官の役割や人型図上の指によるエネルギー測定結果を示し、図2に守護神と魂とDNAと外部霊の情報伝達図を載せました。

ちなみに、二つの命題の答えは、

- ・人間の魂と心とは何か？→定義1と定義2と定義したというのが答え
- ・人間の身体と心の繋がりはあるのか、否、あるのは確実ですが、どういう関係なのか？→「第4 連携による人間システム」の維持に詳しく論じました。

以上です。お付き合いいただきありがとうございました。

マシューさん、ありがとうございました。 2018/11/14（合掌）

資料 – ひふみ神示 第30巻 冬の巻第一帖 –

宇宙は霊の霊と物質とからなっているぞ。人間も又同様であるぞ。宇宙にあるものは皆人間にあり。人間にあるものは皆宇宙にあるぞ。人間は小宇宙と申して、神のヒナガタと申してあらう。人間には物質界を感知するために五官器があるぞ。霊界を感知するために超五官器があるぞ。神界は五官と超五官と和して知り得るのであるぞ。この点 誤るなよ。霊的自分を正守護神と申し、神的自分を本守護神と申すぞ。幽界の自分が副守護神ぢや。本守護神は大神の歓喜であるぞ。

神と霊は一つであって、幽と現、合せて三ぞ。この三は三にして一、一にして二、二にして三であるぞ。故に肉体のみの自分もなければ霊だけの自分もない。神界から真直ぐに感応する想念を正流と申す。幽界を経て又幽界より来る想念を外流と申すぞ。人間の肉体は想念の最外部、最底部をなすものであるから肉体的動きの以前に於て霊的動きが必ずあるのであるぞ。故に人間の肉体は霊のいれものと申してあるぞ。

(…)

人間は霊界より動かされるが、又人間自体よりかもし出した霊波は反射的に霊界に反影するのであるぞ。人間の心の凸凹によって、一は神界に、一は幽界に反影するのであるぞ。幽界は人間の心の影が生み出したものと申してあろうがな。

(…)

故に、人間の生活は霊的生活、言の生活であるぞ。肉体に食ふことあれば霊にもあり、言を食べているのが霊ぞ。霊は言ぞ。この点が最も大切なことじゃから、くどう申しておくぞ

死んでも物質界とつながりなくならん。生きてある時も霊界とは切れんつながりあること、とくと会得せよ。そなた達は神をまつるにも、祖先まつるにも物質のめあてつくるであらうがな。それはまだまだ未熟な事ぞ。

(…)

更に祖先は過去の自分であり、子孫は新しき自分、未来の自分であるぞ。兄弟姉妹は最も近き横の自分であるぞ。人類は横の自分、動、植、鉱物は更にその外の自分であるぞ。切りはなすこと出来ん。

自分のみの自分はないぞ。縦には神とのつながり切れんぞ。限りなき霊とのつながり切れんぞ。故に、神は自分であるぞ。一切は自分であるぞ。一切がよろこびであるぞ。

霊界に於ける自分は、殊に先祖との交流、交渉深いぞ。よって、自分の肉体は自分のみのものでないぞ。先祖霊と交渉深いぞ。神はもとより一切の交渉あるのであるぞ。その祖先霊は神界に属するものと幽界に属するものとあるぞ。中間に属するものもあるぞ。神界に属するものは、正流を通じ、幽界に属するものは外流を通じて自分に反応してくるぞ。正流に属する祖先は正守護神の一柱であり、外流に加はるものは、副守護神の一柱と現はれてくるのであるぞ。外流の中には、動植物霊も交ってくることもあるぞ。それは己の心の中にその霊と通ずるものあるためぞ。

一切が自分であるためぞ。常に一切を浄化せなならんぞ。霊は常に体を求め、体は霊を求めて御座るからぞ。霊体一致が喜びの根本であるぞ。一つの肉体に無数の霊が感応し得るのぞ。それは霊なるが故にであるぞ。霊には霊の霊が感応する。又高度の霊は無限に分霊するのであるぞ。

(…)

人間は現界、霊界共に住んで居り、その調和をはからねばならん。自分は自分一人でなく、タテにもヨコにも無限につながってゐるのであるから、その調和をはからねばならん。それが人間の使命の最も大切なことであるぞ。

調和乱すが悪ぞ。人間のみならず、総て偏してならん。霊に偏してもならん。霊も五、体も五と申してあらう。ぢゃが主は霊であり体は従ぞ。神は主であり、人間は従であるぞ。五と五と同じであると申してあろう。差別則平等と申してあらう。取り違い禁物ぞ。

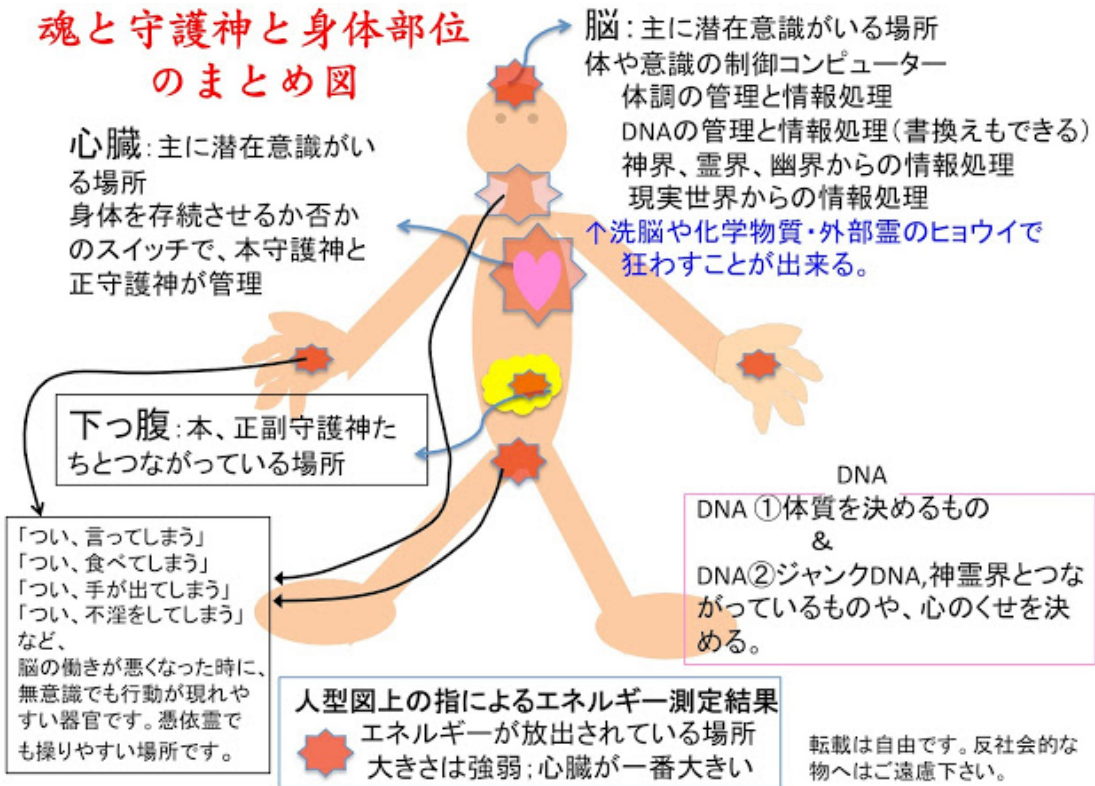


Figure 1: 図1 魂と守護神と身体部位の役割と人型図上の指によるエネルギー測定結果

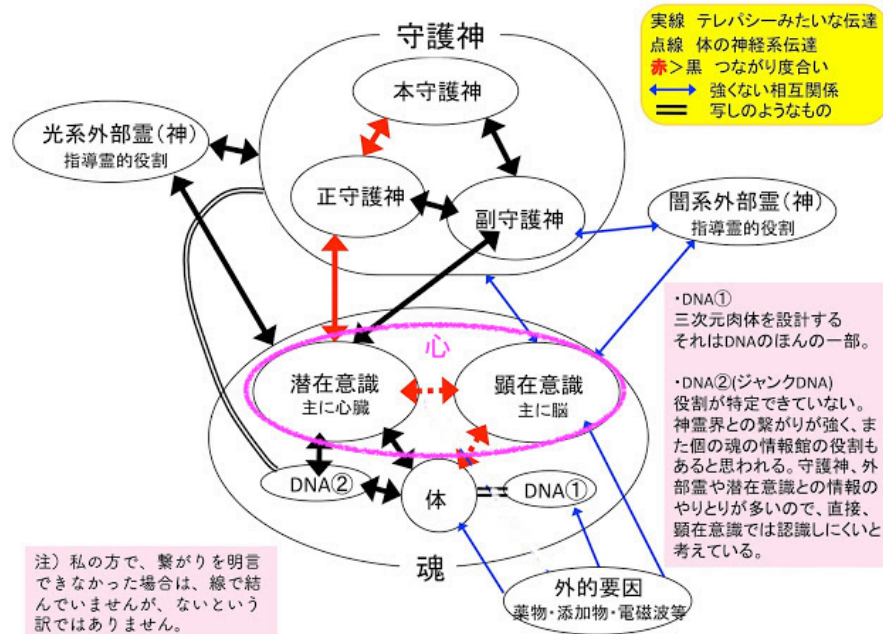


Figure 2: 図2 守護神と魂と DNA と外部霊の情報伝達

付録2 「心を治める」と「自己（魂）を整える」についての考察

「心を治めるのは誰なのか?」、まずは、これを考えます。

心が自治をするのでしょうか?

「心を治める」は、「心を鎮め、護り、制する」ことと、詩 F004 で定義しました。

治められる心は、顕在意識ではないかと、単純に線を引きたくなりますが、私はそのような立場をとっていません。なぜならば、顕在意識と潜在意識にはっきりとした線引きができないと考えているからです。

ですから、治められる心とは、表面に出やすい部分のこと、つまり、主には顕在意識ですが、顕在意識寄りの潜在意識の部分までと考えています。

一方で、潜在意識は身体 DNA からの情報、守護神、外部指導霊、外部霊の情報を察知します。この部分は、もはや神経伝達ではなく、テレパシーという世界でしょう。これらの情報全てを融合させて最もよいと考えられる答えを出すのが魂です。魂の下位置にある心は、魂とは分離不可分ではありますが、この魂の命令に意見はできても、背くことができません。よって、**心を治めるのは魂**だと考えています。

では、どうしたら、魂が正しく心を治めることができるか?このために、魂を正しく整えることが必要なのだと考えています。そこで、さらに、「魂を整えるのは誰か?」という命題がたちます。

私はこれに対して、**魂は魂自身が整える**のではないかと考えています。

ただ、魂というのは、守護神たちと不可分なので、単体として、全く自力で心を治めるのではなく、守護神たちの力を借りて自分で魂が魂を整えると考えています。そのための正しい情報は、必ず自身の中に繋がっている守護神が正流の情報で示しています。しかし、魂が整っていないければ、正流の情報が察知できずに、外流の情報ばかりが察知されます。魂が心を正しく治めないために、心に汚れた溜まると、そちらから魂を荒らす情報が届けられてしまい（外流の情報はもっともらしく声高なのです。）正流の情報がかり消されます。

しかし、不幸にも、外流の情報をもとに心が動いて暴走した時でも、結果や外部の人の反応から、自分がまずかったという情報を顕在意識を中心とする心から送られてきた時が、チャンスでもあります。潜在意識で、それらを熟考します。これがいわゆる反省です。この反省がうまくいくためには、自分は誤ったことをしたという立場に立ち、きちんと考えるという心構えで行うと、驚くほどたくさんの正流の情報が流れてきて、魂が整えられていき、心が正しく治ってくるのです。

また、正流の情報がうまく掴めず、判断に困った場合は、魂は、解決策を保留すべきですが、保留の件は切り離れた上で「心を鎮め、護り、制する」ことにより、なるべく、心を治める努力をするのが最善策だと考えています。

付録3 四諦と仏道

(1) 四諦

四諦（したい）とは、お釈迦様が禅定により得た知恵で構築された概念だと言われています。

お釈迦様は、「この世の中は一切皆苦（いっさいかいく）と捉えましょう。」と提起なさり、この世の中を人間が正しく生きていく方法を説かれました。

四諦とは、字を見れば明らかなように、四つの真理（諦）から成り、それらは、

- (一) 苦しみの原因（苦諦）
- (二) 苦しみの現れ（集諦）
- (三) 苦しみの消滅の原因（滅諦）
- (四) 苦しみを消滅させる方法（道諦：仏道）

と命名され、今日の我々が知るところとなっています。

この世が悪に支配されている時期に、まっとうな人間が生きるには、「悪いこともあれば、いいこともあるさ！」と言った甘い状況ではなく、一切皆苦であると私たちに伝えてくださったのです。

では、ブログ「四諦（四聖諦、苦集滅道）[仏教の基礎知識（2）]」

(http://way-to-buddha.blogspot.com/2011/05/blog-post_21.html)さんを引用しながら、一つずつ、もう少し詳しく書いていきましょう（引用部分はカッコで表します）。

1. 苦諦

「苦諦とは、人生が苦であるということである。

苦とは、人生の真相、現実であり、ブッダの人生観の根本である。そして、これこそ人間の生存自身のもつ必然的な姿である。このような人間存在の苦を示すために、仏教では四苦を説き、さらには四苦八苦を説いている。

四苦とは、次のものである。

- (1) 生（生きること）
- (2) 老（老いること）
- (3) 病（病気になること）
- (4) 死（死ぬこと）

さらに四苦八苦という場合には、次のものを付け加える。

- (5) 愛別離苦（愛する対象と別れねばならない苦）
- (6) 怨憎会苦（憎む対象に出会わなければならない苦）
- (7) 求不得苦（求めても得られない苦）
- (8) 五陰盛苦（人間の生存自身を示す苦、五陰を集めたものすべてが苦）」

五陰（ごうん）は、人間の心身を保つ5つの役割で、色（物質）、受（感受）、想（表象）、行（意志）、識（認識）です。

2. 集諦

「集諦とは、さまざまな悪因を集めたことによって、苦が現れたものであるということである。「集」とは招き集めることで、苦を招き集めるものが、煩惱（「付録4 欲と煩惱」参照）であるというのである。」

3. 滅諦

「滅諦とは、苦のなくなった状態のことである。苦の滅という状態が存在することであり、苦のなくなった状態とは、ニルヴァーナの境地であり、一切の煩惱から解放された境地であり、解脱といえる。」

ただし、解脱は、この世の中では考えられないパワーを得られる状態で、善による解脱と悪による解脱と両者が存在すると私は考えています。仏魔仏教に従うと、悪による解脱をしてしまい、正しい仏道を修めると善による解脱が得られると考えています。

4. 道諦

「道諦とは、苦を滅した状態（ニルヴァーナ）を獲得する方法のことである。つまり、ニルヴァーナへと到る実践的な修行体系を指している。これが仏道と呼ばれるもの、すなわちお釈迦様が体得した解脱への道である。」

この部分がまさに仏道で、「八正道」や、「悟りのよすが」、「五根」がこの部分の教えです！さらに、FS 6 道 詩 F057 で、この中で最も優れている（人を正しく解脱させる）仏道が「八正道」であるとお釈迦様が宣言なさっています。

(2) 仏道

仏道は、四諦の中のひとつで、人を正しく解脱させるための方法です。その中で最も優れているものが「八正道」だと真理のことばの FS 6 道 詩 F057 で謳われています。古来からインドにはヴェータにより、さまざまな教えがあり、「八正道」の他にも、有名なものとして、「悟りのよすが」、「五根」があります。

それぞれをご紹介します。

【1】八正道は8ステップで構成され、それぞれが、

- (1) 正見；正しいものの見方、考え方をもち、物事をありのままに見る。
- (2) 正思惟；正見に基づいた正しい意識を持つ。
- (3) 正語；正見に基づいた正しい考えを持つ。
- (4) 正業；正見に基づいた正しい行いを持つ。
- (5) 正命；正見に基づき、道徳に反する職業や仕事はせず、正当ななりわいを持って生活を営む。
- (6) 正精進；正見に基づいた正しい努力をする。
- (7) 正念；以上の6道の実践し、お釈迦様の教えを心と魂によく理解させて、魂の栄養とし、心を正しく治める。
- (8) 正定；正念により整った魂（自己）が正しく禅定する。これにより、正見を再チェックをしたり、困難な状況などがあれば、高次の存在から、対策を授かったりします。

なお、この説明は マホラ 仕合わせ さん (http://mahorakususi.doorblog.jp/archives/cat_872409.html) を参照させていただきました。

ここで、ブログ記事“「悟りのよすが」、「八正道」、「五根」について”での訂正を、以下に記します。

(<https://newbuddhawords.blogspot.com/2018/05/blog-post.html>)

1 点目 (5) 正命は正しい自分の使命を知る事と記しましたが、私の誤解でした。

2 点目 (2) 正思惟を正念の中に取り込んでいましたが、調べてみると正見によって正しい考え(意識)を持つという事だとわかりました。

【2】悟りのよすがは、次の7ステップで構成されます。

- (1) 択法；教えの中から真実なるものを選び取り偽りのものを捨てること
- (2) 精進；一心に努力すること
- (3) 喜；真実の教えを実行する喜びに住すること
- (4) 軽安(きょうあん)；心身を軽やかに快適にすること
- (5) 捨；対象への捉われを捨てること
- (6) 定；心を集中して乱さな事
- (7) 念；おも(念)いを平らかにすること

【3】五根は、決まり文句として、悟りを得るための5つの力と言われています。この5つのステップとは、

- (1) 信；正しいものを信じるといことなので、正見や択法と同じです。
- (2) 精進；八正道で言えば、正思惟、正語、正業、正命、正精進の部分です。悟りのよすがで言えば、喜、軽安、捨の部分です。
- (3) 念；八正道や悟りのよすがの念と同じ
- (4) 定；五根の定と慧は八正道や悟りのよすがの定の部分です。
- (5) 慧；これは八正道や悟りのよすがの定(禪定)の一部で、高次の存在から知慧が授かることです。

皆様、お釈迦様が、仏道では、八正道が一番優れているとおっしゃった理由がわかった方もいらっしゃるでしょうし、そうでない方もいらっしゃると思います。八正道では正しく〇〇という風に、正しいという言葉大切にしているのです。他の教えも悪くはないと思いますが、具体的に記されていて、人間が一番理解しやすいのが八正道なのかもしれないと、最近では感じています。これら三つの教えを表にまとめましたので参照してください。

人は皆、一番初めに四諦の真実を受け入れて仏道に入るのが理想ですが、そんな人なかなかいません。では、どうしたら仏教を知らないところから仏道に近づいていけるのかというのが、私の重大な関心事でした。色々と経験して考えた結果、苦難に直面した時に、その解決の糸口を、多くの方がこれまでに習得した道徳と知識に求めるのだと思います。もちろん、直接的情報源は、インターネットやTV かもしれませんが。しかし、正しい道を探るとっかかりは、やはり身についた道徳と知識になるのではないかと思うに至りました。そして、まずは「自分は愚かである。」と認識した上で他の中の自分を知り、解決策を探るという道程が最も効率的ではないかと感じています。

最後になりますが、一度、正定までたどり着いたから OK という世界ではありません。また、正念と正定は不可分です。正念と正定によって正見を見直して、残りの5道も見直してということを生きている限り繰り返す、魂の成長を持続させることが一番大切だと考えています。悟りのよすがも五根も同様です。

Figure 3: 八正道と他2道のステップ対応

名称	悟りのよすが	八正道	五根	
意味	悟りを得るための頼りになる指針	人が正しい生き方をするための8つの実践法	悟りを得るための5つの力	
スタート地点	自分が愚かだと知る。			
各成分とその説明(左詰め成分は、各成分で同等と考えたものを高さで揃えて表しましたが、それより下位の喜、軽、捨、正思惟の高さは、フオーセット上のもので、同じ高さだと言った同等という意味ではありません。)	択法(正しい教えを選択する)	正見(正しく世の中を見る)	信(正しい教えを信じる。キリスト教で言えば、信仰宣言；クレドの部分)	
	精進 喜(真実の教えを実行する喜びに住すること。精進を行うための指針の1つ。) 軽安(心身を軽やかに快適にする。精進を行うための指針の1つ。) 捨(対象へのこだわりを捨てること。精進を行うための指針の1つ。)	正語(正しく言葉を使う)	正業(正しい行いをする)	精進
		正命(正しい仕事に従事する。)		
		正精進(正しい精進をする)		
		正思惟(正しく物事の根本を意識(脳)と無意識(心)で考える。正念を行うための指針の1つ。)		
	念(正しい念を保つこと)	正念(正しい念を保つこと)	念(正しい念を保つこと)	
	定(意識を自分の命に集中させて心を乱さない。)	正定(意識を自分の命に集中させて心を乱さない。)	定(意識を自分の命に集中させて心を乱さない。)	
	悟りの領域	慧		

付録4 人間の分類

(1) 分類方法

まず、「仏道が行なった人々の分類法が、一体、どのようなものなのか？」この点について理解が進まないと、「第3節 さまざまな人」について、再考が不可能であると感じました。しかし、私の読んだ範囲ではあるのですが、仏教の書物を読んでもこの点を明記しているものが見当たりませんでした。

そこで、「真理のことば」に従って、私が入分類を構築してから、第3節を再考することにしました。分類を構築するにあたり、分類が一種類だけでは精度を上げられないので、大きく4つの分類を導入しました。それが、(a) 精神性(霊格)分類法、(b) 真理の追求分類法、(c) 仏弟子分類法、(d) 社会的立場分類法です。この分類によって、「第3節 さまざまな人」の全詩が一通り分類可能となりました。

真理のことばの章名や詩中で使われている、「愚かな人」と「賢い人」と「真人」、「道を実践する人」、「仏弟子」、「出家者」、「在家者」、「バラモン」、「修行僧」、「サモン」と、(a)～(d)の対応を、下記に示します。

(a) 精神性(霊格)分類法 「愚かな人－賢い人－真人」

(b) 真理の追求分類法 「道を実践する人－道を実践しない人」

(c) 仏弟子分類法 「在家か出家に関わらず、正しいお釈迦様の教えに従って生きる人達－そうでない人たち」

(d) 社会的立場分類法 「出家者(「修行僧」と「バラモン」)－在家者」

○ 出家者 経済活動には参加せず、本人の行ったことに対する報酬ではなく、在家者の捧げもの(お供物)や先祖から引き継いだもののみで生きる生活形態の人たち

- ・バラモン 出家者の中で、最高の立場に付けられた役職的名称
- ・修行僧 平(ひら)の出家者
- ・サモン ヴェータ以外の修行僧のことを呼んだという説が最も有力

○ 在家者 経済活動に参加し、生業により生活する人たち

以下に、上述の補足を記します。

インドの身分制度のカースト制は、社会的立場分類法の一つになるでしょう。

お釈迦様は、しばしば「サモン」と呼ばれてらっしゃるのは、ヴェータを批判した修行者だったからだだと合点がいきます。

また、インドではバラモンは、今も昔も、血筋によりバラモンなのですが、血筋は重要なファクターだとしても、せめて分類(a)も使って、「真人になっていること」の条件も必要だという当然の結論に至ります。ただ、その評価は難しいですから簡単には行きませんが、本来は、バラモンは出家者で真人であることが理想だと思います。

そして、「真人」が、より霊格的に進化して、超人的な作用が出てくると「ブッダ」という存在になると考えています。つまり、「ブッダ」は、「バラモン」の延長上ではなく、「真人」の延長線上に位置すると、私は考えています。両者のおよその目安は、

ブッダ 煩悩(心の汚れ、執着、無知など)、悪いカルマまで完全に消滅させた人で超人的な力を発揮する人

真人 煩悩(心の汚れ、執着、無知など)をほぼ消滅させた人

と考えています。「真人」と「賢い人」の境は、適時、念定(禅定)ができるか否かで幅があると考えています。

出家的生活を送ったほうがブッダへの到達がはやくなると感じていますが、ブッダになるには、出家者を通らなくてもなれると考えています。

お釈迦様は、日々の生活を正しく過ごすことが最も大切だと主張され、「怠らずに励む→努め励む→学び努める」という具体的な言葉の上に具体的なアドバイスを添えて、在家の人達に教えを述べられたと私は考えています。

在家か出家に関わらず、正しい真理に従って、正しい道で生きている人達を総称して「道を実践する人」としたのですが、「道を実践しない人」との分かれ目は、愚かな人と賢い人のあたりだと考えています。愚かな人と賢い人の境は、詩F226で示されたように、自分が愚かであると認識することとなっています。お釈迦様は、賢愚の境界を非常にはっきりと宣言していることを確認してください。

「仏弟子」は、実は「道を実践する人」に含まれるのですが、この中でも正しいお釈迦様の教え(中核は、「怠らずに励む→努め励む→学び努める」)のように生活を送り、四諦の真実を受け入れ、八正道を進めることに帰依して、それに沿って生きている人たち、つまり正しい仏教徒と捉えました。

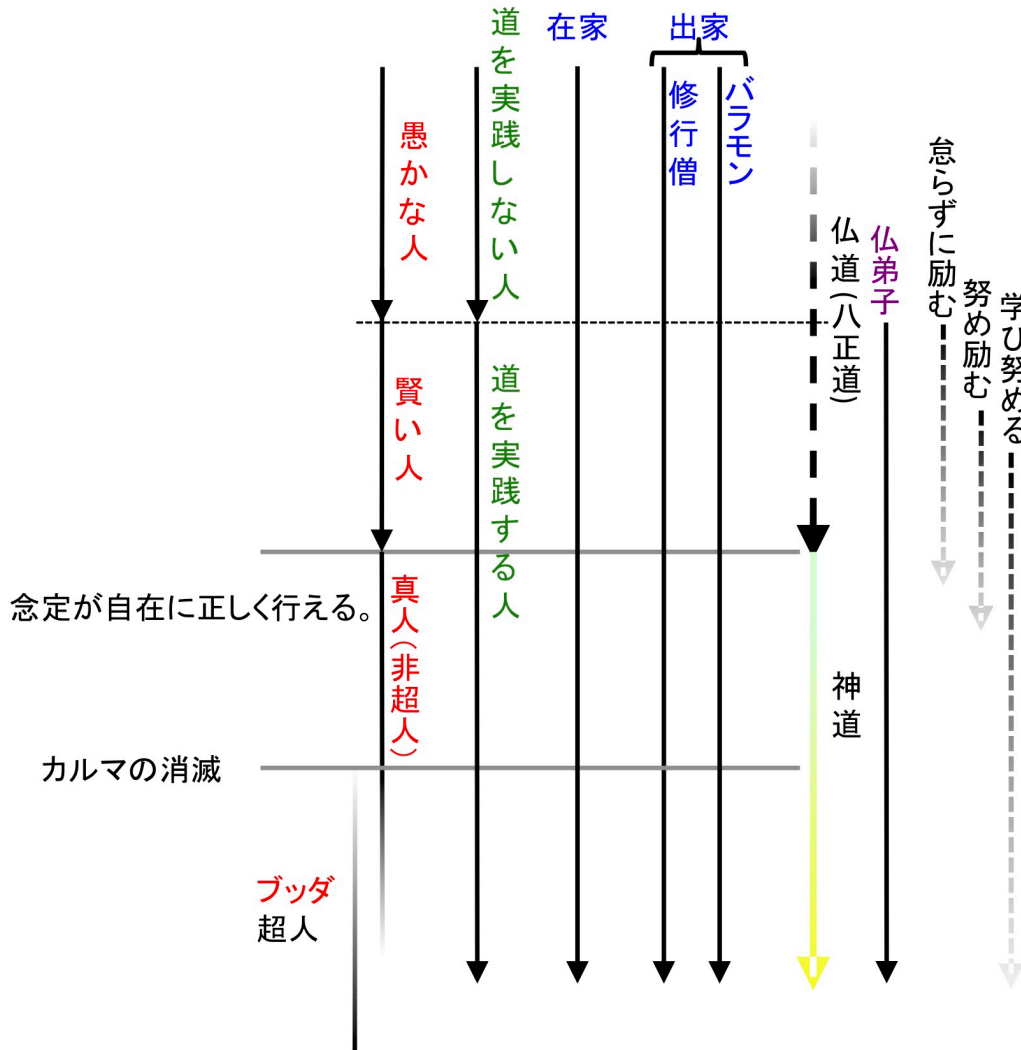


Figure 4: 霊格（精神性）直線

(a) 精神性の分類は赤、(b) 真理の追求の分類は緑、(c) 仏弟子分類は紫色、(d) 社会的立場の分類は青色

(2) 修行者

社会的立場の分類において、出家者と在家者を分けました。お釈迦様は、当時のインドのヒンズー教の廃退を指摘しました。経典であるヴェータも、出家者への教えがほとんどだったことでしょうか。しかし、多勢は在家の人たちです。また、本当の教えが必要だったのも特権を有さない在家の方々だったことは明らかです。その人たちへ教えを説かれたのがお釈迦様だったのです。ですから、お釈迦様が説いた仏道は、在家への教えが主眼であったと考えられます（既存の「真理のことば」では、そうならないのが、問題の一つです。）。

在家、出家問わず、すべての人は霊性の向上を目的として生きているので、全ての人は修行者です。では、お釈迦様は修行者をどのように捉えてらしたのでしょうか？これに関する記述が、「ブッダのことば 第一 蛇の章 5、チェンダ」で以下のように、述べられています。

84 師（ブッダ）は答えた、「チェンダよ。四種の修行者があり、第五の者はありません。面と向かって問われたのだから、それらをあなたに明かしましょう。——〈道による勝者〉と〈道を説く者〉と〈道において生活する者〉と及び〈道を汚す者〉とです。」

この教えを、出家、在家を問わない真理の追求分類方法の〈道を実践する人〉を軸に考えてみます。

この4種類のカテゴリーに対応する既出の分類をあてはめると、
 〈道による勝者〉 → ブッダ

<道を説く者> → 真人の出家者，賢い出家者，道を実践する出家者，仏弟子
<道において生活する者> → 在家の真人，賢い在家者，道を実践する在家者，仏弟子
<道を汚す者> → 愚か者の出家者（偽出家者），愚か者の在家者
となると考えられます。

この書き出したリストを眺めると、お釈迦様は、<道において生活する者>を主眼に置かれて、活動なさったのではないかと言う確信が湧いてきます。

しかしながら、お釈迦様は、ヴェータの廃退を鑑みて、出家者への教えも修正なさってますし、愚かな者の救済誓願のために、彼らへの教えも残してらっしゃいます。

つまり、仏道の教えは、お釈迦様が人類全般に与えた教えであると言えます。

付録5 心の汚れ

(1) 汚れと煩惱

① 煩惱 煩惱とは、原意では、心を汚すもの、仏教の教義を用いて言えば、身心を乱し悩ませ智慧を妨げる心の働きとされています。煩惱の分け方はたくさんあります。三毒、浄土宗の根本煩惱（6分類）、十毒、108の煩惱などです。

ただし、煩惱には、根本的な煩惱と、これらの煩惱が原因で表に現れる随煩惱があるというスキームは理解すべきポイントです。

② 三毒 根本煩惱を3つに分類するものが、三毒と呼ばれる教えで、これは入門編だと思います。ブログでは、「お釈迦様もこの3分類で、仏道を説かれたのだと思います。」と記しましたが、ヴェータが発達していた当時のインドですから、もう少し細かい分類を知った上で、教えを説かれる相手によって、3分類や6分類を使い分けられたのではないかと考えるに至りました。

三毒の3分類の煩惱は、
貪（とん）；欲望への執着
瞋（じん）；怒り
痴（ち）；無知（含無明）、慢心、疑惑、悪見
です。

③ 根本煩惱（6分類） 三毒の解説だと、分類が少し大雑把で、説明がしづらいと感じました。しかし、多く分類すると（108の煩惱、十煩惱 etc.）、「これとあれはかぶってる？」となってしまう、余計に訳が分からなくなります。

色々調べた結果、浄土宗の根本煩惱の教えを参考させていただきたいと思います。これは、根本となる煩惱を貪・瞋・慢・無明・見・疑の六つであるとする教えです。これは、三毒のうちの痴の部分を慢・無明・見・疑に分けたものです。これは、多すぎず少なすぎず、当を得ていて素晴らしいです。分類項目のそれぞれは、

貪：貪は愛と等しく、好ましい対象に対する愛着
瞋：好ましくない対象に対する拒絶や反発 怒り、妬み
慢：自らを高く評し他を軽視する自己中心的感情
無明：正しい道理にくらく真実を知る知見が具わっていないこと
見：仏教以外の誤った見解を信じること
疑：仏教の真理である四諦・縁起・業報等に対して疑念を持つこと

（<http://jodoshuzensho.jp/daijiten/index.php/根本煩惱> さんより）

浄土宗では、仏教らしく仏道への帰依を強く打ち出していますが、本書では、他の教えに対しても敬意を払うことによって、たくさんの方に読んでいただきたいので、仏法ではなく、真理や正しい教えと捉えて拡大解釈をして、以下に「六汚れ」と命名し定義します。

④ 六汚れ

執着：執着すること。しかし、執着対象の、良し悪しは区別しません。

怒：怒ること（妬むこと）。正当な怒りも不当な怒りも含まれます。

慢：奢ること

悪見：悪い教えや考えを持ち、信じること

疑惑：真理を疑うこと

無明：⑤ 無明 参照

執着と怒に関しては、全く悪とは考えず、正当なものへの執着や怒りは良しとします。ただ、正当な執着や怒りであっても、それらに支配されずに、心を治め行動することが必要だという立場で、執着と怒を捉えます。

他方、慢、悪見、疑惑、無明については、悪（影）と捉えます。図5に六汚れと随煩惱をまとめましたので参照してください。

⑤ 無明 無明とは、人間が根本的に持っている無知のことである。人生における人間の苦しみは、すべてこの無明から始まることをブッダは、瞑想の中から発見した。人は、その無明というものを取り払うことで、心安らかに生きていける。

(http://www.st.rim.or.jp/~success/mumyou_je.html さんより)

無明 (avija) という言葉は、お釈迦様が初めて使われたのかどうか？はわかりませんが、このようなものが存在するとは、私も最近切に感じています。慢、悪見、疑惑がなくなってくると、この無明の存在がどうやら感じられて、これが何であるのか理解できるようになってくるものだと思います。ですから、世の中においては、なかなか具体的に説明されていない、といよりか、説明することができないのです。

ただ、あえて、参考程度に説明を試みます。

この無明は、他の5つの分類項目が悪い方向に働くと生産され、この5項目の悪い作用を増幅させる元であると考えています。また、無明は随煩惱の働きによっても増すようです。

正精進によって、努力して自力で六汚れは減らすことはできるのですが、最後にわずかに無明が残ります（これは有名です）。実は、私は、この最後の無明は 上位の存在（本守護神さんではないかと思っています。）によって取り払われ、真人となるのではないかと、考えています。これにより、上位の存在とも直接つながるので、自分が何をなすべきか、直接のご指導ご鞭撻が受けられるために、非常に高い能力を發揮することが可能になります。

しかし、この無明が取れてしまうと、魂が、荒波や激流だらけのこの世の中に、真の意味で直接つながってしまうので、魂がそれに耐えうる強さを持っているか否かが、上位の方は判断基準ではないかと思われま。

したがって、無明は、外してもらえようように正精進するのが我々人間の務め・課題ではあるのですが、まだ直接、この世の中では修行できない普通の魂の保護バリアとしての役割もあると感じています。つまり、無明が、最大の汚れであると同時に、魂の保護バリアであるという二面性があると、私は考えています。

⑥ 六汚れと随煩惱の連携 何らかの執着があり、それが満たされない時には、怒りや憂い (悪見) や恐れ (悪見) が起こります。怒りや憂いや恐れが増えれば、ますます執着が激しくなり、ますます怒りや憂いが増えます。

また、慢心があり、その自分の慢心を満たす執着を持てば、前述の執着が得られない時と同様なことが起こります。

両者とも、真理（本当の教え）を聞いて疑わなければ、これらの執着と慢と悪見と怒の対処が行えますが、疑ってしまうと、これらの負のスパイラルを止めることはできなくなります。

怒は強くなれば、表に現れる随煩惱をたくさん誘発させ、結果として理性を失わせる働きがあります。

慢、悪見、疑惑は外からの情報で植え付けることもあります。無明から伝搬してくることがあるとも思います。

このように、六汚れ (煩惱) と随煩惱は連携しており、それぞれがそれぞれを誘発し、それにより生産された汚れが、その種類に応じて、根本的な六汚れに分配されるのです。

以上は悪循環パターンばかりを述べましたが、次は好循環パターンをご紹介します。

自分が、生きていく中で苦しくなったり辛くなることがあります。ここで、反省して、正しく世の中や自分を見つめようと努力することが、実は八正道の起点の正見となります。そして八正道 (摂法) の教えを信じを実践することによって、六汚れや随煩惱を減らす努力をします。随煩惱の発現を抑えることは、無明を中心とした六汚れの増加を抑えるだけでなく、疑惑や悪見が減ることにより、不当な執着や怒が減ってきて、自分に取って良い行動が判別でき、それを実行できるのです。これらの繰り返しは、好循環パターンです。

⑦ 三界の五上分結と五下分結 この部分は、中村氏の注釈の書き下しと、

http://way-to-buddha.blogspot.jp/2011/05/blog-post_1655.html さんの内容で構成しました。このサイトはとてもよく書いてあると思いますので、ぜひ立ち寄ってご一読ください。

三界ですが、欲界、色界、無色界と呼ばれる3つの世界のことを指します (図6参照)。最下層が欲界、その上が欲界、さらにその上が無色界となっていますが、この三界に属している状態は、ニルバーナ (涅槃) =安らぎ、や 解脱状態ではありません。

三界の五上分結と五下分結は、FS 23 修行僧 詩 F316 に出てきます。

五下分結は、魂を欲界に結びつける5つの煩惱ですが、-心を外から縛り付けるものなのか？- 詩 O316 内では、断つものと示されています。

根本煩惱:六汚れ(三毒)

怒・妬み(瞋;三毒)

執着(貪;三毒)

疑惑

慢心

悪見

無知

(痴;三毒)

緑は善的なもの、赤は悪的なものを表す。
疑惑、慢心、悪見、無知は悪的なものしかないと考え、怒と執着は善悪があると考えていることを表す。

参考までに、20の随煩惱

- 1, 懈怠(じょうご)・・・浮ついた状態のこと
 - 2, 昏沈(こんじん)・・・沈んだ状態のこと
 - 3, 不信(ふしん)・・・信のないこと
 - 4, 懈怠(けたい)・・・怠けること
 - 5, 放逸(ほういつ)・・・欲望のままにふるまうこと
 - 6, 失念(しつねん)・・・記憶を失うこと
 - 7, 散乱(さんらん)・・・心の集中を欠くこと
 - 8, 不正(ふしょう)・・・誤った理解
 - 9, 無慚(むざん)・・・自らを顧みないこと
 - 10, 無愧(むぎ)・・・世間を顧みないこと
 - 11, 忿(ふん)・・・危害を加えようとする心
 - 12, 恨(こん)・・・うらみ
 - 13, 覆(ふく)・・・自己の罪をごまかすこと
 - 14, 惱(のう)・・・人の弱点を口撃すること
 - 15, 嫉(しつ)・・・嫉妬心
 - 16, 慳(けん)・・・ものおしみ
 - 17, 誑(おう)・・・たぶらかすこと
 - 18, 諂(てん)・・・へつらうこと
 - 19, 害(がい)・・・相手を傷つけること
 - 20, 憍(きょう)・・・うぬぼれ
- <http://blog.zempukuji.or.jp/article/54816513.html> さんより

Figure 5: 図5 六汚れ、三毒、20の随煩惱

五上分結は、魂を上界(色界と無色界)に結びつける5つの煩惱ですが、-心に内包される煩惱なか?-捨てるものだと詩F316に示されています。

これら10個の煩惱の個別の意味を図5に示し、各煩惱に対応する六汚れとも記しました。この対応は、無理のないものになったと思います。

(2) 欲

仏教では代表的な欲として、五欲(食欲、財欲、色欲、名誉欲、睡眠欲)が提唱されています。しかし、真理のことは、諸所に「情欲」という欲が登場しますので、五欲という発想では読み解けません。また、情欲は、情が求める欲のことでしょうが、現状の仏教では、一般にきっちりした言葉の定義がなされていないので、欲に関して思考ループを作ってしまうという事態を招いています。したがって、この場で、

愛欲と情欲は同一とし、愛欲とは、他者からの愛情(愛欲)や人気を求める欲

と定義します。この五欲に愛欲が加わり、さらに生存上必要な欲の順に並べると、大まかには、

食欲=睡眠欲>色欲>財欲>愛欲>名誉欲 ←六欲

になると、私は考えています。以上を六欲と命名します。

(3) 執着と欲望

お釈迦様は、この世の中には激流が存在して、その激流と一緒に流れている無常のものに恋い焦がれて、精一杯追いかけるのが人間の心であるとしています(詩F200~F203参照)。この激流に引っ張られる要因が、六汚れの中の執着なのです。また、実際には、執着によって激流と一緒に流されているだけなのですが、その求めているものは、激流の中なので、なかなか掴めません。しかし、自分では激流の中で一生懸命追い求めている気になっているのです。

では、この激流とは何を指すのでしょうか?これが、先ほど述べた欲の数々なのです。この欲というものは、理科学でいう場のようなもので、すでにこの3次元の世の中に設定されているのです。これは、人間の力でなくすことなどできないものです。ですから、「欲をなくせ。」という表現は、本書の定義では、「悪い欲への執着をなくせ。」とするべきです。しかし、どの欲の流れに流されるかは、その心の執着する癖によります。食欲に弱い人もいれば、名誉欲に弱い人もいるというのが、現実ですから、この辺りはわかりやすいと思います。

執着とは、対象が悪い欲だけとは限らないことを、すでに述べました。ですから、良い対象(正しい教え)に対する執着

三界

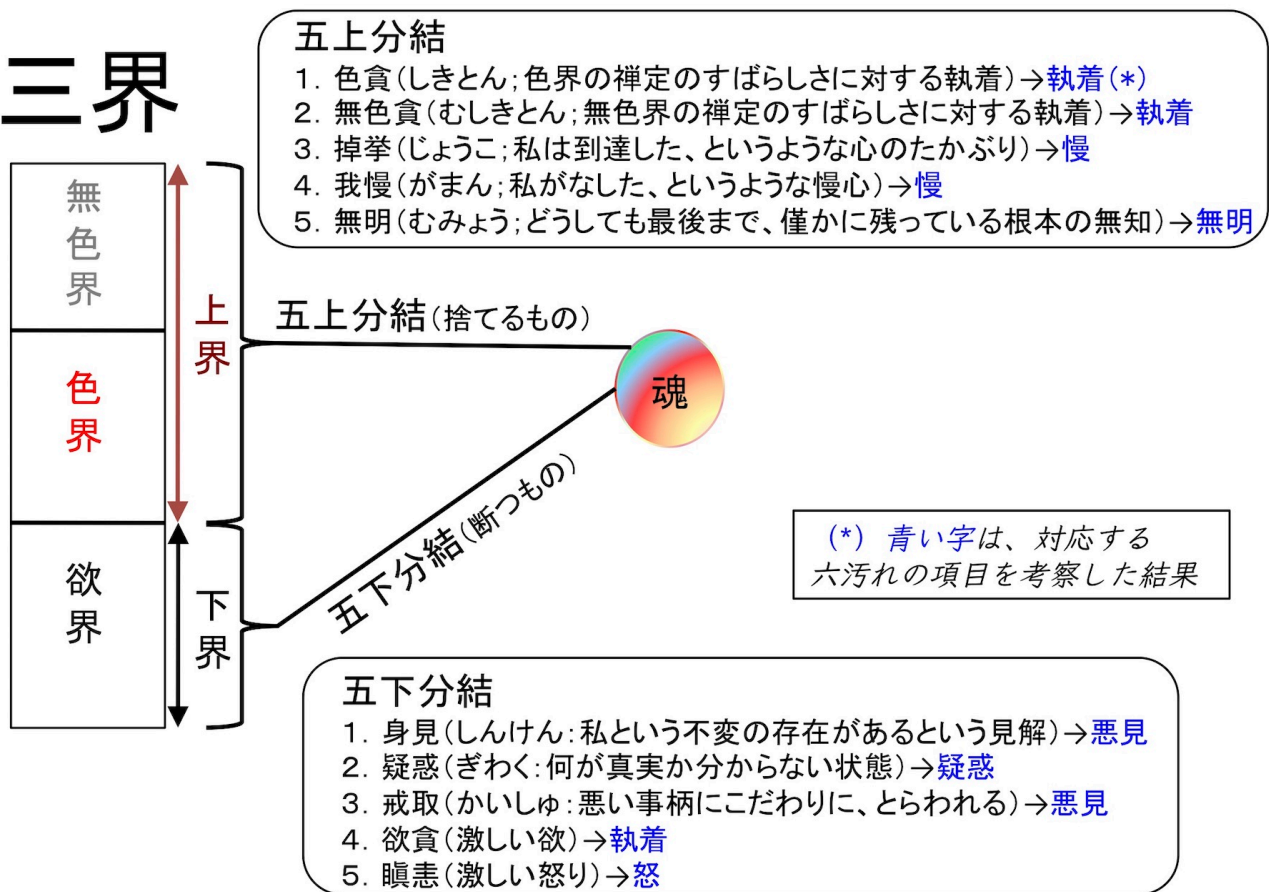


Figure 6: 図6 三界の五上分結と五下分結

は、禁じられるものではありません。これは、六欲の中の怒も同じです。ただ、両者に共通なことを言えば、それにしがみついて動けなくなると、いけないということです。正しい執着だとしても、一時的には離れないといけないこともあるという柔軟性が必要な時もあることは要注意です。

この世の中に設定されている欲望（激流）とそれに流される心のイメージを図5に描きます。

ちなみに、人間が恋い焦がれて追い求める“激流と一緒に流れている無常のもの”は、流れによって形作られたもので、実体のないもの、すなわち空であると認識するべきであるというのが、般若心経の教えです。

(コーヒーブレイク) 仏道のキーナンバー

FS 23 修行僧 詩 F316 では、キーナンバーは5です。

しかし、真理のことばを再考しながら読み進めると、どうも仏道のキーナンバーは5ではないのではないかという思いに至ります。

—もちろん、数字にこだわっても仕方ないのですが—

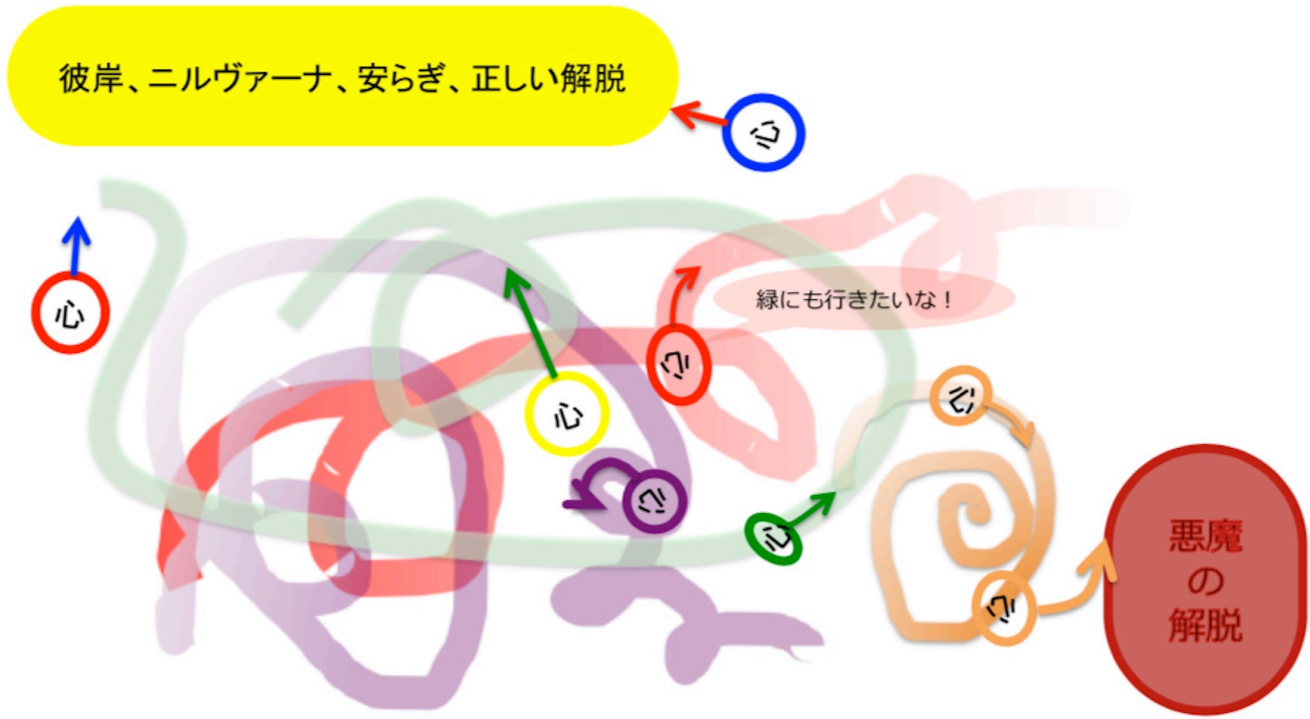
詩 O370 の“五上分結と五下分結”は、結局のところ心の汚れに相当するものを10個書き出しているのです。ですから、付録5で、当方が定義した六汚れをすべて説明できていると考えられます。

また、五根“信、精進、念、定、慧”（付録3参照）は、精進の範囲が広すぎますので、精進を“行動”と“思考”で分けて、六根道にしても良いのかなと思う次第です。

他にも般若心経での一節「眼耳鼻舌身意」、「色声香味触法 (=意)」をそれぞれ六根と六境と言います（六根と五根改め六根道は、少しややこしいです。）。

さらに、六道輪廻、六神通があります。

以上から、仏道のキーナンバーは6ではないかと思うに至りました。



この世の中に設定されている欲望をイメージ化

①色によって欲望の種類を分けています。私は、食欲、財欲、色欲、名誉欲、睡眠欲に愛欲を加えて六欲が主な欲であると考えています。この図では、4本の流れしか書いていませんが、心がこれらの流れに乗って流される様子を表しました。流れに乗って、心が悪魔の領域に近づくと、悪魔たちにトラップされやすくなるイメージがあります。

②ニルヴァーナに正しく近づいている心もあります。心の丸とベクトルの色を違えているのは、バランスが取れていることを表します。

Figure 7: 図7 欲望（激流）とそれに流される心のイメージ

付録6 武力と暴力

私が平和で安全な場所で生まれ育ったので、本書に取り組んだことを機に、初めて暴力という言葉に熟考しました。私の生い立ちからは、ただ自分の欲得のために、人の命や土地を暴力によって奪う人なんてこの世にはいないと信じていました。近くにそういう人間がいなかったのも、そう思うのも、仕方ないのでしょう。

ただ、今から考えれば、「あのハラスメントは暴力の部類だな!」と思ったりもしますが、私は武力行使が伴ったものを暴力と考えていたので、暴力という言葉自体の認識が曖昧でした。そこで暴力という言葉調べてみました。

ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説 (<https://kotobank.jp/word/暴力-132521>) によると、暴力とは、

- (1) 政治学的には、物理的強制力の行使一般をいう。
- (2) 法学的には、不当ないし不法な方法による物理的強制力の使用をいう。

(1) の政治学および社会学的意味における暴力の概念には、単に法的考察によって定義される不当不法な力の行使をいうのではなく、いわゆる革命集団による国家秩序の暴力的転覆（武装蜂起）や暴力団による腕力などの行使から、国家が合法的かつ正当的に所有する軍隊や警察のいわゆる実力行使までも内包されるのが普通である。

(2) の法学的見地の暴力は、法によって許容されない力の行使をいう。したがって軍隊や警察の実力行使は、それが法に依拠しているかぎり、正当化され暴力とは呼称されない。また正当防衛のような場合、個人による実力の行使であっても、それは法の許容内と考えられ、暴力とは呼称されない。

であると説明されています。

政治学的な説明と法学的な説明では、やはり法学的説明の方が普遍性が高いと言わざるおえないと思います。というのも、世の中には、法を侵して、もしくは、脱法で悪事を働く愚かな人たちが沢山いるのですから。これに対応するために武力を

用いた際に、ネガティブなイメージの暴力という言葉を使うのはやはり不自然です。きちんとした分類をせずに、一括りに議論をするというのは、悪魔の常套手段ですから、政治学的な暴力についての説明にも、悪魔の存在が見え隠れします。

では次に、正当な武力行使に至るまでの道筋を、私なりに考えたいと思います。

ある問題が起こるとしましょう。この問題の当事者たちは、この問題を解決するために、この問題の原因をまずは調べなくてはなりません。この原因をはっきりさせる目的は、発端となった事や経緯で過失であれ故意であれ、どの当事者に非があったのかをはっきりさせる必要があるのです。そして、ここまで来て、ようやく話し合いによって非がある当事者に改善を促します。ここまでの段階までで、この非のある当事者に武力を一方的に使うと暴力と認定されます。

しかし、正当な話し合いをしたにも関わらず、その当事者が改善を行わなければ、武力を用いて滅ぼす、もしくは、制圧する事を暴力と定義することは不当な定義です。

正当な話し合いだったかどうかを認定するのが、大変ですが、これは多少でも関わった人たちが、自分の利害に関係なくとも、各自で、なるべく正しく判断するように心がけなければなりません。というのも、自分が、何時、このような事態に落ちるかわかりません。世の中は、そのような相互保証で成り立っているのです。もし、この時に、みんなが知らん顔をしたら、不当行為が勝ってしまうのです。そうして、世の中が悪魔の支配になっていくのです。「他人のことに関わると、厄介な上に、自分が変な勢力から攻撃されるから嫌だ」という人々の姿勢が世の中を圧巻した、ここ 30 年で、散々、味わった悪夢です。

以上から、本書では、

暴力を「不当ないし不法な方法による物理的強制力の使用」

という意味で使用します。

第5部 削除した詩

「第1節 さまざまな事」内の削除詩

削除した詩は、中村氏の整理した OS 章番号、O 番号で記述します。

★ OS15 楽しみ

O200 われわれは一物をも所有していない。大いに楽しく生きて行こう。光り輝く神々のように、喜びを食(は)む者となろう。

O201 勝利からは怨みが起る。敗れた人は苦しんで臥す。勝敗をすてて、やすらぎに帰した人は、安らかに臥す。

*** (コメント減) *****

O200

人間が神になろうとする、この無理な請願によって、良識ある人間は苦しんでしまうのですが、神様と人間は土台、別なのです。神様は、この世の中では、一物も所有してなくても死にませんが、人間は死んでしまいます。食べ物だって、服だって、住まいだって、それらを手に入れるためのお金だって、人間には必要であり、神様には必要ないのです。ですから、この詩は、何についての教えかわからないので削除します。

では、神様は何も必要ないかと言えば、そんなことはないのです。人間からの正しい(畏敬の)念が必要なのです。そして、邪魔なものは、人間から棄せられる邪悪な念です。

ですから、お賽銭にしても、自分の収入に見合った額をすることが大切です。神様は、人間の念を受け取るのであって、お金を受け取るのではなく、金額が指標だけです。本当に神様が好きで感謝していたらそんなしょぼい額にはならないでしょうし、TPOもわかまえるということです。

次に、私の大好きな、新約聖書のやもめの献金を引用 (<https://www.shining-hill.org/2017/09/12/今週の説教-やもめの献金-新約聖書-ルカによる福音書 20 章 45 節から 21 章 4 節/> さんより) します。

ルカによる福音書 20 章 45 節から 21 章 4 節

民衆が皆聞いているとき、イエスは弟子たちに言われた。「律法学者に気をつけなさい。彼らは長い衣をまとして歩き回りたがり、また、広場で挨拶されること、会堂では上席、宴会では上座に座ることを好む。そして、やもめの家を食物にし、見せかけの長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。」

イエスは目を上げて、金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた。そして、ある貧しいやもめがレプトン銅貨二枚を入れるのを見て、言われた。「確かに言うておくが、この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。」

O201

勝負は、避けられない時には挑むしかないのです。勝負があった場合、総合的な勝ち負けよりも、結果を多面的に考察して、各面

においての勝ち負けが大切です。必要な勝負を逃げるのは、最も避けなくてはならないでしょう。この詩は、勝負を否定するような詩と捉えられるので、仏魔の常套手段ということで、削除します。

補足ですが、創価学会の方が書いたブログ「師匠が「仏法は勝負」と言われているのに、なぜそれを否定するのか？」も、この詩に疑問を投げかけている記事です。創価学会は日蓮宗に戦いを挑んで破門になった一派だとのことで、確かに、戦いの歴史なんだろうね。私も、同じ立場だったら、同じように小暴れしていたことだと思います。

ちなみに、私は創価学会とは関係ないです。でも、めずらしく信者第一の教団ではある感じはしています。実は、昔、実名で誤って創価関係者のブログを頻繁に利用していたことがあるのですが、実名も NG だよって、何となく、伝えてくれたり。親切に追い払っていただきました。

★ OS21 様々なこと

O294 (「妄愛」という)母と(「われありという慢心」である)父とを滅ぼし、(永久に存在するという見解と滅びて無くなるという見解という)二人の武家の王を滅ぼし、(主観的機官と客観的対象とあわせて十二の領域である)国土と(「喜び貪り」という)従臣とを滅ぼして、バラモンは汚れなしに赴く。

O295 (「妄愛」という)母と(「われありという慢心」である)父とを滅ぼし、(永久に存在するという見解と滅びて無くなるという見解という)二人の、学問を誇るバラモン王を滅ぼし、第五には(「疑い」という)虎を滅ぼして、バラモンは汚れなしに赴く。

*** (コメント滅) *****

この二つの詩は、中村氏の注釈が非常に多いのですが、そのすべてがブッダゴーサの注釈を日本語で紹介しているだけです。そして、後代に出来上がる仏教教義を彷彿させる内容です。これらの事から考えても、両詩は、お釈迦様が起因ではなく、ブッダゴーサが起因ではないかと、私は考えています。

両方の詩ともに、似たことが書いてありますが、残念ながら整合が取れず、さっぱり意味不明です。もし仮に、ブッダゴーサがこの詩を作ったとして、この整合の取れない二つの詩を残したのであれば、なぜ、みすみす、少し考えれば、「頭おかしいじゃない？」とわかる、この二つの詩を並べておいたのでしょうか？この二つの詩の作られた目的が定かではありませんが、我々一般人にはわからない暗号ではないかと、私は推察します。

ここで、(…)の部分を取って、文章のスキームを見てみましょう。

「母と父とを滅ぼし、二人の武家の王を滅ぼし、12の国土と従臣とを滅ぼして、バラモンは汚れなしに赴く。」

「母と父とを滅ぼし、二人の学問を誇るバラモン王を滅ぼし、第五には虎を滅ぼして、バラモンは汚れなしに赴く。」

何だか、相当おかしな暗号もどきが出てきました。

汚れないバラモンになるには、母と父を滅ぼすことが、第一条件なのでしょう。尊属殺人で、汚れの境地ではあるのですが。

この仏魔の試験に合格したバラモンに、仏魔が我々人間の住む12の領土(12支族の国)と人間を守る武家と学問の王や従臣、そして、神様を表す虎の順で滅亡させる命令を出している、そんな感じの詩です。

ブッダゴーサは仏魔の化身なんですね。それを逐一、記述してくださる中村元氏です。これは、すごい文献です。

お釈迦様が活躍なさった当時は、実は、すでに魔がヴェータに入り込み、バラモンは魔の手先に成り下がっていたのです。この仏魔バラモン達は、その見返りに、優遇され莫大な富を貯めていました。これを示す記述は“ブッダのことは第二小なる章7バラモンにふさわしいこと”(https://www.youtube.com/watch?v=WkuwXGyE9Ck 22:57あたりより)に書かれていますが、教えを述べられたお釈迦様に対して、「大富豪であるバラモンたちは、師に言った」と記述があります。大富豪のバラモンって、笑っちゃうよね。普通は読み過ぎしちゃうけれど、気づくと笑っちゃいます。しかも、彼らは自分たちで、お釈迦様に「在俗信者として受け入れてください。」って懇願するんです。自分たちの財を投げ打つ出家なんて真っ平御免なんだろうね。本当に大爆笑！

このバラモンたちは、学問を誇るバラモン王のお釈迦様を滅ぼしに来た、仏魔バラモンなんだろうね。でも、お釈迦様は論破した感じですよ。

★ OS01 ひと組ずつ

O009 けがれた汚物を除いていないのに、黄褐色の法衣をまとうと欲する人は、自制がなく真実もないのであるから、黄褐色の法衣はふさわしくない。

O010 けがれた汚物を除いていて、戒律を守ることに専念している人は、自制と真実とをそなえているから、黄褐色の法衣をまとうのにふさわしい。

*** (コメント滅) *****

法衣を纏う条件ですが、お釈迦様が法衣を規定したのか疑わしいものです。

お釈迦様の説かれた仏法が、仏教という宗教へ誘われた時に、教団が付け足した詩文と、私は認識致しましたので削除としました。

ちなみに、神様が手を入れることすらできない法(真理)に対して、戒律や法律は神様より下位の存在(含人間)が時代と組織

に合うように法を咀嚼して作ったものだと思います。どちらかと言えば、法律は法を重視したもの、戒律は、戒めや慎みという道徳的なものを重視したもののなのでしょう。法律は、戒律よりは普遍性があり、また、社会人としては守らないと、国家、社会が成り立たないものでもあります。

★ OS01 ひと組ずつ

- O015 悪いことをした人は、この世で憂え、来世でも憂え、ふたつのところで共に憂える。彼は自分の行為が汚れているのを見て、憂え、悩む。
- O016 善いことをした人は、この世で喜び、来世でも喜び、ふたつのところで共に喜ぶ。彼は自分の行為が浄らかなのを見て、喜び、楽しむ。
- O017 悪いことをなす者は、この世で悔いに悩み、来世でも悔いに悩み、ふたつのところで悔いに悩む。「私は悪いことをしました。」と、悔いに悩み、苦難のところ（地獄など）におもむいて（罪のむくいを受けて）さらに悩む。
- O018 善いことをなす者は、この世で歓喜し、来世でも歓喜し、ふたつのところで共に歓喜する。「私は善いことをしました。」と、歓喜し、幸あるところ（天の世界）におもむいて、さらに喜ぶ。

*** (コメント) *****

お釈迦様は、来世を幸せに過ごすために仏法を説かれたのではありません。これが諸宗教の諸悪の根源；オネダリ信仰なのです！お釈迦様は、今が大切、今、自己（魂）を整え、心を治める方法、そして神様が創られた、そして神様の一部でもある、法（則）を、塵穢れに満ちた三次元を生きている人間に伝授されに、この世にいらしたのです。法というものは、人間にとって遠く離れたものではなく、正しく話を聞けば何となくでも理解できるものなのです。なぜなら、人間も法の一部だからです。それに対して、来世とか苦難のところとか、幸あるところという曖昧な言葉で連想される世界は、理解と言うより想像しかできないのです。曖昧な世界の描出、来世へのオネダリ系の詩句は削除します。

「第2節 さまざまな悪」 内の削除詩

★ FS14 怒り

- O221 怒りを捨てよ。慢心を除き去れ。いかなる束縛をも超越せよ。名称と形態とにこだわらず、無一物となった者は、苦悩に追われることがない。
- O224 真実を語れ。怒るな。請われたならば、乏しいなかから与えよ。これらの三つの事によって（死後には天の）神々のもとに至り得るであろう。

*** (コメント) *****

時と場合によって、語って良い真実も、語ってはまずい真実もあるのですが、真実なら全部語らなくてはならないと誤解を生じる詩句になっています。

怒りを制し、怒るべきことは怒らなくてはなりません。

詩中の3つを守ったなら、死後に神々のもとに至り得る保証をお釈迦様がお与えになるとは考えられません。お釈迦様の教えは、死後に神々の元や天国に行くためのものではなく、生きている間に、自分と人類を含めた生類に尽力し、自らが進化するための道筋を示されているのです。

この詩の中で、否定できない部分は、「請われたならば、乏しいなかから与えよ。」ですが、これは分かち合いの教えです。これに関する詩は別立てに FS 5 世の中詩 55、FS 15 汚れ詩 O242 にあります。

以上から、この詩は削除します。

- O225 生きものを殺すことなく、つねに身をつつしんでいる聖者は、不死の境地（くに）におもむく。そこに至れば、憂えることがない。

*** (コメント) *****

肉体は滅んでも、魂はなかなか滅ばないというのが、お釈迦様の教えです（詩 F083、F251 など参照。）。基本的に、魂は不死なのです。さらに、不死の境地が何を意味するのかわかりません。

生き物を殺すとは、不当に殺すことはいけなけれど、正当性があれば仕方ないと言わざるおえません。

怒りの章にあるのですから、怒りに任せて生き物を殺してはならないということなのかもしれませんが、この部分は意味がはっきりしません。

さらに、憂えることがないという部分も、意味がわかりません。

以上から、全体的に意味がわからなくなり過ぎていたので、悪魔による改竄だと考えられますので、この詩は削除します。

★ OS10 暴力

- O129 (B289) すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身をひきくらべて、殺してはならぬ。殺させてはならぬ。
- O130 (B290) すべての者は暴力におびえ、すべての(生きもの)にとって生命は愛しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺させてはならぬ。
- O131 (B291) 生きとし生ける者は幸せをもとめている。もしも暴力によって生きものを害するならば、その人は自分の幸せをもとめていても、死後には幸せが得られない。
- O132 (B292) 生きとし生ける者は幸せをもとめている。もしも暴力によって生きものを害しないならば、その人は自分の幸せをもとめているが、死後には幸せが得られる。

*** (コメント) *****

詩 O129 と O130 に関しては、「すべての者は暴力におびえ」と「すべての者は死をおそれる」が、誤りです。“暴力に怯える”のではなく、“暴力を嫌悪する”なら間違えではないでしょう。

他方、お釈迦様は、ブッダのことばの詩 516 にて、「全世界のうちで内面的にも外面的にも諸々の感官を修養し、この世とかの世とを厭(いと)い離れ、身を修めて、死ぬ時の到来を願っている人、——かれは(自己を制した人)である。」とおっしゃっています。「自己を制した人」=「自己を整えた人」(付録2参照)とします。ここでは、真人としましょう。真人になったあかつきには、死を恐れるどころか、「死ぬ時の到来を願っている人」になるとおっしゃっています。死ぬのを恐れる人もいれば、死の到来を願っている人もいるというお釈迦様の教えと整合が取れません。

「暴力に怯えて」そして「死をおそれて」ばかりいたのでは、悪魔のやりたい放題の世の中になります。あちらは、我々に武力と暴力の境目をぼやかして、正当な武力の行使さえ抑えて、自分たちは暴力し放題なのです。暴力を禁ずる教えは、同時に正当な武力や戦いまでも禁ずる行き過ぎがあれば、悪魔教と考えるべきです。

詩 O131 と O132 に関しては、何度も書きますが、お釈迦様は、来世を幸せに過ごすために仏法を説かれたのではありません。これが諸宗教の諸悪の根源；オネダリ信仰なのです。

以上より、これら4詩は、全くと言って良いほど、整合が取れず、書き直しのレベルではなく、悪魔による改ざんと判定したので、一度は書き直しましたが、削除します。

O137 + O140

手むかうことなく罪咎の無い人々に害を加えるならば、次に挙げる十種の場合のうちのどれかに速やかに会おうであろう、(1) 激しい痛み、(2) 老衰、(3) 身体の傷害、(4) 重い病い、(5) 乱心、(6) 国王からの災い、(7) 恐ろしい告げ口、(8) 親族の滅亡と、(9) 財産の損失と、(10) その人の家を火が焼く。

この愚かな者は、身やぶれてのちに、地獄に生まれる。

*** (コメント) *****

FS13 悪 F157 と、前半部分が同じです。

詩番号の付き方が不明です。

さらにこの詩に挙げられている10個の災いの根拠が不明なことや、“地獄に生まれる”といった表現がお釈迦様が使ったとは考えにくいこと、などから、この詩は、代替もありますし、削除します。

- O145 水道をつくる人は水をみちびき、矢をつくる人は矢を矯め、大工は木材を矯め、慎み深い人々は自己をととのえる。

*** (コメント) *****

FS13 悪 F157 と、前半部分が同じです。

OS6 詩 O80 とほぼ同じで、慎み深い人が、賢い人と変わっているだけです。

どうして暴力の章にあるのか？不明です。

以上より、この詩は削除します。

★ OS16 愛するもの

- O210 愛する人と会うな。愛しない人とも会うな。愛する人に会わないのは苦しい。また愛しない人に会うのも苦しい。

- O211 それ故に愛する人をつくるな。愛する人を失うのはわざわざである。愛する人も憎む人もいない人々には、わずらいの絆が存在しない。

*** (コメント) *****

「愛する人と会うな」etc. なんて、人間の一存でできるわけではないのです。

「神になるよう修行せよ」とか、「欲望をなくせ」とか、土台人間では無理な事を言って、頑張らせるのが、悪魔の常套手段です。人間って真面目ですから、できるはずと思いついで、それでできないと、自分を責めてしまって、発狂するのです。

・人間である以上、できないものもある

・できない理由が本当はどこにあるのかを、冷静に考えることが、実は人間の務め

私が、お釈迦様に代わって僭越ながら勝手に宣言いたします。

この2詩などは、虚偽で、悪しきところに引っ張られる人たちを増やすので、削除しなくてはなりません。

★ OS18 汚れ

O236 だから、自己のよりどころをつくれ。すみやかに努めよ。賢明であれ。汚れをはらい、罪過がなければ、天の尊い処に至るであろう。

*** (コメント) *****

詩 O237 は詩 O235(F173) とほぼ同じなので、後代の付け足し詩 O237 は削除し、詩 O235 を残します。

参考 詩 O235(F173)

汝はいまや枯葉のようなものである。閻魔王の従卒もまた汝に近づいた。汝はいま死出の門路に立っている。しかし汝には資糧(かて)さえも存在しない。

O237 汝の生涯は終りに近づいた。汝は、閻魔王の近くにおもむいた。汝には、みちすがら休らう宿もなく、旅の資糧も存在しない。

*** (コメント) *****

詩 O236 は詩 F174(O238) も非常に似ているのですが、詩 O236 の“天の尊い処に至る”と詩 F174 の“汝はもはや生と老いとに近づかないであろう”が異なっています。仏法は、死後の世界をよりよくするために説かれているのではなく、精神性(霊性 or 魂)の向上を目指し、今、自分がどう努め励むべきかを説いた教えです。よって、詩 O236 の“天の尊い処に至る”という部分は不適当で、詩 238 では、“汝はもはや生と老いとに近づかないであろう”という部分は、転生からの離脱を説いているので、よりお釈迦様の教えを忠実に述べています。したがって、詩 236 は削除して、詩 F174(O238) を残します。

「第3節 さまざまな人」内の削除詩

★ OS06 賢い人

O088 (B080) 賢者は欲楽をすてて、無一物となり、心の汚れを去って、おのれを浄めよ。

*** (コメント) *****

無一物となる必要はないので、詩自体を削除します。

★ OS14 ブツダ

O195 + O196 (B166) すでに虚妄な論議をのりこえ、憂いと苦しみをわたり、何ものをも恐れず、安らぎに帰した、拝むにふさわしいそのような人々、もろもろのブツダまたその弟子たちを供養するならば、この功德はいかなる人でもそれを計ることができない。

*** (コメント) *****

ブツダを供養するならまだしもですが、その弟子とまでなると、あやふやになってしまうので、削除としました。供養に関する教えの詩は、FS 7 花にちなんで 詩 F076, 077 で考察し述べられています。

★ OS19 道を実践する人

O265 (B097) 大きかろうとも小さかろうとも悪をすべてとどめた人は、もろもろの悪を静め滅ぼしたのであるから、〈道の人〉と呼ばれる。

*** (コメント) *****

悪にも必要悪があること、道の人という曖昧な表現があることの二点から、書き換えで対応せず、削除としました。

★ OS25 修行僧

O362 手をつつしみ、足をつつしみ、ことばをつつしみ、最高につつしみ、内心に楽しみ、心を安定統一し、ひとりで居て、満足している、____その人を〈修行僧〉と呼ぶ。

*** (コメント) *****

F311, F312 と同じ教えの詩ですが、「内心に楽しみ」とか「ひとりで居て満足している」など、不要な語が多いので、わざわざ書き直さず、削除しました。

おわりに

本書は約二年かけて取り組んで参りました。「お釈迦様がお説きになりたかったことは何か？」を、仏道の上位の教えと言われている神道の「日月神示」を参考にさせていただきながら、考えて参りました。まだ、至らない点が多いと思いますが、ここまで来れたのも、ひとえにお釈迦様のお導きだと感じております。本当にありがとうございました。なお、神道を参考にして、真理のことはを再考するのは、非常に有意義でした。今後の参考になさってください。

さらに、仏弟子と言われるカテゴリーの人たちを見出せたことは、とても重要でした。日本のご住職、お坊さんは仏弟子さんであって、出家者と捉えるべきではないと考えると、行き詰まった日本の宗派仏教に新しい空気が入る余地があるのではないかと思います。真面目なお坊さんも少なくないというのが、私の印象です。日本の仏教に光が差し込み、世界に本当の仏道を広める重責を担えるものへと変化を遂げることを切に願っております。

本書を記すにあたり、神道と仏道のご教示いただき、「日月神示」を参考にと、ツイッターでご助言いただいた方に、心より感謝申し上げます。

ブログ「宇宙への旅立ち」において、キリスト教やもろもろの教え、Matthew Ward 氏のメッセージが広く紹介されました。ここで得た知識と読者同士の交流による知識がなければ、本書を書き出すことは不可能でした。このブログの運営者の方に心より感謝いたします。

また、ネットを通してたくさんの情報をくださった皆様に、心より感謝いたします。

本活動への、主人と子どもたち、先祖・兄弟からの絶大なる協力と支援には、ただただ、心から感謝するばかりです。

合掌 平成31年(2019年)2月19日

本書(PDF ファイル)と新旧章詩番エクセルファイルの掲載サイト
<http://tsukiyonoryu.seesaa.net/article/464214534.html>